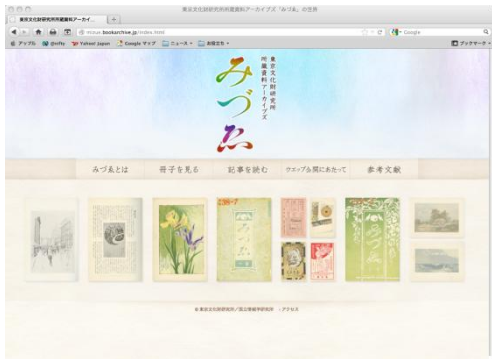


中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の研究情報の公開・活用のための総合的研究((1)－①－ア)		
【事業概要】 他機関との連携をはかり、文化財の研究情報について、効果的に発信していくための手法を研究・開発し、文化財に関する研究情報の蓄積を行うとともに、公開・活用のための手法等について総合的に研究する。また、東京文化財研究所の全所のアーカイブズの構築を推進する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化財アーカイブズ研究室長 綿田稔
【スタッフ】 田中淳(企画情報部長)、山梨絵美子(副部長)、二神葉子(情報システム研究室長)、小林公治(広領域研究室長)、津田徹英(文化形成研究室長)、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、小林達朗(主任研究員)、皿井舞(主任研究員)、城野誠治(専門職員)、井上さやか(アソシエイトフェロー)、橘川英規(アソシエイトフェロー)、中村明子(アソシエイトフェロー)、鳥光美佳子(アソシエイトフェロー)、中村佳史(客員研究員)、丸川雄三(客員研究員)、飯島満(無形文化遺産部音声・映像記録研究室長)、佐野千絵(保存修復科学センター保存科学研究室長)、早川泰弘(分析科学研究室長)、津村宏臣(客員研究員)、山内和也(文化遺産国際協力センター地域環境研究室長)、加藤雅人(主任研究員)、高砂健介(研究支援推進部管理室長)			
【主な成果】 昨年度所内公開した「東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』(試行版、創刊号～10号)」に改良を加えて一般公開を開始し、10号以降についても公開する準備を進めた。同時に図版がメインの貴重書の効果的な公開方法についても検討を重ねた。また、東京文化財研究所アーカイブズ運営委員会のもとにワーキンググループを組織し、本年度については研究所刊行物アーカイブの試行版を作成し、次年度以降の本格的な取り組みに備えた。			
【年度実績概要】 国立情報学研究所と連携して、東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズとして以下について協議を重ねて実施した。 ・東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』(試行版、創刊号～10号)：前年度所内公開したもののについて点検・評価を行い、修正と改良を加えた上で一般公開を開始した。(http://mizue.bookarchive.jp/index.html) また10号以降についても順次公開すべく、50号まではデータの整形と登録の準備をほぼ終えた。 ・その他：写真図版を中心とする画集や図録類のデジタルアーカイブの構築に向け、『日本美術画報』を素材として、いかなる検索方法あるいは見せ方が効果的かつこれからの時代にふさわしいのかについて、協議と実験を重ねた。 本年度からの新たな取り組みとして、東京文化財研究所アーカイブズ運営委員会のもとにワーキンググループを組織し、全所横断的な研究資料アーカイブズの構築に向けて、以下についての協議と作業を行った。 ・研究所所管資料の所在調査 ・全所的アーカイブズ構築に向けての構想づくり ・全所的アーカイブズ構築に向けての可能性と問題点の洗い出し ・研究所刊行物記事データベース(簡易版)の作成 ・研究所刊行物アーカイブズ(実験試行版)の作成			
			
東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』(試行版、創刊号～10号) トップページ (http://mizue.bookarchive.jp/index.html)			
【実績値】 研究情報のウェブサイト上での公開1件(備考欄)			
【備考】 東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』(試行版、創刊号～10号)			

自己点検評価調査

研No.1

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：情報化社会において専門的研究機関から発信される情報の意義が見直されている中であって、本研究は緊急性が高い。 独創性：通常の図書館や資料館にはない、よりきめ細やかな情報提供ないし総合的な情報発信を目指して当研究所ならではのオリジナリティのある発信方法を模索し、国立情報学研究所と連携しながら一部それを実現している。 発展性：文字情報や画像情報等、多様な資料の在り方に着目しており、常に応用性を重視して研究を進めている。 効率性：限られた予算額の中で対費用効果を厳しく吟味しながら検討を進めている。 継続性：過去と現在と未来をつなぐアーカイブを構想しており、一時的なものに終わらないよう十分に留意している。 正確性：単なるPDF配信に終わらない付加価値のある情報発信を実現している。						

2. 定量的評価

観点	研究情報のウェブサイト上の公開件数					
判定	A					
判定理由 研究情報のウェブサイト上での公開：東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』（試行版、創刊号～10号）1件の一般公開を開始した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	国立情報学研究所との連携を図り、多種多様な文化財の研究情報について、効果的かつ有機的に蓄積して発信してゆくための手法を総合的に研究・開発し、計画2年目としては所期の成果を得られた。また、本年度より東京文化財研究所の全所的アーカイブズの構築に着手することとなり、その実現に向けて具体的な一歩を踏み出すことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	年度計画に沿って順調に成果をあげた。次年度はこれをふまえて『みづゑ』の公開件数を増やし、それと並行して図版中心の貴重書の公開方法についても検討を重ねて行きたい。また、本年度は新たに全所的アーカイブズの構築にも着手した。次年度は所蔵資料管理閲覧システム本体の設計に進んでいきたい。

業務実績書

研No.2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の資料学的研究(1)－①－イ)
【事業概要】 日本を含む東アジア地域における美術の価値形成の多様性を解明するために、近年の記録媒体や分析手法等の進展に対応しながら調査研究を行い、文化財を対象とする資料学的基盤を整備、確立する。併せてその基盤を礎としながら国内外の研究交流を推進する。	
【担当部課】	企画情報部
【プロジェクト責任者】	文化形成研究室長 津田徹英
【スタッフ】 田中淳(企画情報部長)、山梨絵美子(副部長)、二神葉子(情報システム研究室長)、綿田稔(文化財アーカイブズ研究室長)、小林公治(広領域研究室長、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、小林達朗(主任研究員)、皿井舞(主任研究員)、江村知子(文化遺産国際協力センター主任研究員)、中野照男(客員研究員)、相澤正彦(客員研究員)、三上豊(客員研究員)、吉田千鶴子(客員研究員)、森下正昭(客員研究員)	
【主な成果】 (1)調査 熊本県立美術館における横山大観《山路》の調査・撮影。 (2)美術史研究のためのコンテンツ形成 古記録・文献史料記載絵巻関係資料のデータ化。ならびに、今泉雄作『記事珠』の翻刻・訳注。古美術文献目録の作成。 (3)研究交流促進のための研究会の開催 ユベール・ギメ氏講演 (4)研究成果報告書 『美術研究作品資料第6冊 横山大観《山路》』の編集・作成。	
【年度実績概要】 (1)調査 24年5月11、12日に、熊本県立美術館において横山大観《山路》の調査・撮影を行った。 (2)美術史研究のためのコンテンツの形成 当研究所OBによってカード化されている古記録・文献史料記載絵巻関係資料のデータ化を引き続き行った。また、東京文化財研究所が所蔵する今泉雄作『記事珠』の翻刻・訳注を進めた。 (3)研究交流促進のための研究会の開催 24年4月5日にユベール・ギメ氏(フランス・ギメ美術館理事)による講演会「エミール・ギメ ウルトラマリンからギメ美術館へ」を開催した。 (4)研究成果報告書の作成 24年8月3日に進捗状況の確認を兼ねて研究協議会を開催した。 『美術研究作品資料』の第6冊として『横山大観《山路》』の編集を行い、刊行した。 「《山路》研究の経緯」塩谷純(東京文化財研究所) 「《山路》のあゆみ―画家の手から蒐集家の手へ至るまで」塩谷純(東京文化財研究所) 「《山路》修理報告」竹上幸宏 「岩絵具の新表現―《山路》の材料と技法」荒井経、小川絢子、平論一郎 「永青文庫所蔵本《山路》の画面」三宅秀和(永青文庫) 「《山路》と洋画」林田龍太 「《山路》をめぐる言説」佐藤志乃	
【実績値】 刊行物1件(①) 学会誌等への掲載論文数2件(②～③) 学会等での発表件数3件(④～⑥)	
【備考】 刊行物 ①『美術研究作品資料第6・横山大観《山路》』2013.3 論文 ②塩谷純「秋元洒江と明治の日本画(2)」『美術研究』407 2012.8 ③塩谷純「《山路》のあゆみ―画家の手から蒐集家の手へ至るまで」『美術研究作品資料第6・横山大観《山路》』2013.3 発表 ④相澤正彦「石山寺縁起絵巻の絵師再考」企画情報部研究会 2012.11.15 ⑤三上豊「マンガを学生にどう伝えるか」企画情報部研究会 2012.12.25 ⑥津田徹英「研究資料 滋賀・十輪院地藏菩薩立像」企画情報部研究会 2013.1.29	

自己点検評価調査

研No.2

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性	独創性	
判定	A	A	A	A	S	
判定理由 適時性： 海外研究者を招聘し、研究交流促進のための研究会を開催するなど、国際性、公共性、公開性に鑑みて十分に成果が認められた。 発展性・正確性・継続性： 『横山大観《山路》』を『美術研究作品資料』の第6冊として刊行し、本作品の関係資料を網羅的に収録した。その影響性、網羅性、基礎性など十分に成果が認められた。 独創性： 近代日本画が近世の文人画を新たに受容していく動きの中で注目される作品について、修復過程でのみ収集できる情報を研究者間で共有し、作品を総合的に位置づけたことは極めて顕著な成果である。						

2. 定量的評価

観点	刊行物数	掲載論文数	発表件数			
判定	S	A	A			
判定理由 刊行物数：年度計画時には、刊行に向けて編集をすすめる予定であったが、年度内に刊行することができたことは極めて顕著な成果である。 掲載論文数・発表件数：掲載論文数、発表件数ともに、目標を100%達成したため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	「山路」は横山大観の画業にとってひとつの転機を為した作品であるのみならず、近代の日本画が近世の文人画を踏まえて新たな絵画に向かう動きの中でも注目すべき作品である。このたびの調査研究は、作品の修理を機に作画の技法、材料にも迫り、人工顔料を用いた点でも新たな試みがなされていたことが明らかになった。それらも含め、作品を多角的かつ生命誌的に位置づけることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成したので順調と判定した。中期計画の趣旨に沿って次年度も調査、美術史研究のためのコンテンツの形成、研究交流促進のための研究会の開催を行い、『美術研究作品資料』第7冊の刊行に向けて計画を進めて行きたい。

業務実績書

研No.3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近現代美術に関する交流史的研究((1)ー①ーウ)		
【事業概要】 日本を含む東アジア諸地域における近現代美術の研究資料の収集、整理、調査研究を行うとともに、その交流を明らかにする有効な視点と調査研究方法の開発を目指す。また、多様化する我が国の現代美術の動向に関する調査研究を行い、基礎資料を作成する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長 塩谷 純
【スタッフ】 田中 淳(企画情報部長)、山梨絵美子(副部長)、城野誠治(専門職員)、鳥光美佳子(アソシエイトフェロー)、中村明子(アソシエイトフェロー)、三上 豊(客員研究員)、丸川雄三(客員研究員)			
【主な成果】 東アジア諸地域の近現代美術の研究資料収集、整理として、未公開資料である黒田清輝宛書簡のデジタル画像作成を進め、併せて黒田作品の調査も行った。東アジア美術交流の調査研究では、日本で学び台湾で活躍した陳澄波の作品調査を行い、さらに台湾から研究者を招聘して交流を図った。我が国の現代美術の動向に関する調査研究としては、笹木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料の整理・調査を進めた。			
【年度実績概要】 東アジア諸地域の近現代美術の研究資料収集、整理 ・当研究所が保管する黒田清輝宛書簡のデジタル画像作成を進めた。(一部科学研究費補助金基盤研究B「諸先学の作品調書・画像資料類の保存と活用のための研究・開発—美術史家の眼を引き継ぐ」)また上記資料のうち小川一真書簡(7通)について、平成24年10月22日、平成25年3月5日に研究協議会を開催した。出席者は岡塚章子(東京都江戸東京博物館)、斎藤洋一(松戸市戸定歴史館)、田中淳。 ・黒田清輝《花》(個人蔵)の調査を行った。 ・台湾の洋画家陳澄波の作品調査を進め、また陳澄波をはじめ台湾近代美術史研究で優れた業績を挙げている白適銘氏(国立台湾師範大学准教授)を招聘し、第46回オープンレクチャーにて講演「上野モダンから近代文化体験へ—陳澄波が会った近代日本」を行った。			
我が国の現代美術の動向に関する調査研究 ・笹木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料の整理・調査を進めた。 ・当研究所所蔵の画廊資料の画廊別による整理とカード化を行った。			
【実績値】 刊行物1件(①) 学会誌等への掲載論文数5件(②～⑥) 学会等での発表件数6件(⑦～⑫)			
【備考】 刊行物 ①田中淳『太陽と「仁丹」 1912年の自画像群・そしてアジアのなかの「仁丹」』 2012.12 論文 ②山梨絵美子「陳澄波の画業に見る東アジア美術交流」 『美術フォーラム21』26 2012.11 ③山梨絵美子「陳澄波の裸体画の一特色—日本のアカデミズム絵画との比較から」『阿里山之春 陳澄波與台湾美術史研究新論』 2013.1 ④山梨絵美子「東アジアの油彩画の中で高橋由一を考える」 『視る』462 2013.2 ⑤田中淳「木村莊八—わたしは東京を呼吸してゐます」 『生誕120周年記念 木村莊八展』図録 東京ステーションギャラリー等 2013.3 ⑥山梨絵美子「台北市で開催されたふたつの陳澄波展—台北市立美術館「行過江南—陳澄波芸術探索歷程」展と至善芸文センター「豔陽下的陳澄波」展— 『美術研究』409号 2013.3 発表 ⑦山梨絵美子「川村清雄の油絵—江戸絵画と西洋画の融合」川村清雄展特別レクチャー 江戸東京博物館 2012.10.11 ⑧山梨絵美子「徳川霊廟を描いた画家たち」 第46回オープンレクチャー 東京文化財研究所 2012.10.19 ⑨丸川雄三「連想が結ぶ美術史の点と線—アーカイブズから見えるもの」 第46回オープンレクチャー 東京文化財研究所 2012.10.20 ⑩田中淳「1912年10月20日・上野・美術」 第46回オープンレクチャー 東京文化財研究所 2012.10.20 ⑪田中淳「Futurism day—木村莊八の1912年」 日本における未来派100年記念シンポジウム 東京都現代美術館 2012.11.17 ⑫塩谷純「大正期の日本画—再興日本美術院を中心に」江東区森下文化センター平成24年度後期講座 2013.2.2			

自己点検評価調査

研No.3

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性： 陳澄波（1895-1947）は生誕100年を前に台湾でも複数の展覧会が開かれ調査研究が活況を呈している。その動きと連動するかたちで調査研究を進めることができた。 独創性・発展性： 近年の東アジアにおける文化交流の深まりの中で、これまで不問に付されがちだった同地域の近代を研究対象とする意義は大きいと十分に成果が認められた。 継続性・正確性： 作品に比して等閑視されがちな諸資料についても、作家の営為を物語るものとして不断の収集整理及び調査研究を行ったため十分に成果が認められた。						

2. 定量的評価

観点	刊行物数	論文等掲載	発表件数			
判定	S	A	A			
判定理由 刊行物数・論文等掲載数・発表件数： 年度計画になかったが、単著『太陽と「仁丹」』を刊行することができ、さらに新聞書評にも掲載され、高い評価を得ることが出来た。論文等掲載数、発表件数ともに、目標を100%達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は単著『太陽と「仁丹」』を刊行することができた。また東アジア美術交流に関して、とくに台湾の近代美術について、日台双方の研究者が意見を交換し、講演や論考に結実させた意義は大きい。また諸資料の継続的な整理に比べ、黒田清輝宛書簡についての研究協議会の開催も、同資料の今後の活用に向けての新たな布石と評価できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施しており、当該年度計画を100%達成したため順調と判定した。中期計画の趣旨に沿って次年度も東アジア諸地域の近現代美術の研究資料収集、整理及び我が国の現代美術の動向に関する調査研究を続行、充実させていきたい。

業務実績書

研No.4

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	美術の表現・技法・材料に関する多角的研究((1)－①－エ)		
【事業概要】 様々な美術作品を構成する材料やそこに用いられた技法、ひいては表現、その制作過程、作品の成り立ち、生成されてから今日にどう至ったか、それがどのように受容されてきたか等を、関連書分野と連携しながら多角的に分析し、現在目の前にある「作品」ないし文化財に対するより深い理解を形成することを目指す。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	広領域研究室長 小林 公治
【スタッフ】 田中淳（企画情報部長）、山梨絵美子（副部長）、綿田稔（文化財アーカイブズ研究室長）、二神葉子（情報システム研究室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）、中野照男（客員研究員）			
【主な成果】 本研究は美術作品が基盤としている表現・材料・技法等を作品の観察、文献資料あるいは科学的手法による分析を実施しながら解明することを目的とする。本年度は絵画・工芸作品を中心に各地で作品調査を進めるとともに、日本の近世絵画、中国の障壁画についての論文掲載、また近世絵画や桃山時代の螺鈿漆器についての発表を行った他、ウェブサイト上で公開している奈良時代の資料にあらわれた彩色語彙についてデータベースの増補を実施した。			
【年度実績概要】 ・調査 東京国立博物館との共同調査計画に基づき、絵画作品である「国宝・絹本着色千手観音像」の調査を実施した他、東京国立博物館・南蛮文化館・逸翁美術館・岐阜市歴史博物館・浦添市美術館、ドイツの Museum Fur Lackkunst、オランダの Het Loo 宮殿博物館・Cultural Masonic Centre 'Prins Frederik' において日本・中国・朝鮮漆器の調査、ギメ本「大政威徳天縁起絵巻」に関連する国内調査を行った。 ・研究会発表 本年度は、日本近世絵画・中国壁画・日本製輸出漆器、に関する研究会発表を行った。 ・資料のデータ化 研究所への寄贈資料のうち、技法材料研究と特に関わりの深い久野健旧蔵資料及び秋山光和旧蔵資料（調査ノート・撮影画像など）のデジタル化・整理・入力を行った。また奈良時代資料にあらわれた彩色語彙についてデータベースの増補・公開を実施した。			
【実績値】 論文掲載数 4 件（①～④） 発表件数 4 件（⑤～⑧） 調査件数 6 件（国内 5 件、海外 1 件）（⑨～⑭）			
【備考】 論文等 ①綿田 稔「永享七年の竹庵大縁をめぐる画事より一松岡美術館の周文画とケレン東洋美術館の靈照女図一」『美術研究』第 407 号、2012 年 9 月 ②綿田 稔「研究資料 御絵鑑一元禄十三年板の画法書一」『美術研究』第 408 号、2013 年 1 月 ③中野照男「光学的調査及び蛍光 X 線分析による壁画ドルナ像の検証」（即■（日＋華）訳、中文「光学調査及蛍光 X 射線対壁画徒盧那像の検証」）『敦煌・絲■（糸＋周）之路国際検討会資料集』神戸大学、2012 年 8 月 20、21 日、pp.00-19、20-26 ④中野 照男「光学的調査及び蛍光 X 線分析による壁画ドルナ像の検証」（中文「運用光学手法以蛍光 X 線分析検証壁画徒盧那像」）『敦煌・絲■（糸＋周）之路国際検討会報告書』神戸大学、2013 年 3 月 発表 ⑤Tomoko Emura, Classicism, Subject Matter, and Artistic Status--In the Work of Ogata K・rin, Symposium The Artist in Edo, at CASVA-Center for Advanced Study in the Visual Arts, National Gallery of Art, Washington DC, USA. 2012 年 4 月 13 日 ⑥中野照男「光学的調査及び蛍光 X 線分析による壁画ドルナ像の検証」『敦煌絲■（糸＋周）之路国際検討会』神戸大学、2012 年 8 月 20 日 ⑦小林公治「南蛮漆器成立・製作の経緯と年代再考—中間報告—」2012 年度第 5 回総合研究会、2013 年 2 月 5 日 ⑧綿田 稔「ギメ本大政威徳天縁起絵巻について」企画情報部研究会 2013 年 3 月 19 日 調査 ⑨小林公治 東京国立博物館所蔵朝鮮螺鈿漆器熟覧調査 2012 年 6 月 22 日 ⑩小林公治 沖縄県浦添美術館所蔵漆器熟覧調査 2012 年 9 月 30 日 ⑪小林公治 東京国立博物館所蔵漆器熟覧調査 2012 年 10 月 3 日 ⑫小林達朗・江村知子・城野誠治 東京国立博物館絵画熟覧・光学調査 2012 年 11 月 1 日 ⑬小林公治 ドイツ・オランダ国内に遺存する日本製輸出漆器熟覧調査 2012 年 10 月 29～30 日、11 月 2 日 ⑭綿田稔 大阪市立美術館所蔵ギメ本大政威徳天縁起絵巻関連資料及び長岡京市内奉納地調査 2013 年 1 月 24～25 日			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4114

自己点検評価調査

研No.4

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：様々な機会を捉え調査を実施し、また国内外での多様なチャンネルによって研究成果を公表したため。 独創性：これまでに行われて来なかった多様な視点による調査を実施できた。 発展性：これらの調査結果は将来にわたって活用される基礎資料となることが期待されるため。 継続性：いずれの調査研究も継続的な努力によって結果となったものであるため。 正確性：実施した成果公表や調査は各分野の研究全般に対する基礎的な内容であるため。						

2. 定量的評価

観点	論文掲載数	発表件数	調査件数			
判定	A	A	A			
判定理由 掲載論文数・発表件数・調査件数： これまでの研究成果の公表及び調査について、目標に達する内容を実施できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本プロジェクトの初年度であった昨年度は、絵画を中心に調査研究を実施したが、プロジェクト2年目である本年は、これまでの対象に加え、障壁画・工芸品などより幅広い分野・作品に対して検討を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	全般的に計画通りに進捗したと考える。次年度以降も一層の進化を目指して計画を立案し、調査研究・研究結果の分析理解、またデータの収集整理によるデジタル化と公開を進めたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	近畿を中心とする古寺社等所蔵の歴史資料等に関する調査研究((1)－②))
【事業概要】 近畿地方を中心として、重要な古寺社や関連する旧家等が所蔵する歴史資料や書跡資料等について、継続的・悉皆的に整理・調書作成・写真撮影等の調査を行い、現存資料の把握に努め、成果を目録・データベース等により、また重要資料は翻刻して公開する。このような調査によって文化財研究の基礎を固めた上で、文化財の歴史的・性格・特徴等を研究し、日本の歴史・文化の研究に資する。撮影した写真は焼き付けを作成し、研究者等の研究に供する。	
【担当部課】	文化遺産部
【プロジェクト責任者】	歴史研究室長 吉川 聡
【スタッフ】 小原嘉記(客員研究員)、渡辺晃宏、馬場 基、山本 崇、桑田訓也、山本祥隆(以上、都城発掘調査部)、児島大輔(埋蔵文化財センター)、中村一郎、栗山雅夫、鎌倉綾(以上、企画調整部)	
【主な成果】 仁和寺所蔵の中世文書である、御経蔵第150函の1号～216号文書を翻刻し、『仁和寺史料 古文書編一』に公表した。これらは平安時代～室町時代の古文書で、全国各地の仁和寺領荘園に関する未公表の文書を多く含み、日本史研究上重要な史料群である。また、三仏寺所蔵の大日寺瓦経についての調査知見を公表した。この報告により、大日寺瓦経が、数ヵ所の工房で数セット作成されており、現状では日本最大の瓦経群と考えられることを明らかにした。	
【年度実績概要】 ・興福寺所蔵の書跡資料の調査を実施し、第115函～第117函の調書を作成した。また第104函～第106函の写真を撮影した。 ・仁和寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、御経蔵聖教第44～第46函の調書原本校正、第41函～第49函の写真撮影を実施した。また第150函所収の古文書については、釈文の原本校正を行い、『仁和寺史料 古文書編一』として公表した。 ・薬師寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、第56函～第59函の調書作成と、第25函の写真撮影を実施した。 ・三仏寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、第3函の調書を作成し、第3函～第5函の写真撮影を実施した。また、所蔵する神像・瓦経の調査を実施した。瓦経については、『文化財論叢Ⅳ』にその成果を公表した。 ・唐招提寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、戒学院に所在する資料調査を行った。 ・東大寺所蔵の歴史資料の調査を、科学研究費補助金も充当して実施し、新修東大寺文書聖教第69函～76函の調査データ入力、第56函・絵図の撮影等を行った。 ・奈良市教育委員会と連携研究の協定を結び、氷室神社の大宮家所蔵文書の未成巻文書の調書原本校正を実施した。 ・奈良市六条町水利組合所蔵の歴史資料の調査を実施し、絵図・簿冊の写真撮影を行った。また奈良市佐紀町溝辺家所蔵の元明天皇像の調査を行った。また天理市杣之内町岡田家所蔵の内山永久寺旧蔵扁額の調査を行った。	
	
唐招提寺古文書調査風景	
【実績値】 調査対象箇所数：8ヵ所以上（興福寺・仁和寺・薬師寺・三仏寺・唐招提寺・東大寺・大宮家・六条町水利組合等） 調査資料点数 興福寺：調書作成資料点数587点、写真撮影点数91点 仁和寺：調書等原本校正資料点数120点、写真撮影資料点数300点 薬師寺：調書作成資料点数92点、写真撮影資料点数61点 三仏寺：調書作成資料点数305点、写真撮影資料点数615点 東大寺：調査データ入力点数451点、写真撮影資料点数59点 平城宮周辺諸家等：写真撮影資料点数59点 論文等数：報告書等1件（①）、論文2件（②③）	
【備考】 論文等 ①奈良文化財研究所『仁和寺史料 古文書編一』奈良文化財研究所史料第89冊、2013.3 ②吉川聡「大日寺瓦経の研究―三佛寺所在分を中心に―」『文化財論叢Ⅳ』2012.10 ③吉川聡「平城宮跡保存運動のはじまり―石崎勝蔵関係資料から―」『奈良文化財研究所紀要2012』2012.6	

自己点検評価調査

研No.5

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：近畿を中心とする、世界遺産にも登録されるような古寺社等には、未だに調査・整理されていない歴史資料・書跡資料が数多く存在している。その内容を把握し、保存を図り、史料として利用できる状態にまで整理することは、極めて適時性が高い調査である。 発展性：これらの資料には、日本史を研究する上で重要な内容を持つものが多く含まれており、発展性がある。本年度は特に、仁和寺の中世文書の釈文を公表した。そこには重要な中世史料を多く含んでおり、その史料を用いた今後の日本史研究の進展が大いに期待できるところである。また、大日寺瓦経の性格を明らかにした。これも、当該分野における今後の研究の進展を望めるものである。 継続性：調査は着実に中断なく全容を把握する調査を実行しており、継続性に優れている。 正確性：調査資料の重要性に鑑みて、詳細・正確な調査を実施している。						

2. 定量的評価

観点	調査対象箇所数	調査資料点数	論文等数			
判定	A	A	A			
判定理由 調査対象箇所数：年度計画に掲げた寺社をすべて調査した。 調査点数：目標を上回った。 論文等数：目標を上回った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	興福寺、仁和寺、薬師寺、三仏寺の調査は計画通り実施した。また、唐招提寺・東大寺の調査を実施し、大宮家は奈良市と連携研究を行った。その他、平城宮周辺諸家の資料も調査した。そして、仁和寺の中世文書・三仏寺所蔵の瓦経を公表できた。特に、仁和寺の中世文書は、数十年来、当研究所が調査研究してきた、未公表の重要史料である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、堅調に実現できたと考える。特に、従来積み重ねてきた調査に基づいて、仁和寺中世文書等を公表できたことは大きな成果である。ただし、それ以外の寺社に関しても、調査データが蓄積されつつあるので、それらを公表するべく取り組む必要がある。また一方で、調書作成などの地道な調査も継続して続ける必要があるため、今後もこのペースで、各所の調査を進めていきたい

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究((1)－③)		
【事業概要】 我が国の文化財建造物の保存・修復・活用に向けた歴史的建造物、伝統的建造物群及び近代化遺産等に関する基礎データを蓄積し、分析・研究を行うとともに、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の技法についての再検証(調査研究)を行い、得られた成果を整理するとともに、一般公開を図る。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	建造物研究室長 林良彦
【スタッフ】 箱崎和久、黒坂貴裕、番 光、鈴木智大、海野聡、高橋智奈津、井上麻香、中島咲紀(以上、都城発掘調査部)、清水重敦(前)、大林潤、恵谷浩子、松本将一郎(前)(以上、文化遺産部)、成田聖(企画調整部)			
【主な成果】 文化財建造物の保存修理に関する基礎データである所内保管資料の整理等の作業を行い、「建造物現状変更説明」については出版物として刊行・配布し、「ガラス乾板」については画像のデジタルデータ化と目録の出版により、一般公開を推進した。また、古代建築の技法に関する再検証作業を継続的に実施した。この他、受託事業により、各種歴史的建造物の調査を行った。			
【年度実績概要】 ・所内で保管している文化財建造物保存修理時の「建造物現状変更説明」資料のうち、1950 年度から 1952 年度分の Word 文書化、図版調整を行い、その成果を本文編と図版編に分けて刊行・配布した。また、同じく所内保管の文化財建造物等の撮影ガラス乾板(滋賀県、京都府分)を整理して、画像をデジタル化した(デジタル化は外注)。また、上記ガラス乾板及び建造物保存図並びに同摺拓本資料について、外部への資料提供を実施した。 ・古代建築の技法に関する調査研究では、法隆寺所蔵の古材調査を 2009 年、10 年、11 年度に引き続き実施した。本年度は、引き続きかつて法隆寺西院金堂で使用されていた部材について調査を行った。なお、調査にあたっては、竹中大工道具館の協力を得た。 ・海外関連事業として、日中韓の 3 ャ国の文化財研究所における共同研究の一環として、24 年 11 月に韓国ソウル市で、国際学術会議に参加した。『建築遺跡保存』のテーマで研究発表を行うとともに、総合討議を行った。 ・海外協力として、11 年度に引き続き文化庁が行う協力事業の一環として、ベトナム・ドンナイ省フーホイ、ティエンザン省カイバーの伝統的建造物群保存対策調査を行った。 ・兵庫県近代和風建築総合調査、延暦寺建造物調査、竹林寺客殿・庭園調査、長谷川家建築調査、塩尻市平出伝統的建造物群保存対策調査及び高梁市旧高梁尋常高等小学校建築調査を受託し、調査・図面作成・報告書原稿作成を行った。			
			
		カイバーでの調査風景	
			
		国際学術会議の開催風景	
【実績値】 論文等数 11 件(公刊図書 3 件①～③、論文等 8 件) 学会等発表件数 3 件 (参考値) 保管建造物関係資料整理：写真乾板デジタル化 950 枚、現状変更資料入力等 1950～1952 年分 古代建築研究現地資料収集：法隆寺古材調査 50 回 保管建造物資料の外部者利用数：乾板写真 4 件 221 枚、建造物保存図 5 件 105 枚、摺拓本 2 件 34 冊			
【備考】 論文等 ①奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1950～1952(本文編)』2013.3 ②奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1950～1952(図版編)』2013.3 ③奈良文化財研究所『ベトナム社会主義共和国ドンナイ省フーホイ村集落調査報告書』2013.3 他 8 件			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：海外で行っている集落調査は、現在文化財保存の黎明期にあるベトナムで今後集落保存の前提となる作業で、国際性、必要性、公共性が高い。現在ベトナムでは経済発展が続いており、とくに伝統的な集落町並みの変容が激しいため、緊急性も高い。 独創性：古代建築の諸構法の研究は、研究所がこれまで継続してきた調査研究に基づき、これを発展させるため、法隆寺古材調査では「技術・技法」等の視点を加え、独創性のある研究内容といえる。 発展性：法隆寺古材調査は、古代建築の技法を知る上でまたとない資料であり、新たな視点での調査行い、成果を資料化することは、古代建築研究の展開におおきく貢献するものである。また、関連する受託業務として行った兵庫県近代和風建築総合調査では、今後の近代和風建築の研究と保存に対して貢献をなす成果をあげた点で、高く評価できる。 効率性：限られた人員に対し充分な成果を出している。 継続性：文化財建造物保存修理事業等で作成された貴重な記録である「建造物現状変更説明」「ガラス乾板」の資料整理、デジタル化作業は近年継続的に実施しており、地味な作業ではあるが高く評価できる。 正確性：受託業務として行った延暦寺建造物調査、長谷川家建築調査、竹林寺客殿・庭園調査、塩尻市平出伝統的建造物群保存対策調査、高梁市旧高梁尋常高等小学校建築調査においては、詳細かつ正確な調査にもとづいて、その価値を明確にすることで、近年文化庁で推進されている文化財の保存・活用によるまちづくり施策に、大きく貢献している。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	学会等 発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文等数：目標を上回った。 学会等発表件数：目標の3件に達した						

3. 総合的评价

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財建造物の保存修理に関する基礎データの整理等については計画通り実施でき、この継続的な実施によって、本事業の重要性が認知されるようになっている。受託各事業で、諸建築の具体相を究明できたことは、文化庁等の調査に寄せる期待に応えることになり評価できるとともに、将来実施する建築調査に反映できる。古代建築の研究に関しては、法隆寺古材調査は基礎的な作業であり、今後高く評価されるものと考ええる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	所内保管の建造物関係資料についての整理等作業、古代建築の諸構法に関する研究とも順調に進捗している。前者は地味な作業であるが、これを継続させることの重要性をさらにアピールさせたい。後者の研究は、研究所が蓄積した過去の研究成果を元にした本研究所ならではの研究として、今次中期計画に掲げたものであり、研究成果をより高める必要がある。本年度の成果を元に、次年度においては本研究の実施にさらに力を注ぎたい。

業務実績書

研No.7

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	無形文化財の保存・活用に関する調査研究((1)－④－1)		
【事業概要】 我が国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承実態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成を行う。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 宮田繁幸
【スタッフ】 高桑いづみ(無形文化遺産部無形文化財研究室長)、飯島満(音声・映像記録研究室長)、菊池理予(研究員)			
【主な成果】 山口鷺流狂言の伝承、土佐山内家所蔵楽器、個人蔵小鼓胴、日本で開発された長時間レコード(フィルモン音帯)について調査を行い、無形文化遺産部所蔵音声・映像資料の整理、伝承の変化の大きい伝承芸能について実演記録を作成した。			
【年度実績概要】 ・山口鷺流狂言の伝承について、無形文化遺産部が所蔵する記録をもとに鷺流狂言保存会等が所蔵する楽譜と比較検討を行い、明治以降の伝承の在り方について考察した。成果は第7回公開学術講座で公表し、報告書に掲載した。 ・土佐山内家宝物資料館所蔵資料の内、能管・龍笛についてX線調査に基づく成果講演を行った。 ・大連で活躍した能楽師の所蔵していた小鼓胴について調査し、公開シンポジウムで発表を行った。 ・日本で開発された長時間レコード(フィルモン音帯)の継続調査を行い、新たに現物確認されることとなった音帯について再生とメディア転換を試み、その収録内容を確認した。 ・工芸技術に関しては、第35回文化財の保存と修復に関する国際研究集会「染織技術の伝統と継承－研究と保存修復の現状－」での発表を報告書にまとめて掲載した。 ・連続口演の機会が激減している講談について、一龍斎貞水師と神田松鯉師による実演記録を作成した。また、伝承が変化しつつある宝生流謡曲について、近藤乾之助師他による実演記録を作成した。和泉流狂言については、佐藤友彦師により秘曲「花子」の記録作成を行った。			
【実績値】 学会等発表件数 4件 (①～④) 論文等発表件数 3件 (⑤～⑦)			
【備考】 学会等発表 ①高桑いづみ「大連で鳴り響いた鼓」公開シンポジウム「海外で鳴り響いた邦楽」2012.9.17 ②高桑いづみ「X線調査から判明した能管・龍笛の製作方法」山内家資料修理説明会 2012.11.11 ③高桑いづみ「無形文化遺産部所蔵記録『山口鷺流狂言の小舞謡』の意義」第7回公開学術講座 2012.12.8 ④飯島 満「東京文化財研究所所蔵アナログ音声資料 そのメディア転換をめぐる」平成24年度第3回総合研究会 2012.11.9 論文 ⑤高桑いづみ「下ゲゴマ試論」『能と狂言』10号 能楽学会 2012.4.30 ⑥高桑いづみ「山口鷺流狂言の小舞謡―無形文化遺産部所蔵「山口鷺流小舞謡」の記録をめぐる―」『無形文化遺産研究報告』第7号 2013.3.29 ⑦菊池理予「日本における染織技術保護の現状と課題」第35回文化財の保存と修復に関する国際集会『染織技術の伝承と継承』報告書 2012.11.30			

1. 定性的評価

観点	独創性	発展性	継続性	適時性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 独創性：鷺流狂言の記録は無形文化遺産部に所蔵されているものが最も古く、それを活用した実技の調査研究は他では行えないものである。それを広く公表した価値も大きい。 発展性：フィルム音帯についての調査は広がりを見せ、次々と新たな音帯の発見につながっている。どの程度普及していたか、今後の調査につながる。 継続性：狂言の調査、フィルム音帯の調査、楽器調査は他では行っていない独自分野の調査で、かつ以前より行っていた調査であるが、継続することで、データの蓄積や研究手法の発展がみられた。無形文化遺産分野にとって研究が継続する意義は大きい。 適時性：連続口演の機会の減っている講談や、伝承の変化しつつある宝生流謡曲の記録作成は、現在でなければ行えない事業であり、将来の伝承に向けてその意義は大きい。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	学会等発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文等数・学会発表件数：論文数、学会等発表件数とも目標を達成している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	我が国の無形文化遺産について、多角的に調査研究を行い、資料収集にも努めて十分な成果をあげたと考える。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究、資料収集、成果の公表ともに順調に進捗している。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究((1)－④－2)		
【事業概要】 我が国の風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形民俗文化財のうち、近年の変容の著しいものを中心に、その実態を把握するために資料収集と現地調査を行う。また、無形民俗文化財研究協議会を実施し、その成果を報告書にまとめる。さらに、これまで東京文化財研究所で収集し、保管している無形民俗文化財についての記録・資料の整理を行い、媒体転換等の必要な措置を講じるための準備を進める。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 宮田繁幸
【スタッフ】 今石 みぎわ(無形文化遺産部研究員)、齊藤裕嗣(客員研究員)			
【主な成果】 民俗技術や風俗慣習、民俗芸能の伝承実態・伝承組織について現地調査と資料収集を行い、その成果を『無形文化遺産研究報告』などに報告した。特に東北の被災地域における無形民俗文化財の現状調査は重点的に行った。また、無形民俗文化財研究協議会を開催し、無形民俗文化財の保存と活用に関する現実的課題への対応を協議した。その成果は報告書にまとめ、平成 25 年度に関係者及び関係機関等に配布予定である。			
【年度実績概要】 ・無形民俗文化財に関する調査・資料収集 風俗慣習の調査として鹿児島県の甑島のトシドン(国指定重要無形民俗文化財)及び大隅半島の柴祭りの調査を行った。また昨年度より継続テーマである削りかけ状祭具に関わる技術と風俗慣習の研究として、マレーシア・ボルネオ島で比較調査を行った。その成果は『無形文化遺産研究報告』で報告した。また、岩手県・宮城県の被災地域における無形民俗文化財の現状調査や資料収集、関係者からの聞き取りを行った。 ・無形民俗文化財の公開状況に関する調査研究 美濃まつり(岐阜県)、東北六魂祭 2012(岩手県)、地域伝統芸能全国大会福島大会「ふるさとの祭り 2012」(福島県)、第 1 回全国高校生伝統文化フェスティバル(京都府)における民俗芸能等の公開状況調査を実施した。 ・研究集会の開催 24 年 10 月 26 日(金)、第 7 回無形民俗文化財研究協議会を「記憶・記録を伝承する——災害と無形の民俗文化」をテーマに、東京国立博物館平成館において開催し、160 名の参加を得た。4 件の事例報告(「津波から 100 km のまちで一ふるさと岩手の芸能と震災―」飯坂真紀／「被災地における民俗調査の在り方―震災前の調査と震災後の調査―」小谷竜介／「民俗資料・記録の活用に向けて―福島県の被災地から―」大山孝正／「被災者と人類のための災害復興アーカイブ―311 まるごとアーカイブスの取り組み―」長坂俊成氏／)及び 1 件の特別報告(「記録 DVD『3.11 東日本大震災を乗り越えて』について」阿部武司)をもとにコメンテーター 2 名(齊藤裕嗣、久保田裕道)を含めた総合討議を行なった。成果は『第 7 回無形民俗文化財研究協議会報告書』にまとめ、参加者及び関係者に 25 年度配布予定である。 25 年 3 月 6 日(水)、第 1 回無形文化遺産情報ネットワーク協議会を東京文化財研究所において開催。東北被災地域における無形文化遺産の復興支援に関わる様々な分野の関係者約 50 名と共に今後の支援の在り方について協議した。			
【実績値】 発表等件数 4 件(①～④) 論文等発表件数 1 件(⑤)			
【備考】 発表件数 ①今石みぎわ「無形民俗文化財の復興支援について」災害・復興アーカイブシンポジウム in 宮城 石巻市河北総合センター 2012 年 7 月 6 日 ②今石みぎわ「連続講座 イナウとは何か」アイヌ文化交流センター 2012 年 9 月 21 日 ③今石みぎわ「菅江真澄と旅―旅する巨人・宮本常一の視点から」全国菅江真澄研究集会男鹿大会 2012 年 9 月 15 日 ④今石みぎわ「無形文化遺産の復興支援」シンポジウム リスク社会のイノベーション 2013―情報共有に基づく公民協働型防災の実現を目指して― 東京国際フォーラム 2013 年 3 月 1 日 論文 ⑤今石みぎわ「ボルネオ島サラワク州における削りかけ状木製具について」『無形文化遺産研究報告』第 7 号 東京文化財研究所無形文化遺産部 2013. 3. 29			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	S	A	A	A		
判定理由 適時性：継承の危機にある無形民俗文化財の調査研究、記録は必要性、緊急性が高い。特に東北被災地域における調査研究や記録は急務であり、公共性に照らしても極めて顕著な成果が認められる。 独創性・発展性・継続性： 国内唯一の無形民俗文化財の研究部として、全国の関係者を集めて専門的観点から協議会を継続的に開催し、関係者のネットワーク構築を促進させていることは、無形民俗文化財の保護体制の整備・強化の観点から見て、その独創性、発展性、継続性を十分に評価できる。特に被災地域における無形民俗文化財に関する調査・研究及び提言を率先して行ったことは、その独創性において十分に成果が認められる。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文件数				
判定	A	A				
判定理由 論文等掲載数・発表件数：論文等掲載数、発表件数ともに、目標値を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の計画通り事業を実施することができた。特に東北被災地域の無形民俗文化財の調査研究、記録、保存活用については研究協議会のテーマとしても取り上げ、重点的に実施したことにより、その重要性が一般にも認知されるようになったといつてよい。本研究事業の成果は全国の継承が困難な無形民俗文化財の保存に際しても活用できるものであり、将来を見通した取組としても極めて重要であることから、次年度以降もさらなる充実を図りつつ継続的に行う予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施しており、当該年度計画を達成したため順調と判定した。次年度も中期計画の趣旨に沿って、無形民俗文化財の保存・活用に資する調査研究を続行する。また研究協議会についても、引き続き適時性や独創性を持ったテーマを選択し、開催する予定である。

業務実績書

研No.9

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	無形文化遺産分野の国際研究交流事業((1)－④－3)		
【事業概要】 無形文化遺産保護に関わる国際的動向の情報収集を図り、アジアを中心とする海外の研究機関等との研究交流を実施し、国内外の無形文化遺産保護に貢献する。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 宮田繁幸
【スタッフ】 高桑いづみ(無形文化遺産部無形文化財研究室長)、飯島満(音声・映像記録研究室長)、今石みぎわ(研究員)、二神葉子(企画情報部情報システム研究室長)			
【主な成果】 韓国国立文化財研究所無形文化遺産研究室との交流事業において、平成23年度に調印した合意書に基づき、研究員の相互派遣を内容とする研究交流を実施した。その他、関係する国際会議・シンポジウム等へ参加し無形文化遺産分野における国際的情報収集を行った。			
【年度実績概要】 韓国との交流事業では、平成23年度に調印した「無形文化遺産の保護に関する日韓研究交流合意書」に基づき、24年5月18日～6月1日の間、高桑無形文化財研究室長を韓国に派遣し、韓国における仏教儀礼の調査研究を行った。 また韓国国立文化財研究所から、同研究所無形文化遺産研究室のイ・ミョンジン学芸研究士を、24年7月2日～31日の間、無形文化遺産部に迎え、研究交流を実施した。 無形文化遺産分野の国際的情報収集では、以下の国際会議等に出席し、情報収集及び研究発表等を実施した。 参加会議： 24年6月4日～8日「無形文化遺産保護条約第4回締約国総会」フランス パリ 24年10月18日～21日「国際フォーラム 無形文化遺産の再構築と再生－東アジアの視点と文化の多様性」台湾 台北 24年12月3日～7日「無形文化遺産保護条約第7回政府間委員会」フランス パリ			
【実績値】 海外研究発表 1回 ①			
【備考】 海外研究発表 ①宮田繁幸「日本における無形文化遺産保護とユネスコ無形文化遺産保護条約」国際フォーラム 「無形文化遺産の再構築と再生－東アジアの視点と文化の多様性」台湾台北市 2012.10.18			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4143

自己点検評価調査

研No.9

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	効率性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：近年高まりを見せる無形文化遺産保護に対する国際的関心に応じて、適切な情報収集・発信が行えた。 継続性：韓国との交流事業は第2期目に入り、国際会議等での情報収集・発信も継続的に行われている。 効率性：限られた予算・スタッフにより、効率的な実施ができている。						

2. 定量的評価

観点	海外研究発表					
判定	A					
判定理由 海外研究発表：海外研究発表に関しては、目標である例年と同数の発表を行うことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	韓国との交流に関しては、新たな研究交流の合意書に基づき、研究員の相互派遣交流が実施出来た。国際会議等での情報収集、情報発信においても、効率的な実施ができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	韓国国立文化財研究所との無形文化遺産分野に関する交流は、昨年度締結した新たな合意書に基づいて第2期の交流の順調なスタートが切れた。国際会議等における情報収集、情報発信の面でも、当初の計画を順調に実施している。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査・研究（遺跡等整備）（(1)－⑤－ア・イ・ウ）		
【事業概要】 遺跡等の整備に関連する国際的な動向も踏まえた資料収集・調査・整理等を行い、文化財の包括的保存管理を検討する一環として、遺跡等のマネジメントに関する研究集会を開催するとともに、個々の遺跡の現況に応じた適切な保存修理・整備に資する。また、遺構露出展示に関するデータベースの構築を行うとともに、調査研究報告書を刊行する。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	文化遺産部長 小野健吉
【スタッフ】 平澤毅(前遺跡整備研究室長)、青木達司(主任研究員)			
【主な成果】 遺跡等における遺構露出展示について、データベース構築の作業を進めるとともに、調査研究報告書を刊行した。 また、過年度の成果について、『自然的文化財のマネジメント』[平成 23 年度遺跡等マネジメント研究集会（第 1 回）報告書]を刊行・配布するなど、その普及等を行った。			
【年度実績概要】 ・国内外における遺跡の整備に関する調査研究活動の一環として、遺跡整備事例に関する現地調査・情報収集を実施した。 ・24年12月21・22日に、「パブリックな存在としての遺跡・遺産」を主題として、平成24年度遺跡等マネジメント研究集会（第2回）を、平城宮跡資料館講堂で開催した。研究集会の開催趣旨等の他、講演4件、事例研究報告3件が発表され、これらを踏まえ討議を行った。なお、研究集会参加者からのアンケートによれば、約96%から有意義であったとの回答を得た。 ・研究集会開催後、次年度にこの研究集会の報告書を編集・刊行する準備として、討議内容の整理等を進めた。 ・昨年度の研究集会「自然的文化財のマネジメント」の成果について検討を加え、「奈良文化財研究所紀要 2012」に報告するとともに、報告書を執筆・編集・刊行した。 ・日本各地における遺構露出展示に関する現状を把握し、データベースを構築するとともに、調査研究報告書を刊行した。 ・全国の地方公共団体教育委員会文化財保護主管課等に対して平成23年度刊行の報告書を配布するなど、過年度の成果の公表に努めた。			
			
		平成24年度遺跡等マネジメント研究集会(第2回)	
【実績値】 研究集会開催数 1 回 [①：参加者数 地方公共団体職員・民間事業者・ボランティア等約 90 名] 刊行図書数 2 件 [②、③] 学会等発表 4 件[④] 論文等数 5 件[⑤]			
【備考】 研究集会 ①『遺跡等マネジメント研究集会（第 2 回）パブリックな存在としての遺跡・遺産 講演・報告資料集』 2012. 12 刊行図書 ②『自然的文化財のマネジメント』平成 23 年度遺跡等マネジメント研究集会（第 1 回）報告書 2012. 12 ③『遺構露出展示に関する調査研究報告書』[附・遺構露出展示データベースDVD] 2013. 3 学会等発表 ④平澤毅「文化的資産としての名勝地の研究」 平成 24 年度日本造園学会全国大会 2012. 5 他 3 件 論文等 ⑤平澤毅「自然的文化財のマネジメント」『奈良文化財研究所紀要 2012』 2012. 6 他 4 件			

自己点検評価調査

研No.10

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	効率性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：ステークホルダーの視点・立場から検討した研究集会は、文化遺産保護において今日的に最も注目されている観点のひとつである「コミュニティ」と深く関連し、時宜を得たものと言える。 独創性：遺跡等のマネジメントを検討する研究集会の他、遺構露出展示に関する包括的な調査研究成果は、これまでに無く独創的なものと言える。 発展性：遺跡等マネジメント研究集会は、22年度に開催した遺跡整備・活用研究集会（第5回）「地域における遺跡の総合的マネジメント」を基礎として、23年度の「自然的文化財のマネジメント」に引き続き、遺跡等のマネジメントに関する課題について発展的に検討を重ねている。 継続性：保存・活用に関する基礎的・応用的な検討を基礎としながら、研究集会の開催等を通じ、遺跡等のマネジメントについて継続的に検討を進めている。 正確性：遺構露出展示に関する調査研究については、全国各地の事例を集約し、包括的に監修したことによって、正確な情報提供に大きく貢献した。 効率性：研究集会の開催、報告書の刊行、学会での発表、論文の発表等をスケジュール通りに進めることができたので、事業を効率的に実施できたと評価できる。						

2. 定量的評価

観点	研究会等の開催回数	刊行図書数	学会等発表件数	論文等件数		
判定	A	A	A	A		
判定理由 研究会等の開催回数：計画通り、研究集会を1回開催し、極めて好評であった。 刊行図書数：計画通り、2冊刊行できた。 学会等発表件数：十分な成果が認められる。 論文等件数：十分な成果が認められる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	概ね当初の計画通り事業を実施した。また、今後の調査研究に関して取り組むべき具体的な課題を明らかにできた。特に、遺構露出展示に関する調査研究の成果を取りまとめることができたことは、日本の遺跡における遺構保存手法の検討に対して大きく貢献するものと言える。また、昨年度から開催している遺跡等マネジメント研究集会については、急速に変化していく社会構造・国民生活等と遺跡を含む記念物保護との関係について、将来を見通した取組として極めて重要であり、さらなる充実を図る必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	遺跡等の整備に関する情報の収集・整理・公開の検討を様々な観点から進めることができた。特に、研究集会において、マネジメントの対象となる遺跡・遺産の特質をステークホルダーの観点・立場から検討したことは、時宜に適った成果として高く評価できる。また、懸案となっていた遺構露出展示に関する調査研究の成果を取りまとめることができた。

業務実績書

研No.11

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査・研究(庭園及び国際研究交流)((1)－⑤－エ・オ)
【事業概要】 庭園史に関する文献調査及び国内外での現地調査の他、「庭園の歴史に関する研究会」の開催など、日本庭園に関する基礎的資料の検討を行い、併せて森・村岡・牛川資料の整理・研究を進める。また、不動産文化財に関連した研究成果について、米国・コロンビア大学との研究交流の下に、コロンビア大学にて講演を行う。	
【担当部課】	文化遺産部
【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長 小野健吉
【スタッフ】 平澤毅、青木達司、恵谷浩子、エドワーズ・W、マレス・E・ベルナール（以上、文化遺産部）、高橋知奈津（都城発掘調査部）、脇谷草一郎（埋蔵文化財センター）	
【主な成果】 中世の庭園・建築・文学・美術史などの研究に取り組んでいる研究者とともに「庭園の歴史に関する研究会」を開催し、その成果を報告書としてまとめた。日本庭園に関する国際的な情報発信検討については、その一環として『Japanese Garden Dictionary』の改訂作業を進めた。また、米国・コロンビア大学において、日本の不動産文化財に係る講演2件を行った。	
【年度実績概要】 ・24年10月13日に、大学などの外部研究者(庭園史学、建築史学、美術史学、文学など)とともに「庭園の歴史に関する研究会」(テーマ：禅宗寺院と庭園)を開催した。 ・上記の研究会の報告書『平成24年度庭園の歴史に関する研究会 禅宗寺院と庭園』の執筆・編集・刊行を行った。 ・森蘊・村岡正・牛川喜幸の庭園等関係研究資料について、整理を進め、毛越寺庭園（岩手県平泉町）など、関連する庭園の現地調査を行った。 ・日本庭園研究に関する国際的な情報発信検討の一環として『Japanese Garden Dictionary』の改訂に向けた作業を進めた。 ・発掘庭園データベースについて、新たな事例収集を進めるとともに、情報項目充実のための検討を行った。 ・国内外における庭園史及び歴史的庭園の保護等に関する情報の収集・整理・検討を進め、スリランカの庭園遺跡等の現地調査を行った。 ・24年9月25日に、米国・コロンビア大学において、コロンビア大学中世日本研究所及びコロンビア大学建築・計画・保存大学院と講演会を共催し、“Protection of Places of Scenic Beauty in Japan”及び“Study on Heat and Moisture Movement in Openly Exhibited Soil Structure Remains”の2つの講演を行った。	
	
毛越寺庭園での調査の様子	
【実績値】 研究集会開催数：2回（①奈良文化財研究所；大学等研究者20名参加、②米国・コロンビア大学；約30名参加） 刊行図書数：1件（③） 論文等数：27件（論文18件、講演・発表等9件）。	
【備考】 研究集会 ①『平成24年度庭園の歴史に関する研究会 禅宗寺院と庭園』 2012.10 ②平澤毅（文化遺産部）、脇谷草一郎（埋蔵文化財センター） 刊行図書 ③『禅宗寺院と庭園』平成24年度庭園の歴史に関する研究会報告書 2013.3	

自己点検評価調査

研No.11

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	効率性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：中世の庭園に関する研究会（テーマ：禅宗寺院と庭園）を開催し、庭園史学、建築史学、美術史学、文学などの外部研究者とともに、多面的に庭園史を考え、報告書にまとめたことは、テーマの発展性や今後の研究方法の在り方を考えても時宜を得たものであった。 独創性：研究会を開催し、研究発表と討論によって多面的に庭園史を検討し、幅広い観点からの考察と新たな課題の明確化を行ったことは、独創的であると言える。 発展性：今期中期計画で対象としている中世の庭園については、今後も様々な角度からの研究が期待される分野であり、本年度の成果を踏まえたさらなる発展が期待できる。 継続性：研究会の開催及び報告書の刊行、米国・コロンビア大学との研究交流の他、資料収集やデータの改訂に向けた作業等、昨年度から行ってきた事業を着実に進めることができた。 正確性：『Japanese Garden Dictionary』の改訂に向けた作業及び発掘庭園データベースの新たな事例収集等、正確な情報提供のための事業を行った。 効率性：研究集会の開催、報告書の刊行、学会での発表、論文の発表等をスケジュール通りに進めることができたので、事業を効率的に実施できたと評価できる。						

2. 定量的評価

観点	研究会等の開催回数	報告書等刊行件数	論文等数			
判定	A	A	A			
判定理由 研究会等の開催回数：計画通り、研究会等を2回開催し（うち1回は米国・コロンビア大学と共催）、研究を深めることができた。 報告書等刊行件数：計画通り、報告書を1冊刊行できた。 論文等数：十分な成果が認められる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の計画通り事業を実施した。また、今後の調査研究に関して取り組むべき具体的な課題を明らかにできた。特に、「庭園の歴史に関する研究会」を開催し、庭園史学、建築史学、美術史学、文学などの外部研究者とともに、多面的に庭園史を考え、報告書にまとめたことは意義があった。また、庭園史及び歴史的庭園等の調査、不動産文化財等に関する研究成果の国内外への情報発信も着実に進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	庭園史に関する文献調査・内外での現地調査、研究会の実施、日本庭園に関する基礎的資料のデータベース化の他、資料の整理及び関連調査についても、着実に進めることができた。 また、米国・コロンビア大学との研究交流のもとに不動産文化財等に関連する各種研究成果の発表を計画通りに行い、併せて今後の研究交流事業の方向性等を確認できた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城宮跡東院の発掘調査((1)ー⑥ーア)		
【事業概要】 古代都城の実体解明を目的とする、平城宮跡東院地区の学術発掘調査。特に、東院地区の中枢部と西北部との境界付近に調査区を設定し、両地区の空間利用の変遷を解明することを主目的とした。調査面積は 1050 m ² 。調査期間は 24 年 12 月 17 日～25 年 3 月 30 日である。			
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【プロジェクト責任者】	副所長 深澤芳樹
【スタッフ】 諫早直人・小田裕樹・鈴木智大(以上、研究員)、渡邊晃宏(史料研究室長) 中村一郎・栗山雅夫(以上、企画調整部研究員)			
【主な成果】 平城宮跡東院地区の北西部にあたる地区で、掘立柱建物、掘立柱塀、溝、土坑、基壇状遺構など多様な遺構を検出した。これらの遺構は、周辺の調査成果も踏まえて 6 時期に区分でき、東院地区において活発な土地利用が行われていたことを明らかにした。また、6 期中枢部を区画する回廊状建物を検出し、中枢部の範囲をつかむ大きな手がかりを得た。また、平城宮跡内で初の検出となる平瓦を外装とする基壇状遺構を確認した。			
【年度実績概要】 検出遺構は掘立柱建物 11 棟、掘立柱塀 11 条、溝 2 条、土坑 3 基、基壇状遺構、礫敷で、これらは大きく 6 時期に区分できる。主な調査成果として、以下のような点を指摘できる。 ・6 期中枢部を区画する回廊状建物の発見 今回の調査により、南の第 401・423 次調査区で検出した長大な南北棟建物は、東西方向へと続く回廊状建物であり、北西隅にあたることを明らかにした。これにより、奈良時代末期にあたる 6 期の東院中枢部が回廊状建物に区画されていたこと、中枢施設が今回の調査区の南東側に位置することが明らかになった。これにより東院地区の中枢部では、3 期以降、複数の建て替えに関わらず、単廊形式の回廊状建物を区画する施設が建てられていたことが明らかになり、規模や位置を変えながらも、回廊状建物が囲まれた空間が継続的に使用されていたことが新たに分かった。これは儀式や饗宴の場として継続的に利用された東院地区中枢部の性格の一端を示唆する。 ・平瓦を外装とする基壇状遺構の検出 平城宮内において、平瓦を外装とする基壇状遺構の検出は初めてである。亀腹状の土壇を保護するための手法とみられる。 ・東院中枢部と西辺部の空間利用の変遷の解明 今回の調査では、東院地区西辺部と、回廊状建物に囲まれる中枢部との空間利用の違いが明らかになり、両者の規模や建物配置が時期により変化していることが明らかになった。これらの成果は、東院地区全体の空間利用の実態を解明する上で重要な手がかりとなる。			
			
		調査区全景(西から)	
【実績値】 論文等数：1 件(①) 発表件数：1 件(報道発表 1 回) (参考値) 出土遺物：土器コンテナ 26 箱、軒丸瓦 21 点、軒平瓦 21 点、丸瓦・平瓦コンテナ 174 箱、鉄製品(鉄釘ほか) 9 点 記録作成数：実測図(A2 判) 24 枚、遺構写真(4×5) カラー 76 枚、モノクロ 76 枚			
【備考】 論文等 ①小田裕樹他「東院の発掘調査 一第 503 次」『奈良文化財研究所紀要 2013』奈良文化財研究所、2013.6(予定)			

自己点検評価調査

研No.12

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：既往の調査で課題となっていた東院地区北西部と中枢部とを区画する施設の変遷を明らかにし、東院地区の空間構造を明らかにする上で重要な成果を得た。 独創性：平城宮跡で初めての検出となる平瓦を外装とする基壇状遺構を検出し、平城宮の実態解明に新知見を与えた。 発展性：調査成果は東院地区の空間利用の変遷のみならず、古代都城研究及び奈良時代史の解明に大きく寄与する考えられる。 効率性：作業員の適切な人員配置を行い、作業の効率化に努めた。 継続性：周辺の既往の調査区からの連続性を確認した。また、次調査への足がかりとなる東院中枢部の区画施設に関わる手がかりを得た。 正確性：調査地域は整地土が厚く堆積し、遺構検出が難しい場所であるが、複数の研究員による遺構検出作業を行い、客観的な検証作業を行った。また調査部員による現場検討会により、さらに正確性を向上した。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文等数：調査の速報として、調査中、調査直後に1件の論文発表を行った。 発表件数：調査成果を発表し、新聞、テレビに報道された。現地説明会では820名の参加があった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	複数時期にわたる遺構が複雑に重複し、遺構の検出が難しい現場であったが、的確な土層や遺構の把握により、正確かつ迅速な調査を行うことができた。特に、東院中枢部を区画する回廊状建物の検出は、今後東院地区全体の空間利用を解明する上で重要な成果である。今回の調査成果を受けて、次年度以降の調査への足がかりを得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	継続的な発掘調査の実施により、複数時期の遺構が錯綜する平城宮跡東院地区にありながら、正確かつ迅速な調査を遂行できた。今後、周辺地区の継続的な発掘調査の実施により、東院地区全体の様相を明らかにすることが期待される。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	古代官衙・集落遺跡等に関する研究集会の実施、報告書の刊行((1)－⑥－ア)		
【事業概要】 飛鳥・藤原京、平城京などの古代都城は、多くの古代官衙・集落遺跡と関連づけることにより、その歴史的特性を明らかにすることができる。また、こうした古代官衙・集落遺跡の調査・研究は、各地で分散的に行われる傾向が強く、都城研究を背景としての総合的検討が地方自治体からも切望されている。そこで、各地の古代官衙・集落遺跡の調査・研究を総合化する研究集会を開催し、報告書を刊行することで、こうした研究課題や地方自治体の要望に応える。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 深澤 芳 樹
【スタッフ】 馬場 基（主任研究員）、青木 敬、小田裕樹、海野 聡（以上、研究員）、小澤 毅（埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室長）			
【主な成果】 (1)第16回古代官衙・集落研究集会を開催した（24年12月7・8日）。テーマは「塩の生産・流通と官衙・集落」である。各地の製塩関係遺跡や関連遺物の紹介、文献資料からみた塩の生産・流通などの検討から、製塩土器の評価や古代塩生産の特質など多岐にわたる議論が活発に繰り広げられた。 (2)昨年度実施した研究集会の報告書を『奈良文化財研究所研究報告第9冊 四面廂建物を考える』として刊行した。			
【年度実績概要】 (1)第16回古代官衙・集落研究集会の開催（24年12月7・8日）「塩の生産・流通と官衙・集落」と題して実施。 発表内容は、馬場 基「古代の塩の生産と流通をめぐって」、羽鳥幸一「瀬戸内の製塩と流通について」、新名 強「古代東海地方における製塩状況」、高橋 透「東北地方における古代の塩の流通と生産」、松葉竜司「若狭・北陸の製塩と流通」、神野恵「都城の製塩土器」、森 泰通「コメント」の計7本で、最後に金田明大氏の司会により活発な討論が行われた。 (2)『奈良文化財研究所研究報告第9冊 四面廂建物を考える』の刊行 昨年度の研究集会の報告書を『奈良文化財研究所研究報告第9冊 四面廂建物を考える』として刊行した。そのうち報告編は、論考6編に討議録を収録し、頁数は214。資料編は四面廂建物の事例を集成した資料集で、頁数は494。			
			
第16回古代官衙・集落研究集会（討論の様子）			
【実績値】 報告書等数2件（①・②） 収集資料数590件 (参考値) 第16回古代官衙・集落研究集会 参加者総数124名 アンケート回答108（回収率約87%） 大変有意義であった：77、有意義であった：29、普通：1、あまり有意義でなかった：1、有意義でなかった：0			
【備考】 報告書等 ①『塩の生産・流通と官衙・集落』第16回 古代官衙・集落研究会研究報告資料、奈良文化財研究所、2012.12 ②『奈良文化財研究所研究報告第9冊 四面廂建物を考える』奈良文化財研究所、2012.12			

自己点検評価調査

研No.13

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：古代官衙や集落の研究を推進するうえで、適切なテーマ設定を行うことができた。 独創性：四面廂建物というこれまでにない検討視座から、多様な議論を引き出した報告書を刊行した。 発展性：塩という汎用性の高いテーマ設定と、古代の製塩研究の到達点を明らかにし、今後の研究方向まで議論したことなど、当該分野に与える影響は大きいと判断できる。 効率性：研究集会の準備や報告書などの作成は、都城発掘調査部を中心に埋蔵文化財センターの助力も得ながら効率的に進めることができた。 継続性：当研究所の事業として例年通り研究集会を開催し、報告書も刊行できた。いずれも、研究所内外の研究者の協力を得て、充実した内容となった。参加者からは、次年度以降も継続的に研究集会が開催され、報告書の刊行を期待する意見が多く寄せられている。 正確性：報告書では、四面廂建物の類例について悉皆的な集成を行い、研究に資する正確なデータを広く提供することが可能となった。研究集会においても各発表者の報告内容が、活発な討論を通じて一層の質的向上を図ることができた。						

2. 定量的評価

観点	報告書等数	収集資料数				
判定	A	A				
判定理由 報告書等数：昨年度の研究集会の記録と資料集を『奈良文化財研究所研究報告第9冊 四面廂建物を考える』として刊行することができた。報告編には6編の論文と研究集会における討論記録を収録した。考古・建築・文献と歴史関連諸分野から共通テーマを論じる研究領域の広範さ、独創的な各論考の内容から今後の活用が期待できる。さらに、全国の類例を悉皆的に収録した資料編の資料的価値を勘案し、十分に成果が認められた。 収集資料数：『奈良文化財研究所研究報告第9冊 四面廂建物を考える』資料編では、古代官衙・集落遺跡における四面廂建物の悉皆的な事例集成を行った。集成した事例数は590例にのぼり、膨大な事例を遺跡単位で図表にまとめて報告した。さらに本年度開催した研究集会「塩の生産・流通と官衙・集落」では、簡易製本の予稿集を作成した。ここでも製塩関連遺跡の全国的な集成によって、古代製塩関連遺跡を列島規模で俯瞰することが可能となった。以上の点から十分な資料収集を行えた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究集会には多くの参加者を得て、アンケートの結果もおおむね好評である。また、各地方自治体からの参加者の評価も高く、今後も継続的に研究集会を開催し、研究成果を公表することが望まれる。 次年度以降も研究集会の開催と報告書刊行の継続を目指す。なお、報告書や予稿集等の編集作業は、次第に効率化が進捗しつつあるが、高い質の維持と強い継続力確保のため、さらなる効率化を目指していく。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	例年通り盛会であった研究集会での報告や討論を通じて、古代都城の分析に資する成果を得たのみならず、全国地方自治体職員等との調査・研究情報を交換する場として、古代都城研究の質的向上の一助ともなった。また、報告書の刊行によって毎年の研究成果を公表し、国民共有の財産となったことも含めて順調と判定した。ただ、報告書刊行作業は、総計700頁を超える大冊なものとなり、予定以上の業務量が発生してしまった。本研究集会及び報告書については、全国の自治体職員等からその継続を望む声も大きく、古代都城の分析にも大いに役立つものであり、今後も継続して事業を推進する必要がある。そのため、継続的かつ安定的な事業実施を担保するためにも、報告書編集作業の効率化を一層推し進めていく。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	藤原宮跡の発掘調査((1)－⑥－ア)		
【事業概要】 「飛鳥・藤原」地域は、我が国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めに至る間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果は広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。藤原宮跡は我が国初の本格的都城を備えた宮殿遺跡であり、官衙地区については研究所発足当初から、中枢部については平成11年度以降、実態解明のための計画調査を実施している。			
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査副部長 杉山 洋
【スタッフ】 森川実、清野孝之、山本崇、木村理恵、松下迪生、今井晃樹、庄田慎矢、黒坂孝裕、荒田啓介、森先一貴、玉田芳英、廣瀬寛、番光(以上、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区))、星野安治(埋蔵文化財センター)、井上直夫、栗山雅夫(以上、企画調整部)			
【主な成果】 (1)174次藤原宮朝堂院朝庭部の調査 朝堂院朝庭東北部の発掘調査。この調査では藤原宮造営時の掘立柱建物を新たに数棟検出し、宮造営にともなう木屑の大量出土をみた。宮造営時から朝堂院の完成にいたるまでの過程を、より具体的に検討するための成果を得た。 (2)175次藤原宮東方官衙地区の調査 東方官衙北地区の発掘調査を実施し、藤原宮期以前から以後におよぶ堀・建物跡や溝を検出した。特に、藤原宮東方官衙地区では初となる礎石建物跡を検出したことで、藤原宮官衙地区の建物配置の実態解明に重要な手がかりを得た。			
【年度実績概要】 (1)174次調査 藤原宮朝堂院朝庭東北部の調査で、既往の調査に続き、朝堂院朝庭の様相解明を目的とする。調査期間は24年4月2日～12月17日で、調査面積は1850㎡である。 調査の結果、藤原宮朝堂院朝庭に敷かれた礫敷をまず確認した。次いで礫敷下層の調査において、①藤原宮造営時の建物遺構を、整地層（第2次整地土）の上・中位ないしは「地山」上面において5棟分検出し、その他柱列を5列検出した。また、②藤原宮造営の過程で窪地に投棄された大量の木屑が、調査区の北辺近くに堆積していることが判明し、③これまでの調査で逐次検出してきた「沼状遺構」の南辺を新たに確認した。今次調査では、ことに宮造営の過程が明らかになり、造営時における掘立柱建物の建て替えや、木屑の大量出土が示す木材加工の証拠など、興味深い知見を得ることができた。 (2)175次調査 藤原宮東方官衙北地区の利用状況、建物配置を明らかにすることを目的として実施した。調査期間は24年4月2日～6月25日で、調査面積は494㎡である。 調査の結果、東方官衙区画堀と、その内側にたつ長大な東西棟掘立柱建物1棟と、区画の外側にたつ礎石建物1棟を検出した。長大な東西棟建物は本調査区北側で行った以前の調査でも検出されており、これらは全て同一区画に属していると考えられるため、この官衙区画では北と南で同様の長大な東西棟建物が建っていたことが判明した。また、礎石建物の発見は藤原宮東方官衙地区では初めてである。その性格については今後とも検討を重ねる必要があるが、藤原宮官衙地区全体の建物配置の実態を解明する貴重な成果を得た。藤原宮期以前には建て替えをともなう建物群の存在を、藤原宮期以後にも複数の建物の存在を確認するなど、本調査区内の通時的な利用状況の一端を明らかにし得た。			
【実績値】 論文等数：6件（調査報告2件） 発表件数：3件（現地説明会1件①、報道発表2件②③） (参考値) 出土遺物：174次（軒瓦90点、丸平瓦コンテナ117箱、土器コンテナ62箱、木・石製品コンテナ20箱、種実など） 175次（軒・道具瓦13点、丸平瓦コンテナ7箱、土器コンテナ37箱、木製品コンテナ3箱、石製品コンテナ1箱、鉄製品コンテナ1箱、種実など） 記録作成数：174次（遺構実測図116枚、写真〈4×5〉340枚） 175次（遺構実測図20枚、写真〈4×5〉98枚） 現地説明会来場者数：460人			
【備考】 ①奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮朝堂院朝庭の調査―飛鳥藤原第174次調査現地説明会資料」2012.11.23 ②奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮朝堂院朝庭の調査―飛鳥藤原第174次調査記者発表資料」2012.11.21 ③奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮東方官衙北地区の調査―飛鳥藤原第175次調査記者発表資料」2012.7.25			

自己点検評価調査

研No.14

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：発掘調査は、既往の成果をふまえ、現在最も必要かつ重要な成果を得られる場所を選定して行っており、適時性の面で十分に評価できると判定した。 独創性：我が国最初の本格的都城の造営から解体までの一連の過程解明に寄与する成果を得た。 発展性：藤原宮中枢部の造営過程、及び官衙地区の実態解明に貴重ながかりを得たことで、高い学問的影響性をもつ成果となった。このことにより、今後の研究課題への新たな展望を得た。 効率性：発掘調査・室内調査は事前の十分な計画に基づいて、必要最低限の時間的・人的・設備的投資によって遂行するよう心がけ、所期の成果を得ることができた。 継続性：特別史跡藤原宮跡の全体解明のための長期継続的な計画調査であり、長年の調査実績を基礎とした質の高い調査を実施できた。 正確性：発掘調査の成果は網羅的に現地で記録した。その過程では必要に応じて外部研究者を招聘して調査データの科学性・正確性を期した。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文等数：研究所紀要をはじめとする紙面において6件発表することができた。 発表件数：報道発表・現地説明会で3件の発表を実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査研究は、調査・記録・公開・発表等を適切に行い、定性的・定量的評価において全て所期の目標を充足しているとみなしうるものであった。 計画調査として、次年度以降も、これまでの質・量を維持した成果を得られるよう継続的に調査を行う予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通りに実施されており、かつ目標を順調に達成した。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	飛鳥地域発掘調査((1)－⑥－ア)		
【事業概要】 本事業は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内に所在する檜隈寺の全体像を明らかにすべく、遺跡周辺の調査を行うものである。檜隈寺は、我が国の国家成立期の舞台である飛鳥における古代寺院として重要な遺跡であり、中心部は史跡に指定されている。この遺跡の実体解明及び保存整備に資するため、2008 年度より発掘調査を実施している。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 杉山 洋
【スタッフ】 黒坂貴裕、今井晃樹、庄田慎矢、荒田敬介(以上、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区))、井上直夫、栗山雅夫(以上、企画調整部)、星野安治(埋蔵文化財センター)			
【主な成果】 本年度は檜隈寺中心伽藍跡の南東方向で、昨年度大型柱穴 2 基を確認した調査区の西側と、同じく昨年度素掘溝を確認した調査区の北側について発掘調査を行った。調査区の面積は合計 140 m ² である。大型柱穴は今回の調査区には存在せず、昨年度確認した 2 基が独立した存在であることが判明した。素掘溝は今回の調査区にも続きが確認され、瓦などの遺物が出土し、遺構の年代に関する手掛かりが得られた。檜隈寺成立期の実体解明に繋がる成果が得られた。			
【年度実績概要】 本調査は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業に関わる事前調査である。調査地は、明日香村南西部の丘陵上に位置し、この丘陵上には、渡来系氏族である東漢氏の氏寺と考えられる檜隈寺が所在する。本年度は、檜隈寺中心伽藍跡の南東方向に所在し、昨年度大型柱穴 2 基を確認した調査区(土壇状の高まり部分)の西側(A区)と、擁壁工事計画に先立ち、昨年度の調査で素掘溝を確認していた丘陵の南東裾部分(B区)の2ヵ所について調査を実施した。調査期間は24年8月1日～9月7日。調査面積は合計140 m ² である。 A区では、昨年度の大型柱穴 2 基に連なる遺構を含め、古代に遡ると考えられる遺構は存在しなかった。 B区では、素掘溝 2 条(SD940・SD943)を確認した。素掘溝 SD940 は昨年度確認した素掘溝の延長部分である。南東から北西へ流れ、幅 2.0m、深さ 85 cmの規模である。丘陵の地形に沿って、北への延長は檜隈寺中心伽藍の東側に延びると見られる。素掘溝 SD943 は幅 1.0m、深さ 30 cmで、SD940 から枝分かれして北東方向へ延びる。埋土の状況から SD940 と一連の溝であることが判明した。遺構から出土した遺物は 6 世紀末頃の土器や瓦が出土したため、今回の素掘溝は檜隈寺成立に関わる時期の遺構と考えられる。 本調査では、A区においては昨年度確認した SX950 に関連する遺構は確認されなかった。しかし、確認できなかったことにより、SX950 は 2 本 1 対で、塔跡に中軸線を揃えた遺構であることを確認できた。B区においては素掘溝 SD940 について今回までで 18m分を確認したことになる。また、その規模は生活・耕作関連の遺構とは考えられず、檜隈寺に関連すると判断され、檜隈寺の成立や寺域などの解明に繋がる。			
 写真：素掘溝(A区)と檜隈寺跡(奥の森)			
【実績値】 論文等数 2 件(論文 2 件①②) (参考値) 出土遺物：丸瓦 15 点、平瓦 105 点、土器 2.5 箱分、炭・燃えさし 2 点、骨片(歯) 1 点 記録作成数：遺構実測図 12 枚、写真(4×5) 23 枚			
【備考】 論文 ①黒坂貴裕他「檜隈寺周辺の調査－飛鳥藤原第 176 次」『奈良文化財研究所紀要 2013』2013.6 (予定) ②黒坂貴裕「檜隈寺の調査(飛鳥藤原第 176 次)」『奈文研ニュース No. 47』2012.12			



写真：素掘溝(A区)と檜隈寺跡(奥の森)

自己点検評価調査

研No.15

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：国営公園整備事業の事前調査と、檜隈寺周辺の遺構状況解明について、双方に寄与した。 発展性：これまで不明な点が多かった6世紀後半～7世紀前半の檜隈寺の動向が確認できる重要な資料を得た。 また、今後の調査地区の設定など調査計画に向けて、有用な情報を得た。 継続性：20年度から実施している発掘調査の成果を受け、檜隈寺周辺の全体像復元にかかわる継続的な調査を行った。						

2. 定量的評価

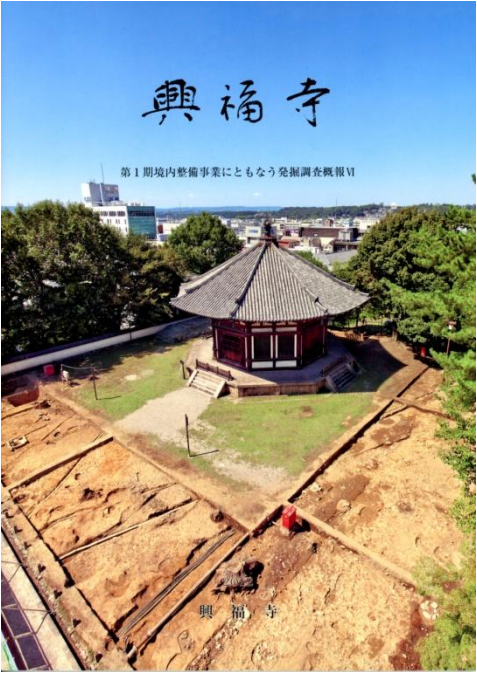
観点	論文等数					
判定	A					
判定理由 論文等数：調査成果の公開となる通例の論文1件、機関広報紙にも1件掲載した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査では、檜隈寺の伽藍が完成した7世紀後半の資料のみならず、これまで不明な点が多かった6世紀後半～7世紀前半の檜隈寺の動向が確認できる資料、及び今後の整備計画・調査計画において土地利用状況に関わる重要なデータを得ることができた。檜隈寺の成立や寺域などの解明に繋がる重要な成果が得られた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査は、年度当初の計画通りに実施されており、国営公園整備事業に関わる範囲について、及び課題であった檜隈寺の全体像復元の解明に向けて、それぞれに有益なデータを得ることができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	平城京跡出土遺物・遺構の調査研究等(①)ー⑥ーイ)
【事業概要】 平成24年度の発掘調査によって平城宮・京跡から出土した木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡などの整理・分析研究、検出遺構の整理・分析研究を、年間を通じて実施した。また、昨年度以前の調査で出土した遺物について、報告書刊行またはその準備作業としての再調査を行った。また、出土遺物の科学的保存処理を継続して実施した。	
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)
【プロジェクト責任者】	副所長 深澤芳樹
【スタッフ】 小池伸彦・芝 康次郎・諫早直人・神野 恵・青木 敬・小田裕樹・渡辺丈彦・石田由紀子・川畑 純・渡辺晃宏・馬場 基・山本祥隆・箱崎和久・鈴木智大・海野 聡・松下迪生・荒田敬介・今井晃樹・森川 実(以上、都城発掘調査部)、大林潤(文化遺産部)、中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾(以上、企画調整部)	
【主な成果】 本年度の発掘調査で出土・検出した遺物・遺構の整理・分析研究、図面作成・写真撮影などの基礎作業を行い、平成25年度刊行予定の『奈良文化財研究所紀要2013』の報告を準備した。併せて、昨年度以前の発掘調査で出土した遺物について調査を継続して実施した。	
【年度実績概要】 ・平成24年度の発掘調査による出土遺物の整理 平城宮・京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡などの整理・分析研究、検出遺構の図面作成・写真撮影・分析研究、及び出土遺物の科学的分析・保存処理は、発掘調査の基礎作業であり、年を通じて発掘調査と併行して、これを遅滞なく実施した。 本年度は薬師寺食堂跡(第500次)において、創建当初の基壇及び礎石立建物を検出し、所期の成果を得た。この発掘調査では、複雑な遺構の整理と出土遺物の調査研究とを実施した。この他、朱雀大路緑地(第491次・第495次)と平城宮跡東院地区(第503次)の発掘調査についても、検出遺構と出土遺物の整理を併行して実施した。 ・平成23年度遺物の出土遺物の整理 平成23年度に実施した興福寺北円堂の発掘調査については、基礎的な遺構と遺物の整理を実施し、当初の予定通りに『興福寺-第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報VI-』を遅滞なく刊行した。また、『名勝大乗院庭園発掘調査報告書』の刊行に向けて、平成23年度に引き続き遺構と遺物の再整理・分析、報告書編集作業を実施した。さらに平城宮東区朝堂院地区の出土遺物・検出遺構についても、報告書刊行に向けての再整理を・分析を開始した。 ・『平城宮発掘調査出土木簡概報(四十二)』を刊行した。	
 刊行した『興福寺-第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報VI-』	
【実績値】 報告書数 2件(①・②)	
【備考】 報告書 ①『興福寺-第1期境内整備事業に伴う発掘調査概報VI-』興福寺、2012.10 ②『平城宮発掘調査出土木簡概報(四十二)』、2012.11	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4162-1

自己点検評価調査

研No.16

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：新たに出土・検出した遺物・遺構の資料的価値を明確にし、重要なものについては迅速に情報公開し、国民の文化財としての活用を図ることができた。 発展性：新たに出土した資料や検出した遺構の検討を通じ、より高度な古代史研究を推進するとともに、資料の分析にあたって新たな方法を追求することができた。 継続性：平城宮・京及び寺院の発掘調査を通じて得た膨大な歴史資料についての基礎的な分析と研究を継続することができた。 正確性：蓄積されている資料を正確に資料化し公表できた。						

2. 定量的評価

観点	報告書数					
判定	A					
判定理由 論文等数：当初予定の刊行物を順調に刊行できたことに加え、新しい成果を適時公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城宮・京跡及び寺院で出土した膨大な考古資料・文字資料を継続的に整理・分析し、古代史研究上の様々な重要課題について、汎東アジア的な視点で検討を加えたこと、また刊行物等の当初予定通りに遅滞なく刊行できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの研究を基礎として、さらに新しい資料・方法を加味・活用して、研究を深化させることができた。

業務実績書

研No.17

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等(①-⑥-イ)		
【事業概要】 本年度の発掘調査により飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦磚類、木簡などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を実施し、合わせて前年度までの発掘調査成果を報告書等で公開するための基礎的整理・分析・復原研究を行う。また、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査副部長 杉山 洋
【スタッフ】 玉田芳英、清野孝之、降幡順子、石橋茂登、山本 崇、黒坂貴裕、今井晃樹、森川実、廣瀬 覚、庄田慎矢、木村理恵、若杉智宏、荒田啓介、森先一貴、橋本美佳、番 光、高橋知奈津〔以上、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)〕、井上直夫、栗山雅夫〔以上、企画調整部〕、星野安治(埋蔵文化財センター)、佐々木由香・藤根久・森将志(以上株式会社パレオ・ラボ)、杉山真二(株式会社古環境研究所)、木村史明(橿原市昆虫館)			
【主な成果】 本年度の発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦磚類などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を実施し、成果の一部を公表した。			
【年度実績概要】 ・本年度の発掘調査による出土遺物について 本年度、飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦磚類などの整理、分析研究、発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業及び、出土遺物の保存と保存処理は発掘調査研究の基礎作業であり、年間を通じての野外での発掘調査と並行して各研究室において計画的に遅滞なく実施した。成果の一部は、『奈良文化財研究所紀要2013』等で公表する予定。 ・前年度までの出土遺物について 発掘調査成果を、計画中の『藤原京左京六条三坊発掘調査報告』等の報告書として公開するための基礎的整理・分析・復原研究、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。藤原京条坊に関連する発掘成果をデータ化する作業は、前年度に引き続いて実施した。この他、坂田寺出土建築部材の整理及び写真撮影、高所寺池出土建築部材の保存処理、藤原宮西方地区出土木簡の整理、甘樫丘東麓遺跡(第171次)の花粉・珪藻・プラントオパール分析、藤原宮朝堂院朝庭(第169次)の自然科学分析、豊浦寺、大官大寺出土の石製部材の調査、石神遺跡出土の人形、藤原宮出土のヘラ描き瓦の整理、藤原宮朝堂院出土瓦(第136次)を実施し、その成果の一部を『奈良文化財研究所紀要2013』等で論文として公表する。 また、植物遺体の回収と整理方法について外部の機関より指導を得た。			
【実績値】 論文等数：5件①～⑤ (参考値) 記録作成数：写真(4×5) 602枚			
【備考】 論文等 ①廣瀬覚他「藤原宮朝堂院朝庭の自然科学分析 第169次調査から」 ②廣瀬覚「飛鳥藤原地域出土基壇外装石の三次元計測」 ③石橋茂登「石神遺跡出土の銅製人形」 ④森先一貴「藤原宮出土のヘラ描き瓦」 ⑤森先一貴「第136次調査出土瓦報告」 以上、奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要2013』2013.6(予定)			

自己点検評価調書

研No.17

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：新出土資料の迅速に公開し活用に供した。 独創性：新たな資料分析方法を追究した。 発展性：蓄積された歴史資料を正確に資料化した。 継続性：膨大な歴史資料の基礎的分析研究と保存処理を実施した。 正確性：新出資料の正確な資料的性格と価値について公表した。						

2. 定量的評価

観点	論文等数					
判定	A					
判定理由 論文等数：過去の調査研究の資料を整理研究し、5件の論文を公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	出土遺物・遺構についての整理調査を、野外での発掘調査と並行して遅滞なく計画通りに実施することができた。また、図書等の刊行を通じて、調査成果の公開も適切に行い得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	報告書作成のための遺物・遺構整理作業を、ほぼ予定通り進めることができた。また、成果物の刊行も計画通りに行い得た。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	東アジアにおける工芸技術及び飛鳥時代の建築遺物等の研究(①-⑥-ウ)		
【事業概要】 飛鳥地域の壁画古墳についての調査研究を行うとともに、東アジアにおける工芸美術史・考古学研究の一環として、金属工芸関連遺物を中心とした資料の調査を行う。また、飛鳥時代木造建築遺物の調査として、山田寺出土部材の研究を行う。			
【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	加藤真二(飛鳥資料館学芸室長)
【スタッフ】 丹羽崇史、成田聖(以上、飛鳥資料館研究員)			
【主な成果】 (1)キトラ古墳、高松塚古墳壁画に関する研究を続けるとともに、唐、朝鮮半島の古墳壁画に関する資料を収集した。 (2)京都大学総合博物館が所蔵する秋田市小阿地遺跡出土の金銅装大刀について、調査研究を行った。 (3)飛鳥寺塔心礎出土品の再整理を実施した。 (4)山田寺出土部材の計測調査を継続した。			
【年度実績概要】 (1)キトラ古墳、高松塚古墳壁画に関する総括的な論文を執筆するとともに、24年9月11日に群馬県立歴史博物館において、同館所蔵の唐墓壁画模写8枚の写真撮影を行い、原寸大パネルを作成した。 (2)京都大学総合博物館と連携研究協定を結び、同館所蔵の秋田市小阿地遺跡出土金銅装大刀の調査研究を行い、その成果を飛鳥資料館研究図録第16冊として、25年3月30日刊行した。 (3)昭和31、32年に奈良国立文化財研究所(当時)が行った飛鳥寺の発掘調査に際して、塔心礎から出土した資料を再分類し、種類ごとの員数等を確認した。その成果は、平成25年度春期特別展にて展示する。 (4)第2展示室で展示している山田寺東回廊部材について、継続的に計測調査を行い、データを集積した。			
			
秋田市小阿地遺跡出土金銅装大刀 (京都大学総合博物館蔵)			
【実績値】 論文2(①、②) 研究図録1(③) 山田寺部材計測データ1年分 (参考値) 唐墓壁画模写原寸大パネル8枚			
【備考】 論文 ①加藤真二(2012)「唐・新羅・日本の墳墓」飛鳥資料館図録第57冊『花開く都城文化』2012.11 ②加藤真二(2013)「キトラ古墳壁画小考」『文化財論叢IV』2012.10 研究図録 ③飛鳥資料館研究図録第16冊『京都大学総合博物館所蔵 秋田市小阿地遺跡出土金銅装大刀の調査研究』2013.3			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：今日的な視座にもとづき古代の標準資料を再整理、公開し、古代史研究のあらたな基礎を提供できた。 独創性：考古学的な見地ばかりでなく、科学的な分析を行った。 発展性：今後の古代史、考古学研究の基礎的資料となるものを提供した。 継続性：東アジアの古代金工に関しては、16冊の研究図録を刊行している。また古墳壁画についても、資料の蓄積が進んでいる。						

2. 定量的評価

観点	研究図録数	論文数	山田寺部材計測データ			
判定	A	A	A			
判定理由 研究図録数：目標値（年1冊以上）を達成した。 論文数：目標値（年2編以上）を達成した。 山田寺部材計測データ：目標値（1年分）を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的、定量的な観点からも十分な成果をあげることができ、考古学、保存科学、美術史等に貢献することができた。次年度以降も継続的に調査研究を続けるとともに資料館の活動に生かしていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	資料の蓄積も進み、研究図録も順調に刊行している。また、研究成果を研究図録や展示によって順調に公開しているため、順調に実施できていると判定した。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究及びカザフスタンへの研究協力((1)－⑥－エ)		
【事業概要】			
(1) 中国社会科学院との共同発掘調査成果の整理と次期共同研究への準備を行う。(2) 遼西地域東晋十六国期都城文化関連遺跡の調査と調査研究報告書を公刊する。(3) 鞏義市黄冶唐三彩窯跡等出土品の共同研究を実施し、成果を公刊する。(4) 日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究と発掘調査交流を、韓国国立文化財研究所と行う。(5) 国立カザフ大学との研究交流を行う。(6) 河南省文物考古研究所と河南省靈井遺跡出土細石刃石器群の研究協力を行う。			
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【プロジェクト責任者】	副所長 深澤芳樹
【スタッフ】			
(1) 杉山 洋、今井晃樹、青木 敬(以上、都城発掘調査部)、栗山雅夫(企画調整部)、他3名(王 巍、朱 岩石、銭 国祥)			
(2) 深澤芳樹、小池伸彦、清野孝之(以上、都城発掘調査部)、加藤真二、栗山雅夫(企画調整部)、他3名(李 向東、華 玉冰、郭 明)			
(3) 杉山 洋・玉田芳英・森川 実(以上、都城発掘調査部)他8名(孫 新民・趙 志文、他)			
(4) 杉山 洋、石橋茂登、青木 敬、庄田慎矢、諫早直人(以上、都城発掘調査部)他24名(卓 京柏、韓 志仙、李 仁叔、他)			
(5) 森本 晋、加藤真二(以上、企画調整部)			
(6) 加藤真二、丹羽崇史、成田 聖(以上、企画調整部)			
【主な成果】			
(1) 漢魏洛陽城調査の資料整理、衛星写真の解析、ベトナム都城の調査、概要報告書作成の準備作業を実施した。			
(2) 団山子・西団山子遺跡の予備調査・踏査、朝陽北塔出土遺物等の調査、調査研究報告書中国語報文2篇・論文6篇の和訳、調査研究報告書の編集作業を実施。			
(3) 河南省鞏義窯で生産した唐三彩の調査研究を実施した。			
(4) 日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究、発掘調査交流を実施した。			
(5) カザフ国立大学収蔵資料の調査、報告論文2件。カザフ国立大学で平城宮跡に関する講演を実施した。			
(6) 25年2月20日～3月2日に中国・香港へ4名の研究者を派遣、国際学会等で研究報告を行った。			
【年度実績概要】			
(1) 24年11月に3名の研究員をベトナムへ派遣し、都城遺跡及び遺物の調査を実施した。次期共同研究にむけて中国社会科学院考古研究所と交渉を継続している。			
(2) 24年6月に3名、25年3月に4名の研究員を遼寧省瀋陽及び朝陽へ派遣し、東団山子・西団山子遺跡の予備調査・踏査と朝陽北塔出土遺物等40点余りの調査を実施した。			
(3) 24年8月に研究員を中国に派遣し、関連資料を調査した。25年3月にはアメリカ、カナダの博物館所蔵の唐三彩を調査し、鞏義窯の産品があることを確認した。			
(4) 日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究では、9名の派遣、6名の招聘を実施した。発掘調査交流では派遣・招聘を各1名、約2ヵ月ずつ実施した。研究報告会も開催し、調査研究協力等を行っている。			
(5) 24年6月にカザフ国立大学歴史学部長タイマガンバトフ教授を招聘し、奈良文化財研究所において中央アジアの文化財に関する講演会を開催した。報告論文も2件執筆した。			
(6) 24年7月にロシア、24年11月に同志社大学、25年2月の第14回北アジア調査研究報告会、香港中文大学学術交流プロジェクトにて研究報告を行った。			
【実績値】			
口頭発表数4件(④他3件)、論文発表数1件(②)、報告書刊行数1件(①)			
(参考値)			
記録作成数:(1) デジタルカメラ1,418カット、(2) デジタルパック(4×5)39カット、デジタルカメラ306カット、			
(3) 写真・調書等の記録多数			
【備考】			
①奈良文化財研究所『河南省鞏義市白河窯跡の発掘調査概報』2013。			
②玉田芳英「中国河南省との共同研究」『奈良文化財研究所概要 2013』2013。			
④Shinji KATO ‘The Diffusion of Northern Microblade Industries in East Asia’ アジア旧石器協会年次シンポジウム、2012.7.8。他3件。			



ベトナム、タンロン皇城研究センターにおける遺物調査(24年11月)

自己点検評価調査

研No.19

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：成果報告を迅速に作成し、研究発表や論文、報告書等で速やかに公表を行った。アジアという広範な地域を対象として、歴史諸分野から都城制や墓制等を比較検討することによって俯瞰していく取り組みは、国際性が高い。 独創性：アジアの考古学に関する最新情報を入手・公開し、日本における事例との比較検討を行い、日本古代史の再検討に貢献できた。 発展性：海外の諸研究機関と密接に連携し、日本文化の源流を探るための基礎的研究の蓄積を継続している。 効率性：各事業では、数名の研究員を海外に派遣し、限られた時間内で効率的な資料収集を行うことができた。 継続性：本年度も膨大な調査資料の詳細な調書作成や、高精細な写真撮影を継続的に実施し、資料の充実を期した。						

2. 定量的評価

観点	口頭発表数	論文発表数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
判定理由 口頭発表数：計画通りに日本側も発表の機会を得、発表ができた。 論文発表数：目標に沿うかたちで発表することができた。 報告書刊行数：予定したものを刊行することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中国、韓国、カザフスタン等で、関係研究機関との密な連携のもと、遺跡・遺物を考古学・文献史学・建築史など複数分野にまたがって調査し、相互の研究を向上させた他、計画通りに事業を実施できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	いずれの研究も計画通りに実施し、本年度も成果をあげることができたことから、順調と判定した。これらの国際共同研究は、都城発掘調査部を中心として担当しており、6つの事業での研究成果を総合的に組み立てることにより、都城制や墓制、生産遺跡をはじめとした遺跡からみた古代史の解明に資する成果を達成することを目指している。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究(1)～⑦)
【事業概要】 文化的景観及びその保存・活用に関する調査・研究の一環として、諸外国との比較を行いつつ、我が国の文化的景観保護行政に関する基礎的な情報を収集し、整理が終了したものより順次公表を行う。また、文化的景観の学術及び保護に資する研究会を定期開催し、その成果を踏まえて文化的景観の保護に関する研究集会を開催する。	
【担当部課】	文化遺産部
【プロジェクト責任者】	景観研究室長 平澤毅
【スタッフ】 小野健吉(前景観研究室長)、恵谷浩子、菊地淑人(以上、文化遺産部研究員) 清水重敦(元景観研究室長)、松本将一郎(前特別研究員)、小浦久子(客員研究員)	
【主な成果】 文化的景観及びその保存・活用に関する調査・研究の一環として、「文化的景観研究集会(第5回)」及び「文化的景観学研究会」を開催した他、現地調査等を行い、論文等を通じて成果を報告した。また、“World Heritage Papers 26”の翻訳作業等を進めた。	
【年度実績概要】 (1) 基礎的・体系的研究 ・文化的景観研究集会(第5回) [テーマ「文化的景観の使い方」] を、24年12月14・15日に、安土城考古博物館を会場に開催した。1日目は重要文化的景観「近江八幡の水郷」の現地視察の他、基調講演1件と講演2件、2日目は報告4件と総合討議を行った。との回答を得た。 ・上記の研究集会に合わせ、『文化的景観研究集会(第5回)講演・報告資料集』(備考①)を作成した他、昨年度開催した研究集会(第4回)の成果報告書(備考②)を刊行した。 ・「文化的景観学」検討会を25年2月23日に開催し、文化的景観学の体系化に向け検討すべき事項等について協議を行った。 ・World Heritage Papers 26 “World Heritage Cultural Landscapes: A Handbook for Conservation and Management” の翻訳作業等を進めるとともに、翻訳権契約に関する協議等を整えた。 (2) 文化的景観保護に関する現地調査・研究 ・宇治市、四万十市、亀岡市をフィールドに、それぞれの地方公共団体担当部局への協力を通じて、文化的景観の価値評価及び整備計画に関する検討を行った。 ・全国の文化的景観に関する協議等により、文化的景観の価値評価及び保護のあり方について検討を進めた。	
【実績値】 研究集会等開催数 2回 文化的景観研究集会 ①(参加者数/地方自治体職員・研究者・民間事業者等、107名) 24年12月14・15日 「文化的景観学」検討会 (参加者 外部専門家等6名及び景観研究室3名) 25年2月23日 刊行図書数 1冊② 論文等数 12件(論文等9件③、講演・発表等3件④)	
【備考】 研究集会等 ①奈良文化財研究所『文化的景観研究集会(第5回) 文化的景観のつかい方 講演・報告資料集』2012.12 刊行図書 ②奈良文化財研究所『文化的景観研究集会(第4回)報告書 文化的景観の現在-保護行政・学術研究の中間総括-』2012.12 論文等 ③清水重敦「文化的景観の6年 文化的景観研究集会(第4回)の議論から」『奈良文化財研究所紀要2012』2012.6 他8件 ④恵谷浩子「学としての文化的景観と保護行政」人文地理学会歴史地理部会、2012.11 他2件	



文化的景観研究集会(第5回)における見学会

自己点検評価調査

研No.20

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：文化的景観研究集会及び「文化的景観学」検討会を通じて、2004年に創設された文化的景観保護制度の今日的な運用について、地域の総合施策の観点から検討を深めたことは、極めて時宜に適っている。 独創性：現地調査を通じた保護手法について検討・提案を行い、文化的景観保護行政及びその学術研究の向上に貢献した。 発展性：諸外国との比較研究として、昨年度実施したアメリカ合衆国における文化的景観の調査研究を踏まえ、文化的景観に関する重要文献の翻訳・検討を発展的に進めた。 効率性：文化的景観研究集会の開催等、これまで実績を重ねて来た事業については、人的投資及び時間的投資の観点から効率性が向上した。 継続性：文化的景観に関する研究集会及び研究会の他、現地調査や情報収集を通じて、従前の成果を踏まえつつ、文化的景観の保存と活用に関する継続的検討を進めた。 正確性：文化庁との連携の下に、国内の文化的景観に関わる情報の把握・収集及び現地調査において、詳細かつ正確な把握・検討を行った。また、World Heritage Papers 26の日本語版刊行に向けて、UNESCOと翻訳権契約締結のための協議を進め、本書刊行の厳格な取扱いの正確性を確保した。						

2. 定量的評価

観点	研究集会等開催数	刊行図書数	論文等数			
判定	A	A	A			
判定理由 研究集会等開催数：計画通り研究集会1回を開催し、極めて好評であった。また、検討会を1回開催した。 刊行図書数：計画通り1冊の報告書を刊行した。 論文等数：十分な成果が認められる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	1：文化的景観に関する研究集会等の実施による保護行政や学術研究への貢献、2：四万十川流域などを対象とした現地での調査研究、3：文化的景観に関する重要な海外文献の翻訳、4：報告書の刊行や学会・学術雑誌等での研究成果発表等、年度当初の計画を的確に遂行することができた。これらの調査研究の取組を発展・継続させ、さらに充実を図っていく必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化的景観に関する研究集会の開催や現地調査の実施等により、当初の計画通り研究を遂行することができた。特に、研究集会では、地域を持続可能な暮らしの場にするとの観点から文化的景観保護の在り方を深め、また、現地調査・研究では、保存計画や整備・活用計画の策定について検討を進めることができた。次年度以降、文化庁との連携・協力を深めつつ、「文化的景観学」検討会における検討を中心として、個別の課題に対する検討も重ね、文化的景観に関する学術上及び保護行政上の検討をさらに深めていくこととしている。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	遺跡データベースの作成と公開(①)～⑧～ア)
【事業概要】	
官衙関係遺跡の指標や属性分析法の確立に関する研究等を継続し、資料収集とデータベース化を進めて順次一般公開するとともに、寺院遺跡の発掘調査で抽出すべき基本的属性についてのデータ収集と分析を行い、一般公開する	
【担当部課】	埋蔵文化財センター
【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
【スタッフ】	
山中敏史(客員研究員)、森本晋(企画調整部国際遺跡研究室長)、馬場基(都城発掘調査部主任研究員)、青木敬、海野聡、小田裕樹(以上、都城発掘調査部研究員)、清野陽一(京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程)	
【主な成果】	
官衙関係遺跡の建物データについては、とくに古代における四面廂建物の遺構を重点的に収集し、居宅や集落まで範囲を広げて全国的に網羅する『四面廂建物資料集成』を作成した。また、寺院遺跡の属性分析をふまえたデータベースを、九州から東海地方まで公開した。さらに、井戸のデータベースの対象を古代の遺跡全般に拡充して、資料収集を行った。	
【年度実績概要】	
- 平成22年度以前に刊行された古代の遺跡全般に関する報告書のめくり作業を行い、四面廂建物の遺構の資料を全国的に収集・整理して、研究報告「四面廂建物を考える」の資料編(①)を刊行した。 - 報告書のめくり作業を行い、国府・郡衙・城柵やその他の官衙関係遺跡などの資料を追加収集・整理した。また、東海地方の古代寺院に関する報告書のめくり作業を行った。3 - 新たに収集した官衙関係遺跡と古代寺院遺跡の資料をデータベース化し、新出資料も追加して一般公開した。 - 古代寺院遺跡の建物遺構を中心とした属性分析を進め、それにもとづく寺院遺跡データベース構造を作成して資料収集と整理を行い、静岡県以西のデータを奈良文化財研究所のウェブサイトで一般公開した。 - 平成21年度以前に刊行された古代の遺跡全般に関する報告書のめくり作業を行い、井戸のデータベースの作成・公開に向けた資料収集を実施した。	
 古代寺院建物データ入力画面(部分)	
【実績値】	
データベース入力・補訂件数	
官衙関係遺跡データベース：遺跡数約10件、文献データ約240件、建物データ約1,120件、画像データ約300件、井戸データ約1,150件	
古代寺院遺跡データベース：遺跡数約80件、文献データ約1,920件、建物データ約410件、画像データ約3,300件	
公開データ数：官衙関係遺跡：遺跡数約1,640件、文献データ約15,130件、建物データ約17,900件など	
古代寺院遺跡：遺跡数約1,090件、文献データ約12,840件、建物データ約2,480件など	
(参考値)	
公開図書数：1件(①)	
【備考】	
公開図書 ①奈良文化財研究所『四面廂建物を考える 資料編』奈良文化財研究所研究報告第9冊、2012.12.	

自己点検評価調査

研No.21

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性	独創性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：近年需要が多い古代官衙関連遺跡と古代寺院遺跡のデータベースを充実させ、活用に供した。 発展性：必要な項目が生じた場合は追加するなど、データベースの改良に努めている。 継続性：毎年増加し続ける遺跡データを継続的に収集し、公開している。 正確性：新出資料の追加に加え、変更を生じた事項についても改定を行った。 独創性：属性分析の成果をふまえて、さまざまな分析に役立つ多彩な項目を設置している。						

2. 定量的評価

観点	データベース 入力・補訂件数	公開データ数				
判定	A	A				
判定理由 データベース入力件数：奈良県から東海地方の官衙遺跡の補填と、古代寺院の入力、井戸の入力を行い、目標を上回った。 データベース公開件数：目標である 50,000 件を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	データベース入力件数の目標値を上回った他、古代の遺跡全般における四面廂建物遺構の資料収集とデータベース化を行い、資料集を刊行した。古代寺院遺跡のデータベースでは、古代の中心地でもある奈良県内についてのデータを一般公開できた。各地で寺院遺跡の調査研究にあたっている人々にとって、情報の共有化につながると同時に、遺跡から抽出すべき遺構の属性についての指標を提示するものであり、寄与するところが大きい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	官衙関連遺跡について、新出資料の補充を含めたデータベースの作成を着実に進め、一般公開するとともに、官衙以外の居宅や集落における四面廂建物のデータも収集して、データベースのいっそうの充実化を図ることができた。平成 21 年度に構築した寺院遺跡のデータベースでは、静岡県以西のデータを網羅的に収集・整理してデータベース化し、一般公開した。本年度の計画を予定どおり順調に達成できたといえる。今後も、官衙関連遺跡及び寺院データの収集とデータベース化を継続し、より利用しやすいかたちでの一般公開を推進していくことが必要である。また、発掘調査で検出例の多い井戸遺構についても属性分析を行い、整理・収集とデータベース化を進めることで、遺跡の調査や建物遺構の分析における新たな指標を示すことができるよう努めたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査((1)－⑧－イ)		
【事業概要】			
出土遺物等の材質構造調査を行い、劣化状態に関する基礎データを集積する。また、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査を実施し、埋蔵中に生じる遺物の劣化現象に関して、環境が及ぼす影響の基礎データを集積する。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】			
脇谷草一郎、田村朋美（以上、研究員）、降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）、赤田昌倫（特別研究員）、佐藤昌憲、肥塚隆保（以上、客員研究員）			
【主な成果】			
(1) ガラス及び鉾物の標準試料のスペクトルを集積し、ガラス製遺物と石製遺物のスペクトルを取得した。 (2) 遺跡から出土した大刀のXCT撮影を実施することにより、刀装具や柄の構造を明らかにした。 (3) 木造建造物の塗装の彩色調査を行い、使用された色料について明らかにした。 (4) 鉄製遺物の埋蔵環境の室内再現実験を実施し、腐食のメカニズムの解明に取り組んだ。 (5) 「古代の繊維—古代繊維技術研究の最近の動向—」をテーマとした研究集会を開催した。			
【年度実績概要】			
(1) 山口県土井ヶ浜遺跡から出土した淡青色不透明小玉のレーザーラマン分光分析と蛍光X線分析を実施し、天河石（アマゾナイト）製であることを明らかにした。 (2) 京都大学総合博物館所蔵の秋田市小阿地遺跡出土金銅装大刀のXCT撮影を実施し、刀装具や柄部分の構造を調査することで、製作工程を明らかにした。 (3) 談山神社の本殿における各部材の彩色調査を行い、ベンガラと鉛丹、水銀朱が使用されていたことを解明した。また近世の修理で再塗装された部材の展色剤には膠が使用されたことを明らかにした。 (4) 鷹島海底遺跡を対象として、海洋鉄製遺物の埋蔵環境の室内再現実験を行い、鉄製品の腐食と埋蔵環境の関係について基礎データを収集した。 (5) 「古代の繊維—古代繊維技術研究の最近の動向—」と題した研究集会を開催し、古代の繊維関係の最新の保存科学的研究の動向について、情報交換と総合討議などを行った。			 談山神社部材の試料採取
【実績値】			
発表件数：3件（①～③） 論文等数：6件（④～⑥） 研究集会開催件数：1件（参加者数76名）			
【備考】			
発表 ①田村朋美、高妻洋成「弥生・古墳時代のナトロンガラス製玉類の考古科学的研究」日本文化財科学会第29回大会、2012.6.23 ②柳田明進、脇谷草一郎、高妻洋成「海水環境が鉄製遺物の腐食過程に及ぼす影響」日本文化財科学会第29回大会、2012.6.23 ③赤田昌倫、高妻洋成、舘俊秀、渡邊緩子、金旻貞、小野村勇人、降幡順子、脇谷草一郎、田村朋美「文化財建造物塗装材料の分析(3)」文化財保存修復学会第34回大会、2012.6.30 論文等 ④田村朋美、高妻洋成「弥生・古墳時代のナトロンガラス製玉類の考古科学的研究」『日本文化財科学会第29回大会研究発表要旨集』2012.6 ⑤柳田明進、脇谷草一郎、高妻洋成「海水環境が鉄製遺物の腐食過程に及ぼす影響」『日本文化財科学会第29回大会研究発表要旨集』2012.6 ⑥赤田昌倫、高妻洋成、舘俊秀、渡邊緩子、金旻貞、小野村勇人、降幡順子、脇谷草一郎、田村朋美「文化財建造物塗装材料の分析(3)」『文化財保存修復学会第34回大会研究発表要旨集』2012.6 他3件			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：出土遺物の材質構造調査に非破壊的な手法が求められているなか、種々の調査機器を応用することで、より多様な遺物の材質構造調査が可能となり、古代の材料や技術に関する新しい知見を得ることができる。 また、平城宮跡など、遺物が埋蔵した状態で整備が行われる事例の増加にともない、埋蔵環境中での遺物の劣化機構の解明が求められている。 独創性：埋蔵環境中における鉄製品の腐食に関する基礎データを収集するため、鉄製遺物の埋蔵環境を室内で再現した腐食実験を行った例はない。 発展性：出土遺物の材質構造に関するデータを集積し、類例との比較研究を進展させることで、生産地や交易関係を明らかにすることができる。 効率性：遺跡から大量に出土するガラス製遺物に対しては、同時に多量の材質調査が可能な方法を適用することで、迅速な調査を実施した。 正確性：蛍光X線分析法とレーザーラマン分光分析法など、複数の分析法を併用することで、精度の高い材質調査を行うことができた。						

2. 定量的評価

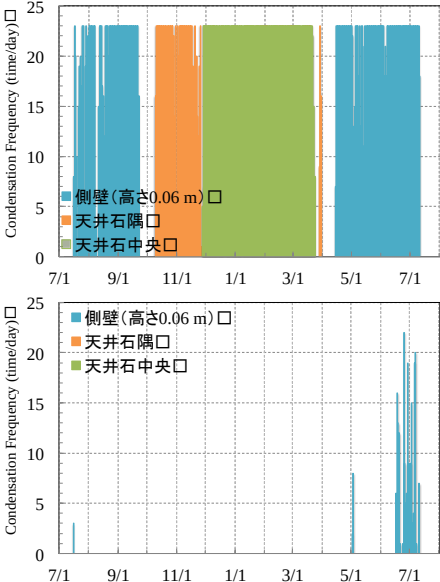
観点	発表件数	論文等数	研究集会開催件数			
判定	A	A	A			
判定理由 発表件数：目標を達成した。 論文等数：目標を達成した。 研究集会開催件数：目標を達成し、76名の参加を得た。						

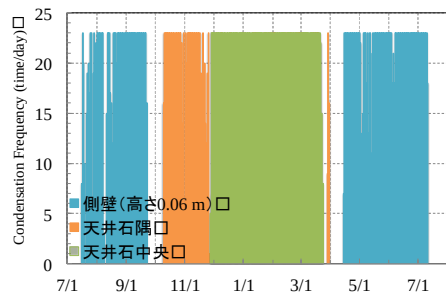
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究事業を当初計画どおり順調に達成することができた。次年度は、ガラス・石製品に加えて有機質遺物にもラマン分光分析の応用範囲を広げていきたい。埋蔵環境調査では、平城宮跡内での埋蔵環境調査を実施し、木製遺物の保存と埋蔵環境の関係についてのデータ収集を進めていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画どおり実施できたことから、順調と判定した。次年度は、ラマン分光分析の応用範囲の拡大や、平城宮跡内での埋蔵環境調査を進めていきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集(1)ー⑧ーウ)		
【事業概要】 土質遺構や装飾古墳の安定した公開・展示を行うことを目的とした環境調査、ならびに維持管理技術の開発的研究の一環として、遺跡を構成する土、石材及び大気における熱・水分移動を推定する解析技術に関する研究、及び土質遺構露出展示、装飾古墳の公開・展示に関する実地試験に取り組む。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）、脇谷草一郎、田村朋美（以上、研究員）			
【主な成果】 土質遺構の露出展示を実施予定の宮畑遺跡を調査フィールドとして、遺構の保護施設（覆屋）内の室空気及び遺構土壌における熱水分同時移動解析を行い、遺構土壌の適切な含水状態の維持及び塩類析出を抑制するための換気条件について検討した。ガランドヤ古墳では石室周辺の熱水分同時移動解析を行い、封土を失い露出した石室が防水シートで覆われていた以前の状に比べて、石室保護施設が設置された現在は結露性状がどれほど改善されたのかを検討した。また、石室内室空気変化について解析を行い、石室の公開が可能となる時期について検討した。			
【年度実績概要】 ・ 福島市の宮畑遺跡では土質遺構露出展示のための保護施設（以下「覆屋」）が竣工している。そこで、覆屋の屋根や壁の断熱性、窓の日射取得率や結露、換気回数などを考慮し、遺構土壌の含水率変化と覆屋内室空気の変化について解析を行った。換気回数を0.2回/時間及び0.5回/時間として解析した結果、いずれにおいても遺構土壌表面の含水率は周期的変動を示した。しかし、後者では含水率の極小値が遺構土壌の塑性限界を下回り、乾燥による劣化の発生が予測された。また、このとき覆屋内室空気の相対湿度は約70%まで低下し、遺構表面における塩類の析出が予測された。以上の結果から、宮畑遺跡では適切な換気条件により、遺構土壌の安定化が図れる見通しが得られた。 ・ 日田市のガランドヤ古墳では、復元する墳丘によって石室石材表面における結露の発生を抑制し、装飾の保存を図る手法の検討を進めている。本年度は、防水シートで石室が覆われた以前の状態と、遮水性の石室保護施設を設置した現況について、数値解析から結露発生の頻度と発生箇所を比較した。その結果、前者では、発生箇所を変えながら1年中結露が発生するのに対して、後者では夏期のみ側壁底部で結露が発生すると判断され、保護施設の設置により、結露の発生を大幅に抑制しうることがわかった。 ・ 大分市の元町石仏では、繰り返し析出する塩類によって、石仏表面の剥離が進行しており、その対策が喫緊の課題となっている。本年度は、石仏表面に集積している塩類を除去する手法として和紙によるフェイシングを行い、和紙への塩類の移動量について検討した。その結果、石仏表面に析出する硫酸ナトリウムが大量に和紙へと移動しており、これらの除去法として有効であることが確認された。			
			
ガランドヤ古墳結露発生回数の変化（上：防水シートあり、下：保護施設内（現在））			
【実績値】 発表件数 2件（①～②） 論文等数 3件（③～⑤）			
【備考】 発表 ①脇谷草一郎、高妻洋成「土質遺構露出展示状態の宮畑遺跡における水分移動解析」日本文化財科学会、2012.6.23 ②Soichiro Wakiya, et al. 'An Investigation of preserving the carved stigation of preserving the carved stone in burial mound using numerical analysis of heat and moisture simultaneous transfer' International Building Physics Conference2012 (IBPC 2012) ,2012.5.28-31 論文等 ③脇谷草一郎、高妻洋成「土質遺構露出展示状態の宮畑遺跡における水分移動解析」『日本文化財科学会第29回大会発『日本文化財科学会第29回大会発表要旨集』2012.6 ④Soichiro Wakiya, et al. 'An Investigation of preserving the carved stone in burial mound using numerical analysis of heat and moisture simultaneous transfer' IBPC2012 Proceedings of the 5th, 2012.5 ⑤脇谷草一郎、高妻洋成「史跡ガランドヤ古墳における水の挙動に関する調査研究3」『奈良文化財研究所紀要2012』奈良文化財研究所、2012.6			



ガランドヤ古墳結露発生回数の変化（上：防水シートあり、下：保護施設内（現在））

自己点検評価調査

研No.23

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：遺跡の公開・活用が推進される現在において、遺跡を適切な環境下で保存しつつ観覧に供する技術の開発は不可欠のものである。 独創性：本研究は、整備後に生じる遺構の劣化を予測し、それを回避しうる適切な環境を制御することで、遺構保存を実現することを目的としており、既往の手法とはコンセプトを異にする。 発展性：個々の遺構を取り巻く環境は千差万別であるが、塩類析出などの劣化要因は普遍的なものである。したがって、本研究から得られた知見は広い汎用性を有する。 効率性：フィールド調査で使用する機材は、取り巻く環境が異なる様々な遺跡で使用可能のものであることから、設備的投資の効率は高いと考える。 正確性：恒常的な高湿度環境など、継続的な調査にとっては過酷な環境下での調査がほとんどであるが、それに対する耐性をもつ測定器具類を選定しており、得られたデータは十分な正確性を有するものとする。また、数値解析結果を実測値と比較することで、解析モデルの妥当性についても十分検討を行っている。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数				
判定	A	A				
判定理由 発表件数：目標を達成した。 論文等数：目標を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究事業を当初の計画通り順調に達成することができた。次年度はさらに詳細な二次元の熱水分同時移動解析を引き続き実施し、装飾古墳石室内の結露を抑制する環境制御法の開発や、とくに塩類析出の抑制に着目した土質遺構の安定化法について検討を行う予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業を当初の計画通り順調に達成することができたことから、順調と判定した。次年度の土質遺構の保存に関する研究では、塩類析出の詳細なメカニズムを検討しつつ、それらの析出を抑制する環境制御法を検討する予定である。また、装飾古墳の保存については、数値解析を応用して、一般公開の実施時期など文化財の公開・活用に資する知見の提供も目標に研究を進めたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財デジタル画像形成に関する調査研究((2)-①)		
【事業概要】 本研究では、着色仏画、彩色壁画・油彩画・日本画などを対象とし、文化財研究に資するデジタル画像の形成方法及びその応用のための手法（表示・出力）を開発し、広範な活用の方向性を研究する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	広領域研究室長 小林 公治
【スタッフ】 田中淳（企画情報部長）、山梨絵美子（副部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、綿田稔（文化財アーカイブズ研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、城野誠治（専門職員）、鳥光美佳子（アソジエイトフェロー）、早川泰弘（保存修復科学センター分析科学研究室長）江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）			
【主な成果】 脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財に対して最先端の光学調査を行うことによって得られた高精細画像や特殊撮影画像を分析研究し、さらにその公開による広範な利用を目指して、本年度は宮内庁三の丸尚蔵館との共同調査研究として春日権現験記絵、奈良国立博物館との共同調査研究として国宝當麻根本曼荼羅（當麻寺所蔵）他の調査・撮影を実施した。この他、経年変化で判読不能となったジアゾ式湿式青焼コピーの撮影による復元研究を行った。			
【年度実績概要】 本年度実施した他機関との共同調査研究 ・宮内庁三の丸尚蔵館（「春日権現験記絵」第4・15巻の調査） 可視光線マルチショット撮影、赤外線撮影（上下両方向）、蛍光撮影、蛍光X線撮影 ・奈良国立博物館（国宝「當麻根本曼荼羅」の調査） 可視光線6ショット分割撮影・部分拡大撮影、赤外線分割撮影、蛍光写真分割撮影 各種文化財の光学調査 ・蠟光作「馬」（東京国立近代美術館所蔵） 近赤外線撮影（表面）、透過近赤外線撮影、カラー撮影 ・鳳凰堂扉絵「日想観」（平等院所蔵） 近赤外線撮影、蛍光撮影、カラー撮影 ・この他、所内外からの依頼を受け、以下10件の文化財光学調査を実施した。 靈照女図（修復後）、横山大観作「山路」、絵師金藏作芝居絵屏風（修復前）、人物埴輪頭部、源氏物語図屏風、二十五菩薩来迎図、白杵磨崖仏、絹本着色阿弥陀聖衆来迎図、ミャンマー国内文化遺産、中国陝西省内壁画墓 成果の公表 ・兵庫県立歴史博物館で開催された特別展及び図録中、また公刊論文中や発表でこれまでの調査研究成果の一部を公表することができた。 退色劣化したジアゾ式湿式青焼コピーの復元研究 ・戦前から昭和40年代頃まで事務文書複製などに盛んに使用されたいわゆる青焼コピーは時間の経過と共に退色し、その記載内容の判読が不能となる。こうした文書類に対し撮影による簡便な復元手法の開発を行い、良好な復元結果を得た。			
【実績値】 学会等での発表件数 2件（①・②） 調査成果の公表 2件（③・④） 光学調査撮影件数 14件			
【備考】 学会等での発表： ①太田彩・小林達朗・城野誠治「宮内庁三の丸尚蔵館所蔵春日権現験記絵共同調査の中間報告」2012年度第6回企画情報部研究会 2012年9月25日 ②大谷省吾「蠟光《眼のある風景》をめぐる」2012年度第10回企画情報部研究会 2013年2月26日 調査成果の公表： ③兵庫県立歴史博物館『鶴林寺太子堂 聖徳太子と御法の花のみほとけ』2012年4月 ④津田 徹英「佛光寺本『善信聖人親鸞伝絵』の製作時期をめぐる」『美術研究』第408号 2013年1月			



當麻根本曼荼羅の調査風景

自己点検評価調査

研No.24

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	S	A	A	A	
判定理由 適時性：共同調査で実施した両作品はこれまでその高精細画像記録や調査が切望されていたものであるため。 独創性：従来、ほとんど調査されてこなかった佛光寺本「善信聖人親鸞伝絵」の調査成果を綿密な考察と高精細画像を伴って発表することができた。また青焼きコピーの文書類に対し撮影による簡便な復元手法の開発を行い、良好な復元結果を得た。以上の2件の成果を上げることができたのでSとした。 発展性：これらの調査データは将来にわたって作品の調査研究などに活用される基礎資料となるものであるため。 継続性：宮内庁三の丸尚蔵館および奈良国立博物館とは継続して優品を対象として様々な共同調査を実施しているため。 正確性：得られたデータは作品に対して網羅的なものであるため。						

2. 定量的評価

観点	調査成果の公表数	学会等での発表件数	光学調査撮影件数			
判定	A	A	A			
判定理由 調査成果の公表数・学会等での発表件数・光学調査撮影件数： これまで調査を実施してきたものについて機会を捉えて適宜成果を公表してきたこと及び、様々な文化財に対する調査を実施できたため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	他館との共同研究により、これまで調査ならびに研究が困難である極めて重要な作品（「春日権現験記絵」及び国宝「當麻根本曼荼羅」）の調査・撮影を実施することができた。また撮影成果については特別展図録及び論文や発表を通じて公表することができた。加え、これまでどこも開発していなかった劣化青焼きコピー復元の見通しが立ったことは特筆される。今後は、こうした成果の公開について検討の上、実現の方向性を探りたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に沿って貴重な文化財に対する調査・研究を実施することができた。また成果の公開についても特別展図録などに掲載されることで広く公表することができた。次年度においても様々な手法による光学調査の研究を進めると共に、恒常的な成果公開の方向性を検討したい。

業務実績書

研No.25

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の測量・探査等に関する研究((2)ー②)
【事業概要】 文化財保護行政に資する研究を主眼として、発掘調査の際の測量・計測による記録方法の高度化、非破壊的手段である探査による地下遺構の把握、その他遺跡を対象とした各種の研究法の開発と試験、活用方法の検討をおこなう。	
【担当部課】	埋蔵文化財センター
【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
【スタッフ】 金田明大（主任研究員）、西村康、西口和彦（以上、客員研究員）	
【主な成果】 (1) 三次元レーザースキャナー及び写真計測による遺構・遺物計測の精緻化と迅速化を検討し、実用化を進めた。 (2) 地中レーダー探査の作業方法を改良し、探査試験を実施した。 (3) 磁気探査機器の多プローブによる同時測定の実験を行い、必要な機器の開発を進めた。 (4) 各地の依頼により、計測及び探査を実施した。	
【年度実績概要】 (1) 三次元計測機器（レーザースキャナー、写真計測）を利用して遺構・遺物の計測を行い、従来の記録との互換性を図りつつ、精緻かつ迅速に記録する方法を実践した。作業に際しては本研究所の所蔵資料をはじめとする資料を活用し、良好な計測が可能な条件を検討した。 (2) 地中レーダー探査機器のノイズ低減及び位置情報の精緻化の実験を実施した。また、アレイ型地中レーダーの実験を行い、地中の礎石の形状まで把握することができた。 (3) 多プローブによる同時計測が可能な磁気探査機を導入し、遺跡の作業に適した補助器具の試験機を開発して、初歩的な実験を行った。 (4) 崎山貝塚（岩手県）、金沢城（石川県）、平城宮、東大寺法華堂・東塔院（以上、奈良県）、牟田洞窯（岐阜県）において探査試験を実施した。また、砂原陣屋（北海道）、天良七堂遺跡、三軒屋遺跡（以上、群馬県）、周防国府（山口県）、備前国分寺（岡山県）では受託研究として探査を行った。ボラルダイ古墓群（カザフスタン）では、東文研と共同で探査と中央アジア諸国の研究者への技術移転を目的とする UNESCO 国際ワークショップを行った。赤前遺跡（岩手県）、平城宮、東大寺、薬師寺（以上、奈良県）では三次元計測の実験をレーザースキャナー、写真測量、角度計付き LRF を用いて実施し、比較検討を実施した。この他、東日本大震災における復興調査に関する会議に技術的な観点から検討を加え、文化庁・岩手県と連携して三陸沿岸地域での計測技術に関するワークショップを開催した。	
	
被災地の遺跡発掘現場における計測試験	
【実績値】 探査件数：14 件 計測件数：6 件 発表件数：9 件（①～②） 論文等数：8 件（③～④）	
【備考】 発表 ①金田明大「現場ですべきこと、整理室でできること」日本文化財科学会、2012. 6. 23 ②金田明大「掘らずに土の中を見る」奈良文化財研究所創立 60 周年記念特別講演会 2012. 10. 6 他 7 件 論文等 ③金田明大「総論 遺跡探査の方法と利用」2012. 6. 30 ④金田明大・西村康「神郡の役所を探る」2012. 6. 23 他 6 件	

自己点検評価調査

研No.25

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：計測は発掘調査に不可欠の技術であり、また探査も遺跡の把握に有効なため、依頼件数が増加している。 独創性：機器の改良やワークフローの改善を進めているが、いっそうの実践と検討が必要である。 発展性：両技術ともに今後の遺跡調査に不可欠のものであり、さらなる発展が期待されている。 効率性：探査機器の多チャンネル化による効率化やレーザースキャナーの高速化など、従来に比べると飛躍的に向上している。 継続性：従来からの研究の蓄積をふまえて、現在の課題に合わせるかたちで研究を進めている。						

2. 定量的評価

観点	探査件数	計測件数	発表件数	論文等数		
判定	S	A	A	A		
判定理由 探査件数：目標値である5件を大きく上回った。 計測件数：ほぼ計画どおりであるが、依頼件数が多い。 発表件数：目標を上回った。 論文等数：依頼に関連したものが多いが、当初の計画を十分に達成している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画を上回って達成しているため、Aと判定する。計測・探査という従来から需要が高い分野の研究を重点的に進め、各地からの共同研究・受託研究の依頼・照会については継続性と有効性の観点から選択せざるを得ないが、極めて件数が多い。探査では、地域ごとの環境条件に応じてそれぞれの有効性や方法の吟味が必要なこともあり、積極的に推進してきたが、反面、技術の検討や開発に充てる人的・予算的な余裕が失われている。次年度以降、成果を蓄積できた地域や対象については整理することを考えている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画を上回って達成しているものが多く、順調と判定する。現地での成果は蓄積されているが、一方で、改善すべき個所や基礎的な技術に関する検討と試験を行う時間の確保が難しくなりつつある。また、東日本大震災にともなう復興関係の調査など喫緊の課題に、本研究で培ってきた技術を早期投入することが要請されており、研究資源をこれらに振り分ける必要がある。本年度半ばには追加配分による科学研究費補助金も獲得でき、機器の充実が望めるため、次年度以降はこうした基礎研究に逐次重点を移していくことを計画している。

業務実績書

研No.26

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	年輪年代学研究(②)～③)
【事業概要】 出土遺物、建造物、美術工芸品などの木造文化財に対して年輪年代法による年代測定を中心とする調査・研究を実施し、考古学、建築史学、美術史、歴史学研究に資する。とりわけ、当研究所で開発したマイクロフォーカスX線CTやデジタル画像による非破壊年輪年代測定法は、非破壊を原則とする文化財調査に有効であるため、調査対象の拡充と活用を図り、これらの研究成果を公表する。また、基礎研究として、現生木の年輪年代学的調査・研究の他、木造文化財の樹種同定調査を行う。	
【担当部課】	埋蔵文化財センター
【プロジェクト責任者】	年代学研究室長 大河内隆之
【スタッフ】 芝康次郎（都城発掘調査部研究員、年代学研究室兼務）、星野安治（研究員）、児島大輔（特別研究員）、光谷拓実、伊東隆夫、藤井裕之（以上、客員研究員）	
【主な成果】 4 府県下 5 遺跡の出土木製遺物、3 県下 5 棟の木造建造物、5 都県下 8 件の木造美術工芸品、4 県下 5 件の現生木について年輪年代測定調査を実施した。このうち、2 件の美術工芸品に対して、プロジェクト研究者らが開発したマイクロフォーカスX線CT装置による年輪年代測定調査を実施した他、3 件の出土遺物の内部構造把握のため、同装置による非破壊検査を行った。また、これらの調査・研究成果の一部を論文等 13 件、学会発表等 27 件として公表した。	
【年度実績概要】 ・ 上記のように、考古学・建築史・美術史といった多分野にわたる 18 件の木造文化財を対象とした年輪年代測定調査を行った。 ・ 新規樹種の暦年標準パターンの作成を目指し、ツガ・カヤなどの現生木を対象とする基礎的研究を継続した。 ・ 3 県下 8 遺跡出土遺物を対象に樹種同定調査を実施した。とくに出土木簡に対する樹種同定調査は、切片の採取が最小限にとどめられるため、高い技術を必要とするが、継続的に行った。 ・ マイクロフォーカスX線CT装置を活用することにより、木彫仏像等の非破壊年輪年代測定調査を行った。 ・ デバイスの交換によって高解像度・高出力化が図られたマイクロフォーカスX線CT装置の運用が軌道に乗り始めたため、既存の装置では不得手であった出土遺物等の非破壊検査を行い、内部構造の把握などに一定の成果を得た。 ・ 以上の調査・研究の成果を、学会等における口頭発表やポスター発表、あるいは学会誌等の論文、調査報告書として公表した。	
	
藤原地区庁舎下出土部材の調査風景	
【実績値】 発表件数 : 23 件 (①) 論文等数 : 7 件 (②) 公刊図書数 : 1 件 (③)	
【備考】 発表 ①鈴木伸哉、大山幹成、星野安治、能城修一「新宿区崇源寺跡から出土した木棺材の樹種と年輪幅からみた江戸の木材利用の変遷」日本文化財科学会第 29 回大会（京都大学）、2012. 6. 23～24 他 22 件 論文等 ②大河内隆之、児島大輔「奈良文化財研究所保管木造男神・女神像の非破壊年輪年代調査」『奈良文化財研究所紀要 2012』、2012. 6 他 6 件 公刊図書 ③伊東隆夫、山田昌久編『木の考古学—出土木製品用材データベース—(CD-ROM 付き)』海青社、2012. 9	

自己点検評価調査

研No.26

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：建造物や木彫像の解体修理あるいは木製遺物の出土に際して迅速に対応することができた他、全国各地の様々な分野からの要望に応え、年輪年代情報を提供することができた。 独創性：年輪年代法は、条件がそろえば調査対象木材の伐採年代を1年単位で特定することのできる自然科学的の年代測定法であり、実用化されている測定法の中でも卓越した方法と言える。 発展性：マイクロフォーカスX線CT装置の高解像度・高出力化により、その利用価値を多角的に高め、これまで不得手であった出土資料等の非破壊検査に活用できた。 効率性：時間的・人的・設備的に見ても十分効率的な調査・研究を行っているが、今後さらに効率化を図りたい。 継続性：暦年標準パターンの拡充のためにも全国各地の様々な時代の年輪データを継続的に収集している他、新規の樹種への応用を目指し、ツガ・カヤなどの年輪データの蓄積にも努めている。 正確性：照合が成立し公表している年代は、統計学的にきわめて正確性の高い数値であり、信頼に足るものである。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数	公刊図書数			
判定	A	A	A			
判定理由 発表件数：目標を上回っており、十分な成果が認められる。 論文等数：目標を上回っており、十分な成果が認められる。 公刊図書数：当初目標としては掲げていなかったが、刊行することができた。						

3. 総合的評価

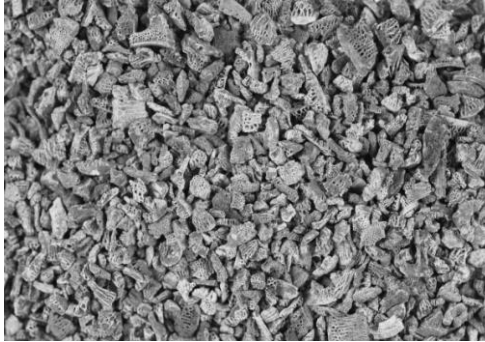
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的、定量的に目標を上回る業績を残すことができた。全国の文化財担当者にも年輪年代法による調査の重要性が認識されるようになっており、今後は調査・研究のいっそうの効率化を図ることで、各地の要望に適時的に応えられる体制を整えたい。また、能力の向上したマイクロフォーカスX線CT装置のさらなる活用を図り、より充実した成果を上げられるよう努力したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査・研究事業を順調に遂行でき、目標値を上回る成果を挙げることができた。次年度は、年輪データの蓄積、適応樹種の拡大、さらにはマイクロフォーカスX線CT装置の活用といった継続的かつ発展性のある調査・研究事業をこれまで以上に推進し、発掘調査や建造物、美術工芸品の修理事業等にも即応できる体制を整えることで、研究の適時性と正確性を高め、質的・量的にいっそう豊かな成果を上げられるよう努めたい。また、そうした成果をつうじて、年輪年代法による文化財の調査の必要性和重要性を訴えていきたい。

業務実績書

研No.27

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	動植物遺存体による環境考古学的研究(②-④)		
【事業概要】 全国の遺跡から出土した動植物遺存体による環境考古学的研究を実施する。また、各種計測機器やマイクロスコープを活用して出土骨に残る加工痕の観察方法を確立し、骨角器製作技術や動物解体技術の研究を推進する。さらに、これまで国内の遺跡で開発してきた微細遺物選別法の実践を行い、東アジア、環太平洋世界の中での農耕・牧畜の起源や動植物利用に関する比較研究を行う。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	埋蔵文化財センター長 松井章
【スタッフ】 山崎健（研究員）、丸山真史、菊地大樹（以上、客員研究員）			
【主な成果】 幅広い時代の動植物遺存体の分析を進め、その研究成果を国内外の学会や研究会において発表した。また、学会、大学、博物館等で発表・講演を行い、環境考古学に関わる展示にも協力するなどの社会貢献を行った。研究の基礎となる標本を継続的に収集・作製した。			
【年度実績概要】 ・町上遺跡（新潟県）、山崎津跡（京都府）、難波宮（大阪府）、カラカミ遺跡（長崎県）、中世大友府内跡（大分県）などから出土した動物遺存体の分析を実施した。 ・藤原宮朝堂院朝庭や藤原京右京六条二・三坊（以上、奈良県）における古環境復元を行った。 ・東京大学と連携研究を進めて、藤原宮跡から出土したウマの同位体化学分析を実施した。 ・継続的に実施している現生動物骨格標本の収集と公開では、シュモクザメ、セキショクヤケイ、ウマ、水牛などの動物骨格標本作製・収集した。 ・研究成果の発信として、日本考古学協会総会、日本文化財科学会、日本人類学会などの学会で発表を行った。 ・社会還元や普及事業として、長野県立歴史館、愛知大学、奈良文化財研究所などで一般向けの講演を行った。			
			
		町上遺跡から出土した多量のサケ科魚骨	
【実績値】 論文等数：9件（①～②） 発表件数：17件（③～⑦）			
【備考】 論文等 ① Takeshi Yamazaki et al. 'Estimation of age at death of sika deer (Cervus nippon) from an archaeological site based on radiographs of mandibular molariform tooth development' International Journal of Osteoarchaeology, 22-2, 2012.4 ② 山崎健「町上遺跡から出土した動物遺存体」『町上遺跡』2013.3 他7件 発表 ③ 松井章「海と山の考古学」長野県立歴史館、2012.4.22 ④ 山崎健「保美貝塚の動物遺存体」日本考古学協会、2012.5.27 ⑤ 松井章「考古学からみた食文化研究の現状と課題」愛知大学総合郷土研究所シンポジウム、2012.6.17 ⑥ 山崎健「藤原宮造営期の馬に認められた骨病変」日本文化財科学会、2012.6.23～24 ⑦ 松井章「先史時代琉球列島へのイノシシ・家畜」日本人類学会、2012.11.3 他12件			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4241

自己点検評価調書

研No.27

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：国や地方公共団体からの要請を受け、発掘調査や整理作業、報告書作成において環境考古学に関する協力や助言を行い、動物遺存体の分析も数多く担当した。 独創性：幅広い時代の動植物遺存体の研究を進めて、動物や植物の利用史を考古学から明らかにした。 発展性：東京大学との連携研究として、藤原宮における動物遺存体の同位体科学分析を実施した。 継続性：研究の基礎となる動物骨格標本を、継続的に収集・作製・管理している。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文等数：当初の計画通りに、査読誌を含む論文等を刊行した。 発表件数：当初の計画通りに、学会や研究会において研究発表を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価に関しては、幅広い時代の動物遺存体の分析を進めるとともに、研究の基礎となる標本の公開を積極的に進めている。定量的評価に関しては、動物考古学や環境考古学について、国内外で数多く論文等や学会発表を行った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度も多くの学会や研究会などで講演や研究発表を行い、これまでに上げた成果を紹介してきた。また、連携研究を継続的に実施して良好な結果を得ることができた。以上の点から、順調と判定する

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての研究((3)－①)		
【事業概要】 高温多湿な我が国において、文化財のカビの問題は非常に深刻である。2011 年の大震災によって津波などで被災した文化財をはじめ、年々大規模燻蒸が難しくなっている博物館などの施設、さらに歴史的建造物等の環境制御が難しい場所において大規模被害を起こさないような予防法、系統的な対応について具体的な流れを示し、普及を目指す。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	生物科学研究室長 木川りか
【スタッフ】 佐藤嘉則（保存修復科学センター研究員）、佐野千絵（保存科学研究室長）、犬塚将英（主任研究員）、吉田直人（主任研究員）、早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、小野寺裕子（研究補佐員）、岡田健（保存修復科学センター長）、藤井義久（客員研究員）、小峰幸夫（客員研究員）、間瀬創（客員研究員）、和田朋子（日本学術振興会特別研究員）、トム・ストラング（カナダ保存研究所）			
【主な成果】 (1) 被災文化財に発生した微生物被害の状況を取りまとめ、発生しやすかった主な微生物の種類や性質などについて調査研究を実施した。津波の海水に含まれる塩分によって、初期においてはカビなどの微生物被害は淡水の被害の場合よりも起きにくい傾向が明らかにみられたが、長期間湿っていたものでは、黒色、赤色の特徴的な被害がみられ、それに関与する微生物を調査した。 (2) 被災文化財のクリーニングの作業現場や古墳環境などにおいて浮遊微生物の調査を行い、対策との関連を調査した。			
【年度実績概要】 (1) 釜石市、陸前高田市、奈良文化財研究所などにおいて、被災紙資料に発生した微生物被害を調査した。その結果、早期に救出されたものにはカビの被害が少なかったが、長期間濡れていたものでは、特徴的な黒色・赤色の被害がみられ、健康被害をおこすといわれるスタキボトリス属のカビなど広くみられることがわかった。 (2) 被災文化財のクリーニングの作業現場において、浮遊微生物・付着微生物の調査を実施し、環境改善につなげた。 ・ (1) を受け、早期にカビが発生した資料を取り扱う場合の注意点の広報にも努めた。 ・ 津波で被災した文書や、被災掛け軸に発生している微生物種を同定し、記録を集積した。 ・ 被災文書などのレスキュー法のひとつであるスクウェルチ法によって、海水に含まれていた塩分がどの程度資料から抜けるのかについて、調査・分析を行った。 ・ 古墳環境などにおいて、パーティクルカウンターによる粉塵数調査及び浮遊微生物の相関の調査を続行している。 ・ 歴史的木造建造物の虫害の駆除方法を検討するために、薬剤の穿孔注入による薬剤の浸透度の試験を行い、またガス燻蒸の具体的方法を検討した。 ・ 歴史的木造建造物の劣化の特徴と、維持管理上の問題点について所見を取りまとめた。 ・ 社寺などの収蔵庫・展示室におけるカビの防止対策について検討した。 ・ 生物被害をテーマとした国際研究集会において、成果を公開するとともに、イタリア、カナダ、ドイツ、フランス、韓国、中国など、海外の研究者と積極的な研究交流を行った。			
【実績値】 論文数 2 件 (①、②) 学会研究会等での発表件数 2 件 (③、④) 研究会等 (国際研究集会) 1 件			
【備考】 論文 ①高鳥浩介・久米田裕子・佐藤嘉則・木川りか・高妻洋成：奈良文化財研究所における被災文書の保管・クリーニング作業場所の微生物環境調査、保存科学 52、2013. 03 ②小峰幸夫・木川りか・川越和四・原田正彦・三浦定俊：日光山輪王寺の虫損部材を用いて行った木材保存剤の浸透試験、保存科学 52、2013. 03 発表 ③木川りか：津波で被災した文化財の微生物被害と殺菌燻蒸処理上の問題点、第 36 回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会、2012. 12. 5 ④佐藤嘉則：津波で被災した紙質文化財の生物劣化に関わる微生物群の調査、第 36 回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会、2012. 12. 5			

自己点検評価調査

研No.28

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	A	S	A	S	S
判定理由 適時性：被災文化財の微生物劣化の現象の調査・対策の策定については、極めて緊急かつ必要なテーマであり、結果をすみやかに国内や国際会議などで公開してきたため、極めて顕著な成果が認められる。 独創性：発想のオリジナリティという点では、現在もっとも必要と考えられることを優先的に行ってきた結果として、新規性の高いデータが得られてきているので、概ね成果が認められる。 発展性：今回得られたデータについては、今後現場でどのように被災文化財に対応するかを考えるうえで、きわめて応用性が高いと考えられるので、極めて顕著な成果が認められる。 効率性：微生物の調査や試験には、相当な時間と労力を要するため、効率性という面では課題は残る。しかし、現在のスタッフで最大限の成果を達成したと考えているので、概ね成果が認められる。 継続性：実施しなければならない生物劣化関係の調査、検体数は膨大であり、ひとつひとつの解析に長い時間をかけることは難しいが、できうる限りの質を保ちながらデータを出してきているので、極めて顕著な成果が認められる。 正確性：データについては、適正な方法で得られるべきデータが得られているか等について厳しく評価を行っているので、極めて顕著な成果が認められる。						

2. 定量的評価

観点	論文数	研究発表件数	研究会等開催数			
判定	A	A	S			
判定理由 論文数：検討結果について目標の論文をすみやかに出すことができた。 研究発表件数：主要なテーマについて検討結果をすぐに公表することができた。 研究会等開催数：本プロジェクトの検討結果とも密接にかかわる国際研究集会を24年12月に開催したことは極めて顕著な成果である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	実施内容及び、数値目標の点についても、極めて顕著な成果が認められた。効率性については、新規に始めた調査の場合に、その方法を見極める必要があり、時間や手間を要することが多かったが、概ね成果が認められた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画していたテーマについて、十分な成果が認められた。次年度以降、本年度の成果をもとに次の段階のテーマ設定をして、取り組んでいく予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の保存環境の研究((3)－②)		
【事業概要】			
異常な高温・低温など最近の気象変動は文化財を展示収蔵する施設内の環境にも影響を与え、さまざまな問題を発生させている。環境データや材料の水分特性など基本的なデータを用いた環境シミュレーションを行い、文化財の保管環境を考慮した博物館の省エネ化に関する研究を行う。また、展示ケース等から放散する汚染ガス対策の研究を行い、文化財収蔵空間で使用可能な材料を選択する試験法の試案をまとめる。総合的に文化財の保存環境の向上に資する。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存科学研究室長 佐野千絵
【スタッフ】			
大塚将英（保存修復科学センター主任研究員）、吉田直人（主任研究員）、木川りか（生物科学研究室長）、佐藤嘉則（研究員）、呂俊民（客員研究員）、北原博幸（客員研究員）、古田島智子（研究補佐員）、林美木子（研究補佐員）			
【主な成果】			
平成 26 年開館予定三重県立博物館の壁付展示ケースをモデルに、調湿した空気を循環させる新方式で、温湿度分布が一樣になる条件を予測するため、調湿剤による調湿効果も考慮した気流解析を行った。また、展示ケース内装材料のうち、仕上げクロス・合板について、材料の入手経路や時期、保管状況などの詳細情報がわかる試料について、昨年度提唱した内装材料実測法試案に則り、有機酸及びアンモニア放散速度を実測し、各試料間を比較できるデータを得た。			
【年度実績概要】			
・コンピュータシミュレーションによる展示ケース内の温湿度分布と気流の解析 平成 26 年に開館を予定している新しい三重県立博物館では、壁付展示ケース内の温湿度の分布を一樣にすることを目的として、調湿した空気を循環させる方式を採用する。このような新しい方式により、展示ケース内における温湿度分布がどのようになるのか、そして一樣にするためにはどのような条件にすれば良いのかを予測するために、調湿剤による調湿効果も考慮した気流解析を行った。			
・展示ケース内装材料からの放散ガスの実測 展示ケース内装材料のうち、仕上げクロス、合板、ガラスコーキング材料について、展示ケース制作会社の協力を得て、材料の由来のわかる状態（入手時期、保管状況などの詳細情報）で取得し、昨年度提唱した内装材料実測法試案に則り、統一的に有機酸及びアンモニア放散速度を実測し、各試料間を比較できるデータを得た。この試験法を応用し、既存美術館の有機酸放散源を明らかにし、ガス対策を実施し、一定の効果を得た。			
・美術館、博物館の環境調査の実施 国指定文化財の公開のための館内環境調査を中心に、館内環境改善に関する相談を受け、改善のための助言を行った。			
・研究成果のすみやかな公開 文化財保存修復学会、文化財科学会、室内環境学会、建築学会等、関連学会の年次大会において研究成果を発表した。また得られた成果を、当研究所紀要『保存科学』を中心にすみやかに公開した。 LED の美術館博物館への導入状況をアンケート調査し、その結果を受けて、「省エネに関する研究会－LED 照明と省エネ」を開催し、学芸員を対象に、LED 照明の開発状況と省エネへの取り組みを紹介し、最新情報を提供した(25 年 2 月 18 日、発表者：6 名、参加者数：130 名)。			
【実績値】			
論文	2 件（①、②）		
研究発表	3 件（③～⑤）		
研究会	1 回		
【備考】			
論文			
①古田嶋智子・呂俊民・林良典・佐野千絵：展示収蔵施設に用いられる木質材料の放散ガス試験、保存科学 52、2013. 03			
②呂俊民・古田嶋智子・林良典・佐野千絵：展示空間に用いるクロス材の放散ガスの測定と評価、保存科学 52、2013. 03			
研究発表			
③佐野千絵・古田嶋智子・呂俊民：文化財展示収蔵施設に用いられる内装材量の空気質への影響―展示ケース内装材料の選定―、文化財保存修復学会第 34 回大会、2012. 6. 30-7. 1			
④古田嶋智子・呂俊民・佐野千絵：文化財展示収蔵施設に用いられる内装材料の空気質への影響その 1 ―内装材料の放散ガス試験法―、文化財保存修復学会第 34 回大会、2012. 6. 30-7. 1			
⑤呂俊民・古田嶋智子・林 良典・佐野千絵：文化財展示収蔵施設に用いられる内装材料の空気質への影響その 2 ―放散ガスのデータベース構築―、文化財保存修復学会第 34 回大会、2012. 6. 30-7. 1			

自己点検評価調査

研No.29

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：博物館等の新築・改修、環境制御に必要な基礎データであり、公共性、緊急性が高く、十分に成果が認められた。 独創性：使用材料からの汚染ガス放散速度と空気清浄化期間をシミュレーション予測できることを利用し、使用材料をレベル分けして、期待する清浄度に合わせて発注者が使用材料を選択できるようにするテーマで、独創性が高く、十分に成果が認められた。 発展性：得られた成果の応用性・汎用性が高く、博物館環境の温度湿度制御や清浄化に多大な影響を及ぼしたため、十分に成果が認められた。 効率性：一定の規格での試験法を採用しており、効率的に試験を順調に進めたため、十分に成果が認められた。 継続性：展示ケース内装材料を網羅し、質・量ともに申し分のない成果を得ることができ、十分に成果が認められた。 正確性：由来の明確な試料に対して、正しい測定法を適用し、正確にデータを得ることができ、十分に成果が認められた。						

2. 定量的評価

観点	論文	研究発表	研究会			
判定	A	A	A			
判定理由 論文：文化財への影響が大きく、清浄化の緊急度が高い展示ケース材料の合板、クロスについて、論文発表をまとめ、目標を100%達成した。 研究発表：汚染ガスの放散速度と空気清浄にかかる時間との関係についてシミュレーション予測できることを利用し、使用材料をレベルづけする方向性を発表するなど、重要な発表を行い、目標を100%達成した。 研究会：学芸員等から期待されていたLED照明について、普及度に関するアンケートを実施し、それを受けて、博物館等への導入時期を判断する技術の進捗状況や省エネへの寄与に関する研究会を開催し、高い評価を得、目標を100%達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価、定量的評価ともに、十分な成果を得た。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成した。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の材質及び劣化調査法に関する研究((3)－③－ア)		
【事業概要】 小型可搬型機器によるその場分析、及び非破壊非接触技術による診断・解析手法の確立と実資料への応用を行う。絵画や彩色文化財に使われている顔料・染料の同定や褪色の評価、あるいは金属製文化財の材質調査や腐食生成物の分析などに関する調査手法の確立を行い、調査結果の蓄積と成果公開を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	分析科学研究室長 早川泰弘
【スタッフ】 岡田健（保存修復科学センター長）、佐野千絵（保存科学研究室長）、木川りか（生物科学研究室長）、吉田直人（主任研究員）、犬塚将英（主任研究員）、佐藤嘉則（研究員）三浦定俊（客員研究員）、城野誠治（企画情報部専門職員）、鳥光美佳子（企画情報部アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 小型可搬型機器の開発・改良に関する基礎的研究として、金属や無機化合物に対する分析感度向上、及び有機化合物に対する分光学的手法の検討を行った。また、応用的研究として、平安～江戸期の日本絵画の彩色材料調査を中心に行うとともに、漆工品・金属製品・木彫像などの材質・構造調査を実施した。蛍光X線分析に関するこれまでの調査結果をまとめ、調査報告書を刊行した。			
【年度実績概要】 5年計画の第2年度として、以下に示す成果を得た。また、これまでの調査研究成果に関する報告書を刊行した。			
(1)小型可搬型機器に関する基礎的研究			
- 金属や無機化合物に対する分析感度の向上を目的に、高感度検出器搭載機器ハンディ型蛍光X線分析装置の改良と分析条件の確立を行った。X線照射条件、データ取り込み条件を改良して、特に軽元素分析に対する高感度化を検討するとともに、種々の標準試料データを取得して定量精度の向上を目指した。 - 有機化合物同定に関する分光学的手法の検討として、LED などを使った単波長可視及び近赤外画像、また可視反射二次微分スペクトルを用いた染料同定を実施した。また蛍光寿命測定による材料分析や劣化状態診断の可能性を検討するため、有機質文化財材料の発光特性測定を行った。			
ハンディ型蛍光X線分析装置による平等院鳳凰堂西面扉絵の彩色材料調査			
(2)応用的研究			
- 平安～江戸期の日本絵画の彩色材料調査を中心に行い、特に白色顔料に着目して分析化学的検討を行った。国宝信貴山縁起絵巻（奈良国立博物館寄託品）、国宝平等院鳳凰堂西面扉絵（平等院）、春日権現験記絵巻（宮内庁三の丸尚蔵館）などを蛍光X線分析により調査し、そのデータ解析を行った。和漢奏楽図屏風（静嘉堂文庫美術館）、業平蒔絵硯箱（根津美術館）などの漆工品、さらには金銅仏、懸仏などの金属製品に関する材質調査も実施した。 - ハンディ型蛍光X線分析装置をウズベキスタン国立歴史博物館に持ち込んで、所蔵作品の材質調査を実施した。 - 東日本大震災によって損傷した木造阿弥陀如来坐像（宮城県安国寺）に関する構造調査及び胎内納入品の確認を行う目的でX線透過撮影による構造調査を実施した。			
(3)調査研究成果に関する報告書			
これまでに彩色材料調査を実施した伊藤若冲「動植綵絵」（宮内庁三の丸尚蔵館）の蛍光X線分析結果に関する報告書を刊行した。			
【実績値】 論文等数 2件（①、②）発表件数 2件（③、④）報告書 1件（⑤）			
【備考】 論文等			
①早川泰弘：ハンドヘルド蛍光X線分析装置によるウズベキスタン国立歴史博物館所蔵資料の材料調査、保存科学 52、2013. 03			
②吉田直人：モノクローム資料写真からの色材推定に関する基礎的検討、保存科学 52、2013. 03			
発表			
③早川泰弘、城野誠治：泰西王侯騎馬図屏風の彩色材料調査、日本文化財科学会第 29 回大会、2012. 6. 23-24			
④吉田直人、早川泰弘、村岡ゆかり、杉本史子：元禄及び天保国絵図の彩色材料と色表現について、日本文化財科学会第 29 回大会、2012. 6. 23-24			
報告書			
⑤「伊藤若冲『動植綵絵』蛍光X線分析結果」、2013. 03			

自己点検評価調査

研No.30

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：文化財資料の科学調査において、その場分析の必要性は非常に高くタイムリーな研究である。 独創性：小型可搬型機器の開発・改良に関して基礎から応用までの研究を行える機関は他にはない。 発展性：絵画材料の調査結果から美術史的・歴史的背景に関する考察が行えるなど発展性は大きい。 効率性：運営費交付金以外に他機関からの調査派遣依頼などに基づき研究を推進している。 継続性：集中的な基礎的研究と長期的な応用的研究の両者が必須であり、その両方をうまく並立できている。 正確性：複数の調査手法を取り入れることで科学的客観性を担保している。						

2. 定量的評価

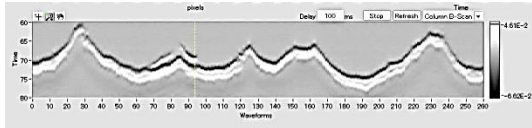
観点	学術雑誌等への掲載論文数	学会研究会等での発表件数	報告書の刊行			
判定	A	A	A			
判定理由 学術雑誌等への掲載論文数：保存科学誌に成果を発表し、目標を100%達成した。 学会研究会等での発表件数：日本文化財科学会で研究発表を行い、目標を100%達成した。 報告書の刊行：研究成果報告書（非売品）の刊行を行い、目標を100%達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	基礎的研究と応用的研究を上手く両立できている。作品を所蔵する博物館・美術館などとの共同調査を積極的に実施し、データの蓄積も着実に行えた。より発展的な成果を目指すためには、さらなる人的・予算的措置が必要である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画の第2年度として、基礎的研究を一層押し進めるとともに、多くの実資料の調査を実現し、データの蓄積を着実にいった。次年度以降は、これまでに基礎的検討課題として取り組んだ内容に関して実資料への適用を図り、より高度な調査法の確立とデータ蓄積・公開を進める。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	ミリ波イメージングにかかる基礎実験及び装置の改良等((3)－③－イ)		
【事業概要】			
文化財の材質分析及び劣化診断を目的とした計測手法に関する調査研究を進める。ミリ波イメージング装置の改良を行う。また、ミリ波イメージング及びテラヘルツ分光イメージングにより文化財を対象とした測定に必要なデータを集めるための基礎実験を行う。さらに、文化財に用いられている材料のテラヘルツ分光スペクトルを収集する。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学室長 高妻洋成
【スタッフ】			
降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）、脇谷草一郎、田村朋美（以上、研究員）、赤田昌倫（特別研究員）			
【主な成果】			
ミリ波イメージングにより、掛軸内部の構造に関する非破壊調査を行った。文化財に用いられている材料のテラヘルツ分光スペクトルの収集とサブミリ波イメージングによる調査を行った。			
【年度実績概要】			
- 文化財に用いられている材料、または検出される無機物質のテラヘルツ分光スペクトルの収集を行った。試料は硫酸カルシウム、炭酸カルシウム、塩基性炭酸鉛、四酸化三鉛、一酸化鉛、辰砂、水酸化アルミニウムなどである。 - 分析装置の改良として、窓板を小型のものに交換し、微量試料による分析を行えるようにした。 - サブミリ波イメージングによる調査に関しては、Picometrix 社製 T-Ray4000 を用いて、掛軸の調査を行った。発信周波数の領域は 0.2～1.4 THz の範囲で、レンズには焦点距離 3 inch のものを用いた。分解能は 0.1mm とした。 - 欠損部分に関して、可視光及び赤外線イメージングと併用した調査を行った。その結果、サブミリ波イメージング画像では、上記の二つの手法よりも簡単に亀裂及び欠損場所を検出できることがわかった。			
			
		サブミリ波イメージング断面画像	
【実績値】			
発表件数 2 件 (①～②)			
論文等数 2 件 (③～④)			
【備考】			
発表			
①高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎、田村朋美、赤田昌倫、辻本與志一、岡田健、佐野千絵、早川泰弘、朽津信明、吉田直人、早川典子、建石徹、宇田川滋正、福永香、碓智文「キトラ古墳壁画の材料調査 1—白虎と青龍の調査—」日本文化財科学会第 29 回大会、2012. 6. 23			
②M.-J. Kim, Y. Kohdzuma, and K. Fukunaga ‘Application of electromagnetic waves for the degradation mechanisms of painted wooden cultural properties’ Proceedings of Advanced Electromagnetic Symposium 2012, 2012. 4. 19			
論文等			
③高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎、田村朋美、赤田昌倫、辻本與志一、岡田健、佐野千絵、早川泰弘、朽津信明、吉田直人、早川典子、建石徹、宇田川滋正、福永香、碓智文「キトラ古墳壁画の材料調査 1—白虎と青龍の調査—」『日本文化財科学会第 29 回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会、2012. 6			
④M.-J. Kim, Y. Kohdzuma, and K. Fukunaga ‘Application of electromagnetic waves for the degradation mechanisms of painted wooden cultural properties’ Proceedings of Advanced Electromagnetic Symposium 2012, 2012. 4			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：文化財の表層部分における非破壊構造調査法の開発が求められており、サブミリ波を用いたイメージング技術の開発は世界的にも最先端の研究である。 独創性：これまで、掛軸に対してサブミリ波を使用した研究及び調査例はない。 発展性：サブミリ波は非破壊かつ非接触で調査を行うことができるため、文化財に対する汎用性が高い。 効率性：機械が小型で専用のスペースを必要としない点を利用し、他の分析を行った直後に調査を行うことが可能であり、効率性が非常に高い。 正確性：サブミリ波イメージングにより、掛軸などの薄層構造を明瞭にとらえることができた。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数				
判定	A	A				
判定理由 発表件数：目標値である2件を達成した。 論文等数：目標値である2件を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	分析機器の改良が進んだことで、文化財に用いられている材料、または検出される無機物質のテラヘルツ分光スペクトルの収集を計画どおり実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の計画どおり実施できたことから、順調と判定した。分析作業は継続して行っており、次年度以降は有機物質にも対象を広げ、応用範囲をさらに拡大する予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究((3)－④)		
【事業概要】 屋外に位置する木造建造物及び石造文化財を対象に、文化財劣化要因となる周辺環境の影響評価手法や劣化診断手法を確立する。また、木造建造物の修復材料について実験室及び現地曝露試験による評価を行う。また、韓国・国立文化財研究所(韓文研)と共同研究を行い、保存修復技術に関する情報共有を進める。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長 朽津信明
【スタッフ】 早川典子(保存修復科学センター主任研究員)、森井順之(主任研究員)、岡田健(保存修復科学センター長)			
【主な成果】 石造文化財や木造建造物など屋外にある文化財について周辺環境計測を行った。また、その結果に基づく劣化要因の解明、周辺環境影響の軽減手法及び修復材料・技法の開発・評価を行った。詳細には、(1) 臼杵磨崖仏の保存環境制御に関する現地試験及び石造文化財劣化と周辺環境影響に関する調査、(2) 積雪寒冷地における木造建造物の保存環境に関する調査、(3) 韓文研との共同調査・ワークショップ等を実施した。			
【年度実績概要】 (1) 石造文化財： 臼杵磨崖仏ホキ石仏第二群の表流水流入に対して、仮設遮水壁を設置しその後の状態変化を観察したところ、岩体内の水分変化が安定し遮水壁の効果を確かめた。また、臼杵磨崖仏表面の剥落片に対してより長期間接着可能な材料選定に向けて実験を開始した。さらに、石廟などの保存環境調査を行い、植生分布など周辺環境の変化により、劣化の進行が著しく変化することを突き止めた。 (2) 木造建造物： 積雪寒冷地における木造建造物の保護のために設置された覆屋について、木材やガラスなど覆屋材質の違いが保存環境にどのように影響するのか、温湿度・照度・紫外線強度の現地連続観測を開始した。また、厳島神社など海浜環境で使用される充填材料に関する現地試験、塗装に用いられる防黴剤の現地試験を行い、結果の整理を行った。 (3) 韓文研との共同研究： 広島県三原市の磨崖和霊石地蔵を対象に表面の劣化状態に関する共同調査を5月に実施し、その成果については24年10月25日、韓文研保存科学センター会議室にて開催された研究報告会にて報告を行った。			
【実績値】 報告書：1件(①) 論文等：4件(②～⑤) 発表等：5件(⑥～⑩)			
【備考】 報告書 ①文化財の保存環境と保存修復技術 日韓共同研究成果報告会報告書2012 韓国・国立文化財研究所／東京文化財研究所 12.10 論文等 ②朽津信明、津村宏臣、森井順之：凝灰岩製石造文化財における劣化現象認識のための注意点—京都市個人所蔵石殿の一事例を通して— 保存科学52、2013.03 ③朽津信明：波打ち際にある花崗岩製磨崖仏とその保存 日韓共同研究成果報告会報告書2012 pp.16-25 2012.10 ④森井順之：磨崖和霊石地蔵の修復 日韓共同研究成果報告会報告書 pp.8-15 2012.10 ⑤Masayuki MORII: Research of Anti-freezing for the Buddhist image carved on tuff cliff by closing shelter, Anti-Cultural Translations through the Silk Road 2 nd Int’l Conference, Proceedings, pp.197-200 2012.09 発表等 ⑥朽津信明：埋蔵環境と屋外環境での石造文化財の風化速度の違い 日本応用地質学会平成24年度研究発表会 朱鷺メッセ 2012.11.1-2 ⑦朽津信明：石造文化財の着生生物による劣化と環境 第36回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会、2012.12.6 ⑧早川典子、舘川修、渡辺慶乃、森井順之、岡田光治、原島誠：臨海環境における建造物修理材料の耐候性評価 日本文化財科学会第29回大会、2012.6.23-24 ⑨森井順之：臼杵磨崖仏における凍結破砕防止策の検討(4)－覆屋閉鎖時における隙間風対策 日本文化財科学会第29回大会、2012.6.23-24 ⑩森井順之：石造文化財着生生物のクリーニングについて 第36回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会、2012.12.6			

自己点検評価調査

研No.32

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：臼杵磨崖仏など、現在まさに保存対策が検討されている現場に適切に対応できている。 独創性：石造文化財の剥離片接着にて従来の不可逆な接着剤ではなく再接着可能な材料とした点が独創的である。 発展性：磨崖仏の保存、修復手法について類似の磨崖仏にも適用可能な物が含まれる。 効率性：韓文研との共同研究により、より効率的に色々な事を進める事ができる。 継続性：臼杵磨崖仏や木造建造物の覆屋に関して研究する事で、他の案件にも適用可能な成果が得られている。 正確性：石廟の烈寒原因調査を現地で行う等、現在の事象をきちんと捕らえた上での対策をとる事ができている。						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書			
判定	A	A	A			
判定理由 論文数：臼杵磨崖仏で長期間にわたり調査研究を進めた成果を報告するとともに、他の石造文化財についてもその劣化要因と周辺環境の相関について調査した結果を論文にまとめた。 発表件数：石造文化財の劣化と環境に関する報告の他、木造建造物の修復材料の評価についても発表を行った。 報告書：日韓共同研究において、我が国の磨崖和霊石地蔵を対象に共同調査を実施した結果を報告書に掲載した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	石造文化財の保存状態とその周辺環境の相関について様々な事例を確認でき、劣化防止策としての環境制御の可能性について有益な情報を得た。また、木造建造物の覆屋の効果について保存科学的調査が開始できた。さらに、日韓共同研究では我が国のサイトで共同研究をおこない、その結果を報告することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画通り順調に進めることができた。特に木造建造物の覆屋に関しては、石川県加賀市の協力により数種類の神社覆屋にデータロガーを設置することができ、保存環境制御に関して今後より多くの知見を得られることとなった。

業務実績書

研No.33

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の防災計画に関する研究((3)－④)		
【事業概要】 自然災害による文化財被害は甚大であり、復旧には多大な労力と時間を要する。我が国では自然災害の発生予測が難しいうえ、発生後すぐの救援はほぼ不可能である。そのため、「減災」の方向性を探ることが他分野よりも求められている。本研究課題では「地震・津波」を対象に下記の調査研究を進め、文化財の減災に必要な研究成果を提供する。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長 朽津信明
【スタッフ】 早川典子（保存修復科学センター主任研究員）、森井順之（主任研究員）、北野信彦（伝統技術研究室長）、中山俊介（近代文化遺産研究室長）、岡田健（保存修復科学センター長）、木川りか（生物科学研究室長）、佐藤嘉則（研究員）、犬塚将英（主任研究員）、吉田直人（主任研究員）、佐野千絵（保存科学研究室長）			
【主な成果】 平成 24 年度は、（１）東日本大震災被災文化財に関する研究では、東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会として警戒区域内での文化財救援活動を実施するとともに、他県での救援文化財一時保管場所について温湿度・生物環境に関する調査を実施した。また、津波水損文化財を対象に修復方法に関する実験を行った。（２）文化財の地震対策に関する研究では、石造文化財について石造多層塔の現地調査や石灯籠の振動台実験を行った。			
【年度実績概要】 （１）東日本大震災被災文化財に関する研究では、文化財レスキュー活動が緊急事態を脱したなか、被災文化財の安定収蔵に向けて調査研究を行った。 ・東京電力福島第一原子力発電所事故により設定された警戒区域内の文化財を救援するため、東京文化財研究所が中心となり救援活動を実施した。また、活動にあたり必要な情報提供を行った。 ・一時保管施設の保存環境調査：釜石市の中学校跡や陸前高田市立博物館（旧生田小学校）などでカビ発生状況の調査を行うとともに、石巻文化センターや旧東北歴史資料館浮島収蔵庫における温湿度調査を継続した。 ・気仙沼市で救援された具足（個人蔵）や鹿嶋市龍蔵院の仏画などの応急処置・修復に関する研究を進めた。 （２）文化財の地震対策に関する研究では、東日本大震災にて多数の被害報告があった石灯籠を対象に、今まで実施された地震対策について振動台実験による評価を行った。また、輪王寺慈眼堂廟塔附石造六天像、宝積寺九層石塔（大山崎町）など石造文化財の現地調査を実施し、地震対策の必要性について考察した。			
【実績値】 論文等：１件（①） 発表等：１件（②）			
【備考】 論文等 ①森井順之：特集 東日本大震災から１年を経過して ●美術学芸課の取り組み、事例５ 東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会による文化財レスキュー活動の取り組み、月刊文化財平成 24 年 4 月号（No. 583） pp. 30-31 2012. 04 発表等 ②森井順之、運天弘樹、藤田悠貴、久世めぐみ、花里利一：彫刻作品の地震時転倒確率の簡易予測に関する研究、日本文化財科学会第 29 回大会、2012. 6. 23-24			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：東日本大震災による被災文化財の救援事業を実施した。 独創性：海水によって水損した文化財に用いられた多様な材料（金属・漆・皮革・裂・紐等）に対して、保存処置の方法を実践的に開発した。 発展性：今回の被災文化財を救援した事で、次に備えて体制を作っていく事ができる。 効率性：被災現場での組織や人の配置等に関し、貴重な教訓を得た。 継続性：今回の経験を次に生かす体制を取る事ができる。 正確性：救援を依頼された文化財に関して、適切に対処する事ができた。						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文数：東日本大震災で被災した文化財の救援事業についてまとめた報告を行った。 発表件数：仏像彫刻の地震時転倒予測手法の開発成果をまとめた報告を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東日本大震災発生後設置された「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」では昨年度より事務局を引き受け、平成24年度末に解散するまで多くの成果を得ることができた。また、今後被災文化財の所有者返還に向け、応急処置や一時保管施設の環境に関する多くの知見を提供できた。さらに、石造文化財の地震対策では石灯籠の地震時挙動について明らかにした。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究では、東日本大震災により被災した文化財の救援について、救援委員会事務局を引き受けるなど積極的な対応を行った。救援委員会事務局の役割は本年度末で終わるが、今後は所有者への返還に向けて必要な技術等を提供していくことが求められる。また、いまだ有効な地震対策が講じられていない多くの石造文化財について、地震時挙動を明らかにするとともに有効な対策が求められる。

業務実績書

研No.34

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究((3)－⑤)
【事業概要】 我が国ではこれまで和紙、糊、膠、漆などの伝統的な文化財修復材料が劣化の程度や修復技術者の経験をもとに長年使われてきた。このような伝統的修復技術・材料及び合成樹脂の物性、製作技法、利用法に関する調査・分析・評価及び開発を行い、修理現場での応用を図る。また以上の内容に即した研究会を開催する。	
【担当部課】	保存修復科学センター
【プロジェクト責任者】	伝統技術研究室長 北野信彦
【スタッフ】 朽津信明（保存修復科学センター修復材料研究室長）、早川典子（主任研究員）、吉田直人（主任研究員）、犬塚将英（主任研究員）、佐藤嘉則（研究員）、本多貴之（客員研究員）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター主任研究員）	
【主な成果】 本年度は中期計画の2年目にあたり、伝統的な建築文化財の塗装材料である漆塗装や乾性油塗料など過去の塗装修理に関する基礎資料の蓄積を図るとともに、その実績を塗装修理作業の実践的な施工指導に役立てた。合成樹脂に関する調査では、過去使用した建造物塗装のうちで合成樹脂を使用した際の劣化状態の調査と、伝統素材である膠材料を強化するため、合成樹脂とブレンドした際の塗膜の状態を理解するための基礎実験を行った。また、第6回伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会を開催した。	
【年度実績概要】 ・建築文化財に使用する塗装材料の耐候性向上に向けた基礎実験を進めるとともに、PY-GC/MS分析装置を用いた塗装材料をはじめとする各種修復材料の基礎分析を進めた。さらにこのような調査実績を小野家住宅や厳島神社、平等院鳳凰堂における塗装修理などの実践的な施工計画に役立てた。 ・研究所が所蔵する表具裂見本の絹布関係資料について、個々の資料の絹の折状態や繊維の拡大顕微鏡画像の取り込みを行い、基礎データを集積した。以上のようなデータベース化に向けた整理を行った。 ・我が国で使用された伝統技術や材料を理解するために、京都市の平安京三条四坊十町跡出土の一括の漆工用具と材料・木製品、鎌倉市大倉幕府跡出土の漆塗金属製籠手や懸仏、同安国論寺出土鉄製壺などの分析調査を行った。 ・「建築文化財における塗装彩色部材の劣化と修理」というテーマで、25年1月24日に東京文化財研究所のセミナー室で第6回伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会を開催し、計125名の参加を得た。 講演：1, 北野信彦（東京文化財研究所）：「建築文化財における塗装彩色の材質と劣化」、2, 木川りか（東京文化財研究所）：「建築文化財における塗装彩色を含む部材の生物被害」、3, 島田豊（京都府教育庁文化財保護課）：「京都府下建造物に超える塗装彩色部材の劣化と修理」、4, 原島誠（厳島神社工務所）：豊城浩行（文化庁）「建築文化財における塗装彩色部材の修理の考え方」、5, 参加者全員「総合討論」	
【実績値】 研究会開催数 1回 参加者数：125名 報告書 1冊 (①) 論文数 3件 (②～④) 研究発表件数 2件 (⑤、⑥)	
【備考】 報告書 ①『伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究報告書2012年度』東京文化財研究所、2013.03 論文 ②北野信彦、本多貴之、梅津秀基：民家建造物における伝統的な塗装材料の調査と修理－重要文化財小野家住宅における塗装修理の施工例－、保存科学、52、2013.03 ③北野信彦：平安京右京三条一坊六町出土資料に付着した赤色顔料に関する分析、平安京右京三条一坊六町跡、2013.03 ④北野信彦：平等院鳳凰堂建造物の塗装材料に関する現状調査報告、平等院紀要 2012、2013.01 研究発表 ⑤北野信彦、新垣力、仲座久宜：出土資料からみた中世首里城におけるベンガラ顔料の調達と使用、第29回日本文化財科学会、京都大学、2012.6.23 ⑥北野信彦：近世出土漆器の研究に関する一知見、江戸遺跡研究会 第26回大会「江戸と木の文化」、江戸東京博物館、2013.2.3	

自己点検評価調査

研No.34

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：平等院鳳凰堂、厳島神社、小野家住宅など具体的な文化財建造物で実施されている塗装修理や、鎌倉市の大倉幕府跡出土懸仏などの施工方針の策定に調査結果を反映させた。 独創性：過去の塗装材料の調査方法として、これまであまり実施されていなかった PY-GC/MS 分析法やベンガラ顔料分析法などの新たな試料分析方法を追求した。 発展性：蓄積された試料分析データと基礎的は、他の文化財建造物の塗装修理や考古資料の保存処置に応用できるよう資料化とこれまでの成果の公表を行った。 効率性：これまで開発した分析手法は、基本的には現有施設と人員を使用することで比較的多くの分析試料を短期間に結果が出せるように実施した。 継続性：実際の塗装修理や考古資料の保存処置はタイトな期間内に比較的安価で効率よく実施することが基本であり、本プロジェクトの成果は実際の保存修復の現場の作業に効率よく反映させた。						

2. 定量的評価

観点	研究会参加者	報告書	論文	研究発表		
判定	A	A	A	A		
判定理由 研究会の参加者数、報告書、論文、研究発表のいずれも当初計画の目標を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	建築文化財に使用する屋外塗装や彩色材料の歴史資料に関する調査研究や物性・耐候性試験を行い、実際の塗装修理の現場の施工に役立てた。絹などの表具裂見本や各種顔料のデータベース化、文化財の修復材料などに関して有益な基礎的知見を収集することができた。さらにこの成果の一部を研究会で公表したが、参加者数も満足度も目標値を満たしたので、Aと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本プロジェクトで実行している手法の有効性が修理現場に応用されるなど、当初の計画通り有効性が明らかになってきた。それに伴い重要な知見の蓄積とこれらの一部を報告書と研究会報告の形で公開及び纏めることができた。そのため、計画の実施状況は順調である。次年度以降も引き続き、基礎的知見の収集と試料目録化を推進する予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近代の文化遺産の保存修復に関する研究((3)－⑥)		
【事業概要】			
近代の文化遺産は絵画、彫刻、木造建造物など、従来の文化財とは規模、材質、製造方法等に大きな違いがあり、その保存修復方法や材料にも大きな違いがある。本研究では、近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行う。具体的には、大型構造物の劣化機構の解明とその修復方法の究明、航空機、船舶、鉄道車両などの保存修復上の問題点とその解決方法の究明を目指している。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	近代文化遺産研究室長 中山俊介
【スタッフ】			
朽津信明（保存修復科学センター修復技術研究室長）、早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、池田芳妃（研究補佐員）、小堀信幸（客員研究員）、横山晋太郎（客員研究員）、長島宏行（客員研究員）			
【主な成果】			
(1) 「動く美術工芸の粋」とも言われる御料車の保存と修復及び活用に関して、関係者を招き、研究会を開催し、御料車の持つ歴史的及び技術的価値、鉄道史における位置づけや車内の美術工芸品に関する保存と修復手法及び台湾にも残る御料車の保存と修復について、発表、討論を行い、保存や修復に関する理解を深める事ができた。			
(2) 屋外展示されている大型構造物、鉄道車両や航空機などの文化財の防錆対策のため、試験片を使った屋外暴露試験にて、塗装仕様と劣化速度の相関についても調査した。			
(3) 山口県萩市や静岡県伊豆の国市の反射炉など、史跡指定地に建つ建造物や構造物の保存や修復に関する研究を			
(4) 昨年度の研究会をまとめた報告書を刊行した。			
【年度実績概要】			
(1) 「動く美術工芸の粋」とも言われる御料車に関して、皇族方の専用車両という特殊性故に、日々の掃除や修復等通常の列車や客車とは別の扱い方あるいは考え方が必要とされている。そのような御料車に関して、保存修復に携わっている方々や鉄道史、鉄道技術の専門家など 5 人と台湾の方 1 人を招き、保存や修復に関する事例紹介を通じてその考え方や難しさを知るとともに活用方法等を討論した研究会を 24 年 11 月 30 日に東京文化財研究所地階セミナー室にて実施した。御料車の持つ歴史的及び技術的価値、鉄道史における位置づけや車内の美術工芸品に関する保存と修復手法及び台湾にも残る御料車の保存と修復について、発表、討論を行い、保存や修復に関する理解を深める事ができた。			
(2) 屋外展示されている鉄道車両や航空機などの金属を主体とする文化財の防錆対策のために試験片を作成し、国内 6 ヶ所に置いて暴露実験を実施し、塗装の劣化と屋外環境との相関について調査を実施した。			
(3) 新潟県佐渡市の佐渡金銀山遺跡、静岡県伊豆の国市の菰山反射炉、山口県萩市の反射炉など、史跡指定地内の建造物や構造物の保存と修復に関する研究会を実施するとともに現地調査も実施した。			
・ 台湾において、日本統治下に建設された建造物や構造物の保存状況について現地にて調査を実施した。台北で開催された近代化遺産保存に関する TICCIH（国際産業遺産保存委員会）の国際会議において各国の産業遺産の保存や修復関係者と情報交換した。			
・ 航空機関連の設計図面あるいは明治後期から大正期、昭和初期にかけて記録された関連資料などの保存の一環としてデジタル化を行うなど貴重な資料を後世に遺すべく現地で状態を調査し保存手法の研究を実施した。			
【実績値】			
報告数	4 件 (①～④)		
発表件数	2 件 (⑤、⑥)		
報告書刊行数	2 件 (⑦、⑧)		
【備考】			
報告			
①中山俊介：Conservation and Restoration of Audio-Visual Recording Media、Conservation and Restoration of Audio-Visual Recording Media、pp.5-14、2013.3			
②中山俊介：近代建築に使用されている油性塗料について、近代建築に使用されている油性塗料、 pp.5-14、2013.3			
③中山俊介、大河原典子、安部倫子：フィルム音帯の修復手法の一例、保存科学 52、2013.03			
④中山俊介、小堀信幸：「タンク船」現況調査について、保存科学 52、2013.03			
発表			
⑤中山俊介：御料車の保存と修復及び活用、御料車の保存と修復及び活用についての研究会、012.11.30			
⑥中山俊介：金属製航空部品の保存手法に関する研究、文化財保存修復学会第 34 回大会、2012.7.1			
報告書			
⑦『Conservation and Restoration of Audio-Visual Recording Media』、東京文化財研究所 2013.3			
⑧『近代建築に使用されている油性塗料』、東京文化財研究所 2012.3			

自己点検評価調査

研No.35

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：産業遺産が世界遺産登録候補リストに記載される今、史跡指定地内の産業遺産の保存・修復理念の作成は急務であり、時代に即した研究テーマとして取り上げた。 独創性：台湾に保存された御料車も加えた新たなテーマで研究会を実施した。 発展性：台湾における産業遺産関係者とのミーティングは、今後の研究につながる人脈形成に有意であった。 効率性：TICCIHの国際会議に出席した事で、多くの関係者と人脈ができ、今後の研究に資する事ができた。 継続性：屋外保存された金属製文化財の暴露実験は長期にわたる金属製文化財保存の維持に貢献する。 また、航空関連資料のデジタル化を行う事により、長く情報を保存する事が可能となる。 正確性：各地の文化財を現地で調査する事により、伝聞ではなく正確に問題を認識し、解決策へつなげる事が可能となった。						

2. 定量的評価

観点	報告数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
判定理由 報告数：近代文化遺産の特徴の一つである、金属製文化財の保存に関する調査や、近年注目されている映画フィルム等の合成樹脂系の文化財の保存と修復等に関しての報告を行った。 発表件数：通常、あまり目に触れる事がない御料車に着目し、その保存と修復および活用に関して発表を行った。 報告書刊行数：昨年度実施した油性塗料に関する研究会の和文報告書及び昨年度発行したコンクリート構造物の保存と修復に関する報告書の英文を刊行した。近代文化遺産に関する国内の活動を海外の関係者に紹介する冊子として当所が発行する英文版は評価が高い。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近代文化遺産の保存・修復と活用について、各種の現地調査を実施することができた。その現地調査を通じて、現状の把握、解決すべき問題点なども新たに掴むことができた。特に、御料車に関して、専門家を招いた研究会を開催し多くの知見、新たな研究者との連携の可能性も得ることができた。さらに今後の修復材料の開発、修復技法の開発に関する重要な成果を得る事ができた。現地調査や研究会を通じて近代文化遺産の重要性を多くの方々に認識していただいた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	前中期計画で得た成果を元にさらに調査研究を発展させるとともに、現地調査を今後も続けて行くことでさらに重要な成果が期待できると考えている。また、研究会を通じて新たな知見を得ると共に、多くの研究者との連携も可能となり、今後の研究を進める上で、重要な成果を得た。次年度も本年度の成果を元にさらに調査研究を発展させることが可能となった。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力（(4)－①）		
【事業概要】 本事業は、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施するもので、本事業では文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的に協力している。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 木川りか（保存修復科学センター生物科学研究室長）、早川泰弘（分析科学研究室長）北野信彦（伝統技術研究室長）、朽津信明（修復材料研究室長）、佐野千絵（保存科学研究室長）、吉田直人（主任研究員）、犬塚将英（主任研究員）、早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、佐藤嘉則（研究員）、酒井清文（客員研究員）、川野邊渉（文化遺産国際協力センター長）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター主任研究員）、江村知子（主任研究員）、楠京子（アソシエイトフェロー）、山田祐子（アソシエイトフェロー）、大河原典子（客員研究員）			
【主な成果】 高松塚古墳壁画については、微生物による彩色の汚損被害について、効果が期待される酵素群の利用に関する研究を進めた。また、害虫トラップの設置と浮遊菌調査等を実施して、修理施設の環境保全について継続的に監視を行った。 キトラ古墳壁画については、墓室壁面から取り外した壁画の再構成作業実施にあたり、裏打ち材料の選定、強度の評価等に関する研究を行った。また継続して毎年実施している石室内部の微生物調査を本年度も行った。両古墳壁画に用いられている材料に関して、蛍光X線、分光光度計等を用いた分析調査を行った。			
【年度実績概要】 ・高松塚古墳 修復研究：微生物等の被害により汚損されている彩色についての新たな処置方法の研究を行った。壁面上の汚れの除去については、今までは次亜塩素酸や紫外線照射による処置を行なって来たが、この手法は彩色のない無地の漆喰部分にのみ適用されるにとどまっており、顔料部分への安全な処置方法の開発が課題であった。本年度は、酵素によって汚れを分解し、彩色上の汚れを除去する方法について検討を行った。その結果、顔料に対しての影響は確認されず、また剥落止め材料について影響を及ぼさない酵素を選択することが可能になった。 生物・環境調査：修理施設の作業室等において、定期的に害虫トラップを設置するとともに、浮遊菌調査を実施し、環境の清浄度を確認するモニタリングを継続実施した。これと並行して、修理作業室をはじめとした修理施設内各所における温湿度の測定も継続して行った。 材料調査：蛍光X線元素分析による壁画面の鉛分布調査及び蛍光X線元素分析・分光光度計による材料調査に参加し、データを蓄積すると共に壁画彩色に関する考察を行った。 その他：25年1月19日から27日に行われた文化庁による修理施設一般公開に際して5名の研究員が対応して協力した。当日は高松塚古墳壁画と修理施設についての説明を行った。 ・キトラ古墳 修復研究：壁画の再構成作業実施にあたり、裏打ち材料の選定、強度の評価等に関する研究を行った。 生物・環境調査：環境調査：キトラ古墳の石室内や小前室などの温湿度の計測、及び古墳周辺の気象観測を継続的に行った。石室内の微生物制御のために2009年より実施されている間欠的紫外線照射によって、菌叢がどのように変化するかを調査する目的で、本年度もキトラ古墳石室内の微生物総合調査を実施した。培養法と、DNA解析による非培養法の両方によって現在微生物に関する解析を実施している。古墳覆屋の浮遊菌、付着菌調査を環境モニタリングの一環として実施した。 材料調査：蛍光X線元素分析による壁画面の鉛分布調査及び蛍光X線元素分析・分光光度計による材料調査に参加し、データを蓄積すると共に壁画彩色に関する考察を行った。 ・その他 ・高松塚古墳壁画・キトラ古墳壁画の保存に関連して文化庁が実施している「古墳壁画の保存活用に関する検討会」に事務局として、またその下に新たに設置された「装飾古墳ワーキンググループ」に委員及び事務局として参加した。 ・福岡県うきは市の装飾古墳（7ヵ所）と宮若市の装飾古墳（2ヵ所）において、温湿度の測定を継続的に行い、これらの装飾古墳の保存環境やモニタリングの方法について検討を行った。茨城県ひたちなか市虎塚古墳の一般公開時の点検作業等へ協力するなど、各地の装飾古墳の保存に関して、貢献した。 ・平成25年夏に予定されるキトラ古墳石室封鎖に向けて、プロジェクトチーム会議を開催し、作業手順の検討を行った。			
【実績値】 援助・助言実施件数 76件、報告数 3件（①②③）			
【備考】 ①佐藤嘉則・木川りか他：非培養法によるキトラ古墳の細菌調査、保存科学、52、2013.03 ②木川りか・佐藤嘉則他：キトラ古墳から分離された微生物の紫外線（UV）照射試験結果について、保存科学、52、2013.03 ③貴田啓子・早川典子他：壁画修復処置に用いる接着材料への酵素の影響、保存科学、52、2013.03			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4441

自己点検評価調査

研No.36

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	正確性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：高松塚壁画発見40年を経て、国民的関心を集める高松塚・キトラ古墳壁画の保存は現在の温湿度、生物等の劣化要因を解決する努力が続けられており、現場の状況に応じた即効性のある作業を展開している。 発展性：修復の準備作業としての物性調査に止まらず、絵画表現を構成する色彩としての把握に関して、重要な進展が見られる。 正確性：複数の研究者の参加と議論を経て、結果に対する客観性を保っている。						

2. 定量的評価

観点	援助・助言 実施件数	報告数				
判定	A	A				
判定理由 援助・助言実施件数：明日香村修理所及びキトラ古墳石室の維持管理に関して、常に現地担当との連携を取り、的確な判断により作業の進行を助けている。修復材料に関しても随時現地へ赴き、詳しく状況を理解し、適切な助言を行っている。 報告数：調査研究について3件の報告を上げることができ、十分な成果が認められる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	高松塚古墳、キトラ古墳ともに、順調に研究を遂行し、良好な成果をあげることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	酵素の応用や微生物の培養方法の検討など、積極的に研究を展開している。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力((4)－①)		
【事業概要】 本事業は、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施するもので、文化庁が行う高松塚・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的な協力を行った。			
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査副部長 杉山 洋
【スタッフ】 廣瀬 覚、青木 敬、降幡順子、玉田芳英、若杉智宏、木村理恵、荒田敬介(以上、都城発掘調査部(飛鳥藤原地区))、辻本与志一、脇谷草一郎、高妻洋成、田村朋美(以上、埋蔵文化財センター)、井上直夫、栗山雅夫(以上、企画調整部)、肥塚隆保(客員研究員)、石崎武志、早川泰典、吉田直人、佐野千絵、三浦定俊(以上、東文研)、青柳泰介、水野敏典(奈良県立橿原考古学研究所)、岡林孝作(奈良県教育委員会)、相原嘉之(明日香村教育委員会)			
【主な成果】 文化庁が進める国宝高松塚古墳壁画の保存・活用に関する事業が円滑かつ適正に遂行するよう協力した。キトラ古墳では、史跡整備計画に対して考古学的成果を提供するとともに、石室封鎖前の最終的な考古学的調査を実施した。また、古墳の保存、活用、整備の方向性を検討にするにあたり、技術的な支援・協力を行った。			
【年度実績概要】 (1)高松塚古墳 ・高松塚古墳では、平成18・19年度に実施した石室解体事業に係る発掘調査の成果、記録類の整理作業の一環として、一昨年度から進めてきた発掘成果のアニメーション動画作成作業を完了させた。 ・発掘調査時に取得した3次元計測データをモデル化し、それを素材に古墳構築過程、石室解体作業工程の再現動画計2本を作成することができた。 ・壁画の保存修復(劣化原因)について、蛍光X線分析を用いた壁画の材料調査、デジタルアーカイブスキャニングによる記録画像などを実施した。 ・1月下旬の高松塚古墳壁画修理施設の一般公開に際しては、解説員として研究員(のべ8人)を派遣した。 (2)キトラ古墳 ・キトラ古墳では、史跡整備の計画作成において必要となる墳丘復元に関する考古学的知見を改めて検討、提供した。 ・整備に向けて石室封鎖前の最終的な考古学的調査として、石室南端及び墓道部分の写真撮影、3次元レーザースキャニング、加工痕跡の拓本採取などを実施した。 ・2週間に1回、研究員による古墳石室内等のカビ点検作業を実施した。緊急時には現地において応急的な処置にあたり、文化庁に状況を報告した。 ・壁画の保存修復(劣化原因)について、蛍光X線分析を用いた壁画の材料調査、デジタルアーカイブスキャニングによる記録画像、可視・近赤外分光光度計による顔料調査、テラヘルツ分光イメージング画像の取得を実施した。 ・石室石材の強度について針貫入試験を実施した。			
【実績値】 論文数4件(①～④)、研究発表2件(⑤⑥) (参考値) 記録作成：遺構実測図16枚、写真(デジタル)352枚、動画DVD2枚			
【備考】 論文 ①降幡順子・青木 敬・廣瀬 覚「特別史跡高松塚古墳版築の剥ぎ取り資料による粒度測定」『奈良文化財研究所紀要2012』2012.6.29 ②廣瀬 覚「構築技術からみた高松塚古墳の横口式石槨」『文化財論叢Ⅳ』2012.10.18 ③若杉智宏「キトラ古墳の墳丘形状」『文化財論叢Ⅳ』2012.10.18 ④高妻洋成・福永香「テラヘルツ分光・イメージングによる文化財の調査」『光アライアンス』第23号第5巻30-34 研究発表 ⑤高妻洋成他「キトラ古墳壁画の材料調査Ⅰ白虎と青龍」『日本文化財科学会第29回大会研究発表要旨集』36-37 ⑥降幡順子他「高松塚古墳壁画の材料調査」『日本文化財科学会第29回大会研究発表要旨集』348-349			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：キトラ古墳の石室封鎖に際し、最終段階の考古学的調査を適切に行うことができた。 独創性：保存科学、考古学の双方の立場から、壁画古墳の保存・整備・活用に助言を行うことができた。 発展性：壁画・装飾古墳や緊急性を有する文化財の保存・活用に対する今後の方向性を示すことができた。 効率性：キトラ古墳石室の点検及び考古学的調査を迅速に行うことができた。 継続性：整理・分析作業を引き続き遂行し、今後の保存・活用にむけた見通しを得ることができた。 正確性：発掘調査の成果を再現動画の作成や古墳整備の方向性に正しく反映させることができた。						

2. 定量的評価

観点	論文数	研究発表				
判定	A	A				
判定理由 論文数：高松塚・キトラ古墳の保存・活用に資する学術的成果を論文にまとめ、目標を上回る4本を発表することができた。 研究発表：高松塚・キトラ古墳の壁材材料調査の成果を2件発表した。目標の2件を達成することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	高松塚古墳の発掘調査成果の整理・検討、壁画の分析調査が進み、また、キトラ古墳石室の最終調査が完了したことにより、今後の保存・活用・整備等の事業が円滑に進むものと期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	高松塚・キトラ両古墳の保存・活用に関する業務を適切に遂行し、同様に重要かつ緊急性を有する文化財の今後の保存・活用に対する方向性を示すことができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	農林水産省が行う大和紀伊平野土地改良事業大和平野県営飛鳥工区2号幹線の調査及び保存活用に関する技術的協力((4)－③)		
【事業概要】 飛鳥・藤原地域は、我が国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、地方公共団体と連携し、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果を広く公開するとともに、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹
【スタッフ】 石橋茂登、若杉智宏、高橋知奈津、桑田訓也(以上、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区))、井上直夫、栗山雅夫(以上、企画調整部)			
【主な成果】 大和平野支線水路等改修工事に伴う発掘調査で、対象地は藤原京右京七条一坊(橿原市上飛驒町)にあたる。総長120mの工事区域のうち、東寄りの2箇所に10m×1mの調査区を設け、発掘調査をおこない、残りの100m分は立会に対応した。その結果、古代の溝・柱穴等を検出し、記録した。			
【年度実績概要】 調査地は藤原京右京七条一坊にあたる。工事区域の東端から西10m分を東区、工事区域東端から西約25～35mの10m分を西区として発掘調査をおこなった。発掘調査期間は25年1月21日～1月30日である。 東区では南北溝1条等を検出した。南北溝は、飛鳥藤原62次調査・168-9次調査の遺構検出面と標高がほぼ一致しているが、埋土からの出土遺物が少なく、年代を確定することが困難である。東区の位置には、藤原京西一坊坊間路西側溝が通ると想定されており、今回検出した溝が西側溝にあたる可能性があるが、従来の調査成果から導き出した想定位置とはややずれる点に問題を残す。 西区では、南北溝1条、柱穴2基、土坑3基等を検出した。南北溝は、飛鳥藤原62次調査で確認している藤原京期の南北溝SD6511の延長部にあたる。柱穴2基に関しては、両者とも埋土から方形の板材が出土した。板材の特徴からみて、これらの柱穴は同時期のものと考えられる。2基のうち西側の柱穴は、飛鳥藤原62次調査で確認した藤原京期の南北堀SA6479の延長ラインと位置が重なり、今回検出した柱穴2基は藤原京期の遺構である可能性がある。 本事業は、水路付け替え工事に伴う発掘調査で、狭隘な調査範囲ではあったが、上記のように埋蔵文化財に関する情報を最大限に引き出し、必要となる記録類の作成を迅速に進めることができた。 なお、調査終了後も調査地外の水路改修工事区域の立会を実施し、遺構状況の記録等を作成した。立会調査の期間は、25年2月14日～3月6日である。			
			
		東区全景(東から)	西区全景(東から)
【実績値】 (参考値) 出土遺物 : 木器・木製品2点、土器・土製品コンテナ1箱 記録作成数: 遺構実測図5枚、写真(4×5)8枚、デジタル写真46枚			
【備考】			

自己点検評価調査

研No.38

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性				
判定	A	A				
判定理由 適時性：開発行為に対する迅速性、地方公共団体の文化財行政に対して協力した。 継続性：飛鳥・藤原地域に関する遺跡情報の収集のために、規模の大小にかかわらず、調査を継続して行った。						

2. 定量的評価

観点						
判定						
判定理由						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	年間1件の案件に対して、迅速かつ適切に対応し、地方公共団体の行う埋蔵文化財行政に対して協力することができた。また、これらの調査を通して継続的に遺跡のデータを収集し、蓄積を図った

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急性を要する事前調査に効率よく対応し、藤原宮並びに飛鳥・藤原地域についての基礎資料を継続的に蓄積している。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究 (5) - ①)		
【事業概要】 館蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、あわせて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島哲
【スタッフ】 荒木臣紀（保存修復課環境保存室主任研究員）、安藤香織（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）、井上洋一（企画課長）、池田宏（上席研究員）、伊藤嘉章（学芸研究部長）、伊藤信二（教育普及室長）、井上洋一（企画課長）、猪熊兼樹（列品管理課貸与特別観覧室主任研究員）、今井敦（博物館教育課長）、恵美千鶴子（調査研究課書跡・歴史室アソシエイトフェロー）、沖本明子（保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー）、小山弓弦葉（工芸室主任研究員）、及川穰（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）、河内晋平（東京藝術大学助手）、川村佳男（保存修復課保存修復室研究員）、神庭信幸（保存修復課長）、木島隆康（東京藝術大学教授）、鬼頭智美（企画課国際交流室）、木下史青（デザイン室長）、金鐘旭（東京藝術大学）、小菅将夫（岩宿博物館館長）、後藤健（東京国立博物館上席研究員）、小林牧（広報室長）、佐々木佳美（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）、佐藤祐介（博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー）、佐藤香子（環境保存室研究支援者）、佐藤祐介（博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー）、澤田むつ代（特任研究員）、品川欣也（調査研究課考古室研究員）、島谷弘幸（副館長）、白井克也（列品管理課平常展調整室長）、鈴嶋富士子（東京藝術大学非常勤講師）、鈴木みどり（博物館教育課ボランティア室長）、鈴木晴彦（保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー）、関紀子（調査研究課絵画・彫刻室アソシエイトフェロー）、瀬谷愛（列品管理課平常展調整室員）、高木雅広（エクサーチ LLC 合同会社）、高橋裕次（博物館情報課長）、竹内奈美子（調査研究課工芸室長）、竹浪遠（黒川古文化研究所）、田沢裕賀（調査研究課絵画・彫刻室長）、千葉史（株式会社ラング）、塚本鷹充（調査研究課東洋室研究員）、土屋貴裕（調査研究課絵画・彫刻室研究員）、土屋裕子（保存修復課環境保存室主任研究員）、富田淳（列品管理課長）、富山恵介（東京藝術大学大学院）、中村春佳（修理技術者）、中安知佳、西尾歩（立命館大学）、平野はな子（修理技術者）、藤田千織（博物館教育課教育普及室主任研究員）、古谷毅（列品管理課主任研究員）、星野裕昭（アルテアエンジニアリング株）、松嶋雅人（企画課特別展室長）、松田麻美（国立歴史民俗博物館）、松本伸之（学芸企画部長）、村田良二（博物館情報課情報管理室長）、森田正彦（慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科）、山田俊輔（調査研究課考古室研究員）、横山真（株式会社ラング）、横山梓（企画課特別展室研究員）、米倉乙世（保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）			
【主な成果】 館蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財と、その周辺領域に関して、美術史・歴史学・考古学・博物館学等の各見地から学会・研究会・学術雑誌上で各種発表を行った。			
【年度実績概要】 ・内外の学会・研究会で、各種発表を行った。 ・学術雑誌に各種の論考を発表し、著書を刊行した。			
【実績値】 ・学会・研究会等発表件数：27 名 65 件。 ・論文等掲載数：39 名 92 編。			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：学界動向や展覧会との関連などに留意した研究を行っているため。 独創性：他に類例のない当館コレクションを素材とした研究を多く行っているため。 発展性：これまでの作品・資料に対する知見を元に、新たな視点を持った研究を多く行っているため。 効率性：列品管理・展示など他の業務に多く時間を割かれながらも、多くの研究を実施しているため。 継続性：各研究員はそれぞれの研究分野や研究テーマについて継続して研究、成果発表を行っているため。 正確性：確実な実証に基づいた研究を行っているため。						

2. 定量的評価

観点	学会・研究会等 発表件数	論文等掲載数				
判定	A	A				
判定理由 学会・研究会等発表件数、論文等掲載数：いずれも研究機関の規模及び業務の繁多を考慮した上で、十分な成果をあげている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	前年度に比して遜色のない調査研究成果の公開を行い、絵画・書跡・工芸・考古・歴史資料などの各ジャンルにわたり、最新の学術情報を盛り込んだ情報を発信しえた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画に基づき、順調に進捗している。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 特別調査法隆寺献納宝物(第34次)「聖徳太子絵伝」第8回((5)-①)		
【事業概要】 東京国立博物館では、法隆寺献納宝物について、昭和54年より、34次にわたって献納宝物の調査を館内及び館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。献納宝物は、経年によって脆弱化しており、各分野の研究者が直接的な調査をすることは難しい。本事業は全ての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。毎次の調査研究については「法隆寺献納宝物特別調査概報」を発刊している。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】 土屋貴裕(調査研究課絵画・彫刻室研究員)、瀬谷愛(列品管理課平常展室研究員)、小山弓弦葉(調査研究課工芸室主任研究員)、伊藤信二(博物館教育課教育普及室長)、沖松健次郎(企画課特別展室主任研究員)、澤田むつ代(学芸研究部特任研究員)、小林達朗(東京文化財研究所企画情報部主任研究員)、谷口耕生(奈良国立博物館学芸部保存修理指導室長)、朝賀浩(文化庁美術学芸課主任文化財調査官)、村重寧(早稲田大学文学学術院名誉教授)、松原茂(根津美術館学芸部長<当館客員研究員>)、東野治之(奈良大学教授<当館客員研究員>)、若杉準治(京都国立博物館名誉館員<当館客員研究員>)、岡本明子(東京芸術大学大学美術館学芸研究員)、谷川ゆき(国文学研究資料館プロジェクト研究院)			
【主な成果】 本年度は、重要文化財聖徳太子絵伝全4面を調査対象とした。経年の剥落や劣化などによって判別の困難な図様の細部について観察することで、4面に70余りの場面を描く本図の事跡をおおむね確定することができた。またその成果を『法隆寺献納宝物特別調査概報33』「聖徳太子絵伝(四幅本)1」として刊行した。			
【年度実績概要】 高精細デジタルカメラによって全図、分割図のみならず、各事跡が詳細に確認しうる精度で撮影し、実作品に基づいて細部を照合しつつ、各事跡場面の特定と、描かれたモチーフの形状、描写について詳細な客観的記述を重ね、各研究者共同で、確認、確定を行った。また、本図と図様構成を共有する法隆寺本、斑鳩寺本との図様の照合を行ない、あわせて画面に付された銘札の比較を行った。高精細画像の各場面の拡大図とともにこれを公表することにより、事業概要で述べたとおり、全ての研究者に対して通常の状態では観察しにくい本図の詳細な客観的情報を提供する下地ができたものとする。			
			
『法隆寺献納宝物特別調査概報33』 「聖徳太子絵伝(四幅本)1」			
【実績値】 調査回数 1回 調査概報発行 1件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	S	S
判定理由 適時性：本調査は、これまで継続的になされてきた法隆寺献納宝物調査の未報告作品に対するものであり、近年重要文化財指定をうけた作品を対象としているため。 独創性・発展性：本図と図様構成を共有する法隆寺本、斑鳩寺本との図様の照合を行い、四幅本の特徴を明確にする意義があるため。 効率性：これまでも聖徳太子絵伝の研究を行ってきたスタッフの協力により、効率よく報告の段階まで調査を進めることができた。 継続性：昭和54年から34年間調査を継続して行っている。また、次年度に、「聖徳太子絵伝（四幅本）2」を刊行する目途が立っているため。 正確性：高精細デジタルカメラによって、各事跡を詳細に確認し、実作品に基づいて各事跡場面の特定を行い、客観的記述を行った。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査概報発行				
判定	A	A				
判定理由 調査回数：予定通りの調査を行うことができた。 調査概報発行：成果をまとめて公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当該調査は、絵画史、工芸史だけでなく、歴史の専門家を含めた調査で、総合的な作品評価を行ってきた。これらの成果を踏まえ、『法隆寺献納宝物特別調査概報33』『聖徳太子絵伝（四幅本）1』を刊行した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	作品の全事跡の調査と検討を行い、第1、2面に関しては概報を刊行することができた。また、次年度刊行する第3、4面に関する基礎調査も終えることができ、計画通り、順調に進めることができた。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-3

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 特別調査「書跡」第10回 ((5)-①)		
【事業概要】 館書跡収蔵品の中で、平安時代から江戸時代にわたる歌書、物語、願文など和様の書跡類を調査する。この分野ではすでに平安時代の作品を中心とした図版目録『日本書跡篇 和様Ⅰ』を刊行しているが、その後の新規収集品及び鎌倉時代以降の作品を対象とする。特に古筆切となっている断簡類の原典特定作業、使用された料紙の種類、書写年代の比定を行うとともに、法量計測、高精細画像撮影など基礎データを収集し今後の研究に便宜を図る。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島 哲
【スタッフ】 島谷弘幸（東京国立博物館副館長）、高橋裕次（博物館情報課長）、富坂賢（保存修復課保存修復室長）、恵美千鶴子（調査研究課書跡・歴史室アソシエイトフェロー）、羽田聡（京都国立博物館学芸部研究員）、丸山猶計（九州国立博物館文化財課主任研究員）、酒井芳司（九州国立博物館企画課展示室研究員）、渡部史之（九州国立博物館博物館科学課アソシエイトフェロー）、吉川聡（奈良文化財研究所文化遺産部歴史研究室長）、高梨真行（文化庁美術学芸課文化財調査官）			
【主な成果】 平成元年以降当館で収集した書跡分野に属する古筆切と文化庁所蔵の書跡計61件について、作品の名称、古筆切としての通称、制作年代、形状、界線について確認した。断簡は原典推定をし、可能な限り『国歌大観』の収載番号との照合を行った。合わせて原装丁の推測、使用された料紙の紙質分析の検討も合わせて行った。今回の調査対象について記載文字を可能な限り解読し書誌情報を収集した。また対象全件について法量を計測し、一部について撮影を行った。			
【年度実績概要】 平成元年以降当館の収蔵にかかる書跡分野の作品及び文化庁所蔵の作品の内、主として掛軸装の古筆切、卷子装・帖装の作品、について次の項目について調査を実施した。1, 名称・通称の検討、2, 筆者の真贋・伝称筆者などの検討、3, 制作年代、4, 元装丁の推測、5, 形状性質の確認、6, 本紙の法量計測、7, 出典の推定、8, 使用料紙の分析、9, 界線の分析、10, 記載文字の判読、11, 書誌情報の確認、12, 写真撮影 調査対象:B-3416 了佐切 など 61件 調査日 :25年3月13日(水)～15日(金)			
			
調査及び写真撮影の様子			
【実績値】 調査件数: 61件 調査日数: 3日間 調書作成: 61枚 撮影画像数: 162カット (参考値) 調査人数: 参加者10人 26人日(のべ)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：館蔵品の収集がある程度まとまった適切な段階で実施しているため。 独創性：館蔵品を対象とした詳細な調査で、他では実施できないため。 発展性：調査成果は今後の目録の刊行等につながるため。 効率性：必要最小限の経費で実施しているため。 継続性：館蔵品の調査を毎年蓄積しているため。 正確性：各参加者の専門性を活かして、正確な調査内容となっているため。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	調査日数	調書作成	撮影画像数		
判定	A	A	A	A		
判定理由 調査件数：所期の件数を調査した。 調査日数：所期の日数の調査を行った。 調書作成：今後の研究に十分な調書の作成を行った。 撮影画像数：今後の研究に十分な写真の撮影を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今後の研究に必要な件数と内容の文化財の調査を実施している。今後は未調査の物件の調査を進めるとともに、調査成果を目録として公開するために、調査した情報の点検等を進める必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画1-4-(1)-①「我が国の美術を中心とする有形文化財及びそれに係わる諸外国の文化財に関し調査・研究を実施する。」を反映した事業として適切に実施している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 特別調査「工芸」第4回(5)-①		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財のうち、金工・刀剣・陶磁・漆工・染織等工芸分野の特別調査。独立行政法人国立文化財機構の国立博物館4館及び文化庁の工芸担当者が集まり、同じ専門分野の研究者が同時に作品調査を行う。複数の専門家の目で同時に同じ作品を調査することにより、精度の高い成果が得られる。また各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有できる。今後の研究の進展や、展示内容の向上に結びつけることを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸室長 竹内奈美子
【スタッフ】 今井敦(博物館教育課長)、伊藤信二(博物館教育課教育普及室長)、猪熊兼樹(列品管理課貸与特別観覧室主任研究員)、酒井元樹(列品管理課平常展室研究員)、横山梓(企画課特別展室研究員)、尾野善裕(京都国立博物館学芸部工芸室長)、永島明子(京都国立博物館学芸部企画室主任研究員)、内藤榮(奈良国立博物館学芸部長補佐)、清水健(奈良国立博物館学芸部教育室研究員)、末兼俊彦(京都国立博物館学芸部企画室研究員)、川畑憲子(九州国立博物館学芸部企画課文化交流展室研究員)、望月規史(九州国立博物館学芸部文化財課研究員)			
【主な成果】 東京国立博物館の金工・陶磁・漆工の列品について、最新の研究結果を反映させた知見を共有することができた。金工調査では、当館所蔵の密教法具は平安時代～鎌倉時代の優品がバランスよく揃っていることが確認され、従来展示に供される機会が少なかった作品についても今後積極的に活用する契機を得た。陶磁調査では、類例比較により、20世紀初頭の日本における中国陶磁コレクションの形成に関する新たな知見を得ることができた。漆工調査では、香道具の形式にとらわれない性質について認識を深め、特に香簞には汎用の提簞を用いた場合もあることを確認した。			
【年度実績概要】 ・金工調査 実施期間 25年3月8日(金) 金工列品のうち密教法具類42件について調査を実施し、当館所蔵の密教法具は平安時代～鎌倉時代の優品がバランスよく揃っていることが確認された。このことにより、従来一部の著名な作品を除いて展示に供される機会が少なかったこれら作品類を、今後積極的に活用する契機を得た。また鎌倉時代14世紀や室町時代15世紀の年記銘を有する作品があり、数少ない密教法具の、ひいては中世金工における技法・様式を判断するうえでの基準的作例として、極めて重要であるとの認識を共有することができた。 ・陶磁調査 実施期間 25年2月18日(月)・19日(火) 陶磁列品のうち横河コレクションと広田コレクションに照準を合わせ、京都国立博物館に所蔵される広田コレクションと、寄贈予定の個人コレクションを中心に85件について調査を実施した。個人コレクションは、ほぼ同じ時期に収集された当館の上記コレクションと比較しながら個々の作品について調査を行なった。今回の調査を通じて当館列品についても、20世紀初頭の日本における中国陶磁コレクションの形成に関する新たな知見を得ることができた。 ・漆工調査 実施期間 25年3月5日(火)・6日(水) 漆工列品のうち継続的に香道具をテーマとし、今年度は引出しの中に細々とした道具類や多種多様な香木片を収める、簞笥形式の作品3件をとりあげて調査を実施した。中でも十種香箱のように組香に用いる諸道具を一括して収め、かつ喫煙具を兼ねる簞笥の存在が確認され、香道具の形式にとらわれない自由自在な性質について認識を深めた。またそれゆえに香木を収める香簞には、汎用の提簞を用いた場合もあることを確認した。			
			
金工調査風景		漆工調査風景	
【実績値】 調査回数 3回 調査日数 5日 調査員 13名 調査対象作品 130件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：工芸分野では美術や考古、歴史などの分野より研究者が不足しており、研究推進の緊急性が高く、本事業は時宜に適っているため。 独創性、効率性、正確性：工芸各分野の研究者がそれぞれ複数揃う国立文化財機構ならではの事業であり、本年度も各機関の同じ専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。 継続性、発展性：本年度の調査事業は、4回目の実施となり継続して行うことができた。これにより、今後の研究推進や展示公開に向け寄与するところは大きいと考えるため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査日数	調査員	調査対象作品		
判定	A	A	A	A		
判定理由 調査回数：計画通り、金工・陶磁・漆工それぞれの調査会を実施した。 調査日数：計画通り、それぞれ1～2日にわたる調査を実施した。 調査員：交付金遅配のため例年より実施が遅れたが、金工・漆工各分野は各機関専門家がそれぞれほぼ全員揃って調査を行った。 調査対象作品：各分野の調査において極めて効率良く、相当数の作品を調査できた。漆工調査の対象作品は1件に多数の内容品を含むため作品件数は少ないが、実際には多岐にわたる多数の作品の調査を行っている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	各機関の同じ専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。今後の研究推進及び展示公開に寄与するところが大きい。また分野ごとに分かれて作品調査を実施するため効率性も高く、相当数の作品を調査している。今後は刀剣・染織分野についても調査を行っていくことが望ましく、25年度以降も継続する必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り作品調査を実施することにより、研究を推進し、その成果が展示公開の向上に寄与している。本事業のような調査会を次年度以降も継続的に行っていくことにより、工芸分野の文化財に関する研究の推進を図る。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進										
プロジェクト名称	5) 特別調査「彫刻」第2回 (5)－①										
【事業概要】 社寺所蔵の仏像、神像、肖像彫刻を調査し、調査研究報告、論文等の研究活動に結び付け、あるいは寄託の増加、特別展等の企画につなげて展示の向上を図る。 当館所蔵の東洋彫刻、それに関連した作品を調査し、図版目録東洋彫刻篇の出版、論文等の執筆、展示に反映させる。											
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室長 浅見龍介								
【スタッフ】 丸山士郎（博物館教育課教育講座室長）、稲本泰生（客員研究員・京都大学准教授）、小泉恵英（九州国立博物館企画課長）、原田あゆみ（九州国立博物館主任研究員）											
【主な成果】 東京国立博物館の大型の中国石仏 2 軀の展示作業の際に上記スタッフ立会いのもと、前後左右斜め等多方向からの撮影を行った。このような写真は従来撮影されていなかった。 東京国立博物館所蔵の東南アジア彫刻の調査を行い、陳列に適した作品を抽出し、東洋館 12 室「東南アジアの金銅像」の展示に 5 点を活用した。おそらく収蔵以来初めての展示と考えられる。 岐阜県高山市霊泉寺本尊聖観音菩薩立像を調査。鎌倉時代の都ぶりの作で、市内では数少ない鎌倉彫刻として紹介する文章の準備を進めた。											
【年度実績概要】 - 菩薩立像（TC-375）、観音菩薩立像（TC-376）はいずれも重要文化財だが、高さが 2.5 メートルを超える石造彫刻なので重量が 2～4 トンある。そのため従来正面と側面の写真しかなかった。東洋館リニューアルの際に回転台にのせて多方向からの撮影を実施。平成 26 年度刊行を予定している図版目録に掲載する予定である。また、研究資料として価値が高いものである。 - 当館はおよそ 100 件の東南アジア彫刻を所蔵している。このうちおよそ半数は活用された形跡がみられない。三木榮氏寄贈品はタイの文化財当局の許可を得てもたらされたもので、早いものは 13 世紀、下つても 17 世紀アユタヤ時代の優品と判明。この調査により当館の展示に 5 点、九州国立博物館への長期管理換えに 6 件を活用できた。 『図版目録東洋彫刻篇』刊行のため、およそ 700 件ある作品のうち、制作年代不詳等データ不備の作品の調査を開始した。 - 岐阜県高山市の霊泉寺本尊聖観音菩薩立像は学界に全く知られていないうえ、調査されたこともない。本年度は、調査、撮影を実施し、高山市に報告した。今後、当館研究誌にも紹介文を執筆する予定である。											
											
大型彫刻撮影風景											
【実績値】 <table border="0"> <tr> <td>調査回数</td> <td>5 回</td> </tr> <tr> <td>調査日数</td> <td>7 日</td> </tr> <tr> <td>調査員</td> <td>5 名</td> </tr> <tr> <td>調査対象作品</td> <td>83 件</td> </tr> </table>				調査回数	5 回	調査日数	7 日	調査員	5 名	調査対象作品	83 件
調査回数	5 回										
調査日数	7 日										
調査員	5 名										
調査対象作品	83 件										
【備考】											

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	A	A	A
判定理由 適時性：所蔵品に関する情報公開、資産の有効活用などからも時宜にかなっているため。 独創性：事業のテーマ、遂行の方法等はオーソドックスなものであるため。 発展性：彫刻研究の基礎となるだけでなく、博物館の収集の歴史を研究する基礎的調査として発展を見込めるため。 効率性：石造彫刻は一人では扱いにくいものが多く、複数での調査は極めて効率性が高いため。 継続性：目録刊行という目的がはっきりしており、継続は必須であるため。 正確性：それぞれ生産地ごとに信用のおける研究員を得ており、正確性は高いため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査日数	調査員	調査対象作品		
判定	B	B	B	A		
判定理由 調査回数：2ヵ月に一度としており、平成24年度は仕事の都合で1回実施できなかったのみである。 調査日数：東洋館リニューアルを進めながらという事情があり、満足できる数字である。 調査員：今後さらに多くの研究者に参加してもらうことを考えている。 調査対象作品：今回の調査日数と調査作品数の割合で次年度以降これに集中すれば目的は達成できる計算である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館東洋館、九州国立博物館文化交流展示の充実に結び付けられたため。今後、調査員を増員する場合、調査回数を増やすことも考える。また、図版目録の刊行は困難な事業なので、当面東洋彫刻の調査、研究を優先する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	東京国立博物館東洋館、九州国立博物館文化交流展示の充実に結び付けることができた。 東京国立博物館の彫刻展示及び研究は、本館（日本）、法隆寺宝物館（日本の飛鳥～奈良時代）、東洋館（アジア）の3本柱から成り立っており、それらを比較して見るという観覧方法を提案した。今後、より一層緊密な関係を示して彫刻史に関心を持ってもらえるよう努める。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 特別調査金地屏風の金箔地についての調査研究（(5)－①）		
【事業概要】 近年絵画作品の金・銀の使用が注目されている。当館が収蔵する尾形光琳筆「風神雷神図屏風」をはじめとした、各派各時代の金地屏風を同条件の下で調査し、金地についての客観性のあるデータを蓄積する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】 神庭信幸（保存修復課長）、松嶋雅人（企画課特別展室長）、荒木臣紀（保存修復課環境保存室主任研究員）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）、金井裕子（調査研究課絵画・彫刻室員）			
【主な成果】 これまで蓄積したデータの確認と現段階での追調査の必要項目について検討した。国宝「檜図屏風」の金箔地について蛍光X線分析、赤外線による調査を行い、これまでの結果を踏まえて検討した。また、迅速かつ安全に屏風装作品の蛍光X線分析を行うための道具の検討を行い、新しい蛍光X線分析装置導入へ向けての準備を行った。			
【年度実績概要】 検討会により、これまでのデータの外部公開を目標として、外部公開のために必要な最終実験を検討し、金箔の重なりによるデータの違いを把握する必要性を確認した。また、他の金箔地屏風について蛍光X線分析、赤外線による調査を行ったが、蛍光X線分析装置の故障によりこれまでの継続としての実験を行うことは出来なかった。その代わりに、同条件下でのデータ蓄積ではなかったが、別機材によるX線分析・赤外線撮影などの光学調査を行い、作品修理等に役立てた。			
			
「風神雷神図屏風」X線分析調査風景			
【実績値】 作品調査回数3回（うち、実験方法検討会1回、分析2回（蛍光X線分析、赤外線撮影））			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	C	C	
判定理由 適時性：日本絵画における金の使用方法に対する関心は高く、データ蓄積の必要性も高いため。 独創性：光学機器による金箔研究は、同時代の作品を、流派を超えてデータ集積する点に意味があるため。 発展性：今回の方法をもとに新しい研究方法の確立が可能であるため。 効率性：機材の故障により研究が中断した。 正確性：機材の故障により総合的な検討のためのデータ収集が出来ず、考察を進める段階にいたらなかったが、新たなデータ収集を行い、作品の修理に役立てることが出来た。						

2. 定量的評価

観点	作品調査回数					
判定	C					
判定理由 作品調査：機材の故障により同一条件での新たなデータの蓄積は出来なかったが、国宝「檜図屏風」について40ヵ所の蛍光X線分析と赤外線による調査を行い修理のためのデータ収集を行うことができた。						

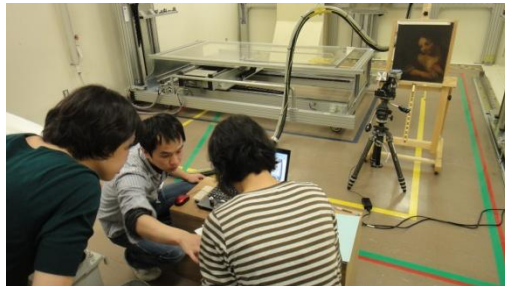
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	長期間の機材の故障により、新たなデータの蓄積は出来なかったが、国宝「檜図屏風」について40ヵ所の蛍光X線分析と赤外線による調査を行い修理のためのデータ収集を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
要注意	本年度は、これまでの調査のまとめとして、金箔の重なりによるデータの違いをもとに、データの集約と現段階での結論発表を行う予定であったが、必要とされた最終実験を行うための機材が長期間故障し、実験を行うことができなくなった。そのため、同一条件を前提としたこれまでのデータを集約しての考察を行うことができなくなった。 次年度以降は、新たな機材により実験の再開が可能となる予定である。今回の経験を考慮し、金地のみに限らない様々な光学的調査を行い、総合化を行わなくても調査成果を反映できる研究課題の選択と実験体制をつくることとしたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 油彩画の材料・技法に関する共同調査（(5)－①）		
【事業概要】 本研究は東京藝術大学との共同研究で平成 21 年度から開始し、平成 24 年度に継続の手続きを行い、続行しているものである。東京国立博物館所蔵の油彩画約 150 件の中から、明治期を中心とした約 50 件を調査対象としている。東京芸術大学大学院油画保存修復研究室はこれまで大学所蔵の明治期油彩画について調査研究を続け、多数の成果を公表している。この度の共同調査の目的は、高精細デジタルカメラを使用した顕微鏡写真、普通光写真、赤外線写真、紫外線蛍光写真、透過デジタルX線写真、蛍光X線分析等の科学的調査を通し、当館所蔵の油彩画に使用された材料と技術に関するデータ構築を行い、これまで芸大が集積したデータと比較を可能にすることである。それによって、今後我が国の初期油彩画の技法的解明、あるいは歴史的解明が一層進展するものと考ええる。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】 木島隆康(東京芸術大学大学院教授)、西川竜二(東京芸術大学大学院助教)、田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長)、土屋裕子(保存修復課保存修復室主任研究員)、荒木臣紀(保存修復課環境保存室主任研究員)			
【主な成果】 平成 20 年 11 月から開始し本調査は、本年度 3 年間の調査期間の締結を更新し、さらなる調査を進めている。本年度調査が終了した作品は、19 点である。24 年 11 月 12 日から本館特別 1 室で開催した特集陳列「東京国立博物館 140 周年特集陳列 グラスゴーから来た西洋画―博物館草創期の国際交流 1」にて作品の一部を展示した。			
【年度実績概要】 平成 24 年度に調査が終了した作品（これまでに調査した作品の追加調査も含む）は、①A-696 唱歌図、②A-697 海港日暮図、③A-699 風景、④A-700 海港日没図、⑤A-701 牧場図、⑥A-702 聖家族、⑦A-703 運動、⑧A-704 少女とカナリヤ、⑨A-705 風景、⑩A-706 童子像、⑪A-707 風景、⑫A-710 風景、⑬A-711 海の景、⑭A-712 ふたりの女性、⑮A-713 隠者、⑯A-716 ジャニー・ディーンズの肖像、⑰A-717 納屋、⑱A-718 音楽の稽古、⑲A-719 橋の景色、以上 19 点。			
			
油彩画の光学的調査風景			
【実績値】 調査回数 : 10 回 調査作品数 : 19 点 研究発表・展示 : 1 回 24 年 11 月 12 日～12 月 24 日特集陳列「東京国立博物館 140 周年特集陳列 グラスゴーから来た西洋画―博物館草創期の国際交流 1」にて、調査対象作品を展示。			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：展示への活用に資する時宜を得た調査であるため。 独創性：当館保有の油彩画に関して初めての総合調査であるため。 発展性：明治期に油彩画に関して多感との比較研究が可能になるため。 効率性：計画的な調査を実施した。 正確性：調査内容は目的とするメニューを確実に行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作品数	研究発表・展示			
判定	A	A	A			
判定理由 調査回数、調査作品数、研究発表・展示：全て当初予定通りの優れた成果を上げることができたと考える。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館が所蔵する油彩画コレクションは、東京藝術大学の同時期の作品群を補完する意味でその存在は大きい。これまで光学的調査が不十分であったため、芸大作品と材料や技術に関する科学的な比較が困難であったが、一連の調査によって徐々に可能になってきている。今年度は調査対象作品を展示までもっていくことができ、今後の調査の進捗が更なる可能性を開いていくものとする。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。『MUSEUM』での発表はなかったため、次年度以降の課題である。

自己点検評価調査

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	8) 名物裂を用いた表装裂の復元に関する共同研究 ((5)-①)
【事業概要】 我が国の文化財は、多種多様な裏打紙及び表装裂地が組み合わさった一体構造を持つものが多く、本紙修理の技術と表装の技術は互いに不可分の関係にある。急激な生活文化の変化により、基礎的材料の不足が深刻化し、伝統的な材料・技術の継承が大きな課題となっている。中でも表装裂地については、伝統的な製造法によるものが著しく減少し、文化財の品格に相応しい裂地を製作することが困難になってきている。本研究の目的は、研究者と技術者が共同して名物裂を調査・記録・保存・公開し、それによって伝統的製法にのっとった復元を可能とすることである。また、文化財修理そして伝統文化の継承に意義があると考ええる。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】 澤田むつ代（特任研究員）、小山弓弦葉（調査研究課工芸室主任研究員）、鈴木晴彦（保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー）、米倉乙世（保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー）、平河智恵（保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー）、小笠原小枝（当館客員研究員）、岡興造（国宝修理装こう師連盟理事長）、加藤章男（国宝修理装こう師連盟専務理事）、半田昌規（国宝修理装こう師連盟常務理事）、大菅直（国宝修理装こう師連盟企画調整役）、廣瀬賢治（伝統技術伝承者協会理事長・選定保存技術「表具用古代裂（金襴等）製作」保持者）	
【主な成果】 前田家伝来名物裂に関する調査を5回（平成23年度2回、平成24年度3回）開催し、金襴を中心に平成23年度35点、平成24年度74点の名物裂の調査を実施した。本調査によって製作に関する技術及び材料に関して科学的な観点からのデータを取得することができた。	
【年度実績概要】 前田家伝来名物裂に納められた裂地は中国で製作された多種多様な金襴を含んでいる。今日これらの金襴を織物市場で購入することは不可能であり、使用するためには自ら作製する他に手段はないが、これまで作製するに十分な裂地情報が提供されていなかった。今回の調査によって、裂地に関する性能を数字と写真、そして状態の記述によって提供することができるようになった。これによって、金襴の復元製作に関する基本的な環境が整えられたといえる。	
	
前田家伝来名物裂に関する調査風景	
【実績値】 調査件数 74 件 (内訳) 第3回調査会、24年7月26日(月)、22件 第4回調査会、24年12月4日(火)、30件 第5回調査会、25年2月7日(木)、22件	
【備考】	

【書式B】

(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-8

自己点検評価調査書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：今日の装こう技術で必要とされる優れた名物裂の基本データの公開が可能になった。 独創性：裂の製作者側に必要なデータを明らかにした点が優れているため。 発展性：基本データを元に実際に名物裂を復元制作することが可能になった。 効率性：短期間に必要十分なデータを取得することができた。 正確性：複数の調査員によって各調査項目を確認することによって、的確な判断を行った。						

2. 定量的評価

観点	調査件数					
判定	A					
判定理由 調査件数：今後、得られた調査データの解析と総括を行い、名物裂の製作技法、製作材料についてまとめ、データベース化を行う計画である。研究計画・方法において当初予定通りの優れた成果を上げることができたと考える。						

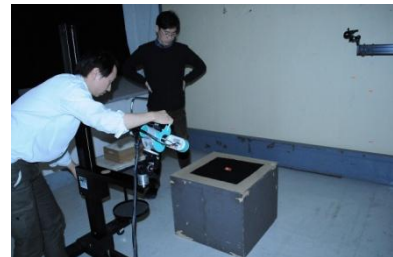
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	染織分野の研究者、織物製作者、織物を実際に表具に用いる技術者等が一堂に会し、通算5回の集中的な調査を実施することによって、美術史的観点と実際の製作技術の観点から、名物裂の実態が明らかになりつつある。今後は調査結果をまとめ、データベース化を図る予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 漆塗籠棺残片の保存に関する共同研究((5)－①)		
【事業概要】 水漬状態の漆塗籠棺残片(J-39374)のミクロ及びマクロ的な構造を理化学的に調査分析し、合わせて過去の処置事例を検討しながら、水漬状態の資料に対する乾燥方法を確定し、具体的に乾燥処理を行うことを目的とした事業である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】 井上洋一（企画課長）、古谷毅（列品管理課主任研究員）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）、山田俊輔（調査研究課考古室研究員）、川村佳男（保存修復課保存修復室研究員）、市元 壘（九州国立博物館企画課研究員）、永嶋正春（国立歴史民俗博物館情報資料研究系准教授）、北野信彦（東京文化財研究所保存修復科学センター）、望月幹夫（当館客員研究員）、松井敏也（筑波大学准教授・当館客員研究員）			
【主な成果】 ・漆塗籠棺残片の保管履歴を整理し、現状を確認した。 ・理化学的調査分析の計画を策定し、実行した。			
【年度実績概要】 ・第1回全体会議・調査会の開催 開催日：平成24年12月12日 出席者：神庭・古谷・和田・山田・川村・市元・永嶋・北野 議事：保存経過報告(和田・川村)、考古資料化案報告(古谷)、学識経験所見報告(永嶋・北野)、報告・協議総括(神庭)。 スタッフが漆塗籠棺残片の現状を確認した。理化学的調査分析についての協議及び、日程を決定した。 ・GC-MS分析（ガスクロマトグラフィー質量分析）の実施 24年12月27日～25年1月17日、東京文化財研究所にて漆層の成分分析を実施した。 ・3次元計測の実施 25年1月22日、東京国立博物館にて資料の外面形状を3次元計測した。			
			
漆塗籠棺残片に対して3次元形状測定を実施しているところ			
【実績値】 調査回数 3回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-9

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	正確性				
判定	A	A				
判定理由 適時性：緊急性が高く、事業完了後は公開を目指した事業を実施した。 正確性：理化学的調査で得られたデータに基づく修理計画立案を目的とする事業を実施した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
判定	A					
判定理由 調査回数：年度内に十分な内容を伴う調査を予定通り実施した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	漆塗籠棺残片の構造、材質の検討、それらを元にした修理計画の検討、また類似資料との比較調査による本資料の特徴中質など、次年度計画遂行に必要な情報を本年度事業によって得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度から漆塗籠棺残片の制作技法と修理方法の検討、次年度以降修理着手に向けたより具体的な修理計画の立案を計画しているが、本年度は計画通り実施されている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) 板谷家を中心とした江戸幕府御用絵師に関する総合的研究(科学研究費補助金) (5) - ①)		
【事業概要】 平成21年度東京国立博物館に一括寄贈された約1万件に及ぶ板谷家伝来資料について、デジタル撮影、データ整理を行い、データベース作成・公開への準備を進める。また、各古文書・絵画資料の画題や原本、伝来等について調査するとともに、板谷家作品を所蔵する機関にて現存作品調査を実施。これにより伝来資料について、資料そのものと現存作品との比較という両面から理解を深め、その成果を公開する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】 池田宏(上席研究員)、富坂賢(保存修復課保存修復室長)、小野真由美(企画課出版企画室主任研究員)、瀬谷愛(列品管理課平常展調整室研究員)、塚本鷹充(調査研究課東洋室研究員)、金井裕子(調査研究課絵画・彫刻室研究員)、山下善也(京都国立博物館連携協力室長)			
【主な成果】 伝来資料について、3,231点(7,449カット)の撮影を終了するとともに、並行して新たな知見の整理、絵画資料の調査、古文書の翻刻を行った。また、スタッフによる研究会を2回開いたのに加え、本年度は特に板谷家が手がけた「東照宮縁起絵巻」及び板谷家の本家にあたる住吉家に関する資料を調査し、東叡山寛永寺(24年6月8日)、日光山輪王寺(24年11月20～21日)及び東京藝術大学美術館(25年2月22日)にて作品の調査撮影を行った。			
【年度実績概要】 ・伝来資料のデジタル撮影、データ整理 作品保存とデータベース公開のため、伝来資料のデジタル撮影、データ整理を、週3日行った。 ・調査の実施 東京国立博物館所蔵の住吉家、板谷家作品の調査を行った。また24年度は東叡山寛永寺(東京)、日光山輪王寺(栃木)、東京藝術大学美術館(東京)(2月22日)での調査を実施した。 ・研究会の実施 24年11月東京国立博物館内で、東照宮縁起絵巻を中心に調査研究会を行った。25年2月には24年度調査研究成果の報告検討会を行った。			
 資料調査撮影風景			
【実績値】 研究会回数 2回(第1回:24年11月22日(木)、第2回:25年2月20日(水)～21日(木)) 外部調査回数 3回(24年6月8日(金)、11月20日(火)～21日(水)、2月22日(金)) 画像データ作成点数 3,231点 7,449カット			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	S	A	A	B	
判定理由 適時性：近年の御用絵師研究の進展に寄与する研究であるため。 独創性：総数1万点を超える御用絵師資料の総括的研究は、これまでになされていないため。 発展性：住吉家（本年調査を実施）・狩野家など板谷家以外の御用絵師の活動と連動した研究により、様々な研究が可能となるため。 効率性：これまで御用絵師研究に関わってきた研究者の協力を得て効率の良い調査がなされているため。 正確性：下絵・粉本等の画題検討を手分けして行い、不明部分に関しては、研究会で課題を出し合って精度を高めているが、総量が多いこともあり、一部には遅れも見られるため。						

2. 定量的評価

観点	研究会回数	外部調査回数	画像データ作成点数			
判定	A	A	A			
判定理由 研究会回数・外部調査回数・画像データ作成点数： 当初目標であったデジタル撮影、データ整理作業、古文書解読などの調査・研究会を定期的に行い、本年度は1月あたり約270点の撮影を行うことができ、目標値を達成することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度の当初目標をほぼ達成した。次年度以降の作品調査（次年度は京都方面）の予定を作成し、準備に入った。また、作業予定は本年度同様の体制を確立し遂行の見通しがたっている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成した。 1万点を超える膨大な資料の撮影、データ整理に、平成24年度は3人の整理作業補助員、1人のカメラマンで当館研究員とともに作業にあたってきた。次年度以降も引き続きこれらのデータをもとに再度各資料に関する情報を精査し、4年後の公開に向けて、今年度の状況で作業を進めることで、利便性の高いデータベースの作成を追及していきたい。次年度以降につづく調査研究の基盤ができています。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11)文化財保護の歴史に関する基礎的研究(科学研究費補助金) (5)－①		
【事業概要】 東京国立博物館は、明治4年(1871)の「古器旧物保存」や、同5年に博覧会の出品物考証に備えるために行った文化財調査「壬申検査」をはじめ、「臨時全国宝物取調」など文化財保護に関する多くの資料を所蔵している。本研究では、こうした資料の収集・整理・データ化を行ってきた。また、国内外の主要な博物館において、文化財関連資料の管理状況などの実態調査を行い、今後のデータ公開に向けて、どのようなことに留意すべきかの検討を続けている。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館情報課長 高橋裕次
【スタッフ】 浅見龍介(調査研究課東洋室長)、丸山士郎(博物館教育課教育講座室長)、白井克也(列品管理課平常展調整室長)、島谷弘幸(副館長)、恵美千鶴子(調査研究課絵画・彫刻室アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 東京国立博物館が収蔵する文化財保護に関連する作品や資料について、展示履歴などの情報を参考にして作成した調査対象リストをもとに、デジタルカメラによる記録撮影やスキャニングによるデータ収集を行い、その分類法についても検討した。また、特集陳列の開催などによる研究成果の公開や、国内外の博物館における文化財保護の歴史に関わる事例の調査を実施した。			
【年度実績概要】 (1)東京国立博物館所蔵の関係資料の調査 博物館の草創期より現在にいたる、文化財保護に関連する資料について、その収集と整理を継続して行った。資料の中核である館史資料のデジタル化を進める中で、研究の利便性の向上のため、列品録、重要雑録など主要な資料の目次のデータベースを作成した。また『東京国立博物館百年史』の編纂以後に作成された関連資料の整理・分析とともに、研究内容に即した分類法を検討し、これまで研究の対象となっていなかった文化財保護に関するパンフレット類などの収集、調査も開始した。			
(2)研究成果の公開 ・特集陳列 東京国立博物館 140 周年の特集陳列として「資料館における情報の歴史」を実施した。 昭和59年に、美術に関する学術資料を収集・整理・保管し、研究者に公開する目的で設置された資料館を対象とした。明治5年に設置された日本最初の官立図書館である書籍館に由来し、国の文化財保護の施策の一つである情報の収集・発信の機能を果たしてきた資料館の活動や役割を、博物館における文化財保護の歴史の中で位置づけた。陳列では、書籍館で作成した図書目録、解題をはじめ、その旧蔵書や、『江戸城本丸等障壁画絵様』などの調査研究に係る資料などをとりあげ、文化財保護に関する情報発信のあり方を紹介した。 ・東京国立近代美術館の60周年記念のシンポジウムでの講演・討議 プロジェクト責任者が、戦前まで日本の文化財保護政策において中心的役割を担ってきた東京国立博物館が行った近代美術の収集と展示の実態を検討し、文化財保護行政と博物館事業の二つの観点から、その歴史的意義を論じた。			
(3)国内外の主要な博物館における文化財関連資料の管理状況などの実態調査 韓国国立中央博物館の保存修復部門の研究員千周鉉氏と、韓国の文化財保護の歴史に関する討議及び、東京国立博物館、山口県山口博物館、九州国立博物館において韓国の文化財保護関連資料の調査を行った。			
【実績値】 展示への反映 1回 特集陳列 「資料館における情報の歴史」作品数28点 25年1月8日～3月3日、 調査件数 320件、 写真撮影点数 2,000点、 データ入力点数 6,000点			
【備考】			



「博物館ニュース」
第1号

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	A
判定理由 適時性：140年という節目の時期に、当館の文化財保護に関わる事業について詳細を明らかにしたため。 独創性：関連する資料の全体像や、相互の関連などを把握するための基礎資料を作成したため。 発展性：これまでに収集、整理した資料の分類法を検討することで、今後の具体的な成果の見通しを得たため。 効率性：資料が膨大なため、データを整備する段階にとどまっているため。 継続性：資料を収集・整理し、将来に伝えるシステムの構築を目指しているため。 正確性：デジタル化を推進し、正確な情報をいつでも引き出せるように心がけている。						

2. 定量的評価

観点	展示への反映	調査件数	写真撮影点数	データ入力点数		
判定	A	A	A	A		
判定理由 展示への反映：特集陳列「資料館における情報の歴史」では28点の資料を公開し、解説入りのパンフレットを配布した。 調査件数：館の公文書である館史資料の他、韓国国立中央博物館の保存修復担当者との共同研究によって、文化財保護に関する資料など約320件を調査した。 写真撮影点数：計画通りデジタルカメラ、スキャナーによって約2000点の画像を収集した。 データ入力点数：計画通り文化財保護の歴史に関連する資料約6000点のデータ入力を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	情報の収集・整理について、その範囲や分類法などを再検討し、さらに韓国国立中央博物館の保存修復担当者と、文化財保護の歴史に関わる資料についての討議と調査などを行い、博物館における文化財保護のあり方を総合的に把握するための方法論を明らかにできた。 今後は、研究の対象とする資料について、作成の年代や経緯などの史料批判を十分に行いながら、文化財保護と関わる博物館の各事業の成立、位置づけ、機能と役割の変遷などを、実証的な方法で明らかにしていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの基礎的な研究をふまえ、東京国立博物館において、文化財保護に関わる各事業がどのような過程を経て成立し、展開していったのか、また国の政策における位置づけ、その機能や役割の変遷などを具体的に明らかにすることで、日本の文化財保護の歴史を検証し、今後のあり方を模索していく。さらに全ての資料について画像を伴ったデータベースを構築し、公開の方法を検討することで、当該分野の研究に寄与することを目標とする。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-12

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12) 占領期の教育政策における国立博物館の役割に関する調査研究（科学研究費補助金）（5） － ①)		
【事業概要】 育児休業のため研究中断			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課教育講座室主任 研究員 神辺知加
【スタッフ】			
【主な成果】			
【年度実績概要】 プロジェクト責任者が、24年4月20日より、産前産後休業・育児休業のため、年度実績なし。			
【実績値】			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-12

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点						
判定						
判定理由						

2. 定量的評価

観点						
判定						
判定理由						

3. 総合的评价

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
F	

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-13

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	13) 宮廷工芸に関する物質文化的研究(科学研究費補助金)((5)－①)		
【事業概要】 本研究は、日本の宮廷で用いられた建築・服飾・調度品などの工芸資料について、生活様式を反映する物質文化の見地から研究し、公家階層の生活様式に基づいた宮廷工芸の分類体系を構築するものである。本研究は、日本の公家階層が用いた宮廷工芸という特定事例を対象とするが、その成果は、歴史研究の物質文化的側面を深化させて、人間の生活感を反映する歴史の構築に資する工芸史研究の試論とすることを念頭におく。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課貸与特別観覧室主任研究員 猪熊兼樹
【スタッフ】			
【主な成果】 本年度は、東京国立博物館、国立公文書館、東洋文庫、天理大学図書館、葵祭行列保存会を中心に調査・撮影を行った。			
【年度実績概要】 - 東京国立博物館所蔵資料の調査 東京国立博物館が所蔵する宮廷工芸関係の資料及び文献の調査と撮影を行った。 - 国立公文書館所蔵史料の調査 国立公文書館が所蔵する宮廷服飾・修学院御幸を中心とする宮廷行事関係史料の調査と文献複写を行った。 - 東洋文庫所蔵史料の調査 東洋文庫が所蔵する東アジア宮廷行事関係史料の調査と文献複写を行った。 - 天理大学図書館所蔵史料の調査 天理大学図書館が所蔵する東アジア宮廷行事関係史料の調査と文献複写を行った。 - 葵祭行列関係資料の調査 葵祭行列保存会に赴き、葵祭(賀茂祭)の儀礼作法及び服飾調度類に関する画像及び動画の記録を行った。 - 本研究の調査において知見を得た越南宮廷の工芸品の資料的価値に関する論考を東京国立博物館学術雑誌『MUSEUM』に寄稿した。現在査読中。			
			
24年5月15日 京都葵祭			
【実績値】 調査回数 15回 データ収集件数 画像402カット、動画9GB			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-13

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：日本の宮廷を根本的に理解するにあたり、今日的課題である東アジア史の観点から調査を行った。 独創性：日本の宮廷を根本的に理解するため、東アジアの宮廷行事の資料を収集することを行った。 発展性：宮廷行事という特殊事例を対象とする研究であるが、その成果に基づく原理は諸文化現象に応用できるため。 効率性：本研究に必要と想定される文献史料、工芸資料のデータ収集を行なうことができた。 継続性：本年度は3年研究計画の最終年度であるので、研究成果の公表を想定した調査を行った。 正確性：宮廷工芸を総合的に把握できるよう、建築・服飾・調度の観点から網羅的に見渡しているため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	データ収集件数				
判定	A	A				
判定理由 調査回数：調査先の懇切な対応のおかげで、効率的な調査を重ねることができた。 データ収集件数：本研究を進めるうえで必要な文献史料および工芸資料のデータを収集することができた。						

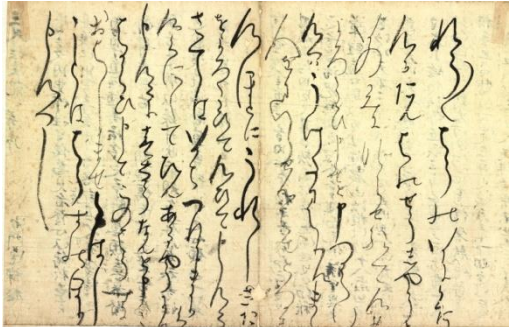
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	データの収集と分析に時間がかかり、本年度内に研究成果を公表できなかったため。ただし、現在ひとつの論文を投稿査読中である。その結果をふまえて、次の研究へとステップアップする。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通りの調査を進行させ、宮廷工芸に関する資料を幅広く収集することができたため。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	14) 古筆切紙背の史料学的研究 (学術研究助成基金助成金) ((5)-①)		
【事業概要】 古筆切の紙背（裏面）には、典籍や記録の断簡が見られることがある。判読の困難という要因もあり、これまで学術的に注目されることがほとんどなかったが、デジタル画像処理技術の普及によって、紙背の内容を把握することが可能となってきた。この研究は、既知の手鑑等に収載されて伝わった希少な古筆切の中から紙背を持つものを集成し、その史料学的な評価と研究の方法を確立することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島 哲
【スタッフ】 島谷弘幸（東京国立博物館副館長）			
【主な成果】 ・平成24年度に確認した過去に刊行されている古典籍の複製本類の写真版を中心に、紙背の内容について網羅的に調査した。 ・当館寄託の手鑑1件と古筆切19件について高精細画像の撮影を行い、データを蓄積した。			
【年度実績概要】 書道史を専門とする高田智仁氏（大東文化大学大学院）に依頼して、複製本等所収の古筆切紙背に関する情報の調査・整理を行った。 現状では、系統化には至っていないが、特に特定の人物を筆者として貼りこまれた「書状切」の中には、裏面に経典（写経・版経）や仏書が認められるものが多くあり、この種の経典や仏書が解体され、裏を返して手鑑の中に人物の書状として採録されたことが窺われた。 しかし、伏見天皇の歌集である「広沢切」のように歴史的に本来的な意味での紙背文書のある状態で、断簡となった場合もあり、一概に古筆切の性格を決定付けることはできなかった。			
			
裏面に典籍断簡のある書状切			
【実績値】 資料収集件数：450 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-14

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：古筆切の素材が豊富に公開されつつあり、網羅的な研究をするには適当な時期であるため。 独創性：これまでの古筆切研究には見られない視角からの研究であるため。 発展性：国文学など既存の分野だけでなく、歴史学等他の分野への応用が可能であるため。 効率性：必要最小限の経費で研究を執行するよう務めているため。 継続性：毎年度、継続して研究素材の拡充を図っているため。 正確性：研究に必要な情報を的確に記述するように努めた。						

2. 定量的評価

観点	資料収集体数					
判定	A					
判定理由 資料収集体数：当初予想していた以上に、紙背を有する古筆切が確認されたため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究の問題意識に対して肯定的な素材が集積されている。業務の関係で館外での調査が困難であったので、次年度の課題として継続する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当館蔵品に関する情報を蓄積して、研究成果が館業務に寄与している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	15)「家形埴輪の群構成と階層性からみた東アジアにおける古墳葬送儀礼に関する基礎的研究」(学術研究助成基金助成金)(5-①)		
【事業概要】 日本古代国家形成期である古墳時代の葬送儀礼を家形埴輪の群構成と階層性から分析・研究する。特に東アジア農耕社会の集落建築や家形造形品との比較・検討から、古墳時代社会の安定と成長に大きな役割を果たした古墳葬送儀礼とその背景にある古墳時代他界観(世界観)を解明するための基礎研究の確立を目的とする。 また、これまでの科学研究費補助金C(2001～2002 年度)・同 B(2005～2007 年度)の調査・研究成果と併せ、総合研究報告書の作成準備を進める。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員 古谷 毅
【スタッフ】 連携協力者：犬木 努(大阪大谷大学 文学部教授)			
【主な成果】 科学研究費補助金C・B(2000～2002・2005～2007 年度)による調査・研究成果に基づき、連携研究者及び各地の研究協力者と共に研究会を組織・開催し、各地の主要古墳出土埴輪群の分析結果を検討すると共に、古代窯業生産体制に関する先行研究の分析・討論を行った。 また、本年度は主に近畿・中国地方で補足調査を実施し、発掘調査によって家形埴輪を含む埴輪配列が確認された良好な家形埴輪資料を再度精査して、埴輪樹立時の群構成と配置・階層性を復元する基礎資料を整備した。			
【年度実績概要】 本年度は、連携研究者と日本古代史研究者を含む研究協力者と共に、24年6月・10月・11月に、大阪府・広島県にて研究会を開催し、これまでの調査成果の確認と問題点を検討・分析した。科学研究費補助金C・B(2000～2002・2005～2007年度)の研究成果を含む、総合的研究報告書の内容・構成と体裁、及び作成スケジュールの検討・打合を進めた。 資料調査としては、近畿・中国地方の主要古墳出土資料(大阪府・奈良県・広島県など)を重点的に進めたほか、既存の整理・研究成果を展示・公開した(宮崎県西都原古墳群出土埴輪：特集陳列 南九州の古墳文化[2012.12.3～2013.3.3]) 既存調査資料の整理に関しては、写真・データ等の整理・分析を実施した。加えて、これまでの調査成果で収集した撮影画像のデジタル化を進めた。東京国立博物館所蔵埴輪資料の調査準備に関しては、館内における存在確認事業等の影響で今年度は実施に至らなかった。			
【実績値】 ○調査日数 : 8日間 ○研究会日数 : 4日間 ・調査件数 : 7件 ・主な調査資料 : 広島県三ツ城古墳出土埴輪(広島大学蔵・東広島市出土文化財管理センター蔵)、大阪府心合寺山出土埴輪(八尾市教育委員会蔵)、同 大阪府内・八尾市内出土埴輪(大阪府近つ飛鳥博物館蔵・大阪府文化財センター蔵・八尾市歴史民俗資料館蔵)、奈良県橿原市内出土埴輪(橿原市教育委員会所蔵) ○論文等公開件数 8件(備考①～⑥) (参考値) ○フィルムデジタル化 : 15,322 画像 ○展示等公開 : 宮崎県西都原古墳群出土埴輪 一括展示(特集陳列 南九州の古墳文化) [会期・場所：東京国立博物館平成館 企画展示室・2012.12.3～2013.3.3]			
【備考】 ①古谷 毅「古墳文化の特質と展開および地域性」『日本考古学会 第74回例会(シンポジウム 南九州の古墳文化) 予稿集』日本考古学会、5～11 頁、2012 年 2 月 23 日 ②犬木 努「埴輪からみた南九州と近畿―西都原古墳群を中心として―」『南九州とヤマト―日向・大隅の古墳―』大阪府立近つ飛鳥博物館図録 58、大阪府立近つ飛鳥博物館、129～138 頁、2012 年 9 月 ③犬木 努「柴又八幡神社古墳の埴輪を読み解く」『平成 24 年度地域史フォーラム 古代東国と柴又八幡神社古墳』葛飾区郷土と天文の博物館、31～40 頁、2012 年 10 月 ④犬木 努「後期古墳出土埴輪の諸問題―関東地方を中心として―」『後期埴輪の特質とその地域的展開』中国四国前方後円墳研究会、1～20 頁、2012 年 12 月 ⑤古谷 毅「利根川中流域両岸の古墳時代前半の様相―下総北西部の方形周溝墓と古墳群―」流山市立博物館 企画展前方後方墳と方墳 関連講座第 3 回(流山市立博物館:平成 25 年 3 月 2 日) ⑥犬木 努「後期古墳出土埴輪の諸問題―関東地方を中心として―」中国四国前方後円墳研究会 倉敷大会(第 15 回研究集会)(ライフパーク倉敷:平成 24 年 12 月 1 日) 他 2 件			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	S	A
判定理由 適時性：既存の科学研究費補助金による調査・研究成果の公開性において需要性・必要性があり、早期の公開を目指し、本年度は既存撮影画像のデジタル化を進めた結果、公開の準備が進展したため。 独創性：古墳時代労働編制研究の視角を中心にして発想・着想しており、埴輪研究においては従来の研究と比較して、オリジナリティ及び新規性には優れていると思われるため。 発展性：円筒埴輪中心であった従来の埴輪研究の多様化・汎用性に裨益し、研究視角の面からは先史考古学及び古墳時代・古代史研究に与える応用性などに、一定の成果及び波及効果があると思われるため。 効率性：連携研究者と共に日本古代史研究者を含む多数の研究協力者を得ており、予算運用の時間的・人的投資について有効であると思われる。一方、設備的投資については、消耗品を含めてほとんど行っていないため。 継続性：これまで交付された科学研究費補助金による調査・研究成果を継承し、期間は適正で、質・内容・量ともに従来の調査・研究例を上回っており、本研究テーマの資料的基盤を構築する基礎性に優れているため。 正確性：実測図の作成はほとんど行っていないが、数値・データに関してはすでに写真撮影だけでも 31,000 カットを超えており、達成値・網羅性については従来の調査・研究事例に近似する成果は見られないため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究会日数	論文等公開件数			
判定	A	B	A			
判定理由 調査回数：館務等のために十分な時間が取れず、量的には不足気味である。しかし、埴輪発祥地で生産の中核である畿地方の資料を多数調査することが出来たことは、質的な評価は出来ると思われるため。 研究会日数：年度末に計画することが出来ずやや不足気味である。とくに、韓国で実施予定の研究交流会が先方の事情で平成 25 年度に延期となり、具体的な計画を推進中であるため。 論文等公開件数：研究代表者は論文・口頭発表とも各 1 程度、連携協力者は論文 3・口頭発表 3 で、研究協力者の同様な公開も実現している。したがって、これまでの調査研究成果をある程度公開することができたと思われるが、今後はさらに促進が必要である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	継続性については、定性的・定量的評価も併せ、変更の必要が認められないと考えられる。次年度研究計画への改良・改善点については、補足調査の拡充によって調査精度の正確性をさらに高めると共に、東京国立博物館所蔵資料(列品)の整理・分析を進めることで、より研究予算運用の効率性・適時性を高めることを図りたい。また、研究会では、延期となった韓国での研究会の開催とさらに古代史研究者等との研究協力を強化し、研究・分析視角に関する発展性・独創性の拡充・確立を図る。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	有形文化財の収集・保管に関しては、列品の整理・分析を行い、学術的評価に関する十分な考古学的情報及び展示・公開(論文・口頭発表および講演・ニュース等)・出版等を通じた当館における文化財(列品)の公開に資する調査・研究として、比較的十分な蓄積ができたと考えられる。このほか、定性的・定量的評価により判定した。 改良・改善点は 3. 総合的評価のように、より高度な効率性・適時性及び発展性・独創性の確立を図ることを目標として、次年度以降の計画へ反映させる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	16) 絵巻の＜伝来＞をめぐる総合的研究（科学研究費補助金）（(5)－①）		
【事業概要】 本研究は、絵巻の研究を従来顧みられることのなかった伝来や鑑賞歴といった作品の付属情報から捉え直し、推進する。研究にあたっては、絵巻の伝来、鑑賞歴に関わる情報を収集・蓄積した上で、絵巻が今日に至るまでにどのような軌跡を経て伝世したのかという、各作品の通時的な歴史性に配慮し、絵巻という媒体全体を視野に入れた総合的な分析を行うことを最終的な目標として設定する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室研究員 土屋貴裕
【スタッフ】			
【主な成果】 本年度は、絵巻の伝来、鑑賞歴といった情報を収集するため、まず、古代中世の文献資料に記載された絵巻関係資料の抜き出しとデータ化を進めた。また、東京国立博物館所蔵絵巻模本の調査に着手し、主に近世に制作された模本から作品所蔵情報を得る基盤を整えた。同時に、近代における作品の移動等に関する情報を収集するため、東京文化財研究所所蔵の売立目録の調査を開始し、そこに記載された情報のデータ化を進めた。			
【年度実績概要】 (1) 文献資料記載絵巻関係資料の抜き出しとデータ化 本研究が主な対象とする古代中世絵巻の伝来、鑑賞情報を得るためには、日記、古記録等の文献資料を博搜し、そこに記載された本文を整理する必要がある。抜き出しにあたっては、絵巻のみならず仏画、肖像画、屏風等、絵画関係の記事をピックアップし、本年度はおおよそ 50 タイトルの文献資料から約 600 件の記事を抜き出し、その一部をデータ化した。 (2) 東京国立博物館所蔵絵巻模本の調査 絵巻模本の多くは近世に作られたが、その制作に際して、所蔵者や伝来等の情報が記されている場合がままある。本研究では、東京国立博物館所蔵絵巻模本の悉皆調査を目指し、目録の整理、撮影、所蔵者や伝来、模写者等の情報を収集すべく、模本リストの整理に着手した。調査順は列品番号順を基本として進め、本年度は狩野晴川院他模本約 20 件、冷泉為恭模春日権現験記絵巻全 20 巻の調査を行うことができた。 (3) 売立目録の調査 (1) と (2) が前近代における絵巻情報の収集と整理であるのに対し、近代における作品の移動等を追うため、売立目録に記載された絵巻の調査を進めた。とりわけ、東京文化財研究所には国内有数の売立目録が所蔵されており、その全てから、絵巻を中心とするやまと絵の情報を抜き出し、PDF 化を進める準備を整えた。先年度分と合わせ約 400 タイトルの目録から約 2,000 件の情報を抜き出した。			
【実績値】 絵巻伝来関係資料の抜き出し件数（未データ化含む） 約 600 件 絵巻模本の調査件数 約 40 件 売立目録の調査件数 約 2,000 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-16

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：従来顧みられることのなかった伝来や鑑賞歴といった作品の付属情報から捉える本研究の意義は大きい ため。 独創性：作品の付属情報のみならず、文献資料、売立目録の情報により多角的に研究を推進する本研究の独創性は高 いたため。 発展性：絵巻研究のみならず、仏画、肖像画をはじめとする絵画の研究にも寄与することができるため。 効率性：限られた時間の中で、効率的にデータ収集を行えた。 継続性：昨年度に引き続き継続して調査研究を進めることができた。次年度もさらなる展開を目指す。 正確性：データに関しては、入力時、入力後の二度確認を行うことで、資料の正確性を期した。						

2. 定量的評価

観点	関係資料の 抜き出し件数	絵巻模本の 調査件数	売立目録の 調査件数			
判定	A	A	A			
判定理由 関係資料の抜き出し：当初の計画よりも、多くの件数を実施することができた。 絵巻模本の調査：当初の計画よりも、多くの件数を実施することができた。 売立目録の調査：当初の計画よりも、多くの件数を実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	先年度に引き続き本年度も、文献資料記載絵巻関係資料の抜き出しとデータ化、絵巻模本の調査、 売立目録の調査という、本研究推進にあたっての基礎作業を着実に進めることが出来た。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は絵巻の研究を作品のみならず、その付帯情報から総合的にとらえるべく進めてきたが、研 究開始当初の計画に沿ったデータ収集を行うことができた。また、絵巻模本の調査もリストはおおむ ね整理することができたため、次年度以降、リストと作品との照合、撮影にさらに進めていく。

業務実績書

中期計画の項目	文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	17) 近現代における古日本染織の移動とコレクション形成に関する基礎的研究(科学研究費補助金) ((5)-①)		
【事業概要】 本研究は、近現代に形成された古日本染織コレクションがいつ、どのような形態のものが、どのような経路で、どのような形状の変化を伴いながら移動し、コレクションとして集積されたのかを調査することによって、染織史研究の基盤となる古日本染織コレクションの形成過程を明らかにし、古日本染織が近現代に形成された美術史の中でどのように価値付けられたのかを明らかにする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸室主任研究員 小山弓弦葉
【スタッフ】			
【主な成果】 本年度は、旧松坂屋染織参考館が蒐集した古染織作品、及び、ロサンゼルス・カウンティ美術館に所蔵される在米個人コレクターが蒐集した江戸時代の日本の袷紬コレクション、現在サンフランシスコ・ミルズ・カレッジ付属美術館に所蔵される野村正治郎が蒐集した江戸時代の袱紗、同じく、サンフランシスコ・デヤング美術館にある米コレクターの古日本染織裂コレクションを調査し、明治後期から大正期、昭和初期にかけて国内外で蒐集された古日本染織コレクションのデータを集積し、その傾向等の分析を行った。			
【年度実績概要】 本年度は、国内においては旧松坂屋染織参考館が蒐集した古染織作品を調査した。全ての作品を調査することは難しかったため、参考としてこれまでの展覧会で出品された図版目録や調査報告書をもとに、図版とデータをまとめ、入力作業を行った。この作業は本年度中には終わらなかったため、次年度も継続して行う予定である。 また、昨年度に引き続き、日本国内における古染織コレクションの主要を占める、岡田三郎助コレクション(遠山記念館・松坂屋所蔵)、野村正治郎コレクション(国立歴史民俗博物館所蔵)、吉川観方コレクション(奈良県立美術館・京都府京都文化博物館・福岡市博物館所蔵)とほぼ同時期に蒐集された海外のコレクターによる古日本染織コレクションの調査を行った。24年10～11月には野村正治郎が最終的にはメトロポリタン美術館に収めた錦・金欄などの袷紬111件の内、特に年記の入った重要な資料である袷紬8件を調査した。同袷紬コレクションについては、当時、野村正治郎がアメリカ各地を巡回した展覧会の目録のコピーをメトロポリタン美術館の附属図書館より入手した。また、山中商会がメトロポリタン美術館で開催した能装束の展覧会についても、その展覧会資料を入手した。25年1月には、ロサンゼルス・カウンティ美術館にある、個人染織コレクターが明治～大正期に蒐集した古日本染織コレクションの内、特にこれまでに公開されてこなかった江戸時代の袷紬のコレクション約110件の内、昨年度調査できなかった28件を調査し、写真を撮影して記録した。また、サンフランシスコにあるミルズ・カレッジにおいて、野村正治郎が蒐集した日本の江戸時代の袱紗56件を写真撮影し調査を行った。さらに、ロサンゼルス・カウンティ美術館染織部長・シャロン・タケダ氏のご教示により、サンフランシスコのデヤング美術館に、米コレクターの古日本染織コレクションがあることが判明し、その内41点を調査した。以上により、これまで知られていなかったデヤング美術館所蔵の古日本染織コレクションの存在が明らかとなり、それらを含めた在米のコレクションが、ほぼ、山中商会や古美術商・野村正治郎を通じて作品を購入したことがわかった。本年度は、その時期や経緯に関する資料収集もできた。日本にある古日本染織コレクションとの関連性については、引き続き比較調査が必要である。 以上の調査で得た写真及び調査内容はファイルメーカーに画像と連動させて入力し、今後の研究の基盤となるデータとした。			
【実績値】 データ集積件数 661件 (内訳) 松坂屋所蔵古染織コレクションデータの入力 425件 メトロポリタン美術館所蔵袷紬調査データの入力 111件 ロサンゼルス・カウンティ美術館所蔵袷紬調査データの入力 28件 ミルズ・カレッジ袱紗コレクション調査データの入力 56件 デヤング美術館所蔵古日本染織コレクション調査データの入力 41件			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：内外のコレクションがほぼ、博物館等公共施設で管理されることとなり、調査しやすい時期であるため。 独創性：内外における網羅的な古日本染織コレクションの調査は本調査が初の試みであるため。 発展性：調査を進める過程で、未知の古日本染織コレクションに関する情報が集積可能となった。 効率性：1～2箇所を集中的に調査するため、それぞれのコレクションについて網羅的にデータを集積できるため。 継続性：新たなコレクション情報をもとに、引き続き調査課題が生まれ、継続的な調査が望まれるため。 正確性：ほぼ、実地に赴いての現物調査なので、自分で作品を見て、必要な調査データを確認できるため。						

2. 定量的評価

観点	データ集積 件数					
判定	A					
判定理由 データ集積：今後のコレクション研究に必要な正確性の高い調査データをコレクションごとに網羅的に集積した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は、国内については、近代に形成された古日本染織コレクションの主要な一つである松坂屋コレクションの調査を一部行い、先行研究をもとにデータの集積を行った。また、在米の海外コレクターによって蒐集されたコレクションを調査し、データの集積を進めた。次年度以降も引き続き、近代における内外の古日本染織コレクターのコレクションのデータを集積し相互の特徴を比較しながら、調査資料から導き出せる時代性や文化的背景に迫っていけるようさらに調査を進めていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	次年度は本研究費における最終年度に当たるため、近代の日本人コレクターによって蒐集された主要なコレクションの内、特にその全貌が知られていない実業家・長尾欣弥、実業家・根津嘉一郎によるコレクションの調査を進めたい。これまでの調査で、海外に流出し、蒐集されることになったコレクションの中には、未調査の古日本染織コレクションの存在が多数あることが把握できた。次年度は、アメリカだけではなくヨーロッパ方面についても調査を進め、次年度以降の研究課題へと発展できるよう、情報の集積を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	18) 狩野晴川院養信による寺社宝物模本の基礎的研究（学術研究助成基金助成金）（(5)-①）		
【事業概要】 本研究は、東京国立博物館が所蔵する木挽町（こびきちょう）狩野派関係の模本類のうち、寺社の宝物を模写した資料の基礎的調査を実施し、江戸時代後期に幕府奥絵師として活躍した木挽町狩野家八代目当主・晴川院養信（せいせん いんおさのぶ）の活動を明確にすることを目的としている。また、模写活動を共にした弟子達についても個々人の活動を明確にするべく、調査報告書の他に、上記の対象資料と制作者のデータベースを作成する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室アソシエイトフェロー 安藤香織
【スタッフ】			
【主な成果】 本年度は、膨大な木挽町狩野派関係の模本類から寺社宝物の模本を選別する作業を引き続き実施し、該当するものについて基礎調査と撮影を実施した。また本研究をまとめるにあたり、特異な模本制作のケースが見られる天保十一年と同十四年に注目し、養信自筆の公務に関する記録「公用日記」も活用しながら一連の模本制作について調査・研究を推進した。加えて寺社宝物に的を絞った模本データベースを作成し、制作者一覧などと共に公開した。			
【年度実績概要】 - 寺社宝物模本 基礎調査 前年度に引き続き、当館の所蔵する木挽町狩野派関係の模本類、約6,500件から寺社宝物の模本を選別するために、まず名称や受け入れ状況、目録などを手がかりに絞り込み、その後、個々の画像を見ながら墨書等を確認していく作業を実施した。その上で該当するものについては基礎的データの収集をし、中でも重要と思われる資料は専門のカメラマンを雇用してデジタル撮影を実施した。基礎調査後のデータは考察やデータベースに利用するべく一覧表に整理をした。基礎調査の結果、寺社宝物の模本が制作される契機として、鑑定、旅、寺社からの直接的な貸与、その他特殊な機会をうまく捉えて模写した場合などが確認できた。  撮影画像のうち、A-1872 仏鬼軍絵巻（巻末部分） - 天保十一年、同十四年（1840、1843）の模写事業について 基礎調査を実施する中で、以前より養信自筆の「公用日記」や一部の模本から指摘されていた天保十一年と同十四年の寺社宝物の模写活動について、実際にまとまった数の模本の存在を確認できた。そこで本研究の成果報告としてはこの部分に注目して掘り下げていくこととし、特に養信自身が模写活動に携わっている天保十四年の熱海湯治にまつわる模写活動については「公用日記」の同年の記事を通読し、湯治に関連する記事について翻刻を行った。その結果、模本からは限られた時間の中で同行の門人とともに模写をし、ものによっては帰宅の後に彩色を加えて完成に至る、という制作の流れが推定でき、「公用日記」からは旅立ちまでの申請手順や公務の調整が詳細に判明した。 - 寺社宝物模本データベース データベースの目的をより鮮明にし、対象を絞り込んで公開する方針にしたため、それに合わせて既存の検索システムのアレンジを実施した。アレンジは、一般用にも研究用にも利用しやすいことを前提とし、なおかつ本研究の意図が明確に伝わるよう検討を重ね、通常の検索システム以外に、模本の制作者を一覧できるページと、上記のように注目される模写事業を一覧出来るページを作成した。同時に、データベースに必要な資料情報と制作者情報について基礎調査をもとにデータを整理した。以上は情報処理技術のある作業協力者1名とともに実施した。			
【実績値】 調査件数 : 34 件 撮影件数 : 14 件、44 点 撮影日数 : 8 日 撮影カット数 : 661 枚 データ整理、データベースシステムアレンジ作業協力者数 : のべ 100 人			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	B	B
判定理由 適時性：本研究はこれまでの調査・研究報告では十分に扱われてこなかった資料を取り上げたものであり、必要性があるとともに、インターネットでの成果公開もするため公共性も高いため。 独創性・発展性：本研究は基礎的調査を主眼とするもので、今後の美術史や歴史など幅広い分野の発展的な研究につながるものと考えられる。また、成果報告のための論考では対象を天保十四年の熱海湯治の際の模本制作に絞り込み、模本だけでなく「公用日記」も翻刻して活用してまとめているため、オリジナリティーも認められると考える。 効率性：本研究では撮影やデータ整理、データベース用のシステムアレンジなどに作業協力者1名を依頼し、作業を委託したため、効率的に各作業を進めることができた。 継続性・正確性：調査期間及び網羅性は、設定した課題を完全に遂行するには若干不足を感じるがあったため。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	撮影件数	撮影日数	撮影カット数	データ整理、データベースシステムアレンジ 作業協力者数	
判定	A	B	B	A	A	
判定理由 調査件数：膨大な絵画分野、歴史資料分野から木挽町狩野家の手になる寺社宝物の模本の可能性があるものを抽出した数値であり、34件まで絞り込むことができたため。 撮影件数・撮影日数：上記の調査対象のうち、データベースや研究を推進する上で重要度が高いものを優先的に撮影対象としたが、時間が許せばもう少し撮影対象を増やしたかったと感じるため。 撮影カット数：撮影対象の件数に対して必要十分な量であるため。 データ整理、データベースシステムアレンジ作業協力者数：今後十分に活用できるデータベースが公開でき、協力者数も十分と考えられるため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	前年度に引き続き、本年度は寺社宝物の模本について必要な調査を実施し、その制作に関わった門人たちに関してもリストアップを完了することができた。また、その成果の一部を論文としてまとめるべく、改めて認識された天保十四年の熱海湯治という視点のもと、模本だけでなく「公用日記」を活用して文献面からも綿密に研究を推進することができた。これに加えデータベースも公開したため、今後幅広い分野に本研究の成果を活用してもらえると考える。 以上、本年度の成果は十分認められると考える。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究の結果、寺社宝物の模本が制作される要因として、鑑定、寺社からの直接的な貸与、その他特殊な機会をうまく捉えて模写した場合などが確認できた。そして今回注目した旅を契機とした模本では、限られた時間の中で同行の門人とともに模写をし、ものによっては帰宅の後に彩色を加えて完成に至る、という模本制作の流れが推定できた。また「公用日記」からは、旅立ちまでの申請や公務の調整が詳細に分かり、奥絵師の業務について新たな実例を確認することができた。さらに、寺社宝物の模本制作に関わった門人をデータベース上で一覧できるようにしたことによって、今では知られていない絵師たちの活動の一端が明らかにできたと考える。 本研究は、木挽町狩野派関係の模本類のうち寺社の宝物を模写した資料の基礎的調査を実施し、晴川院養信と門人達の活動を明確にすることを目的としたもので、二年間の調査・研究の結果、その目的は達成されたと考える。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	19) 創立 150 周年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査 (5)－①)		
【事業概要】 平成 34 年度の東京国立博物館創立 150 年へ向けて、『東京国立博物館 150 年史』を編纂するために、業務文書や刊行物等を収集、整理し、今後の編纂事業の基礎資料として内容の調査を行う。平成 24 年度は館内から収集した文書類を編年、分類し利用の便宜に供するための内容目録を作成する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島 哲
【スタッフ】 鷲塚麻季（調査研究課主任研究員）、高橋裕次（博物館情報課長）、保坂裕興（当館客員研究員・学習院大学教授）			
【主な成果】 館内各所から収集した、館史関係の文書記録・刊行物類を整理して目録を作成し、今後の館史編纂の利用に供することができるようにした。			
【年度実績概要】 ・アルバイト 1 名を採用し、定期的に資料整理作業を行った。 ・整理・調査すべき内容については客員研究員と協議して、適切な項目を設定した。 ・箱詰め状態の文書約 600 箱を順次開梱して、収められた文書・刊行物類の年次と出所の確認を行った。 ・確認した内容の概略を箱にラベルとして貼付し、おおよそ、昭和戦前期から平成にいたる各時期に分類し、配列し直した。 ・各箱に収められた文書のタイトル等の項目を、Excel 表形式の目録に記入し、検索の便宜を図れるようにした。			
			
目録を作成し整理・保管中の館史関係資料			
【実績値】 調査件数： 615 件（文書簿冊を収めた箱数） 調査日数： 31 日間			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-19

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：創立 140 周年の段階で、いち早く着手した。 独創性：当館は日本最古・最大級の博物館で、他にはない資料を対象としているため。 発展性：調査成果は今後の館史編纂に十分に反映されるため。 効率性：必要最小限の経費で実施しているため。 継続性：調査内容を標準化し、今後の継続的な調査に備えているため。 正確性：アーカイブズ学の専門家の指導を仰ぎ、方法・内容の正当性と正確性を確保しているため。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	調査日数				
判定	A	A				
判定理由 調査件数：所期の件数を調査した。 調査日数：所期の日数の調査を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今後の館史編纂に必要な件数と内容の資料の調査を実施している。平成 25 年度以降は未調査の物件の調査を進めるとともに、専門家の意見を聴取しながら、館史の構成・内容の検討に入る必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画 I-4-(1)-②「我が国の歴史、文化の究明及び理解の促進等を図るため、歴史資料・書跡資料等に関する調査・研究を実施する」を反映した事業として適切に実施している。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-20

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	20) 中世聖徳太子絵伝の図様展開に関する調査研究(科学研究費補助金) (5) - ①		
【事業概要】 本研究は日本における古代中世の大画面説話画の中でも、画題として比較的早い時期から成立し、多く描かれた主題のひとつである聖徳太子絵伝について、現存諸作品の詳細な調査に基づき、社会的・文化的・宗教的な動向や、他の説話画制作の状況も踏まえた上で、どのように図様が展開したのかを明らかにしようとするものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室主任研究員 沖松健次郎
【スタッフ】 猪熊兼樹（列品管理課貸与特別観覧室主任研究員）、伊藤信二（博物館教育課教育普及室長）、土屋貴裕（調査研究課絵画・彫刻室研究員）、小林達朗（東京文化財研究所企画情報部主任研究員）、谷口耕生（奈良国立博物館学芸部保存修理指導室長）、朝賀浩（文化庁美術学芸課主任文化財調査官）、石川知彦（龍谷ミュージアム教授）、村松加奈子（龍谷ミュージアム研究員）、阿部泰郎（名古屋大学教授）			
【主な成果】 聖徳太子絵伝は現在 40 件ほどが知られており、それらは想定される享受環境の違いによって画面形式や図様・画面構成に違いがあり、制作集団の違いも想定されている。各々の作品群の詳細な分析と、他の関連作品との比較検討を行なうため、館蔵品、寄託品、および館外作品の調査研究を進めた。あわせて、太子絵伝と密に関わる中世太子伝諸本から各年代の事蹟を比較参照できるよう、データ化を行った。			
【年度実績概要】 (1) 中世聖徳太子絵伝の作品調査 本研究は中世聖徳太子絵伝諸本に描かれた各場面との比定、大画面説話画をはじめとする中世絵画との比較、中世太子伝との照合を進めるが、その基本となるのが綿密な作品調査である。本年度は以下の調査を進めることができた。 ・法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝（四幅本） 嘉元三年（1305） 上野法橋・但馬房筆 東京国立博物館蔵 ・四天王寺本聖徳太子絵伝（六幅本） 元亨三年（1323） 遠江法橋筆 ・中野太子堂本（四幅本） ・奈良国立博物館本（三幅本） 妙源寺（愛知）旧蔵 ・大蔵寺本（二幅本） ・大英博物館本断簡（九幅） (2) 中世太子伝比較対照表の作成 聖徳太子の伝記の集大成である『聖徳太子伝暦』をベースに、中世太子伝のうち、絵解き台本として使用されたとされる文保本諸本を中心に、各事跡にどのような表記の違いがあるのかを一覧で見ることのできる表を作成した。 (3) 中間報告の発表 本研究が対象とする作品のうち、法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝（四幅本）に関しては、その研究成果の一部を『法隆寺献納宝物特別調査概報 33』「聖徳太子絵伝（四幅本）1」として刊行し、沖松が「聖徳太子絵伝（四幅本）の図様構成上の特色」、土屋が「聖徳太子絵伝（四幅本）について」と題する論考を発表した。			
【実績値】 作品調査件数 6 件 中間報告の発表件数 1 件			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：従来体系的な検討の試みられなかった聖徳太子絵伝の研究を進める必要性は高いため。 独創性：絵画史のみならず、工芸、有職の知見から研究を進めるため。 発展性：聖徳太子絵伝のみならず、他の大画面説話が今後の研究にも寄与するため。 効率性：限られた時間の中で、効率的にデータ収集を行えた。 継続性：本研究は5ヵ年計画で進めており、次年度以降も継続的に研究を進めるための整備を行えた。 正確性：中世太子伝の比較検討のための対照表により、各事跡はより正確に把握することができるため。						

2. 定量的評価

観点	作品調査件数	中間報告の 発表件数				
判定	A	A				
判定理由 作品調査：当初の計画よりもより多くの作品調査を実施することができた。 中間報告の発表：聖徳太子絵伝（四幅本）に関しては、今後の調査研究の基礎資料として大いに活用されることが期待されるため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究開始年度である本年度は、まずは聖徳太子絵伝関連の資料を収集することから開始したが、基本的な研究基盤については整えられつつある。あわせて、作品調査も順調に進めることができた。また、事蹟対応表の作成は、それぞれの作品が、どの文献に多く拠って立つのかという点を解明する上で極めて有益な資料となる。次年度以降も引き続き、データ化を進める。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は描かれた事跡の特定のみならず、その図様が選択された背景を中世太子伝などの文献や社会的背景から考究するものであり、研究の基盤を徐々に整えつつあることは次年度以降の研究推進に大きく利するものと考えらる。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-21

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	21) 寄贈品に見る草創期の博物館におけるコレクション形成と美術品の移動（学術研究助成基金助成金）（(5)－①）		
【事業概要】 本研究は、博物館における寄贈品と寄贈者に関する情報から明治初期の美術品の移動について明らかにすることを目的とする。東京国立博物館の館史資料から寄贈品・寄贈者に関する情報を抽出し、データベースを作成する。その上で寄贈者についての調査を行い、研究課題の考察、データの活用方法の検討を行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室アソシエイトフェロー 三輪紫都香
【スタッフ】			
【主な成果】 東京国立博物館の収蔵品のうち、寄贈品、もしくは寄贈品の可能性があるものについて抽出し、エクセルデータを整理した。館史資料の調査により、寄贈に関する情報が収集された。 また、寄贈者情報の整理により、研究対象としている博物館創設から明治19年にかけての寄贈者292名の生没年、職業等をすべてではないが判明させることができた。			
【年度実績概要】 (1) データベース作成のための一覧表の整備 東京国立博物館創設から明治19年に至るまでの寄贈品に関わるデータを、電子化された収蔵品情報である「新列品管理簿」から抽出した。データ上传来が「寄贈」となっているものの他に、「伝来不詳」「引継」となっている収蔵品に関しても寄贈の可能性があるため調査対象として抽出した。 (2) 館史資料の精査 前項において抽出された対象収蔵品について、過去の台帳である「美術品台帳」、「列品記載簿」を参照し、誤記訂正や未記録の部分の調査を行った。また、「列品録」に記された寄贈品に関する項目を調査した。調査内容は上記(1)で作成したエクセルデータに反映した。 (3) 寄贈者に関する調査 前項の資料の調査に並行して寄贈者の基本データを収集する作業を行った。前項で東京国立博物館への寄贈者と寄贈品のデータをもとに寄贈者ごとに寄贈品をまとめ、氏名・住所・寄贈年から人物事典の検索、地方史の書籍や東京国立博物館の職員録を用いての検索を行った。その他寄贈者に関する文献を検索した。 また、「各国寄贈人名並住処控」「購入並寄贈列品保管証」の簡易撮影を行い、調査対象とする寄贈者に漏れがないかを確認した。			
【実績値】 人物データベース作成件数 292 件 (参考値) 調査日数 4 日 作業補助員依頼 25 日			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-21

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	C	B	B
判定理由 適時性：情報が集約されつつあり、本研究によって得られたデータの需要・必要性は高いと考えられるため。 独創性：寄贈品・寄贈者というまとまりで収蔵品を捉えることにより、現状では無名の人物についても調査により詳細が判明する事例がみられるなど、独創性による成果が得られていると考えられる。 発展性：館史に関する資料を検索する中で、現在は収蔵品から除外されているものの情報も何件か発見することができ、現在の収蔵品という枠を超えて博物館への寄贈者を明らかにできる可能性があるため。 効率性：作業補助スタッフを依頼し、作業を進めているところであるが、代表者の産休により当初の計画よりも時間的、人的投資が不足している状況であるため。 継続性：継続してデータ整理、調査を行っており、基本的な資料の検索や修正箇所の抽出が行われている。また、本研究は2年間の計画であり、次年度への基本データの収集がおおむね行えたため。 正確性：予定していたデータの反映は正確に行われているがより多くの文献にあたる余地が残されているため。						

2. 定量的評価

観点	人物データベース作成件数					
判定	B					
判定理由 人物データベース作成件数：予測していた寄贈者に関するデータは順調に収集できているが、今後新たな寄贈者が明らかになる、またはより詳細な調査により情報を更新する余地があるため。また、データベースの書式を改善する余地があるため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	作業補助スタッフを依頼し、継続して調査・データ整理を行っているが、代表者の産休・保育時間取得により当初の計画と比較してやや遅れがみられる。 次年度は作業補助スタッフを多めに依頼し、データの補完、関係資料の撮影・複写など今年度の遅れを消化できるよう計画する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	作業補助スタッフを依頼し、ほぼ計画通り継続して調査・データ整理を行っているが、代表者の産休・保育時間取得によりやや遅れがみられる。 次年度は作業補助スタッフを多めに依頼し、データの補完、関係資料の撮影・複写など今年度の遅れを消化できるよう計画する。また、代表者は引き続き保育時間を取得する予定のため、論文執筆の準備を前倒しで進めるよう計画する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	22) 武家女性の衣生活に関する基礎的研究(学術研究助成基金助成金)((5)-①)		
【事業概要】 明治時代以降の社会変動の中で、旧大名家の多くは財産を手放し、各家に代々伝えられてきた什物類や作成されてきた文書類などは、現在、それぞれ別の機関に所蔵されることとなった。本研究は、江戸時代の大名家文書の染織品に関する記録と実物染織品とを相互に検証し、武家社会の生活の中で、衣服の用いられてきた時・場所・人物・目的などを明らかにする。特に武家の染織品研究の土台となる、染織品に関する大名家文書のデータベースの作成を重要課題とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室アソシエイトフェロー 佐々木佳美
【スタッフ】			
【主な成果】 本年度は、本研究の基盤となる大名家文書のデータベースの作成に重点を置き、研究を進めた。また、適宜、武家伝来の染織品の実物調査を行い、次年度以降の史料と実物資料との研究・考察に備えた。また文書資料や実物染織品以外にも視野を広げ、関連する周辺資料の収集も行った。			
【年度実績概要】 ・染織品に関する記録を持つ大名家文書のデータベースの作成 全国に収蔵される大名家文書のうち史料の伝存状況が良好な165件について、文書の基礎的な情報(名称、所蔵先、点数、資料番号)等を整理・入力した。これを基に、各機関の刊行する資料目録を用いて、文書史料の中から染織品に関する記録を抽出・入力し、データの集積を進めた。 ・染織品に関する記録を持つ大名家文書の資料収集と解読 大名家文書のデータベース作成と平行しつつ、東京・国文学研究所、及び東京・個人の収蔵する大名家文書の調査を行った。調査には、デジタルカメラによる記録撮影を行い、資料収集を行った。また収集した文書の内容は翻刻を行い、データの入力を進めた。 ・武家伝来の実物染織品の基礎データの整備 全国の美術館や博物館において、これまで開催された武家伝来の美術工芸品に関する展覧会記録を整理し、入力を行った。 ・武家伝来の実物染織品の調査 名古屋・松坂屋美術館において、肥前・松浦家伝来の小袖等服飾品の調査を行い、デジタルカメラによる記録撮影を行った。また前年度までに調査を行った長野・真田宝物館の真田家伝来服飾品のデータ整理を終えた。 ・武家伝来染織品に関する周辺資料の収集 東京国立博物館所蔵の田安家徳川家伝来の『献英楼画叢』第三、四集の撮影を行った。			
【実績値】 ・大名家文書データベース入力・整理 : 165 件 ・資料収集(撮影) : 8 件 - 内訳・・・大名家文書資料収集(撮影): 4 件(1653 カット) - 武家伝来染織品調査(撮影): 2 件(838 カット) - 武家伝来染織品周辺関連資料(撮影): 2 件(98 カット)			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	A	A	A
判定理由 適時性：武家染織に関する基礎的な資料として大名家文書のデータ整備は必要性が高いため。 独創性：文字資料と実物資料とを照合するという意味で、研究方法としては最も基本的な手法であるため。 発展性：大名家文書のデータベースは武家染織の研究を行う上で、様々な利用・展開が可能であるため。 効率性：限られた時間の中で、効率的にデータ収集を行った。 継続性：本研究は3年計画で進めており、次年度以降も継続的に研究を進めるための整備を行った。 正確性：大名家文書のデータベースは、入手可能な染織品に関する記録をほぼ網羅している。						

2. 定量的評価

観点	データ入力・整理	資料収集（撮影）				
判定	B	A				
判定理由 データ入力・整理：当初の計画よりも大名家文書の収集範囲を大幅に広げたため、実績値が達しなかったため。 資料収集（撮影）：対象資料について、質・量ともに十分な収集ができたため。						

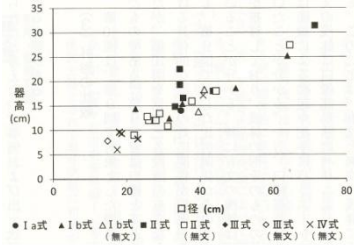
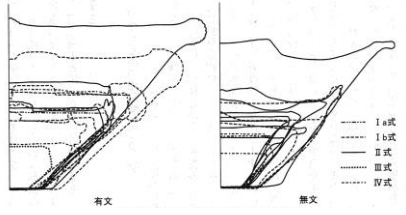
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度、染織品の記録を持つ大名家文書のデータベースの作成を重点的に行った結果、武家文書に記録される染織品の全体像を捉えることができた。これは、今後、武家社会における染織品の機能（時・場所・人物・目的）を考察する上で、大きな指針を得たといえる。また次年度以降のさらに効率的なデータ収集、検証に備えることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	大名家文書のデータベース作成は、武家の染織品研究を進める上で最も基礎的な史料となりうるものである。今後の研究の発展性・汎用性・正確性を高めるため、当初想定していたより対象史料の範囲を大幅に広げて研究を進めた。そのため当初の計画よりもデータベース作成に時間がかかることが想定されるので、次年度以降も引き続き、効率的なデータ収集を行いたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	23) 縄文時代における浅鉢形土器の研究 (学術研究助成基金助成金) ((5)-①)		
【事業概要】 日本先史時代における社会構造の研究をテーマとする。特に縄文時代中期の東日本域の浅鉢形土器の型式学的検討(時系列・分布の整理)と具体的な機能の検討に基づく、縄文社会における地域集団間の交渉史の解明を目的とする			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課考古室研究員 井出浩正
【スタッフ】			
【主な成果】 本年度は文献の悉皆調査(発掘調査報告書等)による、遺跡出土の浅鉢のデータベース化を進めた。また併せて資料の実見・計測・観察を行った。その成果として、当該研究に関連する誌上発表と、研究論文を発表することができた。			
【年度実績概要】 (1) 遺跡出土浅鉢のデータベース化: 文献(発掘調査報告書等)の悉皆調査と文献複写 ・当該研究が対象とする地域の発掘調査報告事例の検索と浅鉢が出土した事例の集積及び分析(対象地域: 東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県・群馬県・栃木県・茨城県・長野県・新潟県・福島県) (2) 浅鉢の実見・計測・観察: 資料の実見と肉眼観察 ・千葉県、茨城県域の資料の実見・計測・観察を行った(早稲田大学會津八一記念博物館所蔵) (3) 上記を受け、研究成果として、関連分野の誌上発表1回と、研究論文1本を発表した(論文は査読中)。 ・誌上発表①: 井出浩正 2012「長野県における阿玉台式土器の様相」『長野県考古学会誌 ―縄文中期文化の繁栄を探る―』(143・144 合併号) ・論文発表①: 井出浩正 2013「縄文時代中期中葉における浅鉢形土器 ―阿玉台式土器に伴う浅鉢の様相―」『史観』(第168 冊)			
			
浅鉢の口径と器高の関係 (論文発表①より抜粋)		浅鉢の外形比較 (論文発表①より抜粋)	
【実績値】 調査…文献調査回数: 12 回 資料調査回数: 1 回 成果発表…誌上発表 1 回, 研究論文 1 本			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-23

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	A	A	B	A	A
判定理由 適時性：資料の蓄積がある現況下においては、当該研究のような新たな研究視点を導入する必要があるため。 独創性：研究対象としてこれまで等閑視されてきた資料群（浅鉢）を新たな分析対象としているため。 発展性：データベース化と時系列の基礎的な整理によって、当該研究成果の今後の持続的な活用が期待できるため。 効率性：限られた時間枠の中で、主要な対象地域のデータベース化を概ね終えることができたため。 継続性：初年度はデータベース化を中心に、次年度はそのデータベースに基づく資料調査を実施する予定であるため。 正確性：悉皆的調査（データベース化）と分析（型式学的検討）による基盤的で確実性が高い手法であるため						

2. 定量的評価

観点	調査回数	資料調査回数	成果発表			
判定	B	B	A			
判定理由 調査回数：主要な研究対象地域に絞り調査を実施したため。 資料調査：ほぼ研究計画通りに資料調査を進めることができたため。 成果発表：研究計画に則った成果を発表することができたため。						

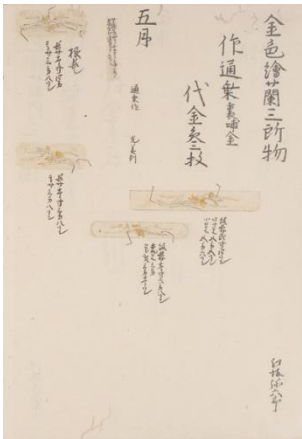
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	既存の発掘調査報告書等を対象とする、悉皆的な文献調査に多くの時間を割くこととなり、資料の実見・計測・観察に必ずしも十分な時間を割くことができなかったため。研究経過としては、誌上発表及び研究論文を達成することができた。次年度はデータベース化が完了した地域を中心に資料調査を進め、研究計画に基づき更に成果の公開を進める。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	二ヵ年の研究期間の一ヵ年目に当たる本年度は、文献の悉皆調査による対象資料のデータベース化作業を中心に進めることができ、概ね完了した。資料の実見・計測・観察においては、当該研究の中心的な対象地域の一つである千葉県、茨城県の資料調査を実施することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	24) 刀装具一派後藤家の鑑定 極帳（鑑定控）の整理に基づく鑑定の様相と価値付けの考察(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) ((5) - ①)		
【事業概要】 本研究は、東京藝術大学附属図書館が所蔵する後藤家文書の調査などによって、近世最大の刀装飾具一派であった後藤家の鑑定活動と、同家の作品の価値付けの様相を具体的に捉えるものである。後藤家では刀装具制作とともに、祖先の作品の鑑定も行っており、その結果は後藤家文書のうち「極帳」という鑑定控に記録されていた。本研究では、後藤家文書の撮影を行い、鑑定された作品のリストを作成し、現存作品との照合を可能な限り進める。そして、その作業から鑑定基準などの鑑定の様相を考察し、近世における工芸品の価値付けの実際を考察する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展室研究員 酒井元樹
【スタッフ】			
【主な成果】 本年度は後藤家文書の撮影を行い、部分的な翻刻作業に着手した。また、史料の検討を行い、極帳の概要について発表を行った。			
【年度実績概要】 ・後藤家文書の撮影 後藤家文書 517 冊について撮影を行った。極帳の他、鑑定活動に関連のある後藤家文書の撮影も行った。 ・後藤家文書の翻刻 極帳の部分的な翻刻作業に着手した。 ・極帳の概要発表 東京藝術大学附属図書館貴重資料展「後藤家文書 刀装金工の鑑定と記録」（会期：24 年 10 月 1 日～27 日）の図録において、「後藤家文書 極帳について」の論題で極帳の概要発表を行った。			
			
東京藝術大学附属図書館所蔵 後藤家文書「極帳」の一例		蘭図三所物（東京国立博物館所蔵）	
【実績値】 データ収集件数 撮影文書数 517 冊 撮影カット数 29,590 カット 研究発表件数 1 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-24

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：従来あまり紹介されることがなかった極帳を公開する機会に協力したため。 独創性：極帳の概要について、その構造を含めて言及したため。 発展性：当館に所蔵される後藤家の作品について極帳との照合に成功した例があったため。 効率性：文書の撮影を入札形式とし、大幅な時間的・人的な節約ができたため。 継続性：計画通りに撮影を行うなど、研究の継続にあたって支障がみられないため。 正確性：撮影された文書の画像は同一条件で撮影され、適切な色彩補正が行われ、また、ナンバリングがなされたなど管理のための処置もなされたため。						

2. 定量的評価

観点	データ収集件数	研究発表件数				
判定	A	A				
判定理由 データ収集件数：計画通り 3 万カット弱の史料撮影を行ったため。 研究発表件数：研究の初年度で極帳の概要について発表したため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画通りに後藤家文書の撮影を行い、得られた画像によって史料を検討し、実作品の刀装具については館蔵品において適宜検討し、その研究成果を公開できたため。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通りの研究を行うことができ、研究資料の収集とその成果を発表したため。次年度は撮影された史料の分析を中心に研究を継続する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	25) 視覚表現とコレクションの形成に見る縄文土器の美術的受容に関する研究(科学研究費補助金)((5)-①)		
【事業概要】 日本美術における考古遺物の受容の実態については未だ明らかにされていない。しかしながらそこには、考古学と美術のそれぞれの様式観の違いや、日本の前衛芸術への影響を考察する上での重要な問題が含まれている。そこで、本研究では考古遺物及び古美術品を管理する東京国立博物館における研究を軸に、近世から現代までの描かれた遺物や蒐集行為について調査を行い、日本美術における考古遺物の受容過程を明らかにする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室アソシエイトフェロー 鈴木希帆
【スタッフ】			
【主な成果】 青森県立郷土館、弘前大学亀ヶ岡文化研究センター、大阪大学学術総合博物館、京都大学文化財総合研究センター、ギメ東洋美術館、チェルヌスキ美術館で作品調査を、是川縄文館、MIHO MUSEUM、大阪府立弥生文化博物館、京都造形芸術大学芸術館で見学及び資料収集を行った。本研究成果は、国立歴史民俗博物館共同研究「歴史表象の形成と消費文化」研究会での発表と、神奈川県立歴史博物館「勝坂縄文展」での記念講演により一般に公開した。			
【年度実績概要】 ・遺物の蒐集に関する調査 青森県立郷土館と弘前大学亀ヶ岡文化研究センターに平成23年度に寄贈された成田氏資料の調査を行い、明治期から昭和初期にかけての好古家の実態の一端を明らかにした。本調査では蓑虫山人作の新発見資料と当館列品との関連が見出された。これにより、次年度の特集陳列の基礎調査も行うことができた。 ギメ東洋美術館及びチェルヌスキ美術館では当館交換品の調査と併せて、明治時代に西洋に流通した日本の考古遺物の実態を調査し、フランス国立図書館では関連資料を収集することができた。 ・近世から現代までの描かれた遺物に関する調査 大阪大学学術総合博物館に寄託されている日本の前衛を代表する画家・吉原治良の土偶のスケッチ帳の調査を行い、岡本太郎以前の日本の美術家における縄文受容について調査を行った。本調査により関西独自の原始性受容の実態が明らかになった。 ・考古遺物の展示方法及び資料館の調査 京都大学文化財総合研究センター(図1)、是川縄文館、MIHO MUSEUM「土偶・コスモス」展、大阪府立弥生文化博物館「縄文の世界像」、京都造形芸術大学芸術館「縄文の夢ー森のざわめき、精霊の風」などで調査を行った。 ・研究発表等 国立歴史民俗博物館の共同研究「歴史表象の形成と消費文化」の研究会において、研究協力者として口頭発表「集古会周辺における縄文受容」を行い、考古遺物の蒐集行為を消費文化の枠組みにおいて考察した。この学際研究の場で「縄文」に関する意見交換も行った。 神奈川県立歴史博物館の「勝坂縄文展」記念対談「縄文土器を美術史と考古学から語る」において、展示企画者の千葉毅氏と対談を行い、研究成果を一般市民に公開した。本講演により全国の研究者とも交流をもつことができ、次の調査につなげることができた。			
			
		図1 京都大学埋蔵文化財研究センター資料室「尊攘堂」の考古遺物調査	
【実績値】 ・調査件数10件(調査回数国内3回、国外1回)・写真撮影点数約1,000枚・研究発表等2件(研究発表1件①、講演1件②)			
【備考】 ①国立歴史民俗博物館共同研究(研究代表:岩淵令治)「歴史表象の形成と消費文化」第9回研究会発表「集古会周辺における縄文受容」平成24年6月24日 ②神奈川県立歴史博物館平成24年度かながわの遺跡展「勝坂縄文展」記念対談「縄文土器を美術史と考古学から語る」(企画者:千葉毅学芸員)平成25年2月2日			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：本年度は縄文土器に関する展覧会が東日本のみならず西日本においても多く開催され、調査が円滑に進み発表の機会も得た。 独創性：美術の枠組みで縄文土器および考古遺物を扱い研究する点に新規性があるため。 発展性：研究成果は日本美術史や考古学以外にも民俗学や文化人類学、現代美術の研究者からも注目されているため。 効率性：東京国立博物館において美術史、考古学双方の研修者の協力を得て、順調に研究が進んでいるため。 継続性：昨年度に提出した博士論文の研究を踏まえ、要点を絞った研究が続けられているため。 正確性：目標として掲げていた今年度の調査件数を達成し、成果を一般に公開することで、科学研究費を用いた研究が有効になされた。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	写真撮影	研究発表			
判定	A	A	A			
判定理由 調査件数：縄文土器に関する国内外の資料の特別観覧および調査が順調に進められた。 写真撮影：他施設の寄託資料を含め、希望資料を当初の予定通り撮影することができた。 研究発表：当初の予定通りに口頭発表や講演を行い、研究成果を公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は資料調査と研究成果の発表が順調に進んだ。特に研究成果を公表したことにより、次年度の調査のための人脈も得ることもできた。また、次年度の特集陳列のための資料も収集することができ、展示および論文による研究成果の発表の準備が整った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成している。次年度は、より日々の業務との連携を図り、展示や論文発表を積極的に行い、研究成果を発表していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	26) 諸先学の作品調査・画像資料類の保存と活用のための研究・開発（科学研究費補助金）（(5)-①）		
【事業概要】 本研究では、諸先学による美術作品の調査・画像資料等の保存と活用のための研究・開発をめざす。その過程で、先行研究者が何に関心をもち、作品にどのように向かい合ったのかについての傾向について調査を行い、解明を目指す。加えて、対象となった作品そのものの情報（調書類・経年変化・修理・研究・展覧会などの情報）の蓄積・充実を図り、公開・利用の手法開発を行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室研究員 土屋貴裕
【スタッフ】 勝木言一郎（博物館情報課情報資料室長）			
【主な成果】 昨年度に引き続き本年度も、日本の絵巻研究の第一人者である梅津次郎氏の自筆調書類、紙焼き写真類、研究資料類等の調査・研究を行った。東京文化財研究所は梅津次郎氏の没後、1988年と2008年の2度にわたり、氏のご遺族より研究資料の寄贈を受けたが、そのうち、自筆調書類の整理を進めた。調書の中には現在は所在不明な作品も含まれ、今後、研究資料としての活用が大いに期待される。 また、松本榮一氏、熊谷宣夫氏、上野アキ氏などの西域美術研究者たちが、スタイン、ペリオ、ル・コック及び大谷探検隊などの中央アジア探検家たちが残した資料や記録などについて、どのようにしてその資料化を図り、西域美術研究を構築していったかを調査・研究した。			
【年度実績概要】 ・梅津次郎氏自筆調書類の整理 梅津氏が作品調査時に研究資料として記した自筆調書類の整理、検討を進めた。その公開に関しては、個人所蔵分、現在所在不明なものもあり、デジタルデータでの公開を行うことはかなわないが、現在確認されうる絵巻作品と調書で取り上げられている作品との照合を進め、今後の公開に向けて資料の整理を行った。 ・西域美術コレクション資料化の調査・研究 松本榮一氏が渡欧し、スタインやペリオが将来した西域美術コレクションを資料化していった過程、さらに熊谷宣夫氏や上野アキ氏が渡米し、ル・コックが将来した西域美術コレクションのうち在米美術館・博物館所蔵分を資料化していった過程について、それぞれ調査・研究を行った。その研究成果の一部として「日の当たらなかった処に光を照らしたアジアの考古学・美術史研究」（『アジア遊学』150号）を公表した。 ・資料の公開へ向けた準備 本研究が対象とした美術作品の調書類は、オンライン上において一般に公開することが甚だ難しい。そのため、資料を所有する東京文化財研究所資料閲覧室における公開に向け、可能な限りテキスト化し、今後の利活用に備えた。			
【実績値】 梅津次郎氏自筆調書類の整理件数 約100件 論文件数 1件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-26

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：対象資料の劣化も進行しており、資料保存の観点からもこれを今行うことの意義は大きい。 独創性：従来検討の試みられなかった研究調査等を取り上げたことは独創性が高いため。 発展性：個別の分野のみならず、近代学問史の検討にも寄与することができるため。 効率性：限られた時間の中で、効率的にデータ収集を行えたため。 継続性：本研究は今年度で終了となるが、今後も資料整理を継続的に進めていくため。 正確性：データに関しては、入力時、入力後の二度確認を行うことで、資料の正確性を期した。						

2. 定量的評価

観点	自筆調査書類の 整理件数	論文件数				
判定	A	A				
判定理由 自筆調査書類の整理件数：当初の計画通りの資料整理を実施することができた。 論文件数：論文のテーマとしてはとりあげにくい資料化の問題について、論文にまとめ公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	梅津次郎氏の自筆調査書類、紙焼き写真類、研究資料類等の調査・研究を進めるにあたっては、梅津氏自筆調査書類の整理が重要な一角を占める。本年度はその整理をほぼ終えることができたことは特筆される。また松本榮一氏、熊谷宣夫氏、上野アキ氏などの西域美術研究者たちが、中央アジア探検家たちが残した記録をどのように資料化したのかを探ることは、西域美術研究の研究史を探る上で極めて重要な作業である。その研究成果を踏まえ、論文として公表できたことは大きな成果としてあげられる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究の全体スケジュールのうち、絵巻関係資料、および西域美術資料に関する資料の整理は概ね達成された。本研究は本年度で終了となるが、資料のさらなる利活用を目指し、今後も資料の検討、及び研究を進めていけるよう努めたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-27

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	27) 絵巻に描かれた「場」と「もの」に見る中世日本の重層的世界観に関する研究（科学研究費補助金）((5)-①)		
【事業概要】 本研究では、中世の人々の日常生活、労働、信仰、行事、儀礼、合戦の他、異国や異域、神仏化現の舞台となる「場」（型）を抽出・収集し、そこに描かれた建築や環境、多様な「もの」に、身分差や階層差がどのように描き分けられ、関連付けられているかを具体的に検証し、作品研究の深化と、物語絵画、とりわけ絵巻という媒体の歴史的特性を明らかにする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室研究員 土屋貴裕
【スタッフ】			
【主な成果】 本研究では中世絵巻に描かれた多様な「場」を「型」として捉え横断的に検討する。特に、異国（唐・天竺・蝦夷など）や異域（地獄・極楽・竜宮など）、そして神仏化現の舞台となる架空の「場」を構成する建築や環境、そしてそこで用いられる「もの」が、どのように「本朝」のそれと描き分けられ、関連付けられているのか、描かれた「場」の抽出・収集と分析を行った。本年度は特に「聖徳太子絵伝」、「華嚴宗祖師絵伝」の検討を進めた。			
【年度実績概要】 ・「聖徳太子絵伝」の研究 法隆寺献納宝物本、法隆寺献納宝物四幅本（嘉元3年、上野法橋・但馬房筆。いずれも当館蔵）、個人蔵本（当館寄託）、メトロポリタン美術館本に加え、今年度調査を行なった中野太子堂本、大蔵寺本、奈良国立博物館本、大英博物館本などに描かれた「異国」の図像の抽出と、そのイメージソースについて検討を進めた。 ・「華嚴宗祖師絵伝」の研究 高山寺所蔵の「華嚴宗祖師絵伝」は、新羅の僧義湘と元暁の事蹟を描く絵巻で、鎌倉時代初期に高山寺を復興した明恵上人周辺で作られたと考えられている。このうち、特に元暁絵に描かれた異国イメージを読み解くとともに、従来の研究で指摘されている元暁と明恵のダブルイメージを、歌仙絵や他の絵巻作品との比較から検討し、論文にまとめた（2013年刊行予定）。 ・絵巻作品の撮影・調査 館蔵品及び、各地の美術館博物館、寺院等において絵巻作品の撮影・調査を進めた。			
【実績値】 調査撮影件数 約5,000件 論文等数 1件 ①			
【備考】 論文等 ①「祖師のおもかげ—華嚴宗祖師絵伝元暁絵試論—」（『仏教美術論集 図像解釈学』竹林舎、2013年刊行予定）			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：絵巻を含む物語絵画の新しい方法を模索する本研究の意義は大きいため。 独創性：「場」を「型」から絵巻を検討する視点は独創性が高いため。 発展性：絵巻研究のみならず、他の物語絵画の研究にも寄与することができるため。 効率性：限られた時間の中で、効率的にデータ収集を行えた。 継続性：本研究は今年度で終了となるが、「場」を「型」を軸とした研究を継続的に行っていくため。 正確性：画像処理、対応する文献資料との比較検討は正確性を持って進めた。						

2. 定量的評価

観点	調査撮影件数	論文等数				
判定	A	A				
判定理由 調査撮影件数：当初の計画よりも、多くの作品調査を実施することができた。 論文等数：当初の目標を達成できた。成果物は2013年刊行予定である。						

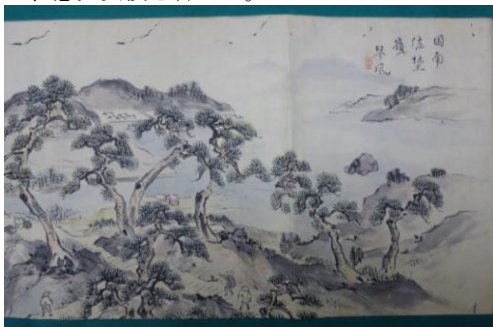
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	日本中世の異国や異界の表象分析を進める中で、中世を通じて描き継がれた「聖徳太子絵伝」、中世前期の高山寺周辺で描かれた「華嚴宗祖師絵伝」は重要な作例とみなしうる。その撮影を伴う調査を終え、その成果の一部を論文として公開する準備が整えられた（2013年刊行予定）。また、25年1月12日（土）には「絵巻研究の新視点―描かれた人の営み、その空間・環境に着目して」（於千葉大学）と題する公開のシンポジウムを開催し、研究成果の公表を行った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究期間三年のうちの最終年度に当たる本年度は、対象とする研究課題のコアとなる作品の基礎調査と分析を効果的に進めることができた。研究成果の公表を含め、今後さらなる調査研究を進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	28) 描いた女性たちに関する研究－桃山時代から明治・大正期まで（科学研究費補助金）（5）－①）		
【事業概要】 桃山時代から明治・大正期までの女性画家に関して、その実態を文献・作品の両面から明らかにし、造形的・社会的・文化的特質と意義を考察する。制作の目的、制作を可能とした社会的な要件、女性であることと表現内容との相関関係、また、各時代の価値観・倫理観が女性の行動に及ぼした影響等も分析しつつ、歴史的な社会における視覚的イメージを表現することの意味について考察する。合わせて、女性の作画に関するデータベースの作成も目指す。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】 仲町啓子（実践女子大学文学部教授）			
【主な成果】 当館の特集陳列「女性画家」（24年6月5日～7月29日）の開催に合わせ、女性画家による作品の調査を行い、展示作品選定等で助言を行った。ついで、山梨県立美術館「十一屋コレクションの名品」を見学し、野口小蘗の作品とその社会的要因について調査を行った。また、実践女子大学の科研メンバーと協力し、防府・尾道・福山で、上田琴風、平田玉蒔他の作品調査（2月23日～26日）を行い、女性画家に関するデータ収集に協力し、外部研究者と連携した質の高い研究を行うことができた。 次年度以降、外部との協力により当館所蔵の女性画家資料に対する研究を進める準備体制も確立した。			
【年度実績概要】 ・女性画家作品の調査 当館所蔵の清原雪信・山崎女龍・徳山玉蘭・奥原晴湖・野口小蘗などの作品調査を行った。 山梨県立美術館寄託の野口小蘗作品の調査を行った。 防府・尾道・福山で、上田琴風・平田玉蒔・江馬細香他の作品調査を行った。 ・女性画家の作品制作の背景を考察 頼山陽、菅茶山、野口柿邨など周辺の人物とのかかわりの中で考えるために資料収集を行い、それらの人物が収集した作品の調査を行った。 ・研究会 実践女子学園香雪記念資料館で行われた書画会に関する研究会に参加し、意見交換を行った。			
 上田琴風筆「周南佐野嶺図」（部分）			
【実績値】 研究会参加 1回 （24年11月17日於香雪記念資料館） 作品調査 3回 （山梨県立美術館・防府尾道他山陽地方・奈良）			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-28

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	A	A	B
判定理由 適時性：当館で、24年6月5日から7月29日まで特集陳列「女性画家」が開催されたように女性芸術家に対する現代的関心が高いため。 独創性：女性画家を総合化した画家としての社会的要因にまで踏み込んだ研究はなされていないため。 発展性：各時代の価値観・倫理観が女性の行動に及ぼした影響等、社会における視覚的イメージ表現の意味について研究を広げることができるため。 効率性・継続性：実践女子学園香雪記念資料館は、これまでも女性画家研究を行ってきた。データの蓄積もあり、研究成果にもとづいた研究が可能であり、成果を展示の形で公開できるため。 正確性：女性画家の作品研究はこれまであまり行われていなかった。そのため、科学研究費の代表者である仲町氏を中心に多くの作品の調査作業を進めたが、未だ質的判断に供しえる基準作品の選定段階にあるため。						

2. 定量的評価

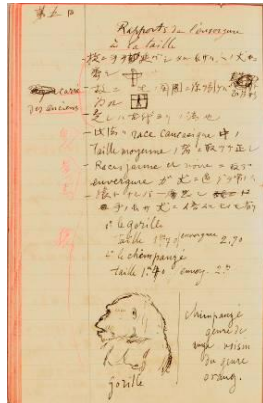
観点	研究会参加回数	作品調査回数				
判定	A	A				
判定理由 研究会参加回数： 実践女子学園香雪記念資料館で開催された研究会（本年度開催の研究会は1回）に参加し、女性が絵を描く背景としての書画会に関する意見交換を行うことができた。 作品調査回数： ・山梨県立美術館で開催された「十一屋コレクションの名品」における野口小蘗や、当館開催の特集陳列「女性画家」に陳列された作品等女性画家の作品を数多く見る事が出来た。タイミングの良い展覧会の開催に合わせ作品を精査できた。 ・山陽地方の調査で、上田琴風、平田玉蕚他多くの女性画家の作品調査を実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年の活動が科学研究費の主体となっている実践女子大学の都合により秋から本格化した。それ以前から研究を始めており、初年度としては十分な調査を進めることが出来た。また、外部との調査協力体制も確立し、次年度以降当館所蔵品を含めより広範な調査計画が進行中である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	実践女子学園香雪記念資料館で行われた研究会、実践女子大学との共同の調査に参加し、外部との調査協力体制が確立した。次年度以降当館所蔵品を含めより広範な調査計画が進行中である。

中期計画の項目	4	文化財に関する調査及び研究の推進	
プロジェクト名称	29)	日本とドイツの美術解剖学教育の発展と展開（科学研究補助金）（(5)-①）	
【事業概要】			
東京国立博物館所蔵の美術解剖学関連資料について調査を行い、わが国における美術解剖学の導入及び教育方法の位置付ける過程を明らかにする。さらにこれら資料の公開を目的として特集陳列を実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課デザイン室長 木下史青
【スタッフ】			
宮永美知代（客員研究員・東京藝術大学大学院美術教育 美術解剖学Ⅱ 助教）			
【主な成果】			
東京国立博物館所蔵の美術解剖学関係資料、特に森鷗外・久米桂一郎・黒田清輝に関する資料調査を実施し、我が国における美術解剖学及びその教育に関する重要な資料が当館所蔵資料に存在する事がわかった。その研究成果は特集陳列「美術解剖学 一人のかたちの学び」において、一般に公開するとともに、美術解剖学雑誌（美術解剖学会研究誌）、東京国立博物館ウェブサイト：1089 ブログ「美術解剖学のことば」等において公開した			
【年度実績概要】			
・他館における資料調査 久米美術館（東京都目黒区） 24年6月2日 調査内容：美術解剖学関連の久米桂一郎に関する資料調査及び作品と資料等の展示方法について			
・館内での資料調査 24年5月9日、13日、17日、調査内容：資料館地下収蔵庫にて美術解剖学関連の館史資料調査を行った。当館所蔵の、森鷗外・黒田清輝・久米桂一郎関連文献による美術解剖学に関する調査。			
  			
「裸婦秀作」黒田清輝筆 東京国立博物館蔵 「美術解剖学ノート」 東京国立博物館蔵 特集陳列「美術解剖学 一人のかたちの学び」 本館特別1室 24年7月3日(火)～7月29日			
【実績値】			
資料調査回数	4回(内他館1回、館内3回)		
研究発表件数	3回(①、②、③)		
論文等掲載数	10回(④、⑤、⑥)		
【備考】			
研究発表			
①列品解説「美術解剖学 一人のかたちの学び」 24年7月3日(火) 於・東京国立博物館			
②口頭発表：東京国立博物館特集陳列「美術解剖学 一人のかたちの学び」24年7月14日(土) 於・東京藝術大学			
③美術解剖学会オプショナルツアー「美術解剖学一人のかたちの学び」24年7月15日(日) 於：東京国立博物館			
論文等掲載			
④美術解剖学雑誌（美術解剖学会研究誌 Vol.16 No.1） 随想「美術解剖学 一人のかたちの学び」（単著）			
⑤同上 美術解剖学雑誌 随想「デッサンと美術解剖学—久米桂一郎と黒田清輝，1887年のデッサンから—」（共著）			
⑥1089 ブログ「美術解剖学のことば」×8回 （東京国立博物館ウェブサイト内）			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	B		
判定理由 適時性：森鷗外・黒田清輝・久米桂一郎がドイツ・フランスから移入した「美術解剖学」に関わる基礎資料が当館（東京国立博物館と黒田記念館）に保管されており、総合的に調査する事が求められていたため。 発展性：黒田清輝と同時期にフランスに学んだ久米桂一郎に関わる資料を保管する久米美術館所蔵資料と並行して調査研究することにより、今後も新たな知見が得られることが考えられるため。 効率性：科研のテーマであるドイツにおける教育的関連を研究する必要があるが、森鷗外関連資料等についてより広く調査を行う方法論が課題となっているため。 継続性：24年度に特集陳列を企画・実施したことで得られた新たな知見を、資料紹介等論文・ウェブサイト上等で、より広い対象に公開することが求められているため。						

2. 定量的評価

観点	資料調査回数	研究発表件数	論文等掲載数			
判定	A	B	B			
判定理由 資料調査回数：当初の計画通り資料調査を行った。 研究発表件数：予定された計画に対し、ほぼ順当に作業をすすめ、実施に至っている。 論文等掲載数：原資料中の専門用語の仏文等外国語記述が予想以上に多く、更に調査研究を進める必要があるため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	美術解剖学関連資料は現在「館史資料」の位置付けで、東京国立博物館所蔵の資料と黒田記念館（旧独立行政法人東京文化財研究所蔵）の列品として保管されている。これらを横断的総合的に研究する必要があり、24年度は特集陳列企画としてまとめて公開する機会を得た事は、極めて意義深いことであった。 また特集陳列の展示においては、個人・他館所有の資料との深い関連づけて当館の資料を対比的に展示することで、鑑賞者にとってわかりやすく美的価値を伝える効果があった。 次年度以降は引き続き資料調査を行い、検討・分析した成果を『MUSEUM』等研究誌にて公開することを計画している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	これまでに得られた未整理の資料を分類し、比較検討・分析作業を続けている。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 訓点資料としての典籍に関する調査研究((5)－①)		
【事業概要】 訓点資料のうち、平安時代や鎌倉時代の古写経や版本を中心とした典籍に施された訓点について調査研究を実施した。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 赤尾栄慶
【スタッフ】 (当館研究者) 羽田 聡 (研究員) (客員研究員) 宇都宮啓吾 (大阪大谷大学教授)			
【主な成果】 当館所蔵で、高山寺旧蔵である南宋版『華嚴経疏』卷第三十二に角筆による角点が施されていることを確認した。鎌倉時代の高山寺の学僧によって付けられたであろう角点が、同時代と思われる親鸞の『教行信証』(国宝、真宗大谷派蔵)の角点と類似性を認めることができた。			
【年度実績概要】 ・7回にわたる調査を実施し、意見交換を行った。 ・南宋版『華嚴経疏』卷第三十二の該当箇所の写真撮影を行った。 ・24年6月13日に開催された龍谷教学会議において、親鸞の『教行信証』の書誌学的発表を行った(赤尾)。 ・24年10月20日に開催された大谷大学博物館の特展フォーラムにおいて、親鸞の『教行信証』に関する発表を行った(赤尾、宇都宮)。			
【実績値】 調査 7回 研究発表 3回(①) 国際交流 2回			
【備考】 研究発表 ①宇都宮啓吾「訓点から見た坂東本『教行信証』の一側面」 大阪大谷国文第四十三号 25年3月1日ほか2回			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：中国の学会や韓国の口訣学会から注目を集めている。 独創性：宋版と親鸞の角筆の類似性に注目している。 発展性：中国や韓半島という漢字文化圏の問題に波及する。 効率性：限られた時間で成果を挙げている。 継続性：調査対象が多くある。 正確性：妥当と思われる結果を導き出している。						

2. 定量的評価

観点	調査	研究発表	国際交流			
判定	A	A	A			
判定理由 調査：7回実施し、成果を挙げている。 研究発表：通算6回の研究発表は、十分情報発信を行っている。 国際交流：韓国の口訣学会と2回交流を行い、招待講演も行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現役の大学教員の中で、訓点及び角点研究の第一人者である宇都宮啓吾氏を迎えての館蔵品及び寄託品を中心とした調査研究は確実に成果を挙げている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	確実な成果を挙げ、海外からも注目される研究へと順調に発展している。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-2

業務実績書

中期計画の項目	4. 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 彫刻に関する調査研究(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)((5)－①)		
【事業概要】 京都国立博物館に保管及び寄託される仏像を中心とした彫刻作品の調査、研究。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 浅湊 毅
スタッフ】 井上一稔(客員研究員・同志社大学教授)、田中健一(調査員・大阪大谷大学専任講師)			
【主な成果】 ・特別展覧会「南山城の古寺」展(仮称)(平成26年度開催)出品予定作品の調査研究を行った。 ・科学研究費補助金基盤研究(B)「多数尊より構成される仏教尊像に関する調査研究」の研究代表者として、寺院及び博物館における彫刻作品の調査を研究分担者とともに行った。			
【年度実績概要】 ・京都国立博物館が所有、あるいは社寺より寄託を受けている彫刻作品の調査及び写真資料の収集を、新たに行った。 ・社寺、個人宅など、館外に所在する彫刻作品の調査・撮影を行った。 ・特別展覧会「南山城の古寺」展(仮称)に出品する予定の彫刻作品について調査研究を行った。 ・下記の科学研究費による調査に研究分担者ないしは研究協力者として参加し、調査研究を行うとともに、それぞれに関し成果を公表した。 ①南アジア及び東南アジアにおけるデーヴァラージャ信仰とその造形に関する基礎的研究 (研究分担者)研究代表者：大阪大学 肥塚隆 本研究の成果に基づき、24年5月発行の『学叢』第34号に「バンコク国立博物館所蔵の如来坐像〈グラヒ仏〉の制作年代における覚書」と題する論文を発表した。本年度が最終年度にあたるので報告書に「アンコール期のカンボジアにおける石造彫刻の編年をめぐって」と題する論文を執筆した。 ②科学的調査に基づく半跏思惟像の日韓共同研究(研究協力者) 研究代表者：大阪大学 藤岡穰 国内において作品調査を行うとともに、当館の館蔵品調査に際して便宜を図った。 ③多数尊より構成される仏教尊像に関する調査研究(研究代表者) 鎌倉地方他で研究分担者らと共同で作品調査を行うとともに、館蔵の十大弟子について三次元計測を行い、詳細なデータの収集に努めた。 ・昨年度、メトロポリタン東洋美術研究センターより「仏師清水隆慶の研究」というテーマのもとで研究助成を受けた成果を、24年5月発行の『学叢』第34号に「新出の清水隆慶作品―近世彫刻の諸相4―」と題して発表した。 ・上記調査研究において、客員研究員の井上一稔氏、調査員の田中健一氏の協力を得た。			
【実績値】 論文 : 5本 口頭発表 : 1回 講座講演 : 3回			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：仏像に関する関心が一般に高まっており、世間の需要にもかなう研究といえるため。 独創性：多数の尊像から構成される群像の研究は、彫刻史上でこれまでほとんど行われてこなかったテーマである。 発展性：未知の作品の新発見など、新たな展覧会へとつながる調査研究である。 効率性：保存修理所の業務や新館建設に関わる業務などの多岐にわたる業務がある中、限られた時間で効率的な調査研究を行った。 継続性：展覧会のための調査もそれで終わるものではなく、さらなる展覧会へとつながるものであるため。 正確性：調査の成果を報告書、展覧会等で速やかに公開し、関係者の意見を広く聞くように努めた。						

2. 定量的評価

観点	論文	口頭発表	講座講演			
判定	S	A	A			
判定理由 論文：自らが担当する展覧会に際して発行した図録以外にも4本の論文を執筆した。 口頭発表：当初の予定にはなかったが、科学研究費による調査の成果発表会において新たな発見について発表した。 講座講演：特別展に際しての講演以外にも夏期講座で1回、外部から求められて1回の講演を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展覧会、調査、研究、論文執筆、講演、いずれの面でも積極的に行ない、一定の成果をあげることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	目的はおおむね達成でき、それに加えて新たなる外部資金（科学研究費補助金費基盤研究B）を代表者として獲得することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3)出土・伝世古陶磁に関する調査研究((5)－①)		
【事業概要】 日本国内で伝世・出土した陶磁器について総合的に調査を実施し、博物館の所蔵品・寄託品の充実を図ると共に、最新の調査・研究成果を展示や講演会などに反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室長 尾野善裕
【スタッフ】 谷口愛子（調査員・京都工芸繊維大学特任准教授）、橘倫子（調査研究支援ボランティア・茶道資料館学芸員）、梶山博史（調査研究支援ボランティア・兵庫陶芸美術館学芸員）、森下愛子（調査研究支援ボランティア・泉屋博古館分館学芸員）			
【主な成果】 野崎家塩業歴史館（岡山）で伝世古陶磁、唐津市教育委員会・京都市埋蔵文化財研究所などにて出土品の調査を行い、388 件の調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。			
【年度実績概要】 所蔵陶磁の悉皆調査を依頼されている野崎家塩業歴史館の所蔵品調査をのべ 8 日、唐津市教育委員会・太宰府市教育委員会・京都市埋蔵文化財研究所で各 1 日の調査を実施し、デジタルカメラでの資料写真撮影と共に、調書の作成を行った。最も力を割いた野崎家塩業歴史館での調査は、これまで調査の手が及んでいなかった膨大な資料群の情報化に主眼があり、それ自体は必ずしも研究として独創性をもつものではないが、文化財の保護・調査・研究上必要不可欠な基本情報の整備として行っており、再来年度に開催予定の特別展覧会「魅惑の清朝陶磁」への出品候補作品を多数見いだすことができるといった副次的成果もあがっている。また、平常展示館閉鎖中であるため、館外の事業ではあるが、昨年度までの本事業による調査成果を盛り込んだ講演会を 6 回行うとともに、次年度開催予定の展覧会（香川県立ミュージアムにて開催の「京都国立博物館名品展(仮)」図録原稿や研究紀要（『学叢』第 34 号）を執筆した。			
【実績値】 調査日数（館外） のべ 10 日 調書作成件数 388 件 成果公表 講演会 6 回（①～⑥）、論文等 2 件（⑦⑧）			
【備考】 講演会 ①尾野善裕「日本人の〈やきもの〉賞玩―唐物と桃山茶陶―」開館 30 周年記念特別展「美の宴」講演会 和泉市久保惣記念美術館 24 年 10 月 27 日 ②尾野善裕「三条せと物や町出土の茶陶―〈茶陶〉は何故大量に捨てられたのか?―」平成 24 年度京都市埋蔵文化財研究所文化財講演会 京都アスニー 24 年 11 月 10 日 ③尾野善裕「幕末のやきもの」彦根城博物館テーマ展「茶人・井伊直弼と幕末のやきもの」講演会 彦根城博物館 24 年 11 月 11 日 ④尾野善裕「最先端! なごやのやきもの―古代の緑釉・灰釉陶器―」特別展「名古屋ものづくりの考古学」講演会 名古屋市見晴台考古資料館 25 年 1 月 20 日 ⑤尾野善裕「茶人・古田織部と桃山茶陶」平成 24 年度「大阪の歴史再発見」講演会 大阪歴史博物館 25 年 1 月 26 日 ⑥尾野善裕「乾山はいかに語られてきたか―近代の乾山評価変容―」第 8 回法蔵寺「乾山セミナー」25 年 8 月 25 日 論文等 ⑦尾野善裕「御室仁清窯跡出土陶片の基礎的研究―茶入―」『学叢』第 34 号 京都国立博物館 ⑧尾野善裕「仁清の初期基準作 三島写水指」『(仮) 京都国立博物館名品展』 香川県立ミュージアム 25 年 4 月刊行予定			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	B	A	A	A	
判定理由 適時性：所蔵品・寄託品の充実や、最新の調査・研究成果を展示や講演会などに反映させることは、博物館として常時行うべき当然の業務と考えるため、Aと評価する。 独創性：基礎情報の収集自体に独創性は乏しいため。 発展性：平成25年度開催予定の特別展覧会「魅惑の清朝陶磁」に、平成24年度調査成果を盛り込むなど、今後展覧会などを通して調査成果の広範な活用が見込めるため。 効率性：記入を容易にするなど、調書の形式に工夫を加えると共に、調査参加者の熟練度上昇によって、一日当たり35件もの調書作成件数を達成しているため、Aと評価する。 継続性：調査（特に野崎家塩業歴史館）を定期的かつ継続的に実施できているため。						

2. 定量的評価

観点	調査日数	調書作成件数	成果公表			
判定	A	A	A			
判定理由 調査日数：独立行政法人化後、日常業務が繁忙化する中で、10日もの調査が実施できたことを評価できるため。 調書作成件数：388件は、十分に満足できる数値であると考えられるため。 成果公表：平常展示館閉鎖中のため、館内での成果公表ができていないというらみはあるものの、各種講演会（6回）や図録論文等に成果を反映させることができているため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財に関する基礎情報の蓄積自体に独創性は乏しいが、基礎情報の蓄積が展覧会や講演会などの博物館事業の内容充実に貢献するものであることは明らかであり、調査自体は着実に進んでいる。建て替え工事に伴って平常展示館が閉鎖しているため、館内での成果公表ができていないが、これはやむを得ない事情であり、減点要素とすべきではないと考えるので、調査の進捗状況が良好であることを重視した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査の進捗は極めて順調であり、対外的な成果公表についても実現できている。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-4-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4)特別展覧会「古事記 1300 年 出雲大社大遷宮 大出雲展」に関する調査研究((5)－①)		
【事業概要】 古事記が編纂されて1300年という節目の年にあたる平成24年度に開催する特別展覧会「大出雲展」開催のための調査研究。現地調査は島根県及び島根県立古代出雲歴史博物館の学芸スタッフと共同で行った。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 浅湊 毅
【スタッフ】 村上隆（学芸部長）、赤尾栄慶（上席研究員）、鬼原俊恵（列品管理室長）、山本英男（美術室長）、山下善也（連携協力室長）、大原嘉豊（研究員）、呉孟晋（研究員）、羽田聡（研究員）、尾野善裕（工芸室長）、山川暁（教育室長）、永島明子（主任研究員）、末兼俊彦（研究員）、宮川禎一（企画室長）、水谷亜希（研究員）、池田素子（アソシエイトフェロー）、岡田愛（アソシエイトフェロー）（以上京博）、久保智康（名誉館員）			
【主な成果】 展覧会の開催が24年7月からであるため、現地における社寺調査は昨年度までにほぼ済ませている。本年は補足調査と写真撮影を若干行った以外は、昨年までの調査の成果に基づき、展覧会のための作品選定及び会場での展示案の作成、図録の原稿執筆及び編集、作品の安全な借用、梱包、輸送、展示、撤収、返却を行った。			
【年度実績概要】 ・調査で得られた知見をもとに、作品の特徴に応じた梱包方法を考え、島根から京都への貴重な文化財の移動に備えた。その結果、軽微な事故もなく無事作品の移動、展示、返却を行なうことができた。 ・展覧会には202件の作品を出品した。この中には17件の国宝と41件の重要文化財が含まれる。 ・これらの作品を全体で6章にわけて展示を行なった。 ・上記出品作について、島根県立古代出雲歴史博物館と分担して図録解説及び会場解説の執筆を行った。 ・図録作成にあたっては、調査の成果を踏まえ、おなじく島根県立古代出雲歴史博物館と共同で、6本の論文と6編の扉解説を執筆した。 ・これまで開催された出雲に関する大規模な展覧会は、銅鐸、銅剣、はにわなどの考古遺品が中心であったが、本展においては、それにとどまらず、出雲地方の宗教文化にも焦点をあてて展示構成を行なうなど、これまでになく新たな視点からの展示を心がけた。 ・全6章のうち、特に後半の第5章、第6章では、当館と島根県立古代出雲歴史博物館との共同調査による社寺調査の結果発見ないしは重要性があらためて確認された作品を中心に展示を行ない、展示及び図録には調査の成果を十分に反映することができた。 ・展覧会会期中に、調査の成果に基づく5回の一般向け講座（土曜講座）を行ない、各回とも定員を超える事前申込みがあった。			
【実績値】 展示への反映：1回 論文数：6本（島根県立古代出雲歴史博物館と分担執筆）(①) 解説数：202点（島根県立古代出雲歴史博物館と分担執筆） 発表回数：5回（島根県立古代出雲歴史博物館と分担発表）			
【備考】 論文 ①古代出雲の山寺と社、出雲神話のバリエーション-スサノオを中心に、青木遺跡と出雲の神社、山陰地域の青銅器文化と大量埋納、神々の国の仏たち古代を中心に、岩屋寺旧蔵の十一面観音坐像をめぐって 他5件			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：古事記編纂1300年という記念の年にふさわしい展覧会に向けての調査であった。 独創性：考古遺品にとどまらず、近世にいたるまでの文化財を対象として調査を行った。 発展性：調査の成果はさらなる展覧会の企画立案へとつながるほど充実しているため。 効率性：限られた時間のなかで出雲全域に眼を配り調査を行うことができた。 継続性：今回の調査と展覧会の開催にともない島根県及び同県内の社寺と友好な関係を築くことができた。 正確性：調査の成果を展覧会、図録、講演のかたちで一般に広く、正しく伝えることができた。						

2. 定量的評価

観点	展示への反映	論文数	解説数	発表回数		
判定	A	A	A	A		
判定理由 展示への反映：バラエティあふれる出雲文化を紹介するにあたって多方面にわたる作品を調査し、展示を行った。 論文数：様々な分野の作品について充実した内容の論文を多数図録に掲載することができた。 解説数：様々な分野の作品について充実した内容の解説を多数図録に掲載することができた。 発表回数：土曜講座で5回の講演を行い各回とも150名以上の聴講者を集めた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	限られた時間のなかで、充実した内容の調査を行なうことができ、島根県の諸機関及び社寺と友好な関係を結ぶことができた。この関係をさらに発展させ、新たな調査及び展覧会へとつなげてきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査の成果を十分に展覧会に反映することができた。展覧会が終了したから調査も終了するというのではなく、本展をひとつのステップとしてさらなる調査、研究へとつなげていきたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4)特別展覧会「宸翰 天皇の書―御手が織りなす至高の美―」に関する調査研究((5)－①)		
【事業概要】 24年10月13日(土)～11月25日(日)まで開催される特別展覧会「宸翰 天皇の書―御手が織りなす至高の美―」を視野にいれ、京都国立博物館の館蔵品と寄託品、及び他機関の所蔵する文化財を調査する。あわせて、これらにより得られた成果を講座あるいは誌上などで公開することにより、広く社会に還元する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室研究員 羽田 聡
【スタッフ】 志水一行(花園大学歴史博物館研究員・調査員)			
【主な成果】 以前から継続する博物館内外での宸翰(天皇の書)の調査をふまえ、24年10月～11月にかけて、特別展覧会を開催、あわせて展覧会図録を刊行し、国際シンポジウムや関連する講演・講座を実施した。総じて、各時代を彩った天皇の個性豊かな文字、時代とともに変遷する書風、日本美術における「書」の独自性を歴史的・美術的な側面から広く紹介することができた。			
【年度実績概要】 ・前年度までに館蔵品と寄託品の調査は終了させているが、他機関より借用する作品のうち、仁和寺、鳩居堂、随心院、実相院(以上、京都市内)、東北大学附属図書館、瑞泉寺、金剛寺(以上、京都市外)所蔵分について調査を実施した。また、展覧会図録に図版を掲載するにあたり、写真の存在しない鳩居堂、泉涌寺、随心院、実相院、法金剛院、陽明文庫(以上、京都市内)、瑞泉寺、金剛寺、観心寺(以上、京都市外)所蔵分について写真撮影を行った。 ・24年10月13日～11月25日にかけて、京都国立博物館特別展示館において、全室を使用した特別展覧会「宸翰 天皇の書―御手が織りなす至高の美―」を開催し、歴代天皇の書、及び関連作品144件(うち国宝17件、重要文化財66件、重要美術品11件)を展示した。あわせて刊行された展覧会図録には、論文1篇を収録する他、144件すべての作品にたいして詳細な解説と史料翻刻、巻末には参考文献や花押・署名・印章リストを付し、資料集として活用できるよう、十分な配慮をほどこした。 ・展覧会の関連事業として、国際シンポジウム、講演・講座を開催した。前者においては、国内外からパネリストを招聘し、日本と中国の「天皇・皇帝の書」における共通点や差異について、多角的な討論を行った。後者は、他機関の研究者にも講師を依頼し、歴史と美術の両側面から宸翰の魅力を再認識する機会を提供した。			
【実績値】 展示への反映：1回 公刊図書数：1篇(①) 公開論文数：1篇(②) 発表件数：6回(③～⑧) (参考値) 撮影資料点数：15点			
【備考】 公刊図書 ①京都国立博物館編『宸翰 天皇の書―御手が織りなす至高の美―』(京都国立博物館 24年10月) 公開論文 ②羽田 聡「宸翰 天皇の書―過去から未来へ―」(『宸翰 天皇の書』 24年10月) 発表 ③羽田 聡「宸翰(天皇の書)の資料論」(毎日新聞書道会 24年8月12日) ④下坂 守「宸翰と古筆―桃山・江戸時代の天皇の手習い―」(奈良大学教授 24年10月13日) ⑤上島 享「中世の天皇と宗教―手印が捺された文書を中心に―」(京都府立大学准教授 24年10月27日) ⑥丸山猶計「宸翰の薫りと三跡―筆致に宿るもの―」(九州国立博物館主任研究員 24年11月10日) ⑦羽田 聡「宸翰―資料と美術のコンチェルト―」(京都国立博物館研究員 24年11月24日) ⑧国際シンポジウム 「天皇・皇帝の書をめぐって」(パネリスト国内1名、国外2名 24年11月18日)			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性・効率性：本プロジェクトに関わる調査は、他の事業と兼ね合いながら効率よく、継続的に行ってきたものである。その成果として実施された特別展覧会「宸翰 天皇の書―御手が織りなす至高の美―」は、歴代天皇の遺墨をほぼ網羅し、講座あるいは国際シンポジウムの開催とあわせ、広く内容が公開された。 独創性・正確性：刊行された展覧会図録は、調査過程で得た知見を加味し、歴史と美術の両側面から独自の視点に立脚し宸翰を捉えなおすことで、学術的な精度の高い情報を提供した。 継続性・発展性：作品に関する情報は、展覧会で帰結するものではなく、今後、博物館の有する文化財情報の蓄積にも汎用しうる。						

2. 定量的評価

観点	展示への反映	公刊図書数	公開論文数	発表件数		
判定	A	A	A	A		
判定理由 展示への反映：研究成果を展示内容等に反映させることができたため。 公刊図書数・公開論文数：継続的に行ってきた調査成果をもとに刊行した展覧会図録『宸翰 天皇の書―御手が織りなす至高の美―』は、通史的な論考とともに、作品 144 件につき詳細な解説と翻刻、巻末には参考文献や花押・署名・印章リストを収録し、学術的な精度の高い情報を提供した。 発表件数：展覧会に関連する国際シンポジウム、講演・講座を開催し、アンケートにおける満足度が 88% と、本プロジェクトの目的の一つである成果の還元という点においても、十分な実績をあげることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査の成果をふまえた特別展覧会「宸翰 天皇の書―御手が織りなす至高の美―」を開催し、かつ、関連事業を実施することにより、本プロジェクトの目的を達成した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館の内外にわたり、文化財の調査を実施したことにより、その歴史的あるいは美術的な位置付けについて、より正確な評価をくだすことが可能となった。これにより得られた情報は、2014 年 3 月に開館予定の新平常展示館における展示に活用しうる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4)特別展観「国宝 十二天像と密教法会の世界」に関する調査研究((5)－①)		
【事業概要】 特別展観「国宝 十二天像と密教法会の世界」の出展候補作品について、関連調査を行った。特に、仏教美術研究上野記念財団の助成により仁和寺御経蔵所蔵の守覚法親王関係仁和寺御流聖教の調査を中心として実施した。仁和寺御経蔵所蔵の守覚法親王関係仁和寺御流聖教については、名古屋大学大学院文学研究科教授阿部泰郎を代表とする文部省科学研究費（平成7-8年度「仁和寺文化圏と守覚法親王に関する文献学的研究」）等による調査の成果が既に公表されている。但し、従来の調査では国文学・日本史学の専門家が中心となっていたが、本調査では古文書学及び美術史学の専門家によって図像を含む聖教の制作年代等について既存調査成果の再検討を行うことを目的とした。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室研究員 大原嘉豊
【スタッフ】 赤尾栄慶(学芸部上席研究員)、浅湊毅(学芸部保存修理指導室長)、永島明子(学芸部連携協力室主任研究員)、羽田聡(学芸部企画室研究員)、末兼俊彦(学芸部企画室研究員)			
【主な成果】 (1)作品調査：24年8月22日、23日に仁和寺現地調査及び写真撮影実施。24年11月15日、16日東京国立博物館調査 (2)事業：仏教美術研究上野記念財団主催の研究発表と座談会「仁和寺御流を中心とした院政期真言密教の文化と美術」（25年1月14日開催）を実施した。 (3)成果：展覧会図録及びシンポジウムの開催によりその成果を論文及び作品解説として公表することができた。			
【年度実績概要】 (1)24年8月22日、23日に仁和寺現地調査及び写真撮影実施（参加者：大原・赤尾・羽田）。24年11月15日、16日に東京国立博物館調査実施（参加者：末兼）。 (2)上記の研究成果をもとに、仏教美術研究上野記念財団主催の研究発表と座談会「仁和寺御流を中心とした院政期真言密教の文化と美術」（25年1月14日）を開催し、関連諸学の専門家と知見の交換を行った。当館担当スタッフによる研究報告として、大原嘉豊「院政期における灌頂儀礼と守覚法親王―十二天屏風と山水屏風の成立に関連して―」が行われた。また、東京国立博物館では静岡・尊永寺所蔵金銅五種鈴の調査を行ったが、早期に寺外に流出した三鈷鈴（大阪市立美術館現蔵）の補作について、初めて室町時代に遡る可能性を指摘し、展覧会図録解説で公表することができた。 (3)論文 大原嘉豊「十二天屏風と山水屏風―院政期における灌頂儀礼の整備と守覚法親王との関係―」京都国立博物館特別展観図録『国宝 十二天像と密教法会の世界』（2013年） ・特別展観「国宝 十二天像と密教法会の世界」において、調査した守覚法親王関係仁和寺御流聖教17件を公開することができた。これは寺外初公開となり、多くの注目を集めた。			
【実績値】 展示への反映 1回 公開性 論文数1本、シンポジウム開催1回 調査件数 調査箇所2箇所約20件 資料記録 写真撮影枚数約200枚			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	S
判定理由 適時性：日本史学で聖教史料論が高まりつつある中、重要寺院の一級の聖教について公開報告を行ったため。 独創性：古文書学・美術史学の見地から聖教の評価判定を下して提示したことで関連諸学に有益な示唆を与えることができたため。 発展性：仁和寺は当館所在地近辺に位置する寺院であり、今後の調査協力関係について展望が開けたため。 効率性：短い時間・少ない人員で最大に近い効果を発揮できたため。 継続性：発展性と関連し今後の所蔵先寺院との協力関係が見込まれる点、及び研究の将来性を評価できるため。 正確性：他の既存調査成果を基礎にそれを他の専門分野から再検証することを主眼とし、件数も厳選したため。						

2. 定量的評価

観点	展示への反映	公開性	調査件数	資料記録		
判定	A	S	A	A		
判定理由 展示への反映：該当展覧会の準備調査の側面があり、その目的は達成されているから。 公開性：展覧会で調査対象とした門外不出の一級聖教を17件まとめた形で寺外初公開を実現できた点、展覧会図録において論文及び作品解説によって最新の研究成果を公刊媒体で提示できた点、及びシンポジウムの開催で研究者に広くその価値を知らしめた点による。 調査件数：当初予定を完遂できたため。 資料記録：写真撮影を行い、当初予定を完遂できたため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査及び撮影を計画通りに実施することができ、展覧会にその成果を十分に反映させることができた。また、調査対象の展覧会への出展、シンポジウムの開催でその成果の公表を適切に行い得た。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通りに調査を実施し、展覧会も予定通り開催することができた。また、研究成果の公表も適切に行い得た。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 特集陳列「成立 800 年記念 方丈記」に関する調査研究((5)－①)		
【事業概要】 特集陳列「成立 800 年記念 方丈記」(25年1月8日～2月11日) 鴨長明が建暦二年(1212)三月に執筆し、鎌倉時代を代表する随筆として知られる『方丈記』の最古の写本である大福光寺本『方丈記』(重文)を中心に関連する資料の調査を実施。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 赤尾栄慶
【スタッフ】 羽田聡(研究員)、大原嘉豊(研究員)、鬼原俊枝(列品管理室長)			
【主な成果】 鴨長明が著した仏教説話集である『発心集』の断簡を調査し、巻第二の「安居院聖行京中時隠居僧値事」の一節であることを確認し、書写年代も調査の結果、鎌倉時代とした。同じく、鴨長明が著した歌論書『無名抄』(重文、東京国立博物館蔵)も調査し、『方丈記』を含めた鴨長明の三大著作を展示できるようにし、全体で18件の作品を選択した。			
【年度実績概要】 ・大福光寺本『方丈記』(重文)の調査を実施し、紙数や行数、全体の法量などを確認した。 ・「二十一代集」に入選した鴨長明の和歌を調査し、展示スペースを考慮して、その中から六冊を選んだ。 ・『方丈記』に記されている生活ぶりから、信仰に関連する仏画や写経を選定した。 ・大福光寺本『方丈記』(重文)が漢字片仮名交じりの表記であることから、同時代の漢字片仮名交じりで表記された書及び絵巻を調査し、展示用に6件を選定した。 ・鴨長明の和歌や『発心集』などには、本文が読み解けるように読み本を付けるように努めた。 ・平成25年1月12日に『方丈記』研究の第一人者浅見和彦成城大学教授による関連土曜講座「鴨長明、京都を歩く」を開催した。			
【実績値】 調査 4回 現地踏査 1回 展示への反映 1回 (総作品数18件、そのうち国宝2件、重文11件、重要美術品2件) 発表回数 1回(土曜講座)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-4-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性:『方丈記』成立800年を記念した。 独創性:漢字片仮名交じり文という表記方法に注目した。 発展性:漢字片仮名交じりという表記に対する研究を進める。 効率性:少ない作品数で『方丈記』の特徴を提示した。 継続性:日本の文字における片仮名使用の役割について、今後の研究課題となる。 正確性:『方丈記』の写本に対する正当な理解を深める。						

2. 定量的評価

観点	調査	現地踏査	展示への反映	関連講座		
判定	A	A	A	A		
判定理由 調査:4回の調査に基づき、特別展示館3室分の展示スペースを勘案し、18件の作品を選定した。 現地調査:現地踏査に基づいて、河合神社、同境内に復元された方丈、日野の山中の方丈石の写真パネルを掲出し、理解を深めるように努めた。 展示への反映:調査をふまえ、漢字片仮名交じり表記の作品を6件展示した。 関連講座:土曜講座では、申し込み人数が350人あり、抽選で220人を選び、当日は会場の収容人数である定員いっぱいの190人余りの参加を得た。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	日本三大随筆として知られる『方丈記』成立800年を顕彰した展示内容で、最古の写本である大福光寺本の全文が鑑賞できるように配慮し、入館者の理解を深めるように可能な限り、読み本を掲出した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	全体18件のうち、国宝2件、重文11件という充実した展示内容となった。日本の文字における片仮名の機能について、今後とも調査研究すべき内容となった。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-4-5

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 特別展覧会「狩野山楽・山雪」に関する調査研究((5)－①)		
【事業概要】 25年3月30日～5月12日に開催する特別展覧会「狩野山楽・山雪」の内容を固める			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	連携協力室長 山下善也
【スタッフ】 (外部研究者) 奥平俊六(客員研究員・大阪大学教授)、五十嵐公一(調査員・兵庫県立歴史博物館学芸員)、吉田智美(調査支援ボランティア・同志社大学院生)、森光彦(同前・京都市学校博物館学芸員)、大橋あきつ(同前・京都大学大学院生)、浦上彩音(同前・同前)			
【主な成果】 出品候補作品の調査・出品交渉、関連文献の調査等を行った。			
【年度実績概要】 ・以下の狩野山楽・山雪作品を所蔵する寺社・博物館・美術館等に出張して調査を行い、出品交渉を行った。 大阪市・四天王寺、名古屋市徳川美術館、福井県・善導寺、佐賀県立博物館、滋賀県・彦根城博物館、滋賀県・常德寺、滋賀県・大通寺、八幡市・神応寺、京都市・法界寺、京都市・雑華院、京都市・大覚寺、京都市・正伝寺、京都市・泉涌寺、京都市・東福寺、静岡市・静岡県立美術館、奈良市・大和文華館、東京都・日本相撲協会相撲博物館、東京・大阪・京都の個人所蔵家宅多数 ・京都工芸繊維大学附属図書館に月2、3回(計14回)のペースで訪問し、同館が所蔵する、故・土居次義氏の山楽・山雪調査ノートを調査し、情報収集を行った。この調査が、上記の調査・出品交渉のいくつかにつながった。 ・24年6月12日～6月24日、アメリカ合衆国、アイルランド共和国に出張し、以下の狩野山楽・山雪作品を所蔵する美術館等を訪問し、調査・出品交渉を行った。 ミネアポリス・ミネアポリス美術館、ニューヨーク・メトロポリタン美術館、ニューヨーク・パークコレクション、ニュージャージー・バーンスタインコレクション、ダブリン・チェスタビーティライブラリ ・当館所蔵及び寄託の狩野山楽・山雪作品を調査した。 以上を通じ、展覧会出品作品の選定・依頼・作品の詳細な情報収集を実現した。			
【実績値】 調査回数 80回 収集資料数 約300点 調査情報 1件(展覧会図録)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-4-5

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	S	A	S	A
判定理由 適時性：平成 25 年 3 月 30 日～5 月 12 日に開催される展覧会に合わせた準備で適時であった。 独創性：山楽・山雪（京狩野初期）に絞った大規模な調査研究は他に例がない。 発展性：18 世紀以降の京都の絵画へと展開できる調査研究となった。 効率性：客員研究員・調査員・調査支援ボランティアと協力し調査を進め効率をあげた。 継続性：展覧会テーマとしては初めてのものであり、今後新たな作品の発見につながる。 正確性：展覧会図録に反映させるべく調書作成につとめてきたため正確な調査ができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査情報			
判定	S	A	A			
判定理由 調査回数：80 回は十分な回数。 収集資料数：展覧会開催に十分な資料数約 300 点を収集できた。 調査情報：展覧会図録 1 冊（376 頁）を出版できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	美術雑誌等をはじめ、予想外に多い期待感が示されている点で、まずは高く自己評価したい。この高い自己評価を、今後の活動の向上につなげていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	展覧会実現に向けて調査を着実に進めることができた。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-4-6

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 特別展覧会「魅惑の清朝陶磁」に関する調査（学術研究助成基金助成金）（(5)－①）		
【事業概要】 平成25年度事業として予定している特別展覧会「魅惑の清朝陶磁」の開催に向けて、出品候補作品の選定を進めるべく、日本国内で伝世・出土した清朝陶磁と、清朝陶磁の影響下に製作された日本陶磁を広く調査し、展覧会内容の充実を図る。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室長 尾野善裕
【スタッフ】 谷口愛子（調査員・京都工芸繊維大学特任准教授）			
【主な成果】 日本国内伝世・出土の中国清朝陶磁器41件の調査を実施し、メモ写真の撮影と共に調書の作成を行った。展示候補作品を含む、寄託品22件・寄贈品60件を受け入れた。			
【年度実績概要】 ・平成25年度に開催を計画している特別展覧会「魅惑の清朝陶磁」に向けて、出品作品の選定を進めるため、候補作品を所蔵している京都府立総合資料館・沖縄県立埋蔵文化財センター・愛知県陶磁資料館・廣誠院・和泉市久保惣記念美術館・宛理堂文庫・古美術商（2軒）・彦根城博物館・法金剛院・長崎歴史文化博物館・パラミタ・ミュージアム・京都市美術館などにて作品調査を行った。 ・過年度の調査で中国清朝陶磁を所蔵していることを把握していた京都の3カ寺に対して、展覧会への協力を要請し、その結果、新規に22件の中国清朝陶磁を寄託品として受け入れることができた。 ・永年にわたって作品を寄託してこられた個人所蔵者2名から、展示候補作品を含む60件に及ぶ作品の寄贈を受けた。 ・展覧会準備の過程で知りえた新情報に基づいて、積極的に成果公表を行うべく、論文1本（①）、広報誌のコラム1本（②）を執筆した。			
【実績値】 調書作成件数 41件 調査日数（館外） のべ15日 新規寄託品 22件 寄贈品 60件 論文等数 2件（①②）			
【備考】 論文等 ①尾野善裕『『金瑱瑯』と呼ばれた器』『王朝文化の華 陽明文庫名宝展 宮廷貴族近衛家の一千年』NHK京都放送局・NHKプラネット近畿・読売新聞社 ②「うらんだーのやちむん『金瑱瑯』『京都国立博物館だより』176号 京都国立博物館			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	B	B	
判定理由 適時性：当初計画していた生産地・中国での調査は、日中関係の悪化という政治的状況にかんがみて自粛し、全く行っていないが、平成25年度の特別展覧会開催に向けて、必要不可欠な国内調査は粛々と進めたため。 独創性：これまで、美術史研究の上では殆んど注目されてこなかった日本伝世の中国清朝陶磁を意識的に採り上げ、出土品とも比較できるように構成した展覧会は過去開催されたことがなく、展覧会の企画自体は十二分に独創性をもつものにできると自負しているため。 発展性：過去、等閑視されてきた日本伝世の中国清朝陶磁の存在が周知されれば、新たな作品の発見につながる確率は高いため。 効率性・継続性：平常展示館建替工事に伴う各種会議や、平成25年度より館務の一環として担当することになった京都大学大学院への出講などにより、勤務時間を寸断されることが多く、継続的かつ効率的に業務を進めるには困難が多かった。						

2. 定量的評価

観点	調書作成件数	調査日数	寄託・寄贈品数	論文等数		
判定	C	C	A	A		
判定理由 調書作成件数・調査日数：展覧会予算圧縮の為に新聞社への出資依頼や、出資条件としての展覧会巡回に伴う巡回先との調整など、付随的業務が一段と厳しさを増す経済事情の中で当初予想を超えて増大しており、上記の他の要因とも相まって、必ずしも調査や出品作品選定に十分な時間をかけることができていないため。 寄託・寄贈品数：調査にあまり時間をかけることができなかった割には、関連する作品として22件の新規寄託品・60件の寄贈品を受け入れることができ、この点では展覧会の開催に向けて大きく前進させることができたため。 論文等数：科学研究費の交付を受けた調査研究事業としては、調査成果の一部を別の展覧会（陽明文庫展）の図録原稿に反映させたり、広報誌（京都国立博物館だより）に調査にまつわる逸話を逸早く紹介したりするなど成果公表ができたため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当面の大目標である特別展覧会の開催が必ずしも危ぶまれるほどではないものの、結果的に予定していた調査を縮小せざるを得なくなった。特に、進捗はかばかしくない図録掲載用の写真撮影については、平成25年度に重点的に取り組む必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

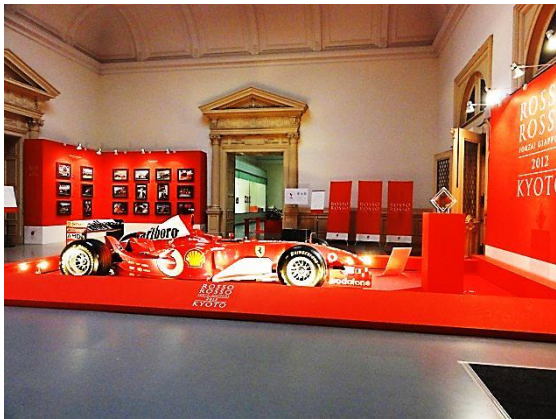
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	単年度でみると必ずしも満足のいく実施状況ではないものの、先行して昨年度までに行っていた調査の蓄積があるため、当面の大目標である特別展覧会の開催には漕ぎ着けられるとの見通しを持っているため、ほぼ順調と評価する。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-4-7

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4) 特別展示「【時空を超えた運命の出会い】古代青銅鏡とフェラーリ F 1 美の競演」に関する調査研究((5)－①)
【事業概要】 イベント展示「【時空を超えた運命の出会い】古代青銅鏡とフェラーリ F 1 美の競演」(24 年 12 月 14 日～12 月 16 日) 現代のハイテクを駆使したフェラーリと古代ハイテクの象徴である古代青銅鏡を展示した。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	学芸部長 村上 隆
【スタッフ】 村上隆(学芸部長)、宮川禎一(企画室長)、植田義雄(総務課長)、中久保洋子(課長補佐)、櫻川 稔(事業推進係長)、白石大作(事業推進係主任)、姫野千晴(事業推進係係員)	
【主な成果】 現代の先端技術で再現した京都国立博物館所蔵の三角縁神獣鏡の鏡面に現代最高レベルのレーシングカーが映る展示は、来館者に大きなインパクトを与えた。また、入場無料の展示としたことも、普段博物館に足を運ばない人たちに博物館の存在をアピールすることができた。	
【年度実績概要】 古代青銅鏡研究の一環として、制作当初の材質と形状を正確に再現した復元品を現代の最新技術で制作してきたが、この研究の成果を、現代技術の粋を結集した F 1 レーシングカーと対峙して展示することで、古代と現代の時空を超えた技術の競演が実現した。一見ミスマッチなこの両者が一堂に会することでこれまで経験したことがない展示空間を演出することができた。これからの博物館の可能性を探る試みとして開催した意義は大きいといえよう。	
 	
特別展示館エントランスホールに展示したフェラーリ F 1 と復元した古代青銅鏡の展示風景	
【実績値】 展示作品数 : 古代青銅鏡(重要文化財 犬山市東之宮古墳出土)6 件、復元鏡 1 件、レーシングカー 1 件(館内)、10 件(館庭)、パネル 50 件、その他 安全な輸送 1 件 解説・論文数 4 件 観覧者数 : 4,106 人 (参考値) 図録販売数: 294 冊	
【備考】 この企画は、ROSSO×ROSSO 委員会(山口正巳会長)からの要請を受けて実施した。入場無料とし、京都国立博物館文化財保護基金への寄付を募った。	

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-4-7

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	B	A
判定理由 適時性：古代青銅鏡の調査研究成果を速やかに展示公開することができた。 独創性：現代のレーシングカーと古代青銅鏡を一緒に展示することは世界で初めての試みである。 発展性：これからの博物館の可能性を試す展示であった。 効率性：3日間の展示にもかかわらず、迅速な準備と撤収ができた。 継続性：同様の企画を継続的に実施できるかどうかは不確定である。 正確性：展示計画、警備計画に則って実施され、事故・トラブルもなく無事終了できた。						

2. 定量的評価

観点	展示作品数	安全な輸送	解説・論文数	観覧者数		
判定	A	A	A	A		
判定理由 展示作品数：古代青銅鏡（重要文化財 犬山市東之宮古墳出土）6件、復元鏡1件、レーシングカー1件（館内）、10件（館庭）、パネル50件、その他（特別展示館のエントランスホール、第1室、第10室を使用） 安全な輸送：高価なレーシングカーを全くトラブルなく、運搬・展示できた。 解説・論文数：開催が短期間ではあったが図録を作成し、観覧者の鑑賞の便宜を図ることができた。 観覧者数：3日間で4千人を超える観覧者を集めることができた。						

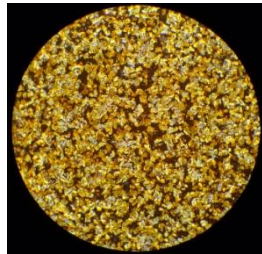
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	・年次計画にはなかったが、博物館への関心を高める展示として一定の成果を上げた。 ・これまで博物館とは縁のなかった人たちに博物館へ来る機会を与えることができた。 ・この展示期間にホームページへのアクセスが急増した。 ・今後も新規性のある企画を随時計画していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	・年次計画にはない展示ではあったが、中期計画を補完するものとして開催した意義は大きい。 ・これまでにないレイアウトを試みたので、今後の展示構成に大きく反映できる成果を上げた。 ・博物館に興味を持つ人たちを新規に開拓することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4. 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 漆工芸に関する調査研究(科学研究費補助金)((5)－①)		
【事業概要】 科学研究費補助金(若手研究(A))「内外伝世品の調査ならびに比較に基づく京都製蒔絵の歴史的研究」の一環として、国内外の蒔絵の伝世品を調査し、既知の基準作と比較し、また伝世の経緯を伝える史料を研究することによって、近世から近代への微妙な様式変化や、京都とそれ以外の地域の蒔絵の差異を見極めることを目標と定め、京都の蒔絵史を捉えることを目的とする。また海外の所蔵者や研究者との交流を深め、将来の共同研究の在り方を探る。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	連携協力室主任研究員 永島明子
【スタッフ】			
【主な成果】 昨年度のスイスでの調査に引き続き、本年度は国内に伝世する東京の白山松哉とその弟子たちによる蒔絵の技法をつぶさに観察することができ、おぼろげながら京都の伝統技法とのちがいを知ることができた。ボストン美術館やハーバード大学美術館に所蔵されている蒔絵作品をまとめて見ることができ、19世紀末から20世紀初頭にかけてビゲローや岡倉天心らが蒐集した蒔絵の実態と、六角紫水の蒔絵図録原稿を確認することができた。フランスのアントワヌ・ヴィヴネル美術館、ルーヴル美術館、ディジョン美術館では、日本の開国前に収集されたことが明確なティエール大統領のコレクションや、18世紀フランスにおいて蒔絵を模造した工房のストックなどの新資料を調査することができ、ヨーロッパにおける京都製蒔絵の受容のありようをより鮮やかに知ることができた。			
【年度実績概要】 24年6月に京都市内個人蔵の蝶形卓と白鶴美術館所蔵の蝶形卓を調査研究し、近代の奈良製の蒔絵螺鈿について考察を深めた。24年10月には永青文庫にて高野松山や白山松哉の作品を数十点調査し、東京藝術大学と東京国立博物館で所蔵する白山松哉作品と関連資料を調査した。24年11月にはボストン美術館とハーバード大学美術館で100点近い漆器を調査研究した。25年1月末から2月頭にはアントワヌ・ヴィヴネル美術館、ルーヴル美術館、ディジョン美術館で計275件の漆器を調査した。3月にはルーヴル学校博士過程に籍を置く今井朋氏を招聘し、フランス19世紀の美術コレクションについての情報を提供してもらった一方、明治京都の工芸界に関する文献情報を提供するなど情報交換を行なった。			
 ルーヴル美術館 調査作品  アントワヌ・ヴィヴネル美術館 調査風景			
【実績値】 調査作品数 386件 撮影カット数 6293カット			
【備考】 2月にフランスでの調査予定と3月に海外研究者招聘の予定あり。			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	S	S
判定理由 適時性：現代の京漆器の担い手たちからの要請もあって企画された事業。海外調査や海外の研究者たちとの交流や情報交換を実施できたため。 独創性：輸出漆器のデータから国内の漆器生産の状況を知る手法の独創性が認められて科研の助成対象となったため。 発展性：調査結果をその場で所蔵者に還元でき、今後の展示や執筆物に活かされる情報を収集できたため。 効率性：調査後の資料を整理する時間を充分にとれていないことと、非常に限られた時間の中で通訳やコーディネータを使わず海外調査を実施せざるを得なかったため。 継続性：昨年からの継続事業であり、研究の大枠は十数年来、一環して続いており、比較データの蓄積ができたため。 正確性：システムチックな調査と顕微鏡画像を含む比較データの蓄積ができたため。						

2. 定量的評価

観点	調査作品数	撮影カット数				
判定	A	A				
判定理由 調査作品数・作品カット数：限られた時間と予算の中で正確なデータを収集するという観点から十分に成果を認める数値を達成している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	招聘者の都合で計画の変更があったものの、年2回の海外調査と海外研究者を当館へ招くという年次計画を完了できたので、順調である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	科学研究費補助金申請時に計画した通り年度実績概要に述べた調査や研究交流が実施されており、当該年度計画を達成している。次年度5月には、当館の研究紀要『学叢』紙上にて、今年度までの調査内容の一部を報告する。また、今年度の調査の折に下打ち合わせをすることのできた在仏研究者を招聘する。これまでのノウハウを活かし、ひきつづき英仏での作品調査を遂行する。

【書式B】
(様式1)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4513-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 館蔵品・寄託品等の基礎的・総合的調査を進め、作品の適切な収集及び魅力的な展示に反映させる。((5)-①)		
【事業概要】 社寺・団体・個人等所蔵の文化財に関する情報を恒常的に収集して新規購入・寄贈・寄託候補作品をリストアップし、綿密な調査に基づく調書を作成して陳列品鑑査会に付議し、コレクションの拡充を図る。新収蔵品は勿論のこと、既存の館蔵品・寄託品についてもより詳しい調査をおこない、その成果を名品展及び特別展・特別陳列等に反映させる。調査に際しては積極的に客員研究員・調査員の助言を仰ぎ、客観的かつ信頼度の高い成果を得ることに努める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 西山 厚
【スタッフ】 岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、野尻忠（企画室長）、岩井共二（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、吉澤悟（情報サービス室長）、斎木涼子（教育室員）、岩戸晶子（列品室員）、清水健（主任研究員）、北澤菜月（情報サービス室員）、山口隆介（美術室員）、永井洋之（工芸考古室員）、原瑛莉子（企画室員）、稲本泰生（前教育室長）			
【主な成果】 仏教美術及び奈良に縁の深い文化財を柱とする当館の運営方針に沿って精選された文化財を、新たに館蔵品・寄託品に加えた。受け入れに際しては詳細な調査を実施した。名品展では、収蔵施設の修理等の事情で一時的に寄託された近在社寺所蔵の重要作例を、調査の後に展示（特別公開）した他、ここ数年に修理された文化財をまとめた形で公開するなどの実績を挙げた。館蔵品・寄託品等の継続的な調査の成果は、展示会場内の解説や各種刊行物等に反映させた。			
【年度実績概要】 ・新規購入・寄贈・寄託候補作品について調査研究を行い、その成果を基に作成した詳細な調書に基づいて、新たに 2 件の文化財を館蔵品として購入し、1 件の寄贈を受け、13 件の文化財を寄託品として受け入れた。 ・桜井市外山区所蔵の木造阿弥陀如来坐像（奈良県指定文化財）は、本体の修理後、本堂の建て替えが完了するまでの間、当館で寄託を受けることになり、名品展にて特別公開（24 年 6 月 26 日～）するとともに、調査成果を展示解説文に反映させた。 ・西新館で特集展示「新たに修理された文化財」（24 年 12 月 26 日～25 年 1 月 20 日）を開催した。これは館蔵品を中心に近年修理を受けた文化財を選定し、公開するもので、当該品の調査研究成果を、会場における解説・パネル等に反映した。 ・客員研究員と調査員の助言を仰ぐための調査会を 14 回実施した。			
			
木造阿弥陀如来坐像（外山区所蔵）			
【実績値】 客員研究員・調査員の調査回数（延べ人数） 14 回（16 人） 購入・寄託に向けた文化財調書の作成枚数 16 件分 展示への反映 3 回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4513-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：寄託・購入とも、時宜に適ったものを受け入れた。 独創性：当館が専門とする仏教美術の基礎研究の土台に立って、文化財調書を作成できた。 発展性：購入品には新発見の資料もあり、今後の研究の進展に期待できる。 効率性：展示会場の広さに制限があるなかで、受け入れた文化財を年度内に展示できた。 継続性：当館がこれまで続けて来た仏教美術研究の基礎に基づく文化財の調査・収集・展示ができた。 正確性：購入・寄贈のために作成した文化財調書は、外部委員による審査においても了承される的確な内容であった。						

2. 定量的評価

観点	客員研究員・ 調査員の調査回数	文化財調書 作成枚数	展示への反映			
判定	A	A	A			
判定理由 客員研究員・調査員の調査回数：限られた時間と予算のなかで、14回の調査会を実施できた。 文化財調書作成枚数：新規に受け入れる文化財の全てについて調書を作成できた。 展示への反映：展示会場の広さに制限がある中で、受け入れた文化財のうち3点を年度内に展示できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	仏教美術及び奈良関係の文化財を中心としたコレクションの充実や、館蔵品・寄託品の有効な活用に向けた調査研究は、これらの分野における調査研究・展示において主導的な役割を果たし、長年の実績で不動の声価を得てきた当館にとって、最も基本的な活動の一つである。本年度もこれまでと同じく、質量両面において、当館に向けられたこのような社会的要請に応えるに十分な実績を挙げることができた。次年度以降も同様の業務を、当館の果たすべき責務として継続していかねばならない。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	作品調査に基づく館蔵品・寄託品の計画的収集や効果的な展示など、有形文化財の保存と活用を促進するという目標に沿って、作品の基礎的かつ総合的な調査を着実に進め、成果を積極的に公表している。当該項目については確実に実績を上げることのできる体制と業務サイクルがすでに確立されており、次年度以降も同様の活動を継続し、同レベルの成果を得ることが見込まれる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館蔵品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。(5)－①)		
【事業概要】 館蔵品・寄託品等に関する調査研究活動を、研究員の専門分野に沿い各自で、もしくは館内外の各種研究グループ（科研等）などを単位として、歴史学・考古学・美術史学等の人文諸学と関連づけた広い視野に立って展開する。その成果は当館における展示活動や講座、刊行物（各種展覧会図録及び研究紀要等）は勿論のこと、館外で行う学会・シンポジウム等における口頭発表・講演、各種学術誌等に掲載する論文等においても、積極的に公表する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 西山 厚
【スタッフ】 岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、野尻忠（企画室長）、岩井共二（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、吉澤悟（情報サービス室長）、斎木涼子（教育室員）、岩戸晶子（列品室員）、清水健（主任研究員）、北澤菜月（情報サービス室員）、山口隆介（美術室員）、永井洋之（工芸考古室員）、原瑛莉子（企画室員）、稲本泰生（前教育室長）			
【主な成果】 歴史学・考古学・美術史学等、各研究員がそれぞれの専門分野に沿って館蔵品・寄託品等の調査研究を行い、その成果は展示・刊行物・講座における作品解説等に反映された。調査研究活動の展開にあたっては、これを個人単位で行うだけでなく、研究分担者・連携研究者として各種科研に参加するなど、外部の研究プロジェクトにも積極的にに関わり、より広い視野に立って学界に貢献する実績を挙げた。			
【年度実績概要】 ・各研究員が各々の専門分野に沿って館蔵品・寄託品等に対する調査研究を実施し、その成果を特別展・特別陳列・名品展における会場パネル解説等、特別展・特別陳列図録『解脱上人貞慶』『古事記の歩んできた道』『頼朝と重源』『第64回正倉院展』『おん祭と春日信仰の美術』における論考と作品解説に反映させた。 ・毎月 1 回、講堂で実施するサンデートークにおいて、各研究員が各々の専門分野に沿った、多彩な調査研究成果の一端を発表した。 ・各研究員が各々の専門分野に沿った館蔵品・寄託品等に対する調査研究の成果の一端を、「奈良国立博物館だより」、読売新聞の連載「鹿園観照－奈良国立博物館で見る名宝」、特別展「解脱上人貞慶」「正倉院展」会期中の読売新聞の連載、「頼朝と重源」会期中の朝日新聞の連載等における作品解説で紹介した。 ・平成 24 年度文部科学省「国際共同に基づく日本研究推進事業」（法政大学国際日本学研究所「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」《研究代表者：法政大学・ヨーゼフ・クライナー》）に、研究員 3 名が参加。 ・科学研究費「近江の古代中世彫像の基礎的調査研究」（基盤研究（B）24320032）の研究分担者として、MIHO ミュージアム、大津市歴史博物館、長浜城博物館、岐阜県博物館の各施設において彫像の調査を実施した。 ・科学研究費「多数尊から構成される仏教尊像に関する調査研究」（基盤研究（B）24320034）の研究分担者として、大津市歴史博物館において尊像を調査した。 ・科学研究費「『ESD』」にアプローチする『地域・世界遺産教育』の創造」（基盤研究（B）10179864）の研究分担者として、世界遺産暫定リストに掲載の沖ノ島において現地調査を実施した。 ・科学研究費「大画面説話画の総合研究」（基盤研究（A）22242005）の研究集会において研究成果を報告した。 ・仏教美術協会研究助成金「仏教美術の調査と展示に関する基礎的研究（第 4 期）」による研究の一環として、楽浪文化財研究所（滋賀県）での彫像調査、大東急記念文庫（東京都）での古写経調査を実施した。			
【実績値】 口頭発表（うちサンデートーク実施回数 12 回）13 回 科研等研究プロジェクトへの参加（延べ人数）12 名 論文等発表本数 10 本（①～⑩） 新聞等掲載の作品解説 38 回			
【備考】 論文等 ①湯山賢一「関白の二条師嗣に充てた将軍・足利義満書状案」、『歴史読本』歴読古文書講座④2012 年 6 月号 ②岩田茂樹『日本の世界遺産』10 号 法隆寺（分担執筆、朝日新聞出版社、6 月 ③岩田茂樹「信楽・来迎寺の院快・院静・院禅作阿弥陀三尊像について」、『MUSEUM』640 号、10 月 ④内藤 栄「仏教工芸の様式分析」、『様式論－スタイルとモードの分析』（仏教美術論集 1）、竹林舎、5 月 ⑤内藤 栄「鶴林寺の工芸－鼈太鼓縁と銅梵鐘」、鶴林寺叢書 4『鶴林寺 信仰の諸相』、法蔵館、10 月 ⑥谷口耕生「南市町自治会所蔵春日宮曼荼羅試論」、『論宗・東洋日本美術史と現場一見つめる・守る・伝える』、竹林舎、5 月 ⑦谷口耕生「俱舍曼荼羅と天平復古」、林温編『仏教美術論集 第 1 巻 様式論－スタイルとモードの分析』、竹林舎、10 月 ⑧清水 健「奈良国立博物館蔵春日龍珠箱雑攷－内箱蓋表・蓋裏の図様をめぐって－」、『論集・東洋日本美術史と現場一見つめる・守る・伝える』、竹林舎、5 月 ⑨清水 健「仏画・垂迹画に見るやまと絵」、『別冊太陽 日本のこころ 2011 やまと絵－日本絵画の原点』、平凡社、10 月 ⑩清水 健「法隆寺戯画・落書考」、『日本美術全集 2 飛鳥・奈良時代Ⅰ 法隆寺と奈良の寺院』、小学館、12 月			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：貞慶没後 800 年に特別展「解脱上人貞慶」を開催し、研究成果を反映した図録を刊行するなど、時宜に適った研究を公表した。 独創性：「雨を祈る」「図像から彫像へ」など、当館収蔵品の綿密な研究に依らなければ成し得ない研究発表を実施できた。 発展性：各地で実施した仏像調査は、今後の新資料発掘への大きな礎となるものである。 継続性：人文科学の各分野の専門家を継続的に擁する当館でなければできない研究発表、たとえば「古地図を読みとく、再び。」「仏像調査からわかること」などを実施した。 正確性：各展覧会図録を正確な内容のものとすることができた。						

2. 定量的評価

観点	口頭発表	科研等研究プロジェクトへの参加	論文等発表本数	新聞等掲載の作品解説		
判定	A	A	A	A		
判定理由 口頭発表：当初計画どおり毎月 1 回のサンデートークを実施するなど当該研究の成果を公表できた。 科研等研究プロジェクトへの参加：それぞれの専門分野に即して、他機関のプロジェクト等に多数参画した。 論文等発表本数：必要な論文を的確に発表することができた。 新聞等掲載の作品解説：展覧会事業にも対応しながら、着実な実績をあげられた。						

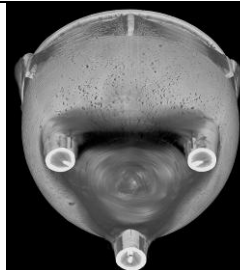
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	仏教美術及び奈良関係の文化財を中心とした館蔵品・寄託品等の調査研究を歴史学・考古学・美術史学等、各研究員の専門分野の観点から展開・深化させることは、当館における文化財の収集・展示等の活動をより充実させる上で、最も基本的な作業の一つである。この方面の文化財の調査研究においては、当館は国内随一の拠点として高水準の成果の公表が期待されているが、本年度もこうした社会的要請に、質量ともに応えられる実績を挙げることができた。次年度以降も同様の業務を、当館の果たすべき責務として、継続する必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究員各自の専門分野に沿った館蔵品・寄託品等の調査研究を展開し、学識・経験に裏付けられた高水準の成果を公表することは、適切な作品の収集計画や効果的な展示の計画など、有形文化財の保存と活用を促進し、博物館の活動を活性化することに直結する。本年度はこの点を視野に入れた調査研究を推進し、十分な実績を挙げることができた。当館学芸部は仏教美術・奈良関係の多様な文化財に様々な人文諸学の観点からアプローチできる人員構成と研究体制を備えており、次年度以降も同様の活動を継続し、成果を公表できる準備が確立されている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) X線CTスキャナによる青銅器・彫刻・漆工などの構造技法解析（科学研究補助金・学術研究助成基金助成金）（(5)－①）		
【事業概要】 日本国内で最も優れた中国古代青銅器コレクションである住友コレクションを所蔵する泉屋博古館の所蔵品 180 点を中心に、日本国内で所蔵されている中国古代青銅器を調査する。古代中国青銅器の鑄造技術の解明のための採り得る方法として、X線CTスキャナ調査、三次元計測による調査、三次元プリンタによる造形出力、鑄造実験による検証を実施する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
【スタッフ】 谷豊信（学芸部長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）、鳥越俊行（文化財課資料登録室主任研究員）			
【主な成果】 泉屋博古館の所蔵品を中心にX線CT、3Dデジタイザ、三次元プリンタ等の科学調査機器を用いて、中国古代青銅器の内部構造データを系統的に集積したデジタルアーカイブを構築した。この成果は、日本文化財科学会及び、中国考古学会で研究発表を行った。			
【年度実績概要】 ・九州国立博物館の展示に借用する文化財を中心に、CT調査や3Dデジタイザによる精密三次元計測を実施した。得られた成果は、文化交流展の展示に活用している。 ・この調査の中で特に注目しているのが青銅器の本体から伸びる立体造形の接続状況である。これまで器本体に付く大型の持ち手や立体装飾を中心に分析を重ね、持ち手や立体装飾の接続方法を考察した。そのなかで器外底から伸びる足の内部状況についても分析を行った。とくに中国古代の代表的器種である鼎について、その足を内部まですべて無垢で造るものと、内部に中子を挿入して円筒状に金属湯をまわすものの2種類が存在することを確認した。さらに後者では中子の形状を立体的に解析することに成功するとともに、中子と外型とを固定するための構造物（スペーサー）の形態も併せて確認することができた。 ・中子の形状は単なる円柱ではなく、断面V字状の溝をそれぞれ4本縦方向に走らせており、固定物（スペーサー）は方台形であることが判明した。そこで中子挿入形式で鑄造された足の状況について、さらに分析を進めた。特に脚の構造に焦点を当てて分析を進めた結果、三足すべてにこのような金属突起を確認することができた。さらにこの突起は三足とも同じ高さ存在することが判った。足の接地面から完全に同じ高さにある棒状の金属突起がすべて器の中心方向を向いていることが判明した。 ・器本体には六等分された位置に稜飾が付いている。このうち足に近い稜飾に范線が存在することから、外范は3分割であったと推測されるが、棒状の金属突起はその稜飾を結ぶラインと完全に一致している。このことから棒状金属突起は外范分割線に沿うように形成されたことが明らかになった。			 
【実績値】 調査回数：8回 資料収集数：50点 学会研究会等発表数：2回 日本文化財科学会、中国考古学会（①、②） 論文掲載数：1件 中国考古学会（③）			円鼎断面三次元像
【備考】 学会研究会等発表 ①「X線CTを利用した殷周時代青銅鼎の内部構造解析」日本文化財科学会第29回大会（24年6月23日） ②「X線CTスキャナ・3Dデジタイザを応用した文化財の調査研究と三次元データの活用」日本中国考古学会（24年12月15日） 論文 ③「X線CTスキャナ・3Dデジタイザを応用した文化財の調査研究と三次元データの活用」日本中国考古学会（24年12月15日）			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：国内・海外の研究者から注目を集めた。特に中国・台湾の研究者が本研究を注目している。 独創性：中国青銅器の構造研究に非破壊的手法を本格的に導入した最新の研究であるため。 発展性：X線CTの改良を随時行っており、現在も文化財用として世界最高性能を維持している。 効率性：CT調査は短時間でデータを取得できるために、時間的投資、人的投資が少ないため。 継続性：泉屋博古館・和泉市久保惣記念美術館の協力により、今後の研究の将来性を評価できるため。 正確性：文化財内部の構造を約0.2mmの高精度で記録することができるため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	資料収集数	学会研究会等 発表数	論文掲載数		
判定	A	A	A	A		
判定理由 調査回数：年間8回、展示の前後に効率よく調査した。 資料収集数：50点の目標を達成できた。 学会研究会等発表数：日本文化財科学会、中国考古学会にて計画通り実施できた。 論文掲載数：中国考古学会にて計画通り1件実施できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究に使用している装置は、文化財用のX線CTとして、世界的に最も優れた装置の一つとして高く評価されている。京都泉屋博古館との共同研究を進めながら、大阪久保惣美術館との連携研究も進んでいる。また、中国上海博物院、中国科学院との研究者の連携研究も進めている。次年度はさらに多くの資料を調査すると共に、蓄積したデータの活用を進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	九州国立博物館では、文化財を外部の博物館から借用して展示することが多いので、展示借用の際に、最新機器を用いて共同研究を進めている。すでに、これまでの研究協力において国内外の博物館や研究機関と共同研究が進んでいる。次年度はさらに連携を進めて共同研究を実施していきたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 平成 20 年度特別展「工芸のいま 伝統と創造」に関連した九州・沖縄の伝統工芸作家への継続的かつ発展的な調査研究((5)－①)		
【事業概要】 九州・沖縄における伝統工芸の作家の創作活動についての継続的調査研究である。無形文化財としての伝統技術と、そこから生まれる新たな創作について、それぞれの作家の取り組みを調査する。これまで調査を行ってきた作家の調査を継続するとともに、新たな作家を調査対象に加えていく。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 谷豊信
【スタッフ】 原田あゆみ（文化財課資料管理室主任研究員）、池内一誠（展示課情報サービス室主任研究員）、遠藤啓介（展示課展示調整室研究員）、望月規史（文化財課アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 平成 24 年度西部工芸展、日本伝統工芸展など本年度開催の工芸展で作品調査を行った。陶芸、染織の作家への聞き取り調査などを継続し、さらに本年度は金工（芦屋釜）の作家の調査を行った。			
【年度実績概要】 ・陶芸分野（九州・沖縄）で作家 3 名について、調査を行った。 ・染織分野（九州・沖縄）で作家 2 名について、調査を行った。 ・金工分野（九州・沖縄）で作家 2 名について、調査を行った。 ・第 109 回九州・山口陶芸展、第 47 回西部工芸展、第 59 回日本伝統工芸展にて九州沖縄の工芸の全体的な調査、全国的な工芸の状況調査を行った。 ・トピック展示「茶の湯を楽しむⅤ 芦屋釜と館蔵茶道具」にて、現代作家の作品について 3 点を展示し、あじっばで触れることができる展示を行った。  トピック展示「茶の湯を楽しむⅤ 芦屋釜と館蔵茶道具」			
【実績値】 調査回数 11 回 作家に関する調査 8 回 全体的な状況調査 3 回 展示への反映 3 件 トピック展示「茶の湯を楽しむⅤ 芦屋釜と館蔵茶道具」			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：陶芸・染織・金工の作家の調査を通して、作家の現在を知ることができ、必要不可欠な調査ができた。 独創性：毎年開催される茶の湯展のなかで、室町期の芦屋釜と現代作家が作った復元された芦屋釜の展示・研究は今までにない試みで高い評価を受けた。 発展性：作家の調査を通じて、変化していく作品をとらえることができた。 効率性：限られた時間、研究員で調査できることを最大限行った。 継続性：伝統工芸展開催以降長期間にわたる調査研究を行っており、十分に成果が認められる。 正確性：陶芸、染織、金工と主要な工芸分野を網羅しているため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	展示への反映				
判定	A	A				
判定理由 調査回数：陶芸、染織、金工と主要な分野の調査を行い、全体的な状況を把握する調査も同時に行った。 展示への反映：トピック展示「茶の湯を楽しむⅤ 芦屋釜と館蔵茶道具」における現代作家の作品を展示した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画通り調査を実施することができ、展覧会にその成果を反映させることができた。 また、地域に根ざした博物館として、九州・沖縄の伝統工芸の発展に寄与している。技術の保存とともに伝統の美意識について、貢献することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	工芸展開催以来の成果を受け、継続的な地道な調査を行い、さらに広がりも見えたことは評価できる。陶芸、染織だけではなく、金工分野の調査が行われ、展示などに活かされた。

【書式B】
(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-3

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 日本の中世の工芸、特に茶道具に関する調査研究((5)－①)		
【事業概要】 毎年行われるトピック展示「茶の湯を楽しむ」を行うにあたって、それに伴う日本の中世から近世にかけての茶道具（特に陶磁器、漆器、金工、染織など）の基礎的な研究を行う。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	展示調整室研究員 遠藤啓介
【スタッフ】 原田あゆみ（文化財課資料登録室主任研究員）、川畑憲子（企画課文化交流展示室主任研究員）、望月規史（文化財課アシエイトフェロー）			
【主な成果】 本年度のトピック展示「茶の湯を楽しむⅤ 芦屋釜と館蔵茶道具」を行うにあたり、芦屋釜の里の全面的な協力のもと芦屋釜の基礎的な研究を行った。また、陶磁器では、出品した作品の中で彫唐津茶碗及び華南三彩陶に関する基礎的な研究を行った。また、次年度展示予定の「煎茶」をテーマにした研究では、紫砂壺についての調査を行った。			
【年度実績概要】 ・トピック展示「茶の湯を楽しむⅤ 芦屋釜と館蔵茶道具」を行った。 ・芦屋釜の基準作品を展示し、製作技法がわかる考古遺物もあわせて展示し、製作技法についての知見が得られた。 ・芦屋釜の里にて、実際に現在作成をしている職人に聞き取り調査を行った。 ・伝世された芦屋釜の調査を行った。 ・彫唐津に関して、唐津焼の陶片調査を行った。 ・華南三彩陶について、他機関所蔵品の調査を行った。 ・次年度の「煎茶」をテーマにした展示に関して、紫砂壺の調査を行った。			
			
トピック展示「茶の湯を楽しむⅤ 芦屋釜と館蔵茶道具」			
【実績値】 展示への反映 26件 「茶の湯を楽しむⅤ 芦屋釜と館蔵茶道具」 調査 6回 芦屋釜の里にて芦屋釜関係の調査 3回 彫唐津及び華南三彩に関する調査 各1回 紫砂壺の調査 1回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：トピック展示を開催するために適切な時期に調査を実施した。 独創性：芦屋釜の展示は作品だけではなく、鋳型などの考古遺物や現代作家の作品をならべ、他にない展示となったため。 発展性：茶道具は陶磁器だけではなく、金工など様々な分野にわたる総合芸術であり、多様性もあるため。 効率性：限られた時間や研究員のなかで最大限の研究をしているため。 継続性：今後も続けられる研究として有意義であるため。 正確性：行われた研究はできるだけデータ化し、基礎的な資料とすることができたため。						

2. 定量的評価

観点	展示への反映	調査				
判定	A	A				
判定理由 展示：トピック展「茶の湯を楽しむⅤ 芦屋釜と館蔵茶道具」として26件の作品の展示を行った。 調査：陶磁器及び均衡の調査を6回行い、その成果の一部を展示に活かすことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	茶の湯で用いられる作品は、陶磁器、金工など多分野にわたり、その研究は日本文化の基層をなすものであり、研究の広がりが期待できる。また、海外の作品を積極的に取り入れた茶の湯の道具を探究することで、アジアとの関係から日本の歴史を捉える九州国立博物館にはなくてはならない研究となりうる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り調査が実施され、当初の目標を達成することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 印籠に関する調査研究(5)－①)		
【事業概要】 フィンランド在住の世界的な印籠コレクター、ハインズ・クレス氏、エルセ・クレス氏の所蔵する印籠、約 300 点の調査を行った。調査した印籠はおもに江戸時代から明治時代にかけて制作されたもので、在銘作など貴重な作例が多く含まれる。なお、この調査研究の成果はトピック展示「江戸の粋、印籠 フィンランド・クレスコレクション」及び図録において公開し、本コレクションの意義を広く一般に紹介した。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展室主任研究員 川畑憲子
【スタッフ】			
【主な成果】 (1) 本調査研究により、クレス氏所蔵印籠コレクションの全貌が明らかにすることができた。 (2) コレクションに含まれる近世初期の作や在銘作といった貴重な作例を通じて、当時の制作技法や制作状況の一端を解明することができた。 (3) 本調査研究の成果として、クレス氏所蔵印籠コレクションを日本で初公開する展覧会を開催することができた。 (4) 展覧会の開催により、日本の誇る印籠文化について、観覧者に多くの情報を提供することができた。			
【年度実績概要】 ・23 年度 フィンランドのクレス氏宅にて、印籠コレクションの調査（約 300 点）を行った。また、クレス夫妻とともに印籠調査の成果についてデータを整理し、展覧会に出品する作品を選定した。 ・24 年度 展覧会の図録を制作するために、印籠の文様や技法、制作年代などについてクレス夫妻や国内外の印籠研究者と議論を交わし、概論や作品解説などの準備を進めた。また、出品される印籠の再調査や撮影も行った。本調査研究の成果として、トピック展示「江戸の粋、印籠 フィンランド・クレスコレクション」（24 年 12 月 19 日～25 年 3 月 10 日）を開催し、展覧会図録を発行した。 会期中には、講演会（「こんなに面白い 印籠と根付」他）やミュージアムトーク、コンサートやワークショップなどを多数開催し、印籠や根付の教育普及を充実させるとともに、フィンランドの芸術文化についても広く紹介する機会を設けた。			
【実績値】 調査回数 1 回 収集資料数 印籠、根付、絵画資料など 約 300 点 研究者海外派遣数 1 回 報告書・図録等 1 件 トピック展示図録『江戸の粋、印籠 フィンランド・クレスコレクション』 展覧回数 1 回 トピック展示「江戸の粋、印籠 フィンランド・クレスコレクション」（24 年 12 月 19 日～25 年 3 月 10 日）			
【備考】			



会場の様子

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：在外印籠コレクションについて、基礎となる調査をすることができた。 独創性：日本初公開のコレクションであり、新規性にすぐれていた。 発展性：調査の成果をトピック展示として、広く一般に公開することができた。 効率性：時間的、人的、設備的に効率よく調査を進めることができた。 正確性：クレス夫妻の協力により、正確な調査を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	研究者海外派遣数	報告書・図録等	展覧回数	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 調査回数：計画通りに実施することができた。 収集資料数：目標を達成することができた。 研究者海外派遣数：計画通りに実施することができた。 報告書・図録等：計画通りに刊行することができた。 展覧回数：計画通りに実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画通り調査を実施することができ、展覧会にその成果を十分に反映させることができた。また、図録・講演会・ワークショップ・イベント等によりその成果を広く公表することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り調査が実施され、当初の目標を達成することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5) 対馬宗家文書に関する調査研究((5)－①)
【事業概要】 朝鮮半島に近接し、古代から半島や大陸への要衝として重要な位置を占める対馬を、鎌倉時代後半から明治維新に至るまで治めてきたのが対馬宗家である。対馬藩は江戸時代を通じて朝鮮との外交・貿易を取り仕切り、総数十二万点を超える記録が現在に遺されている。これらの記録は九州国立博物館を含む国内外七ヶ所に収蔵されており、本研究ではそれら対馬宗家文書の調査・研究を進め、その成果を展示を通じて広く公開していくことを目指すものである。	
【担当部課】	学芸部博物館科学課
【プロジェクト責任者】	保存修復室長 藤田励夫
【スタッフ】 荒木和憲（文化財課資料登録室研究員）、渡部史之（博物館科学課アソシエイトフェロー）	
【主な成果】 現在 8 万点に及ぶ対馬藩の文書・記録類を所蔵する長崎県立対馬歴史民俗資料館では、35 年にわたる対馬宗家文書の調査が昨年度に終了し、平成 24 年にはその一部が国の重要文化財に指定された。その調査には九州国立博物館の職員も参加してきており、本年度は長崎県立対馬歴史民俗資料館との共催で、トピック展示「重要文化財新指定記念 日朝交流の軌跡－対馬宗家文書 8 万点の調査を終えて」及び関連シンポジウム及び講演会を実施した。	
【年度実績概要】 ・長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵の対馬宗家文書八万点の調査終了及び重要文化財新指定をふまえ、文化交流展示トピック展示「重要文化財新指定記念 日朝交流の軌跡－対馬宗家文書 8 万点の調査を終えて」（24 年 7 月 4 日～9 月 9 日）を開催した。会期は 68 日間で、入場者数は 66,635 人であった。展示作品は 71 点で、対馬と対馬藩主宗家、日朝交流の軌跡、対馬の博物誌の内容により構成した。展示図録は 1,500 部作成した。 ・トピック展示関連シンポジウム「対馬宗家文書からみた日朝交流」（24 年 7 月 8 日、於九州国立博物館ミュージアムホール）を開催した。来聴者数は 180 人であった。 ・トピック展示関連講演会「対馬宗家文書の世界」（24 年 8 月 19 日、於九州国立博物館研修室）を開催した。来聴者数は 63 人であった。	
	
シンポジウム風景	
【実績値】 トピック展示開催 1 回 「重要文化財新指定記念 日朝交流の軌跡－対馬宗家文書 8 万点の調査を終えて」 (24 年 7 月 4 日～9 月 9 日) 展示図録 1 件 1,500 部 トピック展示図録『日朝交流の軌跡 対馬宗家文書 8 万点の調査を終えて』 シンポジウム・講演会 2 回 「対馬宗家文書からみた日朝交流」(24 年 7 月 8 日) 参加者数 180 人 「対馬宗家文書の世界」(24 年 8 月 19 日) 参加者数 63 人	
【備考】	

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：長期に及ぶ調査成果を迅速に公開することができた。 独創性：福岡の地で対馬所在の文化財をまとめて紹介することができた。 発展性：対馬藩の史料を一堂に紹介することで、九州のもつ歴史的国際性の再認識を促すことができた。 効率性：対馬宗家文書の所蔵先である長崎県立対馬歴史民俗資料館との共催で展覧会を実施することができた。 継続性：長期に及ぶ調査成果を十分に反映した展覧会を実施することができた。 正確性：展覧会に加えてシンポジウムや講演会を実施することで、幅広くその成果を公開することができた。						

2. 定量的評価

観点	展覧会数	図録発行件数	講演会数			
判定	A	A	A			
判定理由 展覧会数：対馬宗家文書に関する調査成果を、展覧会を通じて公開することができた。 図録発行件数：展覧会の成果を図録にまとめて公開することができ、目標を達成することができた。 講演会数：計画通り展覧会の期間中に、定期的に講演会を開催することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	35年にわたる対馬宗家文書の調査成果を、展覧会やシンポジウム・講演会等を通じて福岡の地で多角的に紹介することができた。またこれらは九州のもつ歴史的国際性の再認識にも通じるもので、対外交流の展示を重視する当館では、今後もこうした研究を継続していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

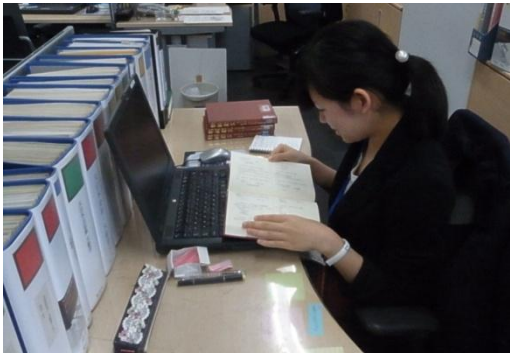
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	対馬宗家文書に関する調査成果を、展覧会・シンポジウム・講演会の開催及び展示図録の刊行の形で継続的に公開することができた。次年度以降も、このような調査及びその成果の公開を継続していく予定である。

【書式B】
(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-6

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進								
プロジェクト名称	6) 中世大般若経の史料学構築に向けての基礎的研究（学術研究助成基金助成金）（(5)－①）								
【事業概要】 日本中世の大般若経に関する資料を収集し、日本史研究に資する。このため、既刊史料を博搜するとともに、主要な大般若経や料紙の調査を実施する。									
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長 藤田励夫						
【スタッフ】									
【主な成果】 自治体史及び刊行された史料集を博搜して、中世大般若経に関連する資料を収集した。また、自治体教育委員会のウェブサイト等から自治体指定の大般若経に関する情報を収集した。また、韓国国立中央博物館にて大般若経の展示を視察した。									
【年度実績概要】 - 自治体史を広く検索して大般若経に関する資料を収集した。 - 刊行された史料集を博搜して大般若経に関する資料を収集した。 - 自治体教育委員会のウェブサイト等から自治体指定の大般若経に関する情報を収集した。 - 韓国国立中央博物館にて大般若経の展示を視察した。									
									
資料収集風景									
【実績値】 <table><tr><td>資料収集</td><td>500 点</td></tr><tr><td>研究者海外派遣</td><td>2 回</td></tr><tr><td>学会発表</td><td>1 回（①）</td></tr></table>				資料収集	500 点	研究者海外派遣	2 回	学会発表	1 回（①）
資料収集	500 点								
研究者海外派遣	2 回								
学会発表	1 回（①）								
【備考】 学会発表 ①「古文書資料の整理と保管」佐賀県博物館協会研修会（25 年 11 月 14 日）									

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-6

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：今後の日本史研究に寄与できるため。 独創性：同様の研究は他になされていないため。 発展性：日本中世史研究に大きな資料を提供できるため。 効率性：日本史研究が積み上げてきた資源を十分に活用しているため。 継続性：質量ともに十分な資料を収集できた。 正確性：既刊資料を網羅的に調査した。						

2. 定量的評価

観点	資料収集	研究者海外派遣	学会発表			
判定	B	A	A			
判定理由 資料収集：目標の90%程度の量を収集できた。 研究者海外派遣：1泊2日の短期間であったが、有効に活用できた。 学会発表：東京大学史料編纂所において料紙に関する発表を行い、多くの専門家と意見を交換できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	目標値の9割程度を達成できたので、次年度も引き続き同程度の成果を目指したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	計画通り調査が実施され、当該年度の目標を9割程度達成できた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究 ((5)-②)		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する漢籍・洋書に関する書誌学的調査である。これらは、博物館草創期の明治時代初期に、文部省より引き継いだ江戸幕府旧蔵資料を中心とする資料群より形成されている。また洋書には江戸幕府旧蔵資料の他にも、ドイツ人医師シーボルトより献納された数百冊を含んでいる。貴重図書として保管されてきたこれらの詳細調査を実施し、その学術的意義を明らかにすることを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館情報課長 高橋裕次
【スタッフ】 田良島 哲(調査研究課長)、住広昭子(博物館情報課情報資料室専門職員)			
【主な成果】 (1) 漢籍は、これまでに江戸幕府旧蔵資料である医学関係のものを中心に調査を行ってきたが、一段落がついたため、全体の調査に着手し、計 30,000 冊のうち、昨年度は 485 冊、本年度は 10,694 冊の書誌学的調査を終了した。 (2) 洋書については、全 973 点の書誌データの図書館システムへの入力を終了した。			
【年度実績概要】 (1) 漢籍には、経年によって劣化や綴じ糸の欠失しているものが多い。調査では書誌データを図書館システムに入力するとともに、保存状態の把握につとめ、必要に応じて糸綴じの手当などを検討している。 (2) 洋書については、かつて科学研究費補助金で行った江戸幕府旧蔵資料の洋書のデータを参考にしながら、全体の書誌データを図書館システムに入力した。当館の洋書は、蕃書調所などの旧蔵書を含む点で国立国会図書館の所蔵する洋書と共通するが、ほとんどが原装を残している点が当館の洋書の最も大きな特徴である。			
 「荷蘭宝函」 (ネーデルランドマガゼイン)			
【実績値】 調査及びデータ入力点数 漢籍 10,694 冊 写真撮影点数 10 冊 (1800 カット)、			
【備考】 +			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：これまでは科研費による部分的な調査にとどまっていたが、閲覧の申請も増えていることから、本格的な調査を開始したため。 独創性：他機関では、まとまった江戸幕府旧蔵資料に関する書誌学的調査はまだ行われていないため。 発展性：東博所蔵分の調査の進展により学術的意義が明らかになりつつある。 効率性：書誌データを図書館システムに登録することで、情報公開が促進されたため。 継続性：進捗は順調であり、計画的に全ての漢籍、洋書を調査する予定である。 正確性：横断検索が可能であり、相互にデータの確認をしているため、より精度の高いものになっている。						

2. 定量的評価

観点	調査及びデータ 入力点数	写真撮影点数				
判定	A	A				
判定理由 調査及びデータ入力点数：漢籍の印記などの一覧表を作成したことが能率向上につながり、目標を大幅に上回る結果となった。 写真撮影点数：撮影は内容など希少性のあるものから行っている。保存上の理由から、半開きの状態で1頁ずつ撮影するなど、慎重を要する作業であるが、進捗は良好で、1800カットと目標以上の点数を達成することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館の所蔵する漢籍、洋書について、書誌データを作成し、図書館システムに入力した。これによって、保存上の理由から閲覧に供することのできない資料であっても、書誌データを伴う画像によってその詳細を公開できるようになったことは大きな進展である。現在、撮影した画像とともにウェブサイトで広く公開するための準備を進めている。本年度に漢籍の調査をほぼ終了したのを契機に、今後、主要な作品に関して解題を作成するなど、学術的情報の提供に努めていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	漢籍・洋書ともに、その保存状況をほぼ把握することができた。原装を残している貴重な図書を、後世に永く伝えていくためには、必要最小限な処置によって現状を維持し、形状や大きさに応じた配架を行うなどの配慮が必要である。現在、保存修復課と連携して、修復作業を行っており、次年度も引き続き、適切な保存方法について検討していく予定である。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 東洋民族資料に関する調査研究((5)－②)		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する約 3500 件の東洋民族資料を対象として、総合的な調査研究を行う。従来の台帳の記載内容を踏まえながら形状、材質の他に、旧蔵者がつけた札や箱書きの内容や保存状態など実際の観察を通してしか分からない情報を、画像とともに一括してデータベース化する。これにより、研究・陳列・保管・修理などに必要な基礎情報をより充実した形で整備する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課保存修復室研究員 川村佳男
【スタッフ】 丸山清志（当館客員研究員）			
【主な成果】 東洋民族の収蔵品のうち、台湾のタオ族の生活及び宗教儀礼にかかわる資料について詳細に調査した。調査で得られた情報をデータベースに反映させることで、研究・陳列・保管・修理などに資する基礎情報が従来よりも一層充実した形で整備された。			
【年度実績概要】 ・文献収集 客員研究員と協力し、日本及び台湾でこれまでに発表、出版された、タオ族の民族資料に関連する報告書、研究論文、書籍を収集し、本年度調査内容の絞込みを行った。 ・熟覧調査の実施 24 年 8 月及び 25 年 2 月に東京国立博物館においてタオ族の民族資料の熟覧調査を実施した。これにより当該民族資料の①形状品質、②保存状態、③来歴、④用途等に関する基礎的なデータを収集することができた。			
			
TK-650 土製船台湾、台東県蘭嶼 19 世紀後半～20 世紀初頭			
【実績値】 調査回数：4 回、作品調査件数：87 件、関連陳列案作成件数：1 件、撮影点数：約 160 カット			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：成果はリニューアルオープンして間もない東洋館 13 室に新設された「アジアの民族文化」の展示ソフトのひとつとして、平成 25 年度の陳列案にすぐに盛りこむことができた。 独創性：台湾原住民・タオ族の文化について、海との結びつきに焦点を絞って考察を進めた。 発展性、継続性：焦点やキーワードを意識しながら考察を進める方法は、今後、別の台湾原住民の文化に対しても有効であるとの手ごたえを得た。 効率性、正確性：平成 24 年度に当館が東洋民族の分野に対して進めた列品情報調査の成果と相互に連携、検証することができた。その結果、調査対象の基本データについて単独での実施以上の正確さを期すことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	作品調査件数	関連陳列案作成件数	撮影件数		
判定	A	B	A	B		
判定理由 調査回数：本調査の目標数値 4 回を達成した。 作品調査件数：昨年度末に設定した本調査の目標数値 100 件の約 90 パーセントを達成した。 関連陳列案作成件数：調査成果を翌年度陳列案に反映させるという所期の目標を達成した。 撮影件数：昨年度末に設定した本調査の目標数値 200 カットの約 80 パーセントを達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東洋館リニューアルオープンやいくつかの特別展の準備などと並行して、破綻なく実施できる目標を昨年度末に設定したため、また、列品情報調査で得られた知見も活用することで、計画をおおむね全うすることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

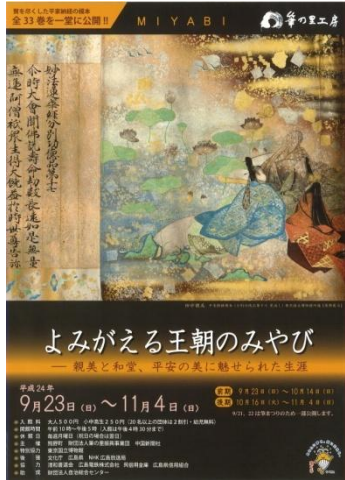
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	台湾原住民の民族資料の調査結果を、東洋館における展示・保管に次年度以降も継続的に結実させることが重要な課題である。また、これまで重点的に調査を積み重ねてきた南太平洋の民族資料、台湾先住民族資料の他に、東洋館での新たな展示ソフトの開発につながる東洋民族分野の調査も継続する必要がある。次年度以降は東洋考古・美術・工芸といった他分野との連携も模索しながら、東洋民族の列品をさらに幅広く活用できる展示企画を追及していきたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-3

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究 (科学研究費補助金) (5) - ②)
【事業概要】 国内外に所蔵される東アジアの書道史に関わる作品について、1点ごとに詳細な書誌や伝来などの情報と、デジタル画像を収集する。さらに、科学機器を用いて、料紙の技法、変遷、使用法を検証するとともに、時代による書風の特徴やその変化などを調査研究する。また、個々の作品に関する歴史的・文学的調査も進める。これらによって、書の作品を、料紙と書風という二つの側面から解明し、複合的・総合的なデータ作成を行う。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	副館長 島谷弘幸
【スタッフ】 神庭信幸(保存修復課長)、高橋裕次(博物館情報課長)、富田淳(列品管理課長)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、荒木臣紀(保存修復課環境保存室主任研究員)、恵美千鶴子(調査研究課書跡・歴史室アソシエイトフェロー)、赤尾栄慶(京都国立博物館上席研究員)、羽田聡(京都国立博物館学芸部企画室研究員)、丸山猶計(九州国立博物館学芸部主任研究員)	
【主な成果】 装飾料紙を用いた古筆・典籍を中心に、これまでに作成した対象作品のリストから調査を進めた。国内では、東京国立博物館・京都国立博物館・九州国立博物館・陽明文庫(京都)・筆の里工房(広島)等、海外では中国の香港芸術館、銀雀山竹簡博物館、臨沂市博物館、鄒県博物館、山東省博物館等、アメリカはホノルル美術館、サンフランシスコアジア美術館等に収蔵されている作品について、デジタル写真撮影と、作品の筆跡及び料紙に関する調査を実施した。	
【年度実績概要】 ・東京国立博物館所蔵の装飾料紙作品の調査とデータ化 東京国立博物館が所蔵する装飾料紙作品の調査とデータ化を行った。 ・特別展に關係する作品の調査とデータ化 次年度(2013年度)に東京国立博物館で開催予定の特別展「和様の書」において、本研究と關係の深い作品が一堂に展示される予定である。その展示準備を兼ねて、關係作品の調査と關係資料のデータ化を行った。 ・他機関への調査 国内では、京都国立博物館、九州国立博物館、京都・陽明文庫、広島・筆の里工房にて調査を行った。海外では、中国の銀雀山竹簡博物館、臨沂市博物館、鄒県博物館、山東省博物館等、アメリカはホノルル美術館、サンフランシスコアジア美術館にて、装飾料紙を用いた写経・古筆・典籍等の調査を行なった。許可の出た作品に関しては、東京国立博物館内部での調査と同様に、顕微鏡による料紙の拡大画像の撮影を行い、データの充実を図った。 ・成果の公開 これまでに蓄積してきた調査結果より得られた成果を、総合文化展本館3室(仏教の美術、宮廷の美術)等の展示解説等で公開した。また、特集陳列「写された書」(24年5月22日～6月24日、本館特別1室)、ウェブサイト「1089ブログ」の「書を楽しむ」シリーズにおいて成果を公開した。広島・筆の里工房で開催の特別展「よみがえる王朝のみやび」(24年9月23日～11月4日)には特別協力として、本研究成果を図録や展示で公開した。	
	
特別展「よみがえる王朝のみやび」 (広島筆の里工房) チラシ	
【実績値】 ・調査件数 約 60 件 ・写真撮影点数 約 500 点 ・データ入力点数 約 200 点 ・研究会などでの発表 8 件 島谷弘幸「残された書」(全日本書道連盟)平成 24 年 11 月 28 日 他 7 件 ・論文掲載数 14 件 島谷弘幸「卷子本古今和歌集の魅力と価値」(『国宝 古今和歌集(卷子本)』、大倉集古館、平成 24 年 8 月) 他 13 件 ・成果公開件数 45 件 (展示 20 件、特集陳列 1 件、ウェブサイト 23 件、他館特別展 1 件)	
【備考】	

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	A	S	A
判定理由 適時性：中国他海外での調査の実施により国際性が高く、展示や研究発表などで公開に努めた。 独創性：基礎的なデータ収集にあわせて、料紙の科学的調査や歴史的調査など複合的に進め、そのデータ数は膨大な量になりつつあるため。 発展性：収集した調査データは総合的であり、新たな研究視点をもたらすものであるため。 効率性：通常の業務の中で調査研究を効率よく進めていく体制が確立しているため。 継続性：基礎研究からあわせて、すでに6年間の調査を実施しており、基礎的データから複合的データまで蓄積してきているため。 正確性：総合的研究として複合的なデータを収集できており、研究論文や研究発表などで着実に公開もしているため。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	写真撮影点数	データ入力 点数	研究会発表 件数	論文掲載件数	成果公開件数
判定	A	A	A	A	A	S
判定理由 調査件数：継続的に進めてきている研究のため調査方法も確立し、確実に調査を進めることができた。 写真撮影点数：日常的に効率的な調査を実施することにより調査写真の撮影も確実に進んでいるため。 データ入力点数：調査結果のデータ入力、関係資料のデータ入力も効率的に実施できた。 研究会発表件数：目標値を達成しており、調査研究内容を広く公開することができた。 論文掲載件数：さまざまな媒体に、調査内容の成果を論文として発表することができた。 成果公開件数：他館での特別展に協力して、本研究成果を発表できたことは特に大きい成果といえる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究は継続的に行う調査により、効率が上がっている。その成果の公表についても、論文や展示等で確実に進めることができた。光学顕微鏡などの科学機器を用いた客観的なデータをさらに収集して、調査の内容を充実したものにすると同時に、さらなる成果を刊行物や展示などで公開していく方針である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	すでに6年継続している研究のため、日々の業務の中で効率よく研究を進めることができている。また、博物館における人脈を生かして、中国やアメリカなどでの調査をすみやかに実行できた。国内外において、あまり公開されていない作品なども調査対象として視野に入れながら、より多くの情報収集に努めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 中国書画の表装に関する基礎的研究（科学研究費補助金）（(5)－②）		
【事業概要】 本研究は、中国の諸文献から表装に関する記述を整理し、歴史的な様式の変遷を明らかにしつつ、日本および中国に収蔵される中国書画を実際に調査し、「中国表装」及び「日本表装」の双方について、時代や地域ごとの様式や素材のデータを網羅的に収集・整理し、表装の変遷に関する体系的な調査研究を進めようとするものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課長 富田淳
【スタッフ】 鍋島稲子(台東区立書道博物館主任研究員)			
【主な成果】 『裝潢史』明・周嘉胄などの中国歴代の文献から、書画の表装に関する記載を収集・整理した。また、プリンストン大学付属美術館・香港中文大学文物館・京都国立博物館・大阪市立美術館・五島美術館・三井記念美術館・台東区立書道博物館に所蔵される主として中国の書画を調査し、表装の諸データ及び画像データを収集した。			
【年度実績概要】 文献調査 ・『裝潢史』明・周嘉胄などから、書画の表装に関する記載を収集・整理した。			
作品調査 ・プリンストン大学付属美術館の所蔵する「行穰帖」1件を調査した。 ・香港中文大学文物館の所蔵する游似旧蔵の蘭亭序 10件を調査した。 ・三井記念美術館の所蔵する中国書跡 9件を調査した。 ・五島美術館の所蔵する中国書跡 16件を調査した。 ・京都国立博物館の所蔵する中国書画 10件を調査した。 ・大阪市立美術館の所蔵する中国書画 4件を調査した。 ・台東区立書道博物館の所蔵する中国書跡 30件を調査した。			
上記の成果に基づいて、台東区立書道博物館との連携企画を開催し、論考を発表した。東京国立博物館・台東区立書道博物館との連携企画「尚意競艶―宋時代の書―」・東京国立博物館特別展「書聖王羲之」にその成果を反映させた。			
			
游丞相旧蔵蘭亭序―御府領字従山本			
【実績値】 ・調査回数：7回(海外2回、国内5回) ・調査作品件数：80件(撮影点数約400カット) ・論文エッセイ発表件数：3件 富田淳「蘭亭序コレクター列伝」(『もっと知りたい王羲之の世界』2013年1月15日)、「游丞相の蘭亭百種」(『書聖王羲之』2013年1月22日)。鍋島稲子「蔡襄筆楷書謝賜御書詩表巻について」(『尚意競艶―宋時代の書―』2012年10月2日) ・展覧会件数 2件			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：東京国立博物館と台東区立書道博物館の連携企画展や、特別展「書聖王羲之」に反映させることができたことによる。 独創性：「中国表装」及び「日本表装」の双方について、時代や地域ごとの様式や素材のデータを網羅的に収集・整理し成果の一部を、展示、論考やエッセイにおいて発表することができたことによる。 発展性：文献の整理及び内外に現存する作品調査から得られたデータは着実に増えたことによる。 効率性：東京国立博物館と台東区立書道博物館の両館で作品・資料を補完し展示できたことによる。 継続性：本研究は3年計画とし本年はその3年目にあたり継続し実施することができた。 正確性：資料調査の対象をプリンストン大学付属美術館所蔵作品ほか全80件調査したことによる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作品件数	論文エッセイ 発表件数	展覧会件数		
判定	A	C	A	A		
判定理由 調査回数：予定通り行うことができた。 調査作品件数：昨年度（143件）を目標としたが、それを下回ってしまった。 論文エッセイ発表件数・展覧会件数：ともに目標の昨年度を上回ることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	データは当初の研究計画にそって蓄積・整理が進んだ。また本研究で得られた成果の一部を展覧会に反映させ、論文やエッセイとして発表することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は当初の研究計画にそって、順調にデータの蓄積・整理・発表ができたと考える。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 光学的調査に基づく高雄曼荼羅の発展的研究(科学研究費補助金)(5)-②)		
【事業概要】 本研究では高雄曼荼羅(京都・神護寺所蔵)の重要性を考え、その研究推進を図るために、最先端の撮影技術を用いた高精細デジタル画像及び赤外線画像の撮影を全面的に行う。さらに新たな高雄曼荼羅研究の端緒と成せるよう、研究者それぞれが絵画・彫刻・工芸等の専門性を生かし、空海と彼を取りまく仏教美術を考察するのに重要と思われる観点を取り上げて調査・研究を行うものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部長 松本伸之
【スタッフ】 丸山士郎(博物館教育課教育講座室長)、伊藤信二(博物館教育課教育普及室長)、澤田むつ代(特任研究員)、沖松健次郎(企画課特別展室主任研究員)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、安藤香織(列品管理課登録室アシエイトフェロー)			
【主な成果】 高雄曼荼羅2幅のうち金剛界曼荼羅について、高精細デジタルカラー及び赤外線の画像撮影を、京都国立博物館にて実施した。また日本密教との関連が指摘されているインドのオリッサ州で出土した密教系の遺物を調査するため、ラトナギリ、ウダヤギリ、ラリタギリなどの遺跡を踏査するとともに、オリッサ州立博物館、インド博物館(コルカタ)、国立博物館(デリー)にて調査を実施し、高雄曼荼羅の源流を考察するのに有力な資料を得た。			
【年度実績概要】 ・高雄曼荼羅撮影 高雄曼荼羅2幅のうち、昨年の胎蔵界曼荼羅に引き続き本年度は金剛界曼荼羅について、高精細デジタルカラー及び赤外線の撮影を行った。撮影は作品の寄託されている京都国立博物館にて、上記スタッフならびに京都国立博物館研究員の立会いのもと、作品取扱の専門業者と撮影担当の専門業者を雇用して実施した。カラー撮影は解像度8000万画素、赤外線撮影は解像度4000万画素の高性能デジタルカメラを使用し、カラー315カット、赤外線432カットを撮影した(合計747カット)。撮影した画像の処理と合成は、撮影を担当した専門業者及び研究協力者に依頼した。またこの撮影作業と平行して、絹の状態や絵画技法など細部の観察をし、必要に応じて部分の拡大写真を撮影した。これまで出版された画像と比較して、格段に精度が高く、金銀泥も明確に表れた画像が得られ、今後の研究には有益な基礎資料となる。 ・オリッサ州(インド)密教遺物調査 オリッサ州に位置するラトナギリ、ウダヤギリ、ラリタギリ、ラングディヒル遺跡は、密教系遺跡のほとんど残されていないインドにおいて、日本密教との関連性が指摘されている希少な例である。本年度は上記遺跡と出土遺物を調査するべく、各遺跡を踏査するとともに、オリッサ州立博物館、コルカタのインド博物館及びデリーの国立博物館を調査した。また、様式的に近似する同時代の遺跡として、ヒンドゥー教やジャイナ教の寺院の調査も実施した。以上の調査対象が高雄曼荼羅と直接的に結びつくか否かは今後検討する必要があるが、仏教遺跡では大日経に基づく図像が多く確認されており、少なくとも高雄曼荼羅の源流を考察するには大きな収穫を得た。			
			
ウダヤギリ遺跡近在 磨崖仏調査			
【実績値】 高雄曼荼羅撮影日数: 1日 高雄曼荼羅撮影カット数: 332枚 研究協力者のべ人数: 17人 オリッサ州密教遺跡調査日数: 6日			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	A	A	A	B	B
判定理由 適時性：本研究で得られる高雄曼荼羅の細密な画像は多様な研究分野にとって非常に有効であり、必要性が高いと考えるが、公共・公開への取り組みについては、本年度の段階では未だ十分ではないため。 独創性：本研究では高雄曼荼羅とアジアの広い地域の仏教美術を比較検証する研究であり、昨年度の中国における調査に引き続き、本年度はインドでの調査を実施することができたため。 発展性：二年に渡って撮影した高雄曼荼羅の画像は今後、広く研究に活用できると見込まれるため。 効率性：本年度は画像処理などで研究協力者を依頼して効率的な研究推進に努めた。 継続性：本年度は高雄曼荼羅の撮影、インド調査など、研究推進に必要な最低限の時間を確保できた。ただし当初予定されていた高雄曼荼羅の関連作例の撮影などを実施する時間的余裕はなかった。 正確性：本年度における達成値は以上の観点からして概ね成果が認められると考えるため。						

2. 定量的評価

観点	高雄曼荼羅 撮影日数	高雄曼荼羅 撮影カット数	研究協力者 のべ人数	オリッサ州密教遺跡 調査日数		
判定	A	A	A	A		
判定理由 高雄曼荼羅撮影日数：所蔵者の意向により昨年度からずれ込んだものであったが、本年度は調査日を確保でき残りの一幅を撮影し終えたため。 高雄曼荼羅撮影カット数：精緻な画像を得るために十分なものであるため。 研究協力者のべ人数：効率よく調査を進める為に必要十分な数を確保できたため。 オリッサ州密教遺跡調査日数：短期間で効率よく十分な調査ができたため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は高雄曼荼羅 2 幅のうち金剛界曼荼羅を撮影し、本研究の骨子である高雄曼荼羅の撮影を完了することができた。今回得られた画像はこれまで発表されているものと比較して格段に精度が高く、金銀泥も明確に表れており、今後の幅広い研究にとって有益な基礎資料となる。また、本年度は日本密教との関連性が指摘されてきたインドのオリッサ州に所在する多数の遺跡で調査を実施することができ、日本密教の源流を探るために有力な資料を得た。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	高雄曼荼羅を各分野の観点から論じる際に比較対照となる作品について、本年度は撮影対象の検討・交渉に留まったが、来年度は各分野の考察につなげられるよう、また今後の多様な研究で汎用的に使用できるよう高精細撮影を実施する必要がある。 また、プロジェクト責任者及びスタッフは成果の発表へ向け、調査結果をまとめるよう準備を始めるとともに、成果の発表方法についても検討していく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 仁寿舍利塔の信仰と荘厳に関する総合的調査研究 (科学研究費補助金) ((5)-②)		
【事業概要】 隋文帝が中国全土に建立した仁寿舍利塔の起塔地と関係遺物に関する現地調査を実施し、仁寿舍利塔の信仰と荘厳の全体像の具体的な解明を目的とする事業である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室主任研究員 和田浩
【スタッフ】 加島勝(大正大学教授)、松本伸之(学芸企画部長)、東野治之(奈良大学教授)、岡林孝作(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館)、泉武夫(東北大学教授)、長岡龍作(東北大学教授)			
【主な成果】 中国各地において現地調査を行い、仁寿舍利塔起塔寺院に関する多くの地理的データ及び、文献的資料を多数収集することができた。			
【年度実績概要】 ・文献収集 中国側研究者と協力し、中国国内でこれまでに発表、出版された、仁寿舍利塔起塔寺院跡から出土した遺物の報告書、研究論文、書籍を収集し、今年度調査地点の絞込み、現地との連絡調整、旅程の決定を行った。 ・中国現地調査の実施 24年8月に中国側研究協力者の協力のもと、西安市、渭南市、泾川县、平凉市、宝鸡市、広元市、綿陽市、閬中市、成都市、敦煌市、において計16日間に及ぶ現地調査を実施した(写真)。これにより現地における①仁寿舍利塔起塔寺院に関する地理的データ、②仁寿舍利塔出土遺物と隋代関連遺物、③関連岳廟、等に関する詳細なデータを収集することができた。 			
中国現地調査の様子			
【実績値】 調査起塔地 13箇所 調査日数(中国) 16日			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-6

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	独創性					
判定	A					
判定理由 独創性：中国の造形美術を通して浮かび上がる信仰と思想について総合的な見地から考察を加える基礎を構築した。						

2. 定量的評価

観点	調査起塔地数	調査日数 (中国)				
判定	A	A				
判定理由 調査起塔地数：本年度は多くの制約が存在する中で地理的データが相当数収集できた。 調査日数(中国)：遅滞なく計画通りに実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中国の造形美術を通して浮かび上がる信仰と思想について総合的な見地から考察を加える基礎を構築でき、地理的データが相当数収集できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り進捗した。本年度の成果を踏まえて次年度計画においても同様に進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7)南宋絵画史における仏画の位相—都と地域、中国と周縁—（(5)－②）		
【事業概要】 従来まで特殊なジャンルと思われていた南宋時代の仏教絵画を中国絵画史の中に位置づける試みを行う。そのために従来の南宋絵画史を批判的に検証し、さらには日本、中国、アメリカ等に所蔵される、異なった位相の南宋絵画を包括的に調査する。また、文献の調査についても継続的に行い、作品と文献の両面から、南宋時代における仏教絵画、ひいては仏教文化の具体的な様相を明らかにする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室研究員 塚本鷹充
【スタッフ】			
【主な成果】 ・作品調査：東京国立博物館所蔵品、関西を中心とする美術館、及び中国での現地調査を含む作品調査を行った。 ・事業：中国での学会参加、作品調査を行った。 ・成果：論文と研究発表、講演の形で公開することができた。			
【年度実績概要】 ・関西中国書画コレクション等の調査 中国書画の世界的宝庫である、関西地区の中国書画コレクションの継続的調査を行った。また、本年度より題跋（書画に付された文人の評語のこと）等の会読をはじめ、報告書も出版予定である。 ・東京国立博物館所蔵品、寄託品等の調査 本年度は、「天帝図」（霊雲寺）、「維摩図」（東福寺）、「出山釈迦図」（梁楷筆、東京国立博物館）等の調査を行った。これらの成果は、東洋館オープンに伴う「中国書画精華—宋元の道釈画を中心に—」（後期、25年1月29日～2月24日）にて展示するとともに、研究の成果を列記解説（25年2月19日）にて一般向けに公開することができた。 ・中国大陸所蔵作品の調査及び学会発表 24年5月に浙江省博物館で行われた「浙派集英」展を参観し、ついで杭州鳳凰山などを参観することで、南宋宮廷の文化空間について大きな知見を得た。24年8月には開封市河南大学で行われた「宋史年会」で発表することができ、開封市の古跡を訪ねることで、当該研究テーマに関する多くの知見を得た。また、24年11月には上海博物館で行われた国際シンポジウムで発表し、また、「翰墨薈萃展—アメリカ所蔵中国絵画名品展—」及び「沈周展」（蘇州博物館）を参観することで、中国絵画及び欧米におけるコレクション形成史について大きな知見を得た。			
【実績値】 口頭発表5回（①～⑤） 論文3本（⑥～⑧） 撮影カット数 約1000枚 成果の公開3回			
【備考】 研究発表 ①24年7月29日（日）「美術と宝物の相関性についての比較美術史的研究」分科ワークショップ「コレクション、宝物から美術へ—東アジアの視点から」：「中国の宮廷コレクションと目録」（於：東京大学） ②24年8月21日（火）「宋都開封與十至十三世紀中國史」國際學術研討會暨中國宋史研究會第十五屆年會：「北宋初期宮廷收藏與目錄—《舍利感應記》到《龍圖閣瑞物目》—」（於：河南大学）中文 ③24年11月4日（月）「翰墨薈萃—圖像與藝術史國際研討會」：「二十世紀歐美與日本對中國繪畫收藏品味的比較：以矢代幸雄與席克門為例」（於：上海博物館）中文 ④24年12月16日（日）「大阪市立美術館藏宋、元、明中國書畫珍品展 專題講座」：「開創文化・建設帝都—北宋初期開封的改造過程與文物—」（香港藝術館）、中文 ⑤25年3月15日「ワークショップ 中国伝統文化の形成」「宋代宮廷の碑刻文化—蔡襄「楷書謝賜御書詩表卷」（「培育年輕學者卓越研究能力計畫—游於藝：十三至十四世紀士人的文化活動與人際網絡」（早稲田大学） 論文 ⑥「北宋の色彩の成立とその伝承—「搗練図」、「韓熙載夜宴図巻」、およびその仇英派の受容について—」『論集・東洋日本美術史と現場 見つめる・守る・伝える』竹林舎、2012年、111—127頁 ⑦「在東博親近中國山水 20世紀中國山水畫展」（『典藏 古美術』No.239、162—171頁、2012年）土屋貴裕と共著、中文 ⑧「北宋初期宮廷收藏與目錄—《舍利感應記》到《龍圖閣瑞物目》—」『宋都開封與十至十三世紀中國史』國際學術研討會暨中國宋史研究會第十五屆年會論文集（文化史組）、河南大学、2012年、中文			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-7

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：本年度は中国大陸を中心に作品調査を行い、杭州と開封という宋代の二大都市を新たな視点から検証できた。 独創性：近現代絵画についても研究し、より独創的研究へとつながる手掛かりを得た。 発展性：他の諸都市の問題へと発展的に問題意識をつなげることができた。 効率性：シンポジウム、現地調査、作品調査を効率的に行うことができた。 継続性：本年度夏季にかけては、中国近現代絵画についての調査研究を集中的に行い、継続性を確保した。 正確性：新たな知見を得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	口頭発表	論文	撮影カット数	成果の公開		
判定	A	A	A	A		
判定理由 口頭発表：目標を到達した。 論文：目標を到達した。 撮影カット数：目標を到達した。 成果の公開：研究会での発表以外にも、3回にわたって一般向け講演を行っており（24年8月26日「連続講座 東洋美術をめぐる旅 東洋の絵画—アジアのなかのトーハク・東洋絵画コレクション」、24年8月11日「青山杉雨の眼と書展・記念講演会 青山杉雨の中国絵画」、24年8月3日「中国山水画の20世紀 社会・生活への“挑戦”」）、十分に成果を公開しえたと考える。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	より包括的な中国仏教文化の理解を目指と、士大夫を中心とする文人文化との接点を模索するため、さらなる調査が必要である。特に江南・四川地域の寺観の調査、日本やアメリカの作品調査が急務であり、今後はこの方面の調査を広げていきたい。あわせて、東京国立博物館所蔵品の調査、及び文献的な調査も継続する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	2年目としては順調に計画を行うことができた。次年度以降、さらに計画を進め、その成果は総合文化展、特別展の開催等でも活用していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 東アジアにおける木彫像の樹種と用材観に関する調査研究(科学研究費補助金)(5)-(2)		
【事業概要】 日本における木彫技法の変革や鎌倉時代新様式の確立にともなう用材観の変化及び形成に関する調査研究、及びその用材観に東アジア世界が及ぼした影響に関する調査研究を行う事業である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室長 浅見龍介
【スタッフ】 丸山士郎(博物館教育課教育講座室長)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、岩佐光晴(成城大学文芸学部教授)、小澤正人(成城大学文芸学部教授)、能城修一(森林総合研究所木材特性研究領域チーム長)、藤井智之(森林総合研究所関西支所長)、安部久(森林総合研究所木材特性研究領域主任研究員)、金子啓明(興福寺国宝館長)			
【主な成果】 国内木彫像の調査によって、多数の木片試料を得ることができた。今後の樹種同定によって用材観の変化・形成に関する重要な知見が得られると予想される。また、中国調査によって、中国におけるカヤ、ヒノキ等の位置付けがある程度明確化した。国内への影響を考察する際の有用な情報収集が行えたと考えている。			
【年度実績概要】 国内木彫像の調査 以下の国内各所において木彫像の調査を実施し、形状・構造・彩色に関する調書の作成、木片試料採取、像の撮影を行った。 ・興福寺東金堂(24年7月17日～21日) 興福寺東金堂が所蔵する十二神将像(12軀)の調査を実施した。 ・埼玉県立歴史と民俗の博物館(24年10月26日) 埼玉県立歴史と民俗の博物館が所蔵する神像(1軀)の調査を実施した。 ・静岡県南禅寺(25年1月12日～14日) 南禅寺が所蔵する木彫像群(一活)の調査を実施した。  木材調査の様子			
【実績値】 国内調査日数 9日			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-8

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	独創性	効率性	継続性			
判定	A	A	A			
判定理由 独創性：「用材観」という概念から独創的に着想に至った研究であるため。 効率性：異分野(美術史、保存科学、木材科学)の研究者が共同で遂行する複合領域的研究であるため。 継続性：10数年来継続している木彫像の樹種に関する研究を受け継ぐ事業であるため。						

2. 定量的評価

観点	国内調査日数					
判定	A					
判定理由 国内調査日数：国内調査を遅滞なく計画通りに実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	「用材観」という概念の発祥と形成について解明するための木彫像の調査を数多く、また、遅滞なく計画通りに実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り進捗した。本年度の成果を踏まえて次年度計画においても同様に進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 唐宋時代の越州窯青磁、碗類の器形の変遷について（茶道文化学術助成金）（(5)－②）		
【事業概要】 五代北宋期の越州窯青磁の造形は、宋磁、特に青磁の先駆的な存在として重要である。よって器種器形ごとの詳細な分析が必要と考えた。これまで日本国内の美術館・博物館所蔵の完形作品や博多、京都出土資料の調査を完了している。今回は越州窯青磁の優れたコレクションを所蔵するイギリスとアメリカにおいて、資料数の多い碗類を中心に作品調査を行い、その研究史も振り返る。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課保存修復室研究員 三笠景子
【スタッフ】			
【主な成果】 大英博物館にてデヴィッド・コレクション龍涛文碗他完形品4点と陶片資料11点の作品調査を行い、大英博物館及びアシュモレアン博物館（イングラム・コレクション）、フィッツウィリアム博物館にて資料収集を行った。			
【年度実績概要】 - 五代北宋期の越州窯青磁の作品調査（平成24年10月26日 於 イギリス大英博物館） 20世紀初頭、東洋陶磁研究の草創期より世界的に名を知られていたパーシヴァル・デヴィッドコレクションの龍涛文碗とヘンリー・オープンハイムコレクションの鳳凰文鉢の調査を行った。 - 晩唐の越州窯青磁の作品調査および陶片調査（24年10月26日 於 イギリス大英博物館） 1935年に日本の陶磁研究者、中尾万三が大英博物館のロバート・ホブソンに送ったと伝わる晩唐の越州窯無文碗と越窯及び龍泉窯址採集と思われる陶片資料の調査を行った。無文碗はいわゆる蛇の目高台を持つ典型的な作品である。これらは、20世紀初頭のイギリスと日本の研究交流をうかがわせる作品としても重要である。 - 北宋時代の汝窯青磁の作品調査（24年10月26日 於 イギリス大英博物館） 越州窯から汝窯、そして南宋官窯青磁への展開を考える上で重要な青磁六輪花鉢（アレキサンダー・ボール）の調査を行った。六輪花形のやや大きめの鉢は宋時代の白磁、青磁に多く見られる器形であるが、越州窯では作られていない。五代北宋期の器形の変遷をたどるうえで鍵となるものである。ちなみに南宋官窯青磁の同形の鉢が東京国立博物館及び台北の国立故宮博物院にも所蔵されており、これらも本年度調査することができ、比較検討が可能になった。 - アシュモレアン博物館、フィッツウィリアム博物館での調査（24年10月27日、28日 於 イギリス） オックスフォードにあるアシュモレアン博物館にはハーバート・イングラムが収集した越州窯青磁の一大コレクションが所蔵されている。また、ケンブリッジのフィッツウィリアム博物館には、中国青磁研究者としても知られる収集家のゴッドフリー・ゴンパーツのコレクションがある。これらの見学を行い、資料を収集することができ、青磁研究史についての新しい知見が得られた。			
			
アシュモレアン博物館イングラム・コレクション 越州窯青磁の展示風景			
【実績値】 作品調査1回 収集資料数 10件 撮影枚数約240枚			
【備考】 2013年度に学会発表、論文等において成果を発表する予定である。			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-9

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	B	A	A	A		
判定理由 適時性：本調査は平成21年度に行う予定であったが、産・育休暇のために執行が遅れ、本年行うこととなった。 独創性：作品調査のみならず、先行研究において重要視されてこなかったイギリスにおける中国青磁研究史をたどるという視点で調査及び資料収集を行うことができた。 発展性：先行研究を整理し、歴史的なコレクションの情報収集を行った。 継続性：越州窯に関する基礎的な作品調査をほぼ終えることができ、十分に成果が認められた。						

2. 定量的評価

観点	作品調査	収集資料数	撮影枚数			
判定	B	A	A			
判定理由 作品調査：24年10月末のハリケーンの影響でアメリカへ渡航することが困難となり、イギリスのみの調査となった。 収集資料数：今回の調査に関連する文献資料を収集することができた。 撮影枚数：学会発表及び論文等にきわめて有効な撮影を行なうことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今回の調査を行う中で研究史を見直し、迅速に関連資料を収集することができた。また、東京国立博物館所蔵青磁輪花鉢の関連作品の調査によって、越州窯の動向のみならず、その後の宋代官窯青磁に関する新たな知見をも得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	イギリスにおける作品調査及び資料収集は今後の研究において重要な足がかりとなった。次年度にその成果を公開する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 中国・韓国などアジア諸国の文化財に関する調査研究を積極的に進め、日本の文化財との比較検討や相互理解に資する。(5)－②)		
【事業概要】 仏教美術を中心に、日本のみならず広くアジアを視野に入れた展示活動を展開している奈良国立博物館の特性に鑑み、中国や朝鮮半島などアジア諸国の文化財に関する調査研究を行って、その魅力を積極的に発信することに努める。調査研究成果の蓄積と併行して中国・韓国などアジア諸国の研究者との交流や共同作業を積極的に進め、日本の文化財との比較検討や相互理解などに資するとともに、将来の展示活動等に向けた情報収集を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 西山 厚
【スタッフ】 岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、野尻忠（企画室長）、岩井共二（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、吉澤悟（情報サービス室長）、斎木涼子（教育室員）、岩戸晶子（列品室員）、清水健（主任研究員）、北澤菜月（情報サービス室員）、山口隆介（美術室員）、永井洋之（工芸考古室員）、原瑛莉子（企画室員）、佐々木香輔（資料室員）、稲本泰生（前教育室長）			
【主な成果】 学術交流協定を締結している中国・韓国の博物館との間で職員の派遣・受入を実施し、活発な研究交流・情報交換を実施した。このほか中国遼寧省において、将来の特別展に向けた文化財調査を実施する傍ら先方諸機関と研究交流を行い、調査資料及び有益な情報を蓄積した。			
【年度実績概要】 ・学術交流協定を結んでいる韓国国立慶州博物館から2名の研究員を各1ヵ月間招聘、当館からは同館へ1名を約1ヵ月間派遣し、研究交流・情報交換した。 ・学術交流協定に基づき、中国上海博物館から3名の職員を10日間招聘、当館からは同館へ5名を約10日間派遣し、研究交流・情報交換した。 ・学術交流協定を結んでいる中国河南博物院から2名の職員を1ヵ月間招聘、当館からは同館へ2名を約1ヵ月間派遣し、研究交流・情報交換した。 ・中国上海博物館の開館60周年記念事業の関連で来日した上海博物館職員1名と意見交換を実施した。(24年4月13日) ・中国上海博物館で開催された「国際博物館館長フォーラム」に職員1名を派遣し、講演を実施した。 ・中国遼寧省に研究員3名を派遣し、将来に開催する特別展「中国遼寧省遼代仏教文物展（仮）」出陳予定文物の調査を遼寧省文物考古研究所、遼寧省博物館、朝陽北塔、北塔博物館、朝陽博物館で実施し、先方諸機関との間で研究交流を行った。 ・中国に研究員3名を派遣し、上海博物館と蘇州博物館において、中国絵画の調査を実施した。			
			
遼寧省博物館での文化財調査			
【実績値】 研究員等海外派遣人数 17名 海外研究者等受入人数 7名 研究会・講座等発表回数 1回			
【備考】 研究会・講座等発表：「国際博物館館長フォーラム（於：上海博物館）」にて講演			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：国際情勢が刻々と変化する今時において、中国や韓国など周辺諸国の研究機関と交流し引き続き互いの文化理解の深化を図ることができた。 独創性：中国遼寧省の遼代仏教美術資料は、これまで日本では注目度が低かったが、これを詳細に調査することができた。 発展性：受け入れた海外研究者による研究発表会を開催し、今後の研究進展に資することができた。 継続性：10年以上の実績を持つ中国上海や韓国慶州との学術交流を引き続き実施し、研究者等と意見交換を行うことができた。 正確性：中国遼寧省での調査は、先方の提供する資料のみに基づいていた段階から、実地調査へと、より正確性を高める研究段階に進むことができた。						

2. 定量的評価

観点	研究員等海外派遣人数	海外研究者等受入人数	研究会・講座等発表回数			
判定	A	A	A			
判定理由 研究員等海外派遣人数：学術交流に加えて、先方からの招聘による派遣もあり、十分な実績をあげた。 海外研究者等受入人数：学術交流協定に基づき、十分な実績をあげた。 研究会・講座等発表回数：国際博物館館長フォーラムでの講演は、当館が継続してきた海外博物館との交流によって実現したものであり、十分な実績をあげた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	奈良に立地し、仏教美術を文化財の収集・展示・調査研究活動等の中核に据えている当館にとって、アジア諸地域の仏教美術を中心とした文化財に対する調査研究は、我が国における調査研究の深化や、展示活動の充実等を図る上で不可欠な業務である。この認識に基づいて、学術交流協定による研究交流を中国・韓国の博物館との間で長年にわたっておこなうなどして、調査資料の蓄積や信頼関係の構築等に努め、それを展示活動や研究成果に反映させてきた。本年度もその延長上に位置づけられる交流・調査等の活動を展開し、質量ともに十分な実績を挙げる事ができた。次年度以降も中国・韓国の文化財を対象とした特別展を計画しており、同様の事業を継続的に進める必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	学術交流協定に基づく中国・韓国の博物館への研究員の派遣等を通して、アジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究を着実に遂行し、将来の展示等に向けた資料の蓄積を進めている。次年度以降も中国・韓国の文化財を出陳する特別展「中国遼寧省遼代仏教文物展（仮）」や特別展「百済（仮）」等を計画しており、開催に向けて、当該テーマに沿った調査研究をさらに深化させていく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 日本とアジア諸国の文化交流に関する調査研究を進め、その成果を展示や公刊物等に反映させる。(5)－②)		
【事業概要】 「国宝 鑑真和上展」「聖地寧波ー日本仏教 1300 年の源流」(平成 21 年)、「大遣唐使展」(同 22 年) など、日本とアジア諸国の文化交流をテーマとする展示活動を展開してきた奈良国立博物館の実績を重視し、国内外所在の請来系文化財及びその影響の濃厚な文化財、日本とアジア諸地域間の文化交流に係る諸事象等を対象とした調査研究を実施し、その成果を展示や刊行物等に反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 西山 厚
【スタッフ】 岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、斎木涼子(教育室員)、岩戸晶子(列品室員)、清水健(主任研究員)、北澤菜月(情報サービス室員)、山口隆介(美術室員)、永井洋之(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)、稲本泰生(前教育室長)			
【主な成果】 名品展「珠玉の仏たち」「珠玉の仏教美術」の陳列替えに備えて、また「第 64 回 正倉院展」開催に向けて、各研究員が出陳品に関する調査と研究を行い、その成果を展示キャプションや図録の論文執筆に反映させた。また、日本とアジア諸国の文化交流に関連する外部の研究プロジェクトにも積極的に参加し、研究発表・論文等を通してその成果を公表した。			
【年度実績概要】 ・「第 64 回 正倉院展」図録に、宝物寸描「金工から見た瑠璃坏」と「古代東アジアを結んだ囲碁文化」を掲載した。 ・夏季講座「鎌倉時代の南都仏教」において、研究報告「大仏復興と重源の舍利信仰」を実施した。 ・毎月 1 回定例のサンデートークにおいて、「東アジアの仏教絵画」「玄奘三蔵像と五天竺図」というテーマの研究発表を実施した。 ・名品展「珠玉の仏たち」の「中国・朝鮮半島の金銅仏」コーナーに、新たに唐代の菩薩坐像と高麗時代の阿弥陀如来蔵を展示し、研究内容を展示キャプションに反映させた。 ・名品展「珠玉の仏教美術」において、朝鮮時代の絵画や、唐代・元代、高麗時代の密教法具を新たに展示し、研究内容を展示キャプションに反映させた。 ・科学研究費「南宋絵画史における仏画の位相」(基盤研究(B)23320033)の研究分担者または協力者として、上海博物館と蘇州博物館(ともに中国)において文化財を調査した。 ・韓国ソウルでの国際ワークショップ「古写経の書写とその伝来」に招聘され、研究概要を報告した。(25 年 1 月)			
あみだにょらいざそう 阿弥陀如来坐像 銅造 朝鮮半島 高麗(十四世紀) 福岡 崇久寺 来迎印を結ぶ阿弥陀如来の像。切れ長の目と小振りの鼻と口、とがった指先や單純化された衣文などに、高麗後期の様式があらわれている。中世の西日本各地にもたらされた高麗仏の一つである。 「中国・朝鮮半島の金銅仏」 展示キャプション			
【実績値】 講座・研究会等発表回数 3 回 論文等発表本数 2 本 展示への反映 3 回			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：特別展の出陳品に直接関連する研究論文を、同展の図録に掲載することができた。 独創性：朝鮮時代の絵画や、唐代・元代、高麗時代の密教法具の調査成果公開は、当館が得意とする仏教美術研究の基礎の上におこなわれたものである。 発展性：東アジアにおける日本仏教美術の位置づけに関する研究は、未開拓の部分も多く、今後の発展が期待される分野であり、それに関わる研究プロジェクトに多数参加することができている。 継続性：当館の名品展は、一貫して仏教美術をテーマとし、日本だけでなく周辺諸国も視野に実施してきている。 正確性：研究成果公開の場である展示において、その内容に対する当館への信頼は厚い。						

2. 定量的評価

観点	講座・研究会等 発表回数	論文等発表 本数	展示への反映			
判定	A	A	A			
判定理由 講座・研究会等発表回数：当該研究についての新しい切り口からの口頭発表を実施することができた。 論文等発表本数：当該研究に関する時宜に適った研究論文を展覧会図録に収載できた。 展示への反映：展示会場の広さが限られる中で、このテーマの研究成果を展示に反映することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	奈良に立地し、仏教美術を文化財の収集・展示・調査研究活動等の中核に据えている当館にとって、日本とアジア諸国の文化交流という観点から、国内外所在の請来系文化財及びその影響の濃厚な文化財や、その背景にある諸事象について調査研究を行うことは、最も基本的な課題の一つと位置づけられる。本年も「第64回 正倉院展」の展示図録に、日本とアジアとの交流という視点に基づく研究論文を掲載することができた。当該テーマの研究の進展と、展示への反映という両面において、成果をあげている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究を、「文化交流」という観点から着実に遂行し、その成果を展示図録や関連講座等で公表した。次年度以降も26年度の「百済（仮）」、その後の「中国遼寧省遼代仏教文物展（仮）」など、中国・韓国の文化財を中心とした展覧会開催を予定しているが、特に前者については中国の南北朝時代及び日本の飛鳥時代を視野に入れた「文化交流」という観点から調査研究を継続することで、海外の博物館の所蔵品紹介にとどまらない内容へと充実・深化させる必要がある。

【書式B】
(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 中国南京博物院所蔵絵画、鎮江焦山碑刻博物館所蔵拓本に関する調査研究((5)－②)		
【事業概要】 江蘇省は、中国でも最も書画が盛んに制作された地域の一つである。当館では、日中国交正常40周年、福岡県・江蘇省友好提携20周年ならびに九州国立博物館・南京博物院学術文化交流協定締結5周年を記念して、江蘇省でも有数のコレクションを誇る南京博物院所蔵の絵画と鎮江焦山碑刻博物館の拓本を紹介するトピック展示「江蘇省書画精華展」を計画した。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 畑靖紀
【スタッフ】			
【主な成果】 南京博物院を訪問して、23年3月29日、10月20日に展覧会について協議し、24年2月21日に出品候補作品を調査した。鎮江焦山碑刻博物館の所蔵品については、23年10月20日に張家港博物館において出品候補作品を調査した。 トピック展示「江蘇省書画精華展」の実現に向けて関係者と協議を重ねたが、悪化した日中関係の余波を受け、24年10月23日からの開催を延期し、のち中止せざるを得なくなった。			
【年度実績概要】 ・本年度は、前年度までの調査をまとめて、展覧会図録の作成を行った。 ・南京博物院、張家港博物館での調査に基づき、中国絵画・書跡に関する研究を進め具体的な知見を得た。これらを公表するためにトピック展示「江蘇省書画精華展」を企画し、ポスター・チラシやカタログ等の原稿をすべて完成させ、成果を公表するトピック展示の実現に向けて関係者と協議を重ねたが、悪化した日中関係の余波を受け、24年10月23日からの開催を延期した後に、展示計画を中止することとなった。			
【実績値】 調査件数 72件 収集資料数 20件 展示への反映 0回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	正確性				
判定	B	B				
判定理由 適時性：展覧会は中止となったが、具体的な調査をすることができた。 正確性：数値・データにおいて正確性を担保できるほど網羅はできなかったが、具体的な知見を得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	資料収集数	展示への反映			
判定	B	B	F			
判定理由 調査件数：目標を達成することはできなかったが、具体的な知見を得ることができた。 資料収集数：目標を達成することはできなかったが、具体的な知見を得ることができた。 展示への反映：目標を達成できなかった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	成果を公表するための展覧会は中止となったものの、日本で公開されたことのない中国絵画・書跡に関する具体的な知見を得ることが出来た。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	展覧会については、本年度開催を予定していた展示が、悪化した日中関係の余波を受け、開催を延期し、のち中止せざるを得なくなった。

【書式B】
(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) ベトナムにおける 16～17 世紀の海外交易に関する調査研究 ((5)－②)		
【事業概要】 平成 25 年度開催の特別展覧会「大ベトナム展」にむけて、ベトナムと日本が直接、交易等の関わりをもっていた 16～17 世紀における交流に関わる資料を調査研究する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長 藤田励夫
【スタッフ】			
【主な成果】 特別展覧会「大ベトナム展」への出品資料を選定できた。また、それらの調査、写真撮影を実施し、展覧会図録や会場解説執筆のための情報を収集できた。また、展覧会開催のため、作品の借用を実施した。			
【年度実績概要】 ・国内では、九州、関東、関西の寺社、個人、博物館等が所蔵する日越関係資料の調査を実施した。(15 回) ・ベトナム国内で、ハノイ市のベトナム国立歴史博物館等の所蔵品を調査した。(10 回) ・「大ベトナム展」の図録の編集作業を進めた。 ・インドネシア国内で、調査、撮影、作品借用を実施した。(5 回)			
			
ベトナム国立歴史博物館での調査風景			
【実績値】 調査回数 30 回 (国内 15 回 ベトナム 10 回 インドネシア 5 回)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	C	A	A
判定理由 適時性：平成25年度は日越外交関係樹立40周年にあたり、九州経済界等の期待も高い。 独創性：準備中のベトナム展は、日本で初めての本格的なものである。 発展性：今後の当館とベトナムとの良好な関係を築く上でも有益である。 効率性：ベトナムとの交渉は初めてのことが多く、時間は要する。 継続性：質量ともに多くの資料を収集できた。 正確性：国内外の資料をかなり網羅的に調査した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
判定	A					
判定理由 調査回数：計画通り国内外において、多数の調査を実施し、多くの資料を収集し、245点の作品を借用した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展覧会準備のため、国内においては、ほぼ9割以上の資料を調査できた。ベトナム等においても、主要な資料の調査が実施できたので、意義ある展覧会開催が期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	展覧会開催の準備に必要な資料は、ほぼ8割以上は収集できた。次年度の「大ベトナム展」を開催するに十分である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 朝鮮半島、三国時代の考古・美術に関する調査研究 ((5)-②)		
【事業概要】 百済・新羅・高句麗の三国時代の文化を中心とした朝鮮半島の文化財について、考古・美術・工芸・史料の分野での調査研究を実施するものである。現地での調査だけでなく、我が国に将来された文化財を当館のX線CTなどの科学機器を利用した分析をすすめる。この成果は、平成27年度に開催予定の「大百済展」に活用する。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	課長 赤司善彦
【スタッフ】 谷豊信（学芸部長）、今津節生（博物館科学課長）、渡部史之（博物館科学課アソシエイトフェロー）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）、楠井隆志（展示課展示調整室主任研究員）、鳥越俊行（文化財課資料登録室主任研究員）、進村真之（交流課教育普及室主任研究員）、坂元雄紀（展示課情報サービス室研究員）			
【主な成果】 (1) 学術交流協定を締結している韓国国立公州博物館との間での研究員の相互派遣を実施して、活発な調査や情報交換を行うことができた。 (2) 九州内の朝鮮半島から伝来した資料等についての調査を実施した。			
【年度実績概要】 (1) ・韓国公州博物館の研究員2名とともに、国内所在の朝鮮半島と倭と深く関わる考古遺物について24年11月5日～18日までの2週間、16箇所の国内所蔵機関を訪問して、共同での調査を実施した。また、韓国国立中央博物館の研究員2名と飛鳥地域の百済関連遺跡等の調査を2日間実施した。 ・当館研究員2名（考古・歴史）が、韓国国内の日本と関連の深い遺跡や遺物を24年11月26日～12月8日までの2週間にわたって調査を実施した。 (2) ・長崎県立対馬歴史民俗資料館・対馬市教育委員会の学芸担当職員と合同で、対馬島内の韓国との関わりのありそうな文化財について、当館へ輸送しX線CTスキャナー等による分析を行った。また、合同での調査成果の検討会を行った。 ・佐賀県祐徳稲荷神社付属祐徳博物館所蔵の朝鮮半島由来の資料群について、調査を実施するための打合せを佐賀県等と行うことができた。			
【実績値】 調査 7回 (1) 韓国との共同調査回数 3回 ・韓国国内での調査 1回（ソウル・扶余・公州・光州・木浦）のべ14日 ・日本国内での調査 2回（福岡・熊本・岡山・姫路・大阪・東京・千葉・飛鳥・奈良）のべ29日 (2) 九州内の朝鮮半島から伝来した資料等についての調査 ・共同調査回数 4回 X線CT分析 6件（対馬出土の銅剣・仏像等）			
【備考】			



韓国 国立扶余文化財研究所にて、王興寺出土舍利容具を国立公州博物館研究員と共同で調査

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：日韓では領土問題等の難しい時期にあっても、文化交流を推し進めることができた。 独創性：資料を目の前にして共同で調査できたので、異なる観点で調査することができた。 発展性：日韓の文化財に対する背景の違いや考え方の違いを知ることができたことは有意義である。 効率性：相互に2週間という比較的長い期間で調査を行うことができた。 継続性：今回は初の試みであったため、かなり気を遣う場面が多かったが、調査を実施できた。教訓を今後に活かしたい。 正確性：韓国国立公州博物館の協力により、正確なデータを得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	X線CT分析				
判定	A	A				
判定理由 調査回数：本年度の調査研究は、初めて韓国との共同調査を計画通りに実施することができた。 X線CT分析：目標を達成することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	学術交流協定を締結している韓国国立公州博物館との研究員の交流を行った。全ての調査について共同で調査を実施できたことの意義は大きい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り調査が実施され、当初の目標を達成することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4)九州における対外交流文化財の保存と活用に向けた研究基盤の創設（科学研究費補助金）（(5)－②）		
【事業概要】 九州はその地政学的特質から日本列島の窓口としてアジアや西洋の文化や技術をいち早く受け入れてきた。そのため、九州には対外交流に関連する文化財が多く残されている。本研究では、九州及びその周辺諸国・地域に所在する対外交流に関係する文化財を対象とする。九州に東西南北4つの方向から流入した文化の中から代表的な事象を選んで調査を展開する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
【スタッフ】 谷 豊信（学芸部長）、赤司善彦（展示課長）			
【主な成果】 本年度は北ルートの対馬、及び、西ルートの長崎市、松浦市の対外交流文化財を中心にして現地調査を実施し、さらに文化財を移動して透過X線、大型X線CT、精密三次元計測機、高精細大型スキャナなどの最新鋭のデジタル計測機器を活用した科学調査を実施した。この科学調査の結果をふまえて、学際的な研究チームによる実物調査を実施することにより、これまでにない高精度のデジタル情報を網羅したアーカイブを構築した。			
【年度実績概要】 ・九州の対外交流文化財として、西ルートからの影響に、長崎を起点として広がった黄檗宗などの仏教文化がある。本研究では昨年度から実施している長崎市寺の聖福寺の調査に引き続いて、本年度から興福寺の調査を実施した。現地で調査を実施した結果、本尊「釈迦如来坐像」の体内に内臓を模した金属製の「五臓」を発見した。 ・仏像は17世紀末～18世紀初頭に清代の中国で造られたと考えられる。現地で仏像をX線透過撮影などで調査した結果、腹部に「五臓」（長さ約15.5cm）を発見した。肺、心臓、肝臓、腎臓、脾臓（ひぞう）の五臓と咽喉にそれぞれ見立てた薄い金属板が針金状の線でつながれ、脊椎を意味する木の棒に結ばれているとみられる。五臓の周囲には複数の球状の影があり、六腑（ろっぷ）に見立てた穀類などの可能性もある。中国には、五臓六腑の模型を入れ、仏像に生命を宿らせる思想がある。像の背面には、銅製とみられる鏡（直径10.3cm）も入っていた。鏡は仏の魂の象徴とされる。 ・金属製の五臓が確認された中国の仏像は、これまでに国内で11例、イタリアで1例である。昨年度からの発見はこれで6例となり、本研究調査によって発見数が倍増したことになる。また、金属製の五臓と共に鏡が発見されたのは今回が初めてである。			
			
釈迦如来座像の「五臓」のX線透過画像			
【実績値】 調査件数 11件 収集資料数 65点 学会発表数 3件（①・②・③） (参考値) 新聞等報道 2件 新聞・テレビ放送で、鷹島海底遺跡遺物のCT調査、長崎市興福寺仏像調査が紹介された。			
【備考】 学会発表 ①「X線CT（3D－CT）による文化財健康診断システムの構築—劣化痕跡・修復履歴からみた文化財の状態把握—」文化財保存修復学会（24年6月30日） ②「X線CTを利用した殷周時代青銅鼎の内部構造解析」日本文化財科学会（24年6月23日） ③「鷹島沖海底遺物出土木製品へのトレハロース含浸法の適応」日本文化財科学会（24年6月23日）			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：九州には対外交流に関連する文化財が多く残されており、当博物館が中心となって研究に取り組む必要があるため。 独創性：高精度の情報を網羅したデジタルアーカイブを構築することで、画期的な博物館情報を蓄積した。 発展性：最新鋭の高精度デジタル計測機器を用いた科学調査を実施して、汎用性の広い高精度の情報を網羅できた。 効率性：高精度の情報を基に文化財の保存状態、内部構造・材質技法を網羅した情報を効率的に取得できた。 継続性：対外交流文化財の基礎調査として、本研究を契機に各機関と連携して発展的に展開することができた。 正確性：高精度デジタル計測機器を用いた調査であるので、現在、世界最高レベルの信頼性を得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	収集資料数	学会発表数			
判定	A	A	A			
判定理由 調査件数：中国・朝鮮半島からの北ルート及び西洋・東南アジアからの西ルートに重点をあてて 11 件の調査を計画通り実施した。調査は、各地の博物館・教育委員会等と協力して実施した。 収集資料数：特に対馬・壱岐の文化財総合調査では 20 点に及ぶ文化財を調査した。また、元寇の海底遺跡から発見された遺物の CT 調査を 40 点実施した。また、長崎市の寺院が所蔵する仏像 5 体についても調査を実施し、目標を達成することができた。 学会発表数：計画通り本研究に関する学会発表を文化財保存修復学会、日本文化財科学会等で発表した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	多様な九州の対外交流文化財について 11 の研究テーマを設定して研究を実施した。すでに北ルートの対外交流文化財調査として対馬の文化財について調査を実施することができた。また、西ルートの長崎の寺院調査については、象内に金属製五臓を納入した仏像について新たな発見が続いている。すでに金属製五臓の発見例は本研究によって 6 例が新たに追加されて 11 例となった。これらの発見は随時報道等で紹介された。また、長崎県松浦市鷹島の海底遺跡から発見された元寇関連遺物に関する調査についても、研究成果が新聞テレビ等で報道された。以上のように、各テーマ毎の進捗状況には差があるが、おおむね順調に進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、当初計画に沿って、研究内容の水準を保ちながら、順調に遂行していると考えられる。引き続き外部資金を積極的に活用しながら、他の研究機関・博物館・教育委員会と連携しつつ調査研究を継続したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5) タイにおける異文化の受容と変容－13世紀から18世紀の対外交易品を中心として－（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）（(5)－②）
【事業概要】 本研究は美術史的視点に立脚して、13～18世紀のタイにおける異文化の受容とその展開を探り、文化交流の実相を浮かび上がらせることを目的とする。タイにおける異文化の受容と変容を明らかにするために、交易品に着目してその関係資料を横断的に調査する。これまでに知られていた資料の理解を深め、新出資料も加えた基礎資料集成を行うとともに、それぞれの資料について正しい評価を行う。	
【担当部課】	学芸部文化財課
【プロジェクト責任者】	資料管理室主任研究員 原田あゆみ
【スタッフ】 小泉恵英（企画課長）、藤田励夫（博物館科学課保存修復室長）、末兼俊彦（京都国立博物館研究員）	
【主な成果】 (1) 上記スタッフに加え、館外の協力者にも協力を仰ぎ、タイにて調査を行った。タイ王国文化省芸術局の協力を得て、本年度は、バンコク、北タイを中心に、彫刻、歴史、考古、工芸班にて国立博物館資料及びプライベートコレクションを調査し、現地研究者との意見交換を行った。調査の成果については、同プロジェクト報告会にて発表し、その一部を報告書として現地に還元した。 (2) 日本国内に伝わったタイ由来文化財の調査を行い、日タイ文化交流を示す文化財の正しい評価を行った。	
【年度実績概要】 (1) タイにおいて他国との交流を示す文化財を中心にタイ王国文化省芸術局と共同で調査を行い、基礎データを収集した。また、シンガポールにおいて、タイ（アユタヤ時代）の貿易染織に係る基礎調査を行った。 (2) 日本国内に伝わったタイ由来文化財の調査を行い、東京国立博物館に収蔵されているタイ彫刻について、再評価を行った。	
 タイ王国芸術局にて調査報告及び協議	
 タイ王国芸術局収蔵施設にて日本由来文化財調査	
【実績値】 調査回数 6回（海外：3回 国内：3回） 調査報告会回数 2回（海外：1回 国内：1回）	
【備考】	

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	B
判定理由 適時性：タイ側からの要望を受け、日本由来資料の評価を行い、現地に還元した。 独創性：タイ国内で独自に展開した工芸品、仏教美術について着目し、そのルーツと歴史的背景を探った。 発展性：ニカ国間、多分野による共同調査を行うことで、新たなプロジェクトへの発展が期待される。 効率性：日常業務の関係で、調査回数、期間については、十分とはいえないが、限られた時間内で最大限の効率を図るため、他機関から、多分野の協力者を得た。 継続性：現地との強い協力体制を構築し、内容の濃い調査・協議を実施できた。 正確性：調査資料のデータベースに着手した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査報告会 回数				
判定	A	B				
判定理由 調査：目標としていた地域での調査を実施した。 報告会：調査参加者の都合により、報告会の回数は限られたが、本年度の調査を通して、調査研究のための問題点や課題を洗い出し、次年度の対処体制を整えた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	プロジェクト初年度の調査において、協力者との連携を十分にとり、新発見を得ることができた。調査成果を現地に還元することで、研究者との信頼関係を深め、今後の展開も順調と見込まれる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	予定していたタイ現地での調査を遂行することができた。本年度の調査を通して、調査研究のための問題点や課題を洗い出し、次年度の対処体制を整えることで、長期的な視野で研究協力体制を結ぶことができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1) 近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究(科学研究費補助金) (5) - ③)
【事業概要】 京都国立博物館では昭和50年代から継続して京都市内とその周辺に存在する古社寺所蔵の文化財調査を行ってきた。平成23年度からは3年間の予定で京都府南部木津川流域の古寺の文化財調査を行っている。平成24年度はその2年目として京都府宇治田原町の禅定寺・京田辺市観音寺・同市壽寶寺の文化財の調査を行う（2月予定）。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	企画室長 宮川禎一
【スタッフ】 尾野善裕（工芸室長）・浅鯨毅（保存修理指導室長）・山本英男（美術室長）・山下善也（連携協力室長）・山川暁（教育室長）・永島明子（主任研究員）・赤尾栄慶（上席研究員）・羽田聡（研究員）・水谷亜希（研究員）・末兼俊彦（研究員）	
【主な成果】 京都府宇治田原町の禅定寺で彫刻及び工芸作品の調査を行い新資料を発見した。また京田辺市の観音寺・壽寶寺において彫刻・工芸・絵画・考古資料の調査を行い新知見が得られた。	
【年度実績概要】 本調査は、科学研究費基盤B「南山城地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」平成23年度～25年度の3ヵ年計画の2年目にあたる。本年度は以下の調査を実施した。 - 平成25年2月19日・20日及び3月4日～6日に京田辺市の一休寺で文化財調査と撮影を行った。特に一休禅師の遺品のなかに未公開資料が発見された。また染織品にみるべき遺品があった。 - 平成25年2月25日に京田辺市の観音寺で文化財調査と撮影を行った。 - 平成25年2月26日に京田辺市の壽寶寺で文化財調査と撮影を行った。 - 平成25年2月28日・3月1日に宇治田原町の禅定寺で文化財調査と撮影を行った。絵画・彫刻・陶磁器にみるべき遺品があった。	
	
京田辺市一休寺での仏像撮影風景	
【実績値】 調査点数：約500点 撮影文化財点数：約200点	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	A	B	A	A
判定理由 適時性：寺院伝来文化財については所蔵寺院側からも調査して欲しいとの要望があった。 独創性：彫刻だけでなく絵画・書跡・工芸・考古などの多方面からの文化財調査は寺院側には望ましい。 発展性：今回の寺院文化財調査により周辺諸寺院の文化財所在情報が把握できて今後のさらなる発見が期待される。 効率性：京都府南部地域は博物館からの交通の便もよく、時間の効率がたかく追加調査が容易である。 継続性：3年にわたる調査の2年目であり個別作品に対する質の高い調査が継続中である。 正確性：個別作品の調書及び写真が順調に増加している。						

2. 定量的評価

観点	調査点数	撮影文化財 点数				
判定	A	A				
判定理由 調査点数：調査点数の目標値約300点のところ調査を終了した件数が約500点と充分以上の件数が調査できた。 撮影文化財点数：撮影件数の目標値150点のところ約200点を撮影し、目標値を上回った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	木津川流域のいくつかの寺院の文化財調査が進展したことによって、従来知られていなかった工芸絵画彫刻作品が新たに発見されたことは評価できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	京都国立博物館での文化財調査の成果については本来単年度・寺院毎に社寺調査報告書とそしてまとめるのが本来であるが、3年間の科学研究費による調査であり、本年度も調書整理に努める。調査成果については次年度以降の特別展覧会カタログや調査報告書の形で公開還元する予定である。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 近世絵画に関する調査研究(5)－③)		
【事業概要】 当館に保管及び寄託される作品を中心とした近世絵画に関する調査研究を行う。再開する平常展示の展示替計画にあたっての情報整理、基盤固めを行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	連携協力室長 山下善也
【スタッフ】 (外部研究者) 奥平俊六 (客員研究員・大阪大学教授)、橋本寛子 (調査支援ボランティア・神戸大学助手)、吉田智美 (調査支援ボランティア・同志社大学大学院生)、森光彦 (同前・京都市学校博物館学芸員)、大橋あきつ (同前・京都大学大学院生)、浦上彩音 (同前・同前)			
【主な成果】 当館発行の『学叢』第34号に、次の論文を執筆し、館蔵品の文化財的価値を明らかにした。 山下善也「狩野山雪筆聖賢図押絵貼屏風について」			
【年度実績概要】 ・毎月一日程度、当館近世絵画担当研究員が調査支援ボランティア等とともに主として館蔵品・寄託品について、調査・撮影・意見交換等を行った。これらの調査に際し、客員研究員の奥平俊六氏の協力を得た。 ・当館に寄託される近世絵画は年々増加し、多様化しており、中には、大量の円山派の画稿・模写資料も加わってきている。それら大量の作品の地道な調査を、調査支援ボランティアの協力を得て、着実に進めてきた。一朝一夕に終えることのできるものではなく、積み重ねが求められる仕事であるが、調査支援ボランティアたちの協力による人海戦術的な手法が効を奏し、通常の2倍～3倍の効率で調査を進めることができた			
【実績値】 調査回数 12回 収集資料数 210点 調査概報 1件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-2

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	S	A	A
判定理由 適時性：寄託された時点から時間をあまり措かずに調査を実施した。 独創性：京都という地域性に根ざした資料・作品ばかりであり、独自の内容である。 発展性：この調査の結果が、平常展展示につながっていく。 効率性：調査支援ボランティア5名の協力を得て調査を進め、効率をあげた。 継続性：寄託品の中には、応挙関連の大量の画稿類もあり、今後も調査を継続できる。 正確性：正確な調書作成につとめ、おおむね成果をあげた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
判定理由 調査回数：コンスタントに12回行った。 収集資料数：210点は十分な資料数で整理も進んだ。 調査概報：論文を1件執筆した。 いずれも、コンスタントに調査をすすめ、調査数そのものも累積してきている。整理も進んだ						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近世絵画の館蔵品・寄託品についての調査研究及び関連情報収集は、順調に進んでいる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
達成	近世絵画担当研究員と客員研究員との協力により、近世絵画の館蔵品・寄託品に関する情報収集・整理は、順調に進み、調査研究は達成されている。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-3

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 近畿旧家伝世文化財総合調査((5)－③)		
【事業概要】 近畿地方の江戸時代から続く旧家より、寄贈を見据えて所蔵品の調査依頼があり、予備調査を実施したところ、複数の土蔵に千数百点に及ぶ古書画・器物が保存されていることが判明し、全容把握だけでも数年を要する見込みであることが判明した。所蔵者と協議を行い、今後時間をかけて悉皆的に調査を進めると同時に、逐次博物館への寄贈を受けていくことで合意に至ったため、24年10月以降、毎月2～4日程度の調査を継続的に実施している。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室長 尾野善裕
【スタッフ】 佐々木丞平（館長）・山川暁（教育室長）・永島明子（連携協力室主任研究員）・末兼俊彦（企画室研究員）・谷口愛子（調査員）・京都工芸繊維大学特任准教授）・寥佐恵（京都大学大学院生）・北條祐子（非常勤事務補佐員）			
【主な成果】 陶磁 378 件、人形 35 件、漆工 67 件、金工 52 件、絵画 57 件の調書作成、ならびに資料写真撮影を行った。併せて、今後の調査の基礎資料とするべく、所蔵者側から提供を受けた古書画・器物リストをパソコンにデータ入力し、データベース化した。			
【年度実績概要】 予備調査を含め、のべ 23 日の調査を行った。京都国立博物館研究員の参加は、のべ 44 日人である。調査を通して、茶道具や保存状態の良好な御所人形、江戸時代の各種七宝焼など、有力な寄贈候補品多数を見出した。 なお、この事業については、調査対象としている旧家の所蔵品を京都国立博物館だけで寄贈を受けるのではなく、より有効に活用される機関の斡旋・紹介することも視野にいて、地元自治体の文化財担当者・担当部局とも緊密に連絡を取りながら進めた。			
【実績値】 調書作成件数 589 件 調査日数（館外） のべ 23 日 成果公表 なし			
【備考】 年度当初計画にはなかった事業であるが、新規に寄贈申出を受けたことに伴い、平成 24 年度より新規事業として開始したもので、事業費には博物館支援団体である清風会からの寄付金を充当した。			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	B	A	A	A	
判定理由 適時性：各種業務繁忙中、年度当初計画にはなかった事業であるにもかかわらず、速やかに調査を開始し、軌道に乗せることができた。 独創性：基本的に、寄贈に向けての候補品の洗い出し作業であり、その作業自体に取り立てて独創性はない。 発展性：今後展覧会での活用が大いに見込まれる文化財が少なくなく、将来的に博物館にとっての大きな財産になることが期待されるため。 効率性：博物館から現地へ赴くのに片道2時間近く要するため、調査回数の割りに進捗は必ずしもはかばかしくなく、可視的に数値化できる成果ではないものの、調査回数の多さが寄贈申出者との間の信頼関係を深める上で大いに良い方向へ作用しているため。 継続性：継続的かつ着実に調査を実施できているため。						

2. 定量的評価

観点	調書作成件数	調査日数	成果公表			
判定	B	S	C			
判定理由 調書作成件数：現地への往復に時間を要するため、調査自体に潤沢な時間を割けず、伸び悩んでいるため。 調査日数：独立行政法人化後、業務が繁忙化する一方の中で、のべ44日人もの研究員の参加が得られたのは、各研究員の日常業務効率化努力によるところが大きく、特にこの点を強調しておきたいため、Sと評価した。 成果公表：調査成果の公表については、個人宅の調査であり、個人情報保護の観点から十分に時機・方法を考慮して行う必要があり、現時点で対外的な情報発信は全く行っていない。しかし、将来的には寄贈品の展覧会等での活用が大いに見込まれるため、成果公表については単年度ではなく、中長期的な視点から評価されるべきものと考えている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	外部への成果公表を全くしていないが、寄贈の申出に速やかに対処しつつ、所蔵者との信頼関係構築が良好であり、博物館資産の上積みにつながる事業である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館の収蔵品を充実させるという大目標に対して、着実に前進している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 鎌倉仏教とその造形に関する調査研究((5)－④)		
【事業概要】 鎌倉仏教の美術・造形にかかわる作品や図像及び関連資料を収集し、整備する。 報告書の刊行、シンポジウム（研究座談会）の開催により、成果を公開する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 赤尾栄慶
【スタッフ】 山本英男（美術室長）、山下善也（連携協力室長）、大原嘉豊（研究員）、呉孟晋（研究員）、水谷亜希（研究員）、羽田 聡（研究員）、浅湊 毅（保存修理指導室長）、尾野善裕（工芸室長）、山川 暁（教育室長）、永島明子（主任研究員）、末兼俊彦（研究員）、村上 隆（学芸部長）、宮川禎一（企画室長）、岡田 愛（アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 (1) 仏教美術研究上野記念財団の助成によって、鎌倉仏教に関する資料の調査・撮影を実施し、その成果の一部を特別展観「国宝 十二天像と密教法会の世界」に反映させた。 (2) 平成 23 年度に実施した研究座談会の報告書「浄土宗の文化と美術」を刊行した。 (3) 研究発表と座談会「仁和寺御流を中心とした院政期真言密教の文化と美術」を開催した。			
【年度実績概要】 (1) ・仁和寺御経蔵聖教のうち、主に「後七日御修法」関係の資料を調査し、撮影を行い、それに基づいて成果の一部を特別展観「国宝 十二天像と密教法会の世界」の展示に反映させた。 ・出光美術館所蔵の「山水屏風残闕」の調査を実施し、もとは当館所蔵の「山水屏風残闕」と同一の屏風の一部分であることを確認し、特別展観「国宝 十二天像と密教法会の世界」において公開した。 (2) 平成 23 年度に実施した研究座談会の報告書「浄土宗の文化と美術」を 24 年 5 月に刊行した。 (3) 25 年 1 月 14 日に研究発表と座談会「仁和寺御流を中心とした院政期真言密教の文化と美術」を開催し、90 人余りの参加を得た。			
【実績値】 調査 2 回 展示公開 1 回 報告書刊行 1 回 研究発表と座談会開催 1 回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4542-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：調査の成果の一部を特別展観「国宝 十二天像と密教法会の世界」で公開した。 独創性：仁和寺の守覚法親王の聖教に注目した。 発展性：図像と具体的作品との比較を促す。 効率性：調査の成果を展示に反映させた。 継続性：調査対象がまだ多い。 正確性 図像との比較検討を提示した。						

2. 定量的評価

観点	調査	展示公開	報告書刊行	研究発表と 座談会開催		
判定	A	A	A	A		
判定理由 調査：2回実施し、写真撮影も行った。 展示公開:成果を盛り込んだ展示を1回行った。 報告書刊行:予定していた報告書「浄土宗の文化と美術」を刊行した。 研究発表と座談会開催:予定通り、研究発表と座談会「仁和寺御流を中心とした院政期真言密教の文化と美術」を開催した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	4ヵ年の継続事業「鎌倉仏教とその造形」の最終年度であったが、禅宗関係、日蓮法華宗関係、浄土宗関係、そして真言密教に関する調査を行い、各年度ごとに研究成果の公開と資料の収集が出来た。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	4ヵ年を通じて、バランスのよい調査研究が行われた。ただし、仏教美術に関する調査研究は、広範であり、今後ともさらなる調査研究と成果の公開をめざす。

【書式B】
(様式1)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4543-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 平成25年度特別展「當麻寺展（仮称）」、26年度特別展「内山永久寺展（仮称）」「百済展（仮称）」など、将来の特別展実施に向けた調査研究を行う。（(5)－④）		
【事業概要】 次年度以降に実施する予定の特別展のテーマに沿って予備的な文化財調査をおこない、出陳品の選定や展示構成案の作成に資する。出陳候補となった作品に対してはより詳細な調査を実施し、展示会場における各種解説、展覧会図録に掲載される総説・各論・作品解説、会期中の講座等に資する。また展覧会担当者を中心として、当該テーマに沿った様々な学術的観点からの調査研究をおこない、展覧会とそれに伴う諸活動の内容充実を図る。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 西山 厚
【スタッフ】 岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、野尻忠（企画室長）、岩井共二（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、吉澤悟（情報サービス室長）、斎木涼子（教育室員）、岩戸晶子（列品室員）、清水健（主任研究員）、北澤菜月（情報サービス室員）、山口隆介（美術室員）、永井洋之（工芸考古室員）、原瑛莉子（企画室員）、佐々木香輔（資料室員）、稲本泰生（前教育室長）			
【主な成果】 平成25年度特別展「當麻寺」、特別展「仏教美術入門（仮）」、26年度特別展「内山永久寺（仮）」、特別展「百済（仮）」、27年度特別展「快慶（仮）」、将来予定される特別展「中国遼寧省遼代仏教文物展（仮）」等に向けて関連する文化財を調査した。うち内容がほぼ確定している特別展（「當麻寺」等）については、特定文化財の重点的な調査を実施した。また、他機関との共催展（「中国遼寧省遼代仏教文物展」等）については、相手先との学術面での協議や合同調査を実施した。			
【年度実績概要】 ・平成25年度特別展「當麻寺」の開催に向け、當麻曼荼羅に関する詳細な調査を、さまざまな研究分野の専門家の助言を得ながら実施した外、その他の出陳予定品に関する調査を以下の諸機関において実施した。調査対象文化財の保管機関：當麻寺（24年4月、11月、12月に調査実施）、石光寺、葛城市歴史博物館、元興寺文化財研究所、大谷大学博物館、神奈川県立金沢文庫、龍谷大学図書館 ・平成25年度特別展「仏教美術入門（仮）」の開催に向け、出陳予定品の事前調査を実施し、資料を収集した。 ・奈良文化財研究所と合同で将来の共催を目指す特別展「中国遼寧省遼代仏教文物展（仮）」の開催に向け、奈文研と内容等について協議を重ねるとともに、中国遼寧省に研究員3名を派遣し、遼寧省博物館・遼寧省文物考古研究所・朝陽北塔博物館等で、奈文研側の担当者との合同調査を実施した。			
【実績値】 ・文化財調査回数（人数×日数の延べ回数） 22回 ・共催者との打ち合わせ・合同研究会等回数 7回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4543-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：當麻曼荼羅の完成 1250 年を翌年に控えた年に、當麻寺での調査を実施することができた。 独創性：當麻寺や周辺寺院での調査は、奈良に根ざした活動を続けている当館でなければ実施し得ないものであるため。 発展性：當麻寺の研究に関しては、未開拓の分野も多くあり、展覧会後にも継続的な研究が望まれ、さらに発展していくと予想されるため。 効率性：限られた予算のなかで、将来の各展覧会に向けて効率良く調査を実施することができた。 継続性：當麻寺での調査は 2 年前から実施し、所蔵者の信頼を得ているため、今後も継続していくことが可能であるため。						

2. 定量的評価

観点	文化財 調査回数	打ち合わせ・ 検討会回数				
判定	A	A				
判定理由 文化財調査回数：展覧会の開催に向けた十分な回数の文化財調査を実施できた。 打ち合わせ・検討会回数：共催者との間で協議・情報交換を行う場を、十分な回数、設けることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	仏教美術及び奈良に関連する文化財を展示活動の中核に据えている当館にとって、当該ジャンルに関連する多彩かつ魅力的な特別展の企画立案・実施は、社会からの要請が最も強い業務の一つである。このような認識から特別展の内容を充実させ、かつそれを学術的な裏付けを伴ったものとすべく、設定した展覧会のテーマに沿った調査研究を展開してきた。本年度は 25 年度以降に開催予定の展覧会に関わる研究活動を作品調査中心に進め、質量両面において大きな実績を挙げることができた。次年度以降も将来の企画展示の充実に向けて同様の業務を継続し、着実に成果を挙げていく必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	特別展等の企画立案から開催に至るまでの過程における調査研究を、「仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の、基礎的かつ総合的な調査研究を行う」という計画に沿うよう展開しており、その点において順調に実績を積み重ねている。次年度も 26 年度特別展「内山永久寺(仮)」、特別展「百済(仮)」等の開催に向けた調査研究を行う予定であり、これを円滑に遂行し、確実な成果の蓄積へと導く業務のサイクルが、すでに確立されている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 南都諸社寺等における文化財調査を積極的に実施して宗教文化に関する調査研究の成果を蓄積し、毎年恒例の特別陳列「お水取り」「おん祭と春日信仰の美術」、24年度御遠忌800年記念特別展「解脱上人貞慶―鎌倉仏教の本流―」、24年度特別展「頼朝と重源―東大寺再興を支えた鎌倉と奈良の絆―」、24年度特別陳列「古事記の歩んできた道―古事記撰録1300年―」、25年度特別展「當麻寺」、25年度特別展「仏教美術入門(仮)」等に反映させる。(5)―④)		
【事業概要】 奈良及びその周辺地域に位置する諸社寺に対し、奈良国立博物館の諸活動に対する理解と協力を得られるよう積極的な働きかけを行って所蔵文化財の調査研究等を実施し、その成果を平成24年度特別展「解脱上人貞慶」、特別展「頼朝と重源」、特別陳列「古事記の歩んできた道」、毎年恒例の特別陳列「お水取り」「おん祭と春日信仰の美術」、25年度特別展「當麻寺」等に反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 西山 厚
【スタッフ】 岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、斎木涼子(教育室員)、岩戸晶子(列品室員)、清水健(主任研究員)、北澤菜月(情報サービス室員)、山口隆介(美術室員)、永井洋之(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)、稲本泰生(前教育室長)			
【主な成果】 奈良を中心とする諸社寺等への働きかけをして、當麻寺(葛城市)、法隆寺(斑鳩町)、唐招提寺(奈良市)、海住山寺(木津川市)、矢田寺(大和郡山市)、持聖院(斑鳩町)、法華寺(奈良市)、薬師寺(奈良市)、金剛山寺(大和郡山市)、元興寺(奈良市)、来迎寺(奈良市)等の所蔵文化財を調査した。その成果を24年度に実施した展示及びそれに伴う図録類や講座等に反映させるとともに、今後の展示活動等に活用できる資料の蓄積、将来の調査に向けた調整などを実施した。			
【年度実績概要】 ・特別展「頼朝と重源」の開催にあたり、来迎寺(奈良市)の善導大師坐像を現地で調査し、その成果を同展の解説文、図録等に反映した。 ・特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」の開催にあたり、春日大社(奈良市)にて文化財調査を実施し、その成果を展示内容に反映させた。 ・名品展「珠玉の仏たち」における木造阿弥陀如来坐像(桜井市外山区)の特別公開に際して調査を行い、その成果を解説に反映した。 ・當麻寺における総合的な文化財調査を前年度から継続し、平成25年度特別展「當麻寺」に向けて調査・写真等の調査資料を蓄積した。 ・「国宝薬師寺展」(25年4月～6月、石川県立美術館、学術協力)に向けて、薬師寺において文化財調査を実施し、図録用の解説文にその成果を反映した。			
			
金剛山寺における文化財調査			
【実績値】 社寺等における調査回数(人数×日数の延べ回数) 149回 展示への反映 4回 講座・研究会等発表回数 2回 論文等発表本数 8本(①～⑧)			
【備考】 論文等 ①西山 厚「解脱上人貞慶の信仰と活動」 ②岩田茂樹「海住山寺の十一面観音像―貞慶との接点を求めて―」 ③谷口耕生「貞慶をめぐる二つの聖地図像」 ④北澤菜月「海山住寺に伝来した一対の浄土図―貞慶の浄土観に関わる新発見―」 ⑤山口隆介「東大寺の鎌倉再興をめぐる信仰と美術」 ⑥稲本泰生「『大仏像寸法注文』と大仏蓮弁世界図の解釈をめぐる覚書」 ⑦斎木涼子「東大寺僧の伊勢神宮参詣と中世的神仏習合」 ⑧内藤 栄「大仏舎利のネットワークとしての三角五輪塔」			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：特別展「頼朝と重源」に出陳予定の善導大師像の調査を、現地において実施するなど、必要な文化財調査を適時に実施することができた。 独創性：海住山寺や持聖院での調査は、特別展「解脱上人貞慶」開催による縁で実現したものであり、常日頃から南都寺院と密接にかかわっている当館でなければ成し得ない研究であるため。 発展性：南都周辺には未知の資料もまだまだ存在すると考えられ、諸寺社との連携を深めることにより、さらに新資料の開拓に発展する可能性が高いため。 効率性：調査した資料のほとんどを、何らかの形で展示に反映しており、効率性は高いため。 継続性：五十年來の伝統を持つ当館による南都諸寺社資料の調査は、本年度も十箇所の現地寺社で実施できた。 正確性：研究成果公開の場である展示において、その内容に対する当館への信頼は厚いため。						

2. 定量的評価

観点	作品調査回数	展示への反映	講座・研究会等 発表回数	論文等発表 回数		
判定	A	A	A	A		
判定理由 文化財調査回数：研究や展示に向けた調査を必要な回数実施することができた。 展示への反映：調査成果を着実に展示内容に反映することができた。 講座・研究会等発表回数：調査成果を盛り込んだ研究発表を実施できた。 論文等発表本数：調査所見に基づく文章を公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	奈良に立地し、仏教美術の調査研究・展示における国内最大級の拠点としての役割を果たしてきた当館にとって、南都諸社寺等に蔵される文化財の調査研究は、最も基本的な作業の一つである。本年度は近在の社寺を中心に所蔵品の調査を活発に展開して資料の収集を着実に進め、また蓄積した成果を展示や刊行物等に反映させることができた。こうした調査を通じて近隣社寺との交流・信頼関係は一層深まっており、今後の当館の企画・事業のさらなる充実につながることを期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	南都諸社寺等における文化財調査は「仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の、基礎的かつ総合的な調査研究を行う」という計画の主軸をなすものであり、近隣社寺の宝物調査実施による基礎資料の蓄積、その成果の展示や刊行物等への反映の両面において、本年度は大きな実績を挙げることができた。25年度以降も毎年恒例の特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」「お水取り」や、南都の地域性を重視した仏教美術関連の特別展（「當麻寺」「仏教美術入門」等）の開催を予定しており、それらの充実を図るべく本年度同様の業務を継続し、着実に成果を挙げていく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 正倉院宝物や奈良の出土遺物・伝世品・伝統工芸・芸能など、当該地域に密着した文化財に関する調査研究を実施し、展覧会等に反映させる。(5)－④)
【事業概要】 毎秋恒例の「正倉院展」を最も重要な事業の一つに位置づけている奈良国立博物館の運営方針に沿って、正倉院宝物に関する調査研究活動をおこない、その成果を展示や刊行物等に反映させる。併せて奈良という地域に密着した文化財に関する調査研究を、(当館が主たる調査研究対象としている仏教美術や社寺関係の文化財に限定することなく) 時代的にもジャンルの的にも幅広く展開し、その成果を展示活動や刊行物等に反映させる。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	部長 西山 厚
【スタッフ】 岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、斎木涼子(教育室員)、岩戸晶子(列品室員)、清水健(主任研究員)、北澤菜月(情報サービス室員)、山口隆介(美術室員)、永井洋之(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)、稲本泰生(前教育室長)	
【主な成果】 正倉院宝物に関連する調査研究を積極的に進め、その成果は当館が編集・刊行した展覧会図録『第64回正倉院展』に掲載されたのに加え、「正倉院展」会場での解説パネル類、新聞連載記事、講座・シンポジウムにおける口頭発表等に反映された。また、『古事記』を編纂した太安万侶についての研究をおこない、同墓誌を展示するとともに概要を展覧会図録『古事記の歩んできた道』に掲載した。また春日社社家の文芸活動を示す資料や、春日若宮おん祭の祭礼を描いた図を重点的に調査し、成果を展示に反映するとともに、図録『おん祭と春日信仰の美術』にも掲載した。	
【年度実績概要】 ・「第64回正倉院展」開催に際し、同題の展覧会図録(和文及び英文)を編集・刊行した。出陳宝物調査資料の精査に基づいて各人が執筆した原稿を当館研究員全員で討議・吟味し、内容を確定した各個解説を掲載した。同図録には当館研究員の執筆した関連論考(「宝物寸描」)2篇も掲載した。会期中には新聞紙上で当館研究員執筆による宝物紹介記事を連載し、公開講座では当館研究員1名が研究成果を披露した。また当館が企画運営した正倉院学術シンポジウム2012「正倉院宝物の近代―壬申検査から140年―」(於：奈良県新公会堂、24年11月4日)でも研究員1名が正倉院宝物に関連する研究成果を発表し、討論に参加した。 ・正倉院宝物に関する調査のため、研究員1名を宮内庁正倉院事務所に派遣した(24年11月) ・特別陳列「古事記の歩んできた道」の開催にあたり、『古事記』を編纂した太安万侶に関する研究をおこない、その墓誌を展示するとともに墓地や周辺資料の研究成果を図録に掲載した。また、同展に向けて奈良文化財研究所及び宮内庁正倉院事務所において奈良時代の原本資料を調査し、それを展示するとともに調査成果を図録の内容に反映させた。 ・平城京の時代に編纂された書物に関する研究を実施し、『古事記』『日本書紀』『出雲国風土記』等の写本を、特別陳列「古事記の歩んできた道」で展示した。 ・毎年恒例の特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に際し、本年度はおん祭の祭礼の様子を描いた絵巻物や屏風画、それに春日の社家で隆盛した文芸活動に焦点をあてて関連文化財を重点的に調査し、出陳した。調査研究の成果は、同名の展覧会図録及び解説パネルなどに反映された。	
	
特別陳列会場 太安万侶墓解説パネル	
【実績値】 展覧会等図録刊行 6冊 講座・研究会等発表回数 3回(正倉院展口座2、正倉院シンポ1) 論文等発表本数 5本(おん祭図録1、古事記1、正倉院宝物に学ぶⅡ3)	
【備考】	

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：古事記の完成から1300年の記念の年に、本書にまつわる特別陳列を開催し、研究成果を展示内容と図録に反映することができた。 独創性：春日若宮祭礼図の研究成果を展示に反映させたこと等は、当該地域に密着した文化財調査を継続している当館でなければ成し得ないものであるため。 発展性：春日若宮祭礼図の研究や、春日社社家の文芸に関する研究は、未知の資料の発掘も含め、今後の発展が期待できる研究であるため。 効率性：正倉院展の内容が開示されてから開催までの短期間に、出陳宝物に関する研究を効率良く実施し、その研究成果を図録の内容に反映することができた。 継続性：春日若宮祭や春日社に関する研究は、当館が平成18年度から継続して毎年開催している特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に関わるものであるため。 正確性：特別陳列「古事記の歩んできた道」の図録は、この分野で最先端を行く古事記学会の支援も得て、正確性の高い書物とすることができた。						

2. 定量的評価

観点	図録等刊行	講座・研究発表等回数	論文等発表本数			
判定	A	A	A			
判定理由 図録等刊行：開催したすべての特別展と特別陳列で図録を刊行できた。 講座・研究会等発表回数：当該研究の成果を反映した口頭発表を実施することができた。 論文等発表本数：当該研究の成果を盛り込んだ文章を各種公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	かつて平城京がおかれた奈良には、独特の魅力に富んだ地域色豊かな文化が形成され、開花した。そこには当館が展示・調査研究の主軸としている仏教美術の枠に収まりきらない要素が、多分に含まれている。また奈良時代の日本に開花した文化の高い水準と国際性を、最も雄弁に物語る存在である正倉院宝物を、毎年恒例の「正倉院展」で展示する館として、当館は世界でも唯一無二の存在である。これら諸点に鑑み、正倉院宝物及び奈良という地域に密着した文化財の調査研究を展開し、その魅力を掘り起こして展示・刊行物等で広く紹介する活動を行ってきたが、本年度もこれまで同様、質量両面において十分な実績を挙げることができた。次年度以降も同様の業務を継続し、着実に成果を上げていく必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	正倉院宝物や奈良という地域に密着した文化財に関する調査研究は、「仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の、基礎的かつ総合的な調査研究を行う」という計画の趣旨にきわめてよく適合するものであり、その成果の展示等への反映も要請度の高い業務である。本年度は恒例の正倉院展開催時の刊行物や講座・シンポジウム、各展覧会の図録等において優れた成果を公表することができ、順調に実績を挙げることができた。次年度以降も同レベルの成果を得ることができるよう、この方面における調査研究活動を継続的に実施していかなければならない。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 東京文化財研究所と共同で行う天台高僧像（一乗寺蔵）、信貴山縁起絵巻（朝護孫子寺蔵）の調査など、仏教美術の光学的調査研究を実施し、作品の材料・技術等の解明に寄与する。(5)－④)		
【事業概要】 奈良国立博物館と東京文化財研究所との間で締結した協定書に基づき、両機関の共同研究として仏教美術作品の光学的調査を実施し、使用材料、製作過程等について検討するとともに、高精細デジタルコンテンツを作成する。光学的調査は、高精細フルカラー画像の作成、可視光励起による高精細蛍光画像の作成、高精細反射近赤外線画像の作成、高精細透過近赤外線画像の作成、蛍光X線による非破壊分析、を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 西山 厚
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、斎木涼子(教育室員)、岩戸晶子(列品室員)、清水健(主任研究員)、北澤菜月(情報サービス室員)、山口隆介(美術室員)、永井洋之(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)、【東京文化財研究所】田中淳(企画情報部長)、小林公治(文化財アーカイブズ研究室長)、早川泰弘(分析科学研究室長)、城野誠治(専門職員)			
【主な成果】 (1) 国宝 信貴山縁起絵巻(奈良・朝護孫子寺蔵)を対象として蛍光X線分析器を用いた光学的調査を実施した。 (2) 国宝 綴織當麻曼荼羅(奈良・當麻寺蔵)を対象として高精細カラー画像・近赤外線画像・可視光励起による蛍光画像の撮影を伴う光学的調査を実施した。 (3) 平成21～22年度に実施した京都・大徳寺所蔵五百羅漢図の光学的調査の成果に基づいて同作品の総合的調査報告書の出版を計画、その報告内容に関する検討会を開催した。			
【年度実績概要】 (1) 本年度は3ヵ年計画で実施している国宝 信貴山縁起絵巻を対象とした光学的調査の最終年度に当たる。前年度に引き続き蛍光X線分析器を用いて顔料に含まれる元素を同定する光学的調査を都合6日間にわたり当館で実施し、全3巻の調査対象となる全ポイントについて基礎的データの収集を終えた。またこれまでの調査で得られたデータに基づいて研究会を実施し、調査成果を文化庁が進める信貴山縁起絵巻復原模写事業に反映させること、調査研究報告書の作成に向けて次年度に顕微鏡写真撮影を中心とする追加調査を実施すること、調査成果を東京文化財研究所に設置されたコンピュータ上で広く一般に公開する方針などを確認した。 (2) 平成25年度当館開催予定の特別展「當麻寺」の予備調査を兼ねて、24年12月17日～12月21日の5日間にわたり、當麻寺所蔵の国宝 綴織當麻曼荼羅を対象とする光学調査を実施した。初めて同曼荼羅に対して行った高精細デジタルカメラを用いてカラー画像、近赤外線画像、可視光励起による蛍光画像、顕微鏡写真の撮影によって膨大な基礎データを入手するとともに、その画像データを宮内庁正倉院事務所の染織担当研究官と共同で分析を行った結果、綴れ織り組織の状態について詳細な知見を得ることができた。當麻寺展の開催期間中には調査成果を踏まえた国際シンポジウムを開催するとともに、調査研究報告書の刊行を目指して関連作品の追加調査及び研究会を次年度以降も実施していく予定である。 (3) 一昨年度に刊行した『大徳寺伝来五百羅漢図銘文調査報告書』の入手が極めて困難な状況になっていることを踏まえ、同報告書を発展させた大徳寺伝来五百羅漢図総合調査研究報告書の出版計画を推進した。24年12月19日に当館で開催した出版にむけての研究会において、前報告書刊行後に蓄積された五百羅漢図に関する最新の研究状況について報告を行うとともに、追加調査の実施計画について協議した。			
【実績値】 調査回数 3回：24年4月25日、4月27日、7月25日 ～7月27日、12月17日～12月21日 調査作品数 2件 4点： 国宝 信貴山縁起絵巻(朝護孫子寺蔵) 1巻 国宝 綴織當麻曼荼羅(當麻寺蔵) 1幅 研究会開催件数 3回： 奈良国立博物館で24年7月26日、24年12月19日 東京文化財研究所で24年9月28日			
			
高精細デジタルカメラを用いた 綴織當麻曼荼羅の蛍光画像撮影			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性:調査成果を特別展の展示内容や文化庁復原模写事業等に着実に反映させることができた。 独創性:可視光励起による蛍光画像撮影等、文化財への応用が進んでいない最新の光学機器を用いた調査を実施した。 発展性:仏教絵画における顔料・絵画技法の解明を進めるため、光学的調査で得られた基礎データを蓄積した。 効率性:当初計画どおり信貴山縁起絵巻の蛍光X線調査を終えるとともに、當麻寺展開催に伴い急遽決まった綴織当麻曼荼羅調査も年度内に実施することができた。 継続性:東京文化財研究所と締結した協定に基づき、平成17年度から継続的に調査を実施している。 正確性:最新の光学機器を用いてデータを収集し、得られた成果をもとに検討会を重ねて報告書作成の準備を進めた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作品数	研究会開催件数			
判定	A	A	A			
判定理由 調査回数 : 延べ11日間にわたる調査を実施した。(目標値: 約1週間) 調査作品数: 日本古代仏教美術を代表する国宝2件について調査を実施した。(目標値: 2~3件) 研究会開催件数: 東京と奈良でそれぞれ研究会を実施し、収集データの検討を重ねた。(目標値: 2~3回)						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は、3ヵ年計画で進められている平安絵巻の名品国宝信貴山縁起絵巻に関する光学調査の3年度目に当たる。最新鋭の光学機器を用いた調査の実施により、従来は不明だった文化財の材質や構造を明らかにすることができ、また文化財の保存・修理を将来行う上での指針となる詳細な現状記録を残すことができた。また、共同研究のメンバー以外にも当該作品を総合的に評価するために外部の研究者を招聘して調査を実施するとともに、調査によって得られたデータをもとに研究会を行った。 特に本年度は、前年度に引き続き蛍光X線分析器を用いた顔料分析を中心に実施し、基礎的データの収集に努めたが、次年度には本年度に計画しながら実施できなかった高精細デジタルカメラによる顕微鏡撮影を行う計画であり、追加調査を重ねていくことで分析の精度を高め、報告書の刊行につなげたい。また特別展の予備調査を兼ねて実施した綴織当麻曼荼羅を対象とする光学調査によって、初めて同曼荼羅に関する高精細デジタル画像データを入手することができ、従来は不明だった材質や構造の解明、さらには修理の指針となる詳細な現状記録を残すことができた。次年度以降も関連作品を中心に追加調査を実施し、将来の報告書刊行に備えたい。なお今後は、調査前・調査後の検討会をより綿密に行う一方、現在は1週間程度かかる1回あたりの調査実施期間を圧縮して、スムーズな日程調整を実現にするとともに、作品自体への負担を軽減したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。 調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、報告書・目録作成やデータベースの公開に力を注ぎたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1) 日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究((5)－⑤)
【事業概要】 九州国立博物館がコンセプトに掲げているアジアとの交流について、関係諸国とのさまざまな形での研究活動を進め、これを展覧会や研究報告の形などで示していく。	
【担当部課】	学芸部企画課
【プロジェクト責任者】	課長 小泉恵英
【スタッフ】 藤田励夫（博物館科学課保存修復室長）、原田あゆみ（文化財課資料管理室主任研究員）、赤司善彦（展示課長）、渡部史之（博物館科学課アソシエイトフェロー）、遠藤啓介（展示課展示調整室研究員）、望月規史（文化財課アソシエイトフェロー）、川畑憲子（企画課文化交流展室主任研究員）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）、末兼俊彦（京都国立博物館研究員）、猪熊兼樹（東京国立博物館研究員）、山田均（名桜大学国際学群教授）、常松幹雄（福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課調査第1係長）	
【主な成果】 タイ国芸術局との学術交流協定に基づき、九州国立博物館の研究員がタイのバンコク、チェンマイ、メーホンソンにおいて、遺跡・博物館の調査を実施した。韓国国立公州博物館との学術交流協定に基づき、公州、ソウルの遺跡・博物館の調査を実施した。韓国から2名を日本に招聘した。ベトナム・ハノイ国立歴史博物館との学術交流協定に基づき、同博物館の所蔵品を中心とする調査を行なった。	
【年度実績概要】 ・タイ国芸術局とは、平成23年度に実施した展覧会の成果を受け、24年8月に今後の継続的な共同研究を目指して新たに学術交流協定を締結した。研究分野は考古学、美術史学、歴史学に及ぶもので、その第1回目の調査としてタイ北部の調査を実施し、日本から当館研究員4名、当館以外に計4名が参加した。本年度は、近世から近代にかけてタイにもたらされた日本の文化財の悉皆調査の一部をなすものである。 ・韓国国立公州博物館との協定に基づく調査では、古代山城、百済に関連する遺物の調査を実施し2名が参加した。この調査は平成26年に予定されている「大百済展（仮称）」の予備調査にも位置づけられるものである。公州博物館からは2名を招聘し、我が国において青銅製品の調査を行った。 ・ベトナム・ハノイ国立歴史博物館との協定に基づく調査では、同博物館所蔵品をはじめ、タンロン遺跡博物館、ハノイ市博物館などのベトナム関連遺物の調査を実施し、また資料写真の撮影をした。これは平成25年に予定されている「大ベトナム展」の予備調査に位置づけられる。	
【実績値】 調査回数 計6回 （タイ1回、韓国2回、ベトナム3回） 研究員海外派遣数 のべ23名 （タイ のべ8名、韓国 のべ2名、ベトナム のべ13名） 研究員受入数 のべ2名（韓国） 研究報告回数 1回（韓国）	
【備考】	



ベトナム・ハノイ国立歴史博物館での作品撮影風景

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：博物館の基本的な活動たる展覧会の実施に先立ち、有効な学術調査が実施できているため。 独創性：国際的な視野に立った共同調査は、博物館レベルとしては他にあまり例がなく先駆的な活動であるため。 発展性：人的な交流も深まり、将来的な展覧会の開催等へ向けての礎を築いているため。 継続性：研究交流を最低でも5年単位で実施しており、相互の機関が継続的に事業を実施しているため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究員海外派遣数	研究員受入数	研究報告回数		
判定	A	A	A	B		
判定理由 調査回数：開始間もないプロジェクトが多いが年度単位で必要な調査を実施している。 研究員海外派遣数：展覧会を目標としたプロジェクトにおいても十分な調査が遂行できている。 研究員受入数：年度毎の計画に沿って予定通りの受け入れを実現した。 研究報告回数：本年は、相手国の主催する研究会からの要請によって、当方が報告を行うことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	国際的な共同研究として、数カ年に渉る計画を立案し、その初年度の事業を順調に実施した。 次年度以後、展覧会等の形で成果を反映する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	相手国との連携を計りながら、計画通りに調査を遂行している。また、展覧会への準備も同時に進行中である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進																
プロジェクト名称	1) 博物館の環境保存に関する研究((5)－⑥)																
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の保存環境及び展示環境について調査研究し、今後の環境の向上に結びつけることを目的として実施する。																	
【担当部課】	学芸研究部																
【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭信幸																
【スタッフ】 和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、荒木臣紀(保存修復課環境保存室主任研究員)																	
【主な成果】 本年度は文化財の保存環境の内、特に展示中の空気環境について、下記概要に示す調査研究を行った。文化財が展覧会期間中に仮設のケース内に収められる際の空気環境について新たな知見が得られたこと、揮発成分濃度の変化を科学的に解析でき、安全に展示を行うための展示ケース材料の選択肢に幅を持つことが主な成果である。																	
【年度実績概要】 ・展示ケース用合板からの放散ガスを遮蔽するアルミシートの性能と効果について。 近年は展示ケースの密閉性が向上し、その結果、ケース内における様々なガス濃度は高い濃度に維持され则认为られる。仮設の展示ケースや既設ケース内に置く展示台の多くは木材が用いられ、それらから放散されるガスを抑制するために、海外では木材をアルミシートで覆っている事例がある。同様のシートは日本国内においても精密機器運搬用などに生産されており、ガスバリアー性、価格、入手の簡便さなどを比較し、展示ケース製作材料としての可能性を考察した。 合板、接着剤、塗料からの放散が予想される室内汚染物質の中から酢酸、蟻酸、アンモニアをサンプルとして着目し、表1に示すサンプルについてSUSチャンバー法(JIS A 1901に準じる)、インピンジャー捕集によるイオンクロマトグラフ法で濃度を測定し結果を比較した。																	
表1 海外製品と国内製品の比較。単位 $[\mu\text{g}/\text{m}^2/\text{hr}]$ <table border="1"> <thead> <tr> <th>試験体</th><th>CH_3COO^-</th><th>HCOO^-</th><th>NH_4^+</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>サンプルA (海外製アルミシート)</td><td>検出限界以下</td><td>検出限界以下</td><td>検出限界以下</td></tr> <tr> <td>サンプルB (合板)</td><td>597</td><td>126</td><td>検出限界以下</td></tr> <tr> <td>サンプルC (国産アルミシート)</td><td>検出限界以下</td><td>検出限界以下</td><td>検出限界以下</td></tr> </tbody> </table>		試験体	CH_3COO^-	HCOO^-	NH_4^+	サンプルA (海外製アルミシート)	検出限界以下	検出限界以下	検出限界以下	サンプルB (合板)	597	126	検出限界以下	サンプルC (国産アルミシート)	検出限界以下	検出限界以下	検出限界以下
試験体	CH_3COO^-	HCOO^-	NH_4^+														
サンプルA (海外製アルミシート)	検出限界以下	検出限界以下	検出限界以下														
サンプルB (合板)	597	126	検出限界以下														
サンプルC (国産アルミシート)	検出限界以下	検出限界以下	検出限界以下														
展示ケース等に使用する板をアルミシートで覆うことによって、合板から放散されるガスを抑える効果がある事が分かった。実際の展示ケース施工方法では合板とクロス、接着剤から放散されるガスが存在するが、アルミシートを用いた施工ではアルミシートを覆うクロスを選択する事でガスの放散を抑える効果があることが判明した。																	
【実績値】 研究会発表件数 1件 文化財保存修復学会(東京)																	
【備考】																	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4561-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：室内汚染による文化財や人体への影響が懸念される今日、その具体的な解決策を探る研究として効果が高い。 独創性：実際の展覧会で使用する材料を調査した上で、具体的な代替材料を提示できたことは優れた成果であるため。 発展性：今後の同様な展示に対して成果の活用が大いに期待できるため。 効率性：性格を異にする二つの研究機関がそれぞれの役割を明確に発揮して行った研究であるため。 正確性：分析及び環境の専門家がそれぞれの立場から研究に参画し、的確なデータを得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数					
判定	A					
判定理由 研究発表件数：予定通り、成果の波及が期待される学術団体において公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	いずれの調査研究も、実験を行うことで得られた客観的データを詳細に分析することで、従来から存在する問題点について具体的な解決の方向を見出したものであるが、基礎研究にとどまらず、実用的側面に大きく寄与する成果が得られた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究 (科学研究費補助金) ((5)-(6))		
【事業概要】 保存と公開という博物館の使命を持続的なものとするためには、あらゆるリスクを予測し、リスクを回避するための対策を事前に講じることによって、高い安全性に裏付けられた活動へと博物館を質的に転換する必要がある。そのためには、従来行われてきた基礎研究及び個別的対処を統合し、機動的かつ実効的な臨床保存学を確立する必要がある。その具体的な方法論としてトータルケアシステムの構築について研究を行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭信幸
【スタッフ】 土屋裕子（保存修復課保存修復室主任研究員）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）、荒木臣紀（保存修復課環境保存室主任研究員）、佐藤香子（保存修復課研究支援者）			
【主な成果】 管理分析サブシステム「文化財収蔵場所環境情報管理システム」、温湿度センサー及び二次元バーコードを用いたセンサーサブシステムの整備が完了した。また包括的保存システムが最大限の効果を発揮するように、館内ですでに利用されている既存の列品検索データベースシステム「ProtoDB」と連携し保存修理に関するデータを他のあらゆるデータと関連付けた。これにより課内職員だけではなく、館内職員の包括的保存システムの利用が可能になった。			
【年度実績概要】 平成24年度はセンサーサブシステム、データ管理サブシステム、データ分析サブシステム、意思決定サブシステム、最適化管理サブシステムの稼動と統合を図り、全体システムを完成させた。具体的には以下のとおり。 ・現時点で使用中のカルテのデータベースの整備完了。 ・センサーサブシステムの無線センサーネットワーク化を運用した温湿度データの集積を開始。 ・位置情報入力について改善。 ・エラーの発生率の改善、劣化要因（Critical To Quality）の定義及び文化財保存状態の改善の程度を検証し、システムの有効性を評価。 ・ワークショップや関連研究会などで、システムについての理解と普及に努め、合わせて今後の発展性について議論。			
			
		人間文化研究機構連携研究会口頭発表風景	
【実績値】 研究会発表件数 10 件 (内訳) 文化財保存修復学会第34回大会口頭発表1件（東京）（2012.06.30-07.01） 文化財保存修復学会第34回大会ポスター発表8件（東京）（2012.06.30-07.01） 人間文化研究機構連携研究会口頭発表1件（東京）（2012.11.12）			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4561-2

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：多種多様な大量のデータを日常業務に効果的に使用し、業務の正確性、先見性、効率性の向上を実現することは喫緊の課題であり、それに対応する研究を実施することができた。 独創性：前述の課題を具体的に解決する研究は他にはないため。 発展性：構築されたシステムを用いることで、安心安全な保存環境の実現に寄与できる。また、さらに効果的なシステムを研究開発するための基礎が完成した。 効率性：5年間研究計画の中で、最終年度で目標の成果が達成できた。 正確性：共同研究者がそれぞれの専門性からシステム構築に深くかわり、的確な判断を行いながら、目標とする研究を実施できた。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数					
判定	A					
判定理由 研究会発表件数：波及効果が期待される学術団体の研究大会などで、10件の成果を公表した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	保存と公開を実践しつつ、安全性をより向上させるために、現状の解析と改善を具体的に実施し、臨床保存学を支援するシステムが完成した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4562-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 修復文化財に関する資料収集及び調査研究((5)－⑥)		
【事業概要】 文化財保存修理所において修復が行われている文化財に関して情報を収集する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 浅湊 毅
【スタッフ】 大原 嘉豊（研究員）、伊東史朗（調査員・和歌山県立博物館長）			
【主な成果】 平成 24 年度に新規搬入された作品の「修理計画書（設計書）」にもとづき、データを入力し、平成 23 年度に完成、搬出した作品については、各工房より提出された「修理解説書（報告書）」にもとづき、データを追加、更新した。また、平成 20 年度に修理が完成した作品に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 9 号に掲載し、修理時に発見された銘文 6 件を「銘文集成」として報告した。			
【年度実績概要】 ・文化財保存修理所の工房に搬入される新規修理作品に関して、データを収集し、データベースに登録した。 ・過去の修理作品に関してもデータの更新、整理作業を行った。 ・毎月行っている文化財保存修理における修理工房の巡回時の他、適宜工房において、修理中にしか得ることのできない情報（作品の構造や使用材料、内部納入品や銘文など）を収集し、分析を行った。 ・『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 9 号に掲載する平成 20 年度修理作品のデータを整理するとともに同年の修理で発見された銘文の解読作業を行った。			
【実績値】 ・データ収集件数 平成 24 年度は 83 件の新規修復文化財の搬入があり、これらの作品に関してデータを収集するとともに、修復データベースへの登録を行った。 ・修復データベースの追加更新件数 過去のデータに関して 1236 回追加、更新を行った。 ・調査回数 修理所の巡回を 11 回行った。その他、新発見の事実や銘文の調査を適宜行った。 ・報告書 平成 25 年 1 月に『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 9 号（平成 20 年度分）を発行した。			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4562-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：文化財の修復は、現在社会的関心の高い問題であり、収集したデータはその貴重な資料となっているため。 独創性：修理作品を館の寄託品として受け入れ、修理によって得られたデータを各研究員の間で共有しているため。 発展性：修理データをデジタル化して、修復データベースへ登録し、将来の公開に備えているため。 効率性：データをデジタル化することで、修理作品の情報検索を容易にしているため。 継続性：収集したデータにより『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』を継続的に発行しているため。 正確性：報告書の発行に際し、データの正確性について再確認をしているため。						

2. 定量的評価

観点	データ収集 件数	データ追加 更新件数	調査回数	報告書		
判定	A	A	A	A		
判定理由 データ収集件数：修理作品に関するデータの蓄積は、順調である。 データ追加更新件数：修復データベースへの登録は、順調である。 調査回数：修理所の巡回・調査回数は、順調である。 報告書：『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第9号の1冊を発行した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存修理所で行われる修理作品から得られる情報はおおむね収集でき、またその成果を報告書に反映した。 よって、修復文化財に関する情報の収集を適切に行い得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	修復文化財に関する資料収集及び調査研究は、ほぼ予定通り進めることができた。24年度に収集された情報をさらに充実させる為、他年度と関連づけながら、さらなる情報の収集を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 文化財の保存・修復に関する調査研究((5)－⑥)		
【事業概要】 歴史的資料の中でも特に考古遺物は、土中埋蔵中に腐食層に覆われるため、作品が本来持っていた色彩を失っている。本研究は、材料科学の手法を用いて制作当初のオリジナルな状態で呈していた色の復元を試みることを目的とする。この研究は保存修理の工程と共に行うことが可能であり、また歴史的資料の考察の際にこれまでほとんど意識されていなかった分野に新たな視点を提供するものと位置付けられる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 村上 隆
【スタッフ】			
【主な成果】 (1) 京都国立博物館所蔵の古代青銅鏡のオリジナルな色を復元できた。 (2) 長野県柳沢遺跡出土の銅鐸が形態的形式に伴い、オリジナルな色が異なることを明らかにした。それに伴い、銅鐸が奏でる音にも違いがある可能性を示唆した。			
【年度実績概要】 (1) ・緑青サビで覆われている古代青銅製遺物は、長期間の埋蔵環境下で表面を暑く緑青サビで覆われてしまうため、現在ではすべての遺物がほぼ同様の色を呈している。しかし、材料科学の手法で制作当初の材質を精確に評価することで、遺物が持っていたオリジナルな色を復元できることを、京都国立博物館所蔵の古代青銅鏡の調査により提示した。 ・例えば、3 世紀に制作されたとされる「三角縁神獣鏡」は、本来は金色がかった銀色を呈している。この事実を実際に体験するために、三次元デジタイザによる精確な形状計測、材料科学分析などのデータに基づき、レーザを用いた金属粉末熔融造形法という最新の技術を用いて復原品を制作した。(この成果は、本年 12 月開催したチャリティーエキシビジョン「RossoRosso Kyoto 2012」などの展示にて一般に公開した) (2) ・長野県柳沢遺跡は東日本で初めて銅鐸と銅戈が一緒に出土したことで注目された。これら銅製遺物を保存修理する過程で精確な材質調査を行い、銅鐸に明らかな組成の違いがあることを確認することができた。また、この組成の違いと考古学的な形態分類とが一致することも判明した。青銅を構成する主要元素は、銅とスズであり、この配合の違いが銅鐸の形態分類と一致するわけである。なお、銅戈についても形態的分類と成分の配合比の違いは良い一致を示した。 ・銅合金は、銅とスズの配合の違いが合金の色に反映される。従って、この違いが銅鐸のオリジナルな色にも反映されていたと考えられる。またこの配合の違いは、銅鐸の奏でる音にも影響を与えることも推定される。 ・これまでの銅鐸研究は、形態と文様の変遷が主に論じられてきたが、色と音という新たな観点から考察することを可能にすることができた。			
			柳沢遺跡から出土した銅鐸を制作当初のオリジナルな色を CG によって復元 (左 2 個は、スズが多く、右 3 個はスズが少ない)
【実績値】 ・青銅鏡調査 20 件 (オリジナルの色を考察するために調査した古代青銅鏡は、愛知県犬山市東之宮古墳出土の青銅鏡 16 面を中心に計 20 面) ・銅鐸調査 5 件 (長野県柳沢遺跡出土) ・銅戈調査 8 件 (" ")			
【備考】 本研究は、学会発表、成果展示で公開した。また、成果は新聞などで取り上げられた。 ①銅鐸調査 5 件：銅鐸研究に関する学会発表：村上 隆他「長野県柳沢遺跡出土銅鐸に関する色と音の考察」(日本文化財科学会：(京都大学)) (24 年 6 月) ②青銅鏡復元製作成果公開：「RossoRosso Kyoto2012 フェアリー F1 と古代青銅鏡の夢の競演」(京都国立博物館) (24 年 12 月)、「日本人の智慧展」(パリ日本文化会館) (24 年 4 月)、「同」(スリランカ) (24 年 7 月) ③新聞掲載：「銅鐸 形式で材質に差 成分分析 CG で色再現」(読売新聞) (24 年 6 月 23 日) 「銅鐸の音色 違い発見 弥生人に迫る手がかり」(朝日新聞) (24 年 8 月 27 日)			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	S	A	A	A
判定理由 適時性：東日本で初めて銅鐸と銅戈と一緒に出土した長野県柳沢遺跡の調査研究に対して行った調査の一環である。 独創性：従来の研究手法とは異なる視点を提示し、銅鐸研究の新たな方向性を示すことができた。 発展性：銅鐸や青銅鏡に限らず、歴史資料のオリジナルな姿に迫る方法として発展性は高い。 効率性：保存修理と並行して調査を進めたため効率性は良い。 継続性：かねてから追及しているテーマの一事例であり、継続性は高い。 正確性：妥協のない精確な分析を行い、その成果を十分に活かすことができた。						

2. 定量的評価

観点	青銅鏡調査	銅鐸調査	銅戈調査			
判定	B	B	B			
判定理由 青銅鏡調査：定量的評価としては、青銅鏡に関してはこれまでの調査事例ではほぼ達成できていると考える。 発掘調査：銅鐸に関しては、さらに調査件数を増やす必要がある。 銅戈調査：銅戈に足対しても、同様に調査事例はまだ限られている。						

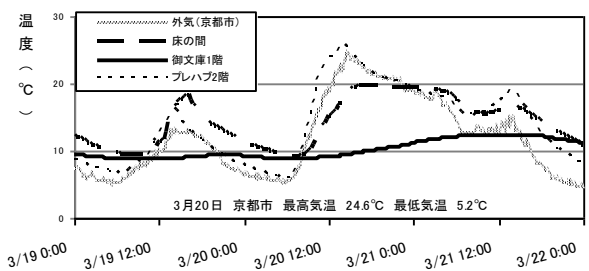
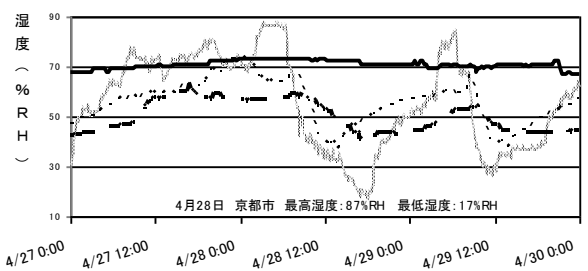
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価が概ね高いことが総合的評価に反映できたが、定量的評価としては、調査対象の絶対数が限られ、このような調査自体が可能かどうか分からない状況ではどうしても抑えざるを得ない。 今後同様の調査を少しずつでも重ねていくことで、歴史資料の本質に迫る研究を充実させることが可能になる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化財の保存修復が、単なる修理作業に終わるのではなく、その過程の中で資料が秘めている情報を精確に把握し、その情報を基に資料そのものの本質を探る作業を目指しており、その点において十分な成果を挙げている評価できる。

業務実績書

中期計画の項目	文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3)文化財の保存・修復に関する調査研究((5)－⑥)(立命館大学G－COE受託研究)		
【事業概要】			
伝統的な文化財の保存方法を再評価することを目的に、京都市内の代表的な旧家である冷泉家・杉本家において、各家に伝わる古文書・絵画・什器・衣装などの保存環境を科学的手法によって計測し、その結果を、他の学術調査の結果や保存状態、年中行事や日常の使用方法、管理方法などと併せて考察する。			
本研究は、省エネルギーや地球環境に配慮した、これからの博物館のあり方について模索する上でも有益である			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 村上 隆
【スタッフ】			
池田 素子(列品管理室アソシエイトフェロー)			
【主な成果】			
(1)冷泉家住宅・杉本家住宅において、土蔵を中心とした敷地内各所の温度・湿度(相対湿度)を約1年間計測(平成22年度)したデータを統計し、分析することができた。			
(2)冷泉家・杉本家における日常的な文化財の管理方法について取材し、過去の資料調査の結果等と併せて、(1)の成果に考察を加え、これを学会等で発表することができた。			
【年度実績概要】			
(1)冷泉家住宅・杉本家住宅における、敷地内各所の温度・湿度(相対湿度)の計測によって、両家ともに代々にわたり、美術工芸品などを日常的に保管してきた土蔵の環境について、以下の特徴が見られた。			
・土蔵の平均温度は外気や居住空間と同じように季節に合わせて変化し、平均湿度は年間を通じて外気や居住空間と同じかやや高めである。			
・土蔵の温度・湿度は短期間では非常に安定しており、外気の急激な変化に対して緩やかに反応し、時間をかけて季節に順応している。			
・土蔵は、扉の開放で温度・湿度が変化しても、短時間のうちに閉鎖すれば、速やかに原状へ回復するようである。			
・木箱に収納することにより、激しい気象変動や扉の開閉など、外気の影響をさらに緩和することができる。			
(2)冷泉家住宅・杉本家住宅における土蔵の管理方法から、以下のような考察と課題が指摘できた。			
・冷泉家住宅・杉本家住宅(ともに重要文化財)には、現在も管理者(当主)が暮らしている。しつらえや年中行事のため、管理者は土蔵のどこに何があるかを十分に把握し、必要な時季に土蔵に出入りし、必要なものを出し入れしている。こういった日常の「目通し」「風通し」と、(1)で述べた土蔵そのものの環境安定性との相乗によって、美術工芸品が土蔵の中でまもられてきたのであろう。			
・しかし、近年では、土蔵を管理するための人員や費用、技術や材料の確保が困難になりつつある。			
  短期間の温度変化(冷泉家、22年3月19日～21日) 短期間の湿度変化(冷泉家、22年4月27日～29日)			
【実績値】			
・温度・湿度測定点 20ヶ所(冷泉家住宅・杉本家住宅における測定場所、各家10点)			
・測定条件 22年3月～23年2月(23年5月まで補足測定)。測定間隔は、15分。			
・管理記録 計2冊。冷泉家住宅・杉本家住宅の各管理者は、上記計測期間において、土蔵の開閉の時間を任意に記録し、記録簿は各家1冊、計2冊。			
【備考】			
学会発表:「冷泉家における文化財継承保存に関する研究―土蔵環境の観点から―」(文化財保存修復学会(日本大学)(24年7月))			
新聞掲載:「文化財 土蔵が守る 冷泉家調査で裏付け」(24年7月10日)(日本経済新聞)			
:「温度・湿度一定 究極の収蔵庫 (冷泉家の土蔵 御文庫)」(24年8月7日)(読売新聞)			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：節電や環境問題が注目される中で、伝統的な文化財保存方法を再評価する、適時の取り組みであった。 独創性：温度・湿度の長期同時多点測定における測定場所の多様性に、従来研究には見られない、独創性があるため。 発展性：土蔵の環境に限らず、居住環境の測定、気象データの参照、管理方法の取材など、より多角的な考察への発展性が高いため。 効率性：立命館大学 G-COE「歴史都市を守る文化遺産防災学推進拠点」の一環として、効率的に研究が進められた。 継続性：館内外におけるさまざまな研究へと継続できるに十分な、測定データをまとめることができた。 正確性：長期同時多点測定によって、温度・湿度の測定データの正確性を確保できた。						

2. 定量的評価

観点	測定点	測定条件	管理記録			
判定	S	A	B			
判定理由 測定点：多点測定により、多様性に富、かつ精度の高い測定データを得ることができた。 測定条件：精密計測を長期間継続することができた。 管理記録：管理者による任意の記録ではあるものの、土蔵の日常管理の状況を概括的に把握することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存の観点から土蔵の環境調査を行った。これまで土蔵が持つ環境維持能力の正当な評価がなされていなかったが、今回の調査で電氣的エネルギーをまったく使わずに環境の安定性を保つ実態を明らかにできた意義は大きい。この調査結果を今後の文化財保存に生かすことを検討したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	立命館大学 G-COE「歴史都市を守る文化遺産防災学推進拠点」の一環として実施した調査を報告書に求めるとともに学会にて発表し、調査の成果を速やかに公開した。また、伝統的な土蔵の環境管理の実態を把握できたことを、今後の収蔵庫管理に反映させていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境の、文化財に与える影響などに関する調査研究を持続的に実施し、収蔵品の保存環境の向上を図る。(5)－(6)		
【事業概要】 展示室・展示ケース・収蔵庫等の環境が文化財に与える影響の解明を目的として、温湿度センサーによる展示室・展示ケース内等の温湿度データ収集、展示ケース内に浮遊する粉塵の電子顕微鏡観察、パッシブインジケータによるVOC調査、文化財害虫調査トラップの定期的な設置・回収等を継続的に実施し、調査で蓄積されたデータを分析することで展示室等の保存環境向上を計る。			
【担当部課】	学芸部保存修理指導室	【プロジェクト責任者】	室長 谷口耕生
【スタッフ】 岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、清水健(主任研究員)、斎木涼子(教育室員)、山口隆介(美術室員)、降幡順子(奈良文化財研究所主任研究員)			
【主な成果】 (1) 展示室・展示ケース内に設置した温湿度センサーのデータを分析し、展示・収蔵環境の保持に努めた。 (2) 展示ケース内から回収した粉塵の種類・量を計測し、展示ケースの気密性向上に資するデータを蓄積した。 (3) 展示室・収蔵庫等への昆虫トラップの設置回収により文化財害虫の生息状況を調査し、害虫被害回避につなげた。 (4) 防災工事に伴う収蔵庫内のVOC(揮発性有機化合物)残留濃度調査を実施し、収蔵環境の保全に努めた。 (5) 「環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」会議を定期的に開催し、保存環境の改善に努めた。			
【年度実績概要】 (1) 展示室・展示ケース内の各所に無線機能付き温湿度センサーを設置し、24時間リアルタイムに温湿度の変化を監視するとともに、LAN回線を通じて学芸部内で収集したデータを蓄積し、展覧会ごとに報告書にまとめた。収蔵庫・文化財保存修理所内についてはロガータイプの温湿度センサーを各所に設置して、保存修理指導室員が定期的に温湿度データの回収を行った。これらのモニタリングによって得られたデータを分析し、文化財の展示・収蔵環境の保持及び改善につなげた。 (2) 正倉院展終了後、展示ケース内から回収した粉塵を電子顕微鏡で観察し、粉塵の種類及び単位面積当たりの量を計測して、展示ケースの気密性向上に資するデータを蓄積した。その結果、粉塵量が多いと判断されたケースについては機密性確保の改修工事を実施した。 (3) 展示室・収蔵庫・文化財保存修理所内など館内150箇所に設置している文化財害虫調査用トラップを、学芸部研究員が当番制により毎月1回交換・回収し、回収したトラップは外部業者に委託して文化財害虫の捕獲数データを蓄積した。この調査データをもとに、害虫被害が懸念される箇所を中心に忌避対策及び殺虫処置を実施し、併せて害虫発生を防ぐための清掃による衛生環境の保持などIPMの実践につなげた。 (4) 収蔵の防災工事に伴って庫内壁面に新規設置する調湿ボードについてその性能評価実験を重ねるとともに、設置工事によって接着剤等から発生する有機酸・アルカリ性ガスの残存状況についてパッシブインジケータを用いた検査を行い、保存環境の安全を確認した。 (5) 学芸部保存修理指導室員と総務課環境整備係員を中心に構成される「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」の会議を8回開催し、上記の調査等で確認された保存環境に関わる問題点について討議を重ねることで、施設の改修など保存環境の改善につなげた。			
 展示ケース内の粉塵調査			
【実績値】 保存環境調査実施箇所数：234箇所(展示室内温湿度調査：75箇所、展示ケース内粉塵調査箇所：9箇所、文化財害虫生息状況調査箇所：150箇所) 保存環境調査報告書作成件数：11件(温湿度モニタリング報告書3件、昆虫類調査用トラップ分類同定結果報告書8件) 研究者発表件数：「保存環境に関するワーキンググループ」開催回数：8回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4563-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：温湿度モニタリング報告書を展覧会ごとに、昆虫トラップ報告書を1回作成した。 独創性：1日2万人が来館する正倉院展という特殊環境において、ケースの機密性、温湿度の調査を実施した。 発展性：保存環境関わる基礎データを着実に蓄積し、施設の改修につなげた。 効率性：温湿度センサーなど最新機器を導入し、効率的な保存環境データの収集に努めた。 継続性：無線機能付き温湿度センサーによる24時間モニタリング、当番制による月1回の昆虫トラップ設置回収を着実に実施した。 正確性：最新機器を用いてデータを収集し、得られた成果を定期的に報告書の形にまとめた。						

2. 定量的評価

観点	保存環境調査実施箇所数	報告書作成件数	研究発表件数			
判定	A	A	A			
判定理由 保存環境調査実施箇所数：前年度と同じ（調査実施箇所数としては必要十分な）点検箇所について継続的にデータ収集を実施した。 報告書作成件数：温湿度モニタリング報告書を展覧会ごとに、昆虫トラップ報告書を1回作成した。 研究発表件数：8回開催し、調査データの検討を重ねた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	前年度に引き続き一年を通じて保存環境調査を着実に実施し、そこで得られたデータをもとに展示環境の維持・改善に努めることができた。次年度も本年度と同規模の調査を継続的に実施し、データの精度をさらに高めるとともに、保存環境変化の兆候を十分に把握できる体制を築いていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。今後もこのペースを維持しつつ、保存環境の維持・改善に努めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 館蔵品・寄託品等の調査研究を文化財修理の観点から実施し、文化財の活用及び後世への継承に資する。((5)－⑥)		
【事業概要】 ・館蔵品、寄託品について詳細に保存状態の調査を実施し、保存カルテとして記録を蓄積することで、将来の文化財修理への指針に役立てる。 ・館蔵品、寄託品の修理に際し、事前に当該文化財の保存状態について入念な調査を実施し、その結果を基に修理調査を作成する。 ・文化財保存修理所内での修理中に文化財から得られた材質や銘文などの基礎情報について調査分析を実施し、その成果を当館研究紀要に掲載する形でデータを蓄積する。			
【担当部課】	学芸部保存修理指導室	【プロジェクト責任者】	室長 谷口耕生
【スタッフ】 岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、清水健(主任研究員)、斎木涼子(教育室員)、山口隆介(美術室員)、降幡順子(奈良文化財研究所主任研究員)			
【主な成果】 (1) 館蔵品、寄託品について保存状態を中心に入念な調査を実施し、その所見をもとに保存カルテを作成した。 (2) 館蔵品、寄託品の修理に際し、保存カルテや新規に実施した保存状態調査の所見をもとに修理調査を作成し、修理方針を決定した。 (3) 文化財保存修理所で修理中の木造文化財について樹種同定調査を実施し、その成果公開の準備を進めた。 (4) 文化財保存修理所で修理中の文化財から発見された銘文の調査を実施し、その成果公開の準備を進めた。			
【年度実績概要】 (1) 館蔵品・寄託品の貸与や修理などの機会に、彫刻・絵画・書跡・工芸・考古の各部門担当者が、光学機器等を用いて保存状態確認を中心とする文化財調査を実施し、そこで得られた成果を保存カルテに記入して基礎データを蓄積し、将来の修理への指針に役立てた。保存カルテについては、新規フォームの作成・保管などの管理業務を保存修理指導室が担当した。 (2) 館蔵品・寄託品の修理時において、事前に保存状態を中心とする入念な文化財調査を実施し、その成果や保存カルテの情報を参照しつつ修理調査作成し、館内監査を経て修理方針を決定した。 (3) 当館と京都大学生存圏研究所との間で締結した協定に基づき、当館文化財保存修理所内における未指定の木造文化財の修理過程で自然に脱落した資料について、所蔵者の同意を得て樹種同定の調査を行った。調査対象となったのは奈良市指定の奈良・観音寺所蔵木造十一面千手観音像1件であり、分析結果は当館研究紀要『鹿園雑集』15号(平成25年3月刊行)に「平成24年度 修復文化財(木造)材質調査報告」として掲載した。これらの樹種データを蓄積することによって、木造文化財の製作技法・製作背景等を樹種の観点から解明する基盤としたい。 (4) 文化財保存修理所内で館蔵品・寄託品及び未指定文化財の修理中に発見された銘文については、当館研究員と修理技術者が共同で調査を実施した。とりわけ館蔵品である木造南無仏太子立像の修理に際して合掌手の中から墨書銘を付した紙片が発見され、この銘文については修理完成後に当館研究紀要『鹿園雑集』に写真・翻刻データを掲載予定である。また海住山寺所蔵阿弥陀浄土曼荼羅の修理に際し、旧軸木の内部から鎌倉時代の墨書銘が見出され、海住山寺を創建した貞慶上人の信仰に関わる重要な内容を持つことが判明したことから、特別展「解脱上人貞慶」(24年4月7日～5月27日開催)に同軸木を銘文の翻刻とともに展示公開した。			
			
海住山寺所蔵阿弥陀浄土図の修理に際して発見された軸木内墨書銘			
【実績値】 保存カルテ作成件数：総計 127 件 うち彫刻 14 件、絵画 42 件、書跡 12 件、工芸(金工・漆工・染織) 13 件、考古 46 件 修理調査作成件数：総計 8 件 うち絵画 5 件、書跡 1 件、工芸 1 件、考古 1 件 調査回数：木造文化財樹種同定調査実施件数：1 件、修復文化財銘文調査実施件数：7 件 調査概報：2 件(「修復文化財(木造)材質調査報告」、「修復文化財関係銘文集成」)			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：調査で得られたデータを報告書として公開し、成果の一部を展覧会に反映させた。 独創性：他の研究機関と協定を結び、共同で最新の分析機器を用いた修理文化財の材質調査を実施した。 発展性：材質・保存状態に関する調査を着実に実施し、将来の文化財修理に益する貴重な基礎データを蓄積した。 効率性：修理・貸与の時宜を見計らって計画的に文化財の材質・保存状態調査を実施した。 継続性：文化財の材質・保存状態調査を継続的に実施し、そこで得られた基礎データを着実に蓄積することができた。 正確性：最新機器を用いて文化財の材質・保存状態に関する基礎データを収集し、入念な分析によって得られた成果を報告書の形にまとめた。						

2. 定量的評価

観点	保存カルテ 作成件数	修理調書 作成件数	調査回数	調査概報		
判定	A	A	A	A		
判定理由 保存カルテ作成件数：貸与時に列品室から発行される貸付簿とセットで保存カルテを管理するシステムが軌道に乗り、着実に保存カルテを作成することができた。 修理調書作成件数：館蔵品修理、寄託品の財団助成修理時に必ず修理調書を作成し、館内の修理監査に備えた。 調査回数：文化財保存修理所の各工房と協力して、文化財修理時に材質・銘文調査を着実に実施した。 調査概報：調査で得られた修理文化財の材質・銘文データを全て当館紀要に掲載した。						

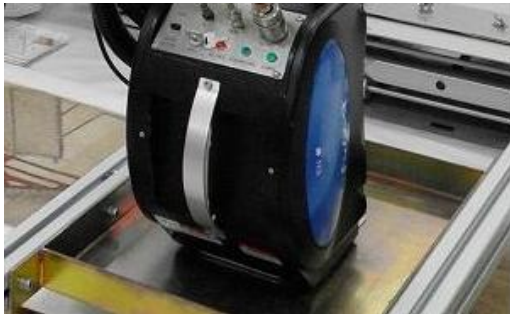
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	館蔵品・寄託品の保存状態調査に基づく保存カルテの作成や、以前から継続的に実施している修復文化財の樹種同定調査・銘文調査を着実に実施し、将来における文化財の研究・修復に資するデータを蓄積することができた。次年度以降も本年度のペースを維持しつつ修復文化財調査を着実に実施していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来水準を維持しつつ堅調に実現できたと考える。今後もこのペースを維持しつつ、修復文化財の基礎データ蓄積に努めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 館蔵品・寄託品等の調査研究を保存科学の観点から実施し、貴重な文化財の後世への継承に資する。((5)－⑥)		
【事業概要】			
・館蔵品、寄託品等の修理に際し、修理前・修理中に当該文化財に対して透過X線や蛍光X線等を用いた光学調査を実施し、その所見を修理方針に反映させる。			
・館蔵品、寄託品の文化財の修理において、修理前に電子顕微鏡を用いた料紙・料絹の繊維組成調査を実施し、その成果をもとに補紙・補絹を調製する。			
・文化財保存修理所で修理中の文化財について、研究員と各工房職員が共同で光学機器を用いた材質調査を実施する。			
【担当部課】	学芸部保存修理指導室	【プロジェクト責任者】	室長 谷口耕生
【スタッフ】			
岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、清水健(主任研究員)、斎木涼子(教育室員)、山口隆介(美術室員)、降幡順子(奈良文化財研究所主任研究員)			
【主な成果】			
(1) 館蔵、寄託品の修理に際し、蛍光X線を用いた材料調査、近赤外線写真やポリライトを用いた補筆・補絹分布調査、透過X線を用いた構造調査等を実施した。			
(2) 館蔵、寄託品のうち絹製文化財の修理において電子顕微鏡を用いた料絹の組成調査、紙製文化財の修理において同じく料紙の繊維調査を実施し、その所見を修理に用いる補絹・補紙の調製に反映した。			
(3) 文化存修理所の修理寄託中の文化財について蛍光X線を用いた材料調査を実施し、修理方針に資するデータを蓄積した。			
【年度実績概要】			
(1) ・絵画部門の館蔵品、重要文化財絹本着色十王図の修理に際し、肌上げ作業終了時に料絹の裏から近赤外線撮影を行うとともに、蛍光X線を用いて裏彩色の顔料調査を実施し、絹裏の状態について基礎データを収集した。			
・絵画部門の館蔵品、重要文化財絹本着色普賢延命像の修理に際し、高精細デジタルカメラを用いた近赤外線写真撮影を実施して、補筆・補彩の有無や、補絹箇所における絹の重なり状態について把握し、その所見に基づいて補絹去作業の方針について協議した。			
・工芸部門の館蔵品、国宝刺繍釈迦説法図の修理に際し、表具の内部構造を把握するために当館光学調査室において透過X線撮影を実施し、修理方針決定に向けての基礎データを収集した。			
・考古部門の館蔵品、陶棺の修理において、透過X線を用いた構造調査強化のために含浸させる樹脂の選定についても修理技術者と検討を重ねた。			
(2) 館蔵、寄託品のうち絵画部門の絹製品2件の修理において、電子顕微鏡を用いた料絹の組成調査を修理技術者と共同で実施し、その成果を補修絹の調製に反映した。同じく、書跡部門の紙製品2件について、電子顕微鏡を用いた料紙の繊維調査を修理技術者と共同で実施し、その所見を補修紙の調製に反映した。			
(3) 文化存修理所で修理中の装飾経の見返絵及び界線に用いられる金属系色料について、学芸部研究員が蛍光X線による材質調査を実施し、修理方針及び時代判定の材料を提供した。			
・東京文化財研究所との共同研究により、寄託品の国宝信貴山縁起絵巻について蛍光X線を用いた顔料調査を実施し、前年度までに実施した近赤外線撮影及び可視光励起による蛍光画像撮影の成果と併せて、文化庁が進めている同絵巻の復元模写に資する基礎データを蓄積した。			
			
蛍光X線分析器による顔料調査			
【実績値】			
調査回数 9回 (館蔵品、寄託品等の修理に伴う光学的調査実施回数：9回)			
研究会回数 17回 (館蔵品、寄託品等の修理に使用する補修材料の検討会実施回数：17回)			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：修理前、修理中に実施した材質・構造調査の成果を修理方針に反映させた。 独創性：最新の光学機器を用いた材質・構造調査を実施し、その成果を修理方針に反映させた。 発展性：修理文化財の材質・構造に関する基礎データを着実に蓄積し、そのデータを修理技術者に提供することで修理技術の発展に努めた。 効率性：文化財保存修理所内で修理される文化財について、館が所有する最新の光学機器を積極的に活用し、高精度の材質・構造調査を館内で効率的に実施した。 継続性：修理文化財の材質・保存状態調査を継続的に実施し、得られた基礎データを着実に蓄積することができた 正確性：最新機器を用いて文化財修理に有益な材質・保存状態に関する基礎データを収集・精査し、そこで得られた所見を補修材料の選択等の修理方針決定に反映させることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究会回数				
判定	A	A				
判定理由 調査回数：館蔵品・寄託品の修理において確実に調査を実施することができた。 研究会回数：修理文化財の材質・構造調査で得られたデータについて修理技術者と共同で検討を重ね、その成果を補修材料の選定等の修理方針に反映させた。						

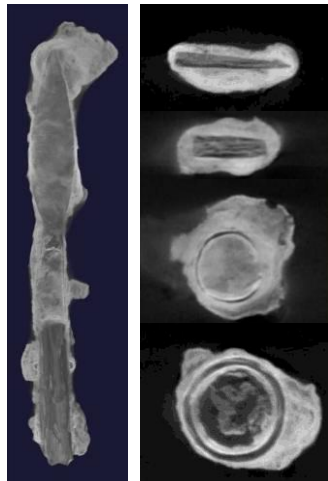
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	館蔵品・寄託品の修理に伴って、保存状態の確認や材質解明を主目的とした光学的調査を着実に実施し、当該文化財の修理方針決定や、将来における文化財の研究・修復に資する基礎データを蓄積することができた。次年度以降も本年度のペースを維持しつつ、館蔵品・寄託品を主対象とする保存科学的手法を用いた調査を着実に実施していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来水準を維持しつつ堅調に実現できたと考える。今後もこのペースを維持しつつ、文化財の基礎データ蓄積に努めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 文化財の材質・構造等に関する共同研究 ((5)－⑥)		
【事業概要】 文化財を解体することなく内部構造を立体的に調査する方法の開発を目指す。九州国立博物館において、X線CTや透過X線を用いて文化財の内部構造を調査する。また3Dデジタイザを用いて文化財の詳細な三次元形状を調査する。文化財の構造や制作技法を理解し、文化財の健康状態を知る。さらに、得られた成果を展示に活用することを目的とする。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
【スタッフ】 臺信祐爾（文化財課長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）、楠井隆志（展示課展示調整室主任研究員）、坂元雄紀（展示課情報サービス室研究員）			
【主な成果】 透過X線撮影、X線CT調査、3Dデジタイザ調査等を実施した。その結果、特別展「細川家の至宝」で展示した「銀人立像」についてX線CT調査の結果、鋳造品の内部構造が判明した。また、文化交流展示室で展示している長崎県鷹島海底遺跡出土品に関連して、松浦市所蔵の鷹島海底出土金属製品をCT調査した。			
【年度実績概要】 ・文化交流展元関連の鷹島海底遺跡出土品について、文化財の構造や材質を調査した。 ・調査は、九州国立博物館が借用しているてつほう、冑、矢束、漆椀、陶磁器類などに加えて、松浦市所蔵の冑、矢束、武器類、不明鉄製品などに対して行った。測定は、九州国立博物館のX線CTを用いて、320kV、2mAの条件で実施した。解析はVolume Graphics社のVGStudioMAXを用いた。 ・その結果、冑は、蒙古鉢といわれる半球状に近いものがほとんどで、頭頂部の飾りは鋳留めされていたが、いずれも地金の鉄が溶脱していた。直刀や太刀などの鉄製品も同様に地金の鉄が溶脱しており、片刃の矛も確認された。矢束は錆で塊となっていたが、溶脱している鏃は長さが6cmに及ぶこと、矢柄が竹ではなく木製であること等が判明した。 ・CT画像に見るように、鷹島海底遺跡から発見された元寇関連遺物は、全体が錆化しており本来の形状が不明瞭である。CT調査を実施することで本来の遺物の形状が判明すると共に、遺物の構造や使い方などの調査が飛躍的に進んだ。CT画像の情報は展示室でもパネルとして展示して作品の理解に役立てることができた。			
			
		鷹島海底遺跡出土矛 CT像三次元像・断面像	
【実績値】 調査件数 80件 調査回数 40回 資料収集数 230点 学会研究会等発表数 5件 (①～⑤) 日本文化財科学会1件、文化財保存修復学会2件、日本地球科学会2件 論文掲載数 2件 (⑥・⑦) 日本学術振興会1件、藤井寺教育委員会1件			
【備考】 学会研究会等 ①前方後円墳発生期における朱の交易—Iオウ同位体比分析による産地推定をととして—」日本文化財科学会第29回大会 (24年6月23日) ②「漆工品修復におけるX線CT模型の利用」文化財保存修復学会第34回大会 (24年6月30日) ③「漆工品の修復における、X線CTスキャナの活用」文化財保存修復学会第34回大会 (24年6月30日) ④「遺跡出土朱の産地推定のための同位体分析」日本地球科学会第59回年会 (24年9月11日) ⑤「前方後円墳発生期における朱の交易—Iオウ同位体比分析の産地推定を通して」日本地球科学会第59回年会 (24年9月11日) 論文等 ⑥「X線CTを用いた国宝阿修羅像の健康状態調査と製作技術の解明」科研費ニュース 日本学術振興会 (25年1月) ⑦「硫黄同位体比法から見た津堂城山古墳出土朱の産地推定」津堂城山古墳報告書 藤井寺教育委員会 (25年3月)			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：C T 調査は形状や保存状態の把握に大きな効果がある。鷹島海底遺跡発見遺物の形状把握に効果があった。 独創性：我が国の博物館で唯一、非破壊で文化財の構造調査や三次元計測、三次元造形を行うことができるため。 発展性：X線C T・3Dデジタイザ・三次元プリンタによる調査研究は適用範囲が広く、得られる結果も多様である。 効率性：X線C T・3Dデジタイザ・三次元プリンタは短時間でデータを取得できるので時間的投資効果が大きい。 継続性：非破壊で採取した計測データを基に、短時間で内容豊富な質の高い基礎情報を蓄積することができる。 正確性：X線C Tでは文化財内部の構造を約0.2 mm、3Dデジタイザでは0.02 mmの高精度で記録することができる。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	調査回数	資料収集数	学会研究会等 発表数	論文掲載数	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 調査件数：80件の調査を計画通り実施できた。 調査回数：年間40回の目標値を達成できた。 資料収集数：X線C T 199点、3Dデジタイザ31点、合計230点の資料調査を計画通り実施することができた。 学会研究会等発表数：3件の成果を日本文化財科学会及び文化財保存修復学会で研究発表し、目標を達成できた。 論文掲載数：本研究の成果を日本文化財科学会誌に1件掲載し、目標を達成できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展「細川家の至宝」で展示した「銀人立像」や文化交流展示室で展示した長崎県鷹島海底遺跡出土品、大分県竹田市南蛮鐘など多くの作品について三次元計測・調査を実施することができた。次年度も、展示借用計画と連動して計画的な調査を実施したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初計画に沿って研究内容の水準を保ちながら順調に遂行している。引き続き外部資金を積極的に活用しながら研究を継続したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 博物館における文化財保存修復に関する研究((5)－⑥)		
【事業概要】 当館の文化財保存修復施設の機能と利点を生かし、西日本地域の大学で装こう技術による文化財保存修復を学ぶ学部生・大学院生を対象とした研修を実施する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員 志賀智史
【スタッフ】 藤田励夫（博物館科学課保存修復室長）、渡部史之（博物館科学課アソシエイトフェロー）、下田詩織（博物館科学課研究補佐員）、大賀典子（博物館科学課事務補佐員）、竹上幸宏（国宝修理装こう師連盟九州支部技師長）、田村 公（国宝修理装こう師連盟九州支部技師）、元 喜載（国宝修理装こう師連盟九州支部技師補）			
【主な成果】 吉備国際大学1名、九州産業大学3名、別府大学1名、佐賀大学1名、広島市立大学2名の計5大学8名が研修に参加した。少人数のため、実践的な研修を実施することができた。本研修により、参加学生は文化財保護への理解を深め、また将来の修理技術者の育成にも寄与することができた。			
【年度実績概要】 ・当館の保存修復施設を利用して地域大学との協業を図る短期インターンシップ研修プログラムについて、平成17～23年度の実績をもとに検討、改善した。その成果は、国宝修理装こう師連盟の協力を得て5大学8名の学生を対象に24年8月20日（月）～24日（金）にわたり実施された、装こう技術に関する短期インターンシップ「文化財保存修復研修」に反映された。研修では障壁画の下貼り作製に関する講義と実習を通じて、文化財保存修復に対する参加学生の理解と研鑽を深めることができた。			
			
「文化財保存修復研修」 研修風景			
【実績値】 研修開催数 1回（平成17年度より8回目） 参加者数 計5大学8名 （吉備国際大学1名、九州産業大学3名、別府大学1名、佐賀大学1名、広島市立大学2名）			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：公共財産である文化財を伝えてゆくためには修理技術者の育成が必要で、公共性も高いため。 独創性：同様な研修を行っている公的機関は西日本地域には無いため。 発展性：文化財修理は近年注目されており、社会的な影響性は高いため。 効率性：5日間の短期間でかつ少人数、整った設備で、効率的に研修を行うことができた。 継続性：技術者の育成は継続的に行う必要があり、研修も毎年継続して行う必要があるため。 正確性：国宝修理装こう師連盟の協力により、正確な研修を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	研修開催数	参加者数				
判定	A	A				
判定理由 研修開催数：計画通り実施できた。 参加者数：実習としては適切な人数である。地域大学からの申し込みも多く、研修への関心の高さが窺える。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	大学で保存修理の基礎教育を受けた学生を対象に実践的な研修の場を提供することで、修理技術者の育成を図ることができる機関はきわめて少なく、次年度以降も地域大学の学生を対象に、本事業を継続していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平成 17 年度より少人数の実習を継続的に行っており、参加者数も安定している。そのため、平成 25 年度以降も引き続き同様の研修を実施する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 博物館危機管理としての市民協同型 I P Mシステム構築に向けての基礎研究((5)－⑥)
【事業概要】 平成 24 年度文化庁文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業「市民と共に ミュージアム I P M」実行委員として、地域の博物館等と連携協力し、実施する。本事業は、地域に展開可能なミュージアム I P M支援者育成プログラムを策定し、館の保存管理機能の基盤強化と共に地域のミュージアム支援者層の拡大に寄与するものである。ミュージアム I P M支援者研修（基礎編・技術編・実践編）を実施し、プログラムを確立する。公開シンポジウムを東京で開催し、より広い範囲への普及に努める。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	特任研究員 本田光子
【スタッフ】 三輪嘉六(館長)、清水圭輔(副館長)、森田稔(副館長)、谷 豊信(学芸部長)阿部 勝(総務課長)、今津節生(博物館科学課長)、高田政司(交流課長)、大石淳子(総務課長補佐)、秋山純子(博物館科学課アソシエイトフェロー)、河北絵里子(学芸部事務補佐員)	
【主な成果】 (1) 研修会等参加者は、全国の美術館・博物館の学芸員及びボランティアからなるが、毎回大変熱心な参加状況であり、学芸員・市民の関心の高さがうかがえた。積極的な意見を集約することが可能となり、ミュージアム I P M支援者研修プログラム案策定に充分活かすことができた。今後は、本プログラムにより支援者育成を段階的に進める目途が立てられた。 (2) 公開シンポジウムでは専門家の講演と実践報告等により、東京での情報発信ができた。 (3) 平成 24 年度文化庁文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業「市民と共に ミュージアム I P M」を軸に市民協同型 I P Mシステム構築に関する研究を展開しその成果は、事業費より 3 冊の報告書を刊行した。	
【年度実績概要】 (1) ミュージアム I P M支援者研修プログラムの策定 専門家や有識者による会議を開催し、ミュージアム I P M支援者研修（基礎編・技術編・実践編）の研修を実施した。研修プログラムを全体会議で検証し、問題点や課題を整理した。 (1) 研修会の実施 文化財の保存科学と生物被害の基礎を学ぶ研修会（基礎編）と、メンテナンスに伴ったダスト・インジケーター観察の基礎を学ぶ研修会（技術編）及び荷解き場・収蔵庫前室兼通路・展示室などで実際の I P Mメンテナンスを実習する研修会（実践編）を実施した。 (2) 公開シンポジウムの開催 公開シンポジウムを開催し、市民協同型ミュージアム I P Mの必要性や重要性を広く社会へ紹介する。2 名の専門家による基調講演と 3 本の実践報告及び座談会の構成で、24 年 10 月 7 日に東京で開催した。	
 IPM 支援者研修（技術編）  公開シンポジウム	
【実績値】 ○検討会等開催回数・・・・・・・・・・4 回 ・「市民と共に ミュージアム I P M」全体会議：2 回 ・ワーキンググループ検討会：2 回 ○支援者研修会開催回数・・・・・・・・・・3 回 ○支援者研修会参加者数・・・・・・・・・・72 名 ・ミュージアム I P M支援者研修（基礎編）：39 名 ・ミュージアム I P M支援者研修（技術編）：26 名 ・ミュージアム I P M支援者研修（実践編）：7 名 ○シンポジウム開催回数・・・・・・1 回 公開シンポジウム「市民と共にミュージアム I P M」（24 年 10 月 7 日） ○シンポジウム参加者数・・・・・・145 名 ○報告書 3 冊 ・「市民と共に ミュージアム I P M」事業報告書（研修編） 300 部 ・「市民と共に ミュージアム I P M」事業報告書（報告会・施設見学調査編） 300 部 ・「市民と共に ミュージアム I P M」事業報告書（シンポジウム編） 1,000 部 (参考値) ○ミュージアム I P M支援者研修会修了者報告会・・・・1 回 50 名	
【備考】	

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：研修会への文化財関係者の参加希望が多く、需要・必要性が高いため。 独創性：I P Mに関する先駆的取り組みであり、「市民と共に」という点でオリジナリティがあるため。 発展性：公開シンポジウムを東京で開催し、さらに広い地域への普及に努めた。 効率性：文化庁の補助金を活用しているため。 継続性：I P M研修会を基礎編、技術編、実践編と段階的に受講できるため。 正確性：各方面の専門家の協力により、正確な研修を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	検討会等開催回数	支援者研修会開催回数	支援者研修会参加者数	シンポジウム開催回数	シンポジウム参加者数	報告書
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 検討会等開催回数：目標回数、開催した。 支援者研修会開催回数：目標回数、開催した。 支援者研修会参加者数：予定を上回る人数の参加があった。 シンポジウム開催回数：目標回数、開催した。 シンポジウム参加者数：目標人数を達成した。 報告書：予定通り刊行した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今回の事業が、I P Mをひとつの切り口とした、九州国立博物館の着実な取組を多くの方々に理解していただく契機になるとともに、館の規模や設置形態を超えて、広く参考となるモデルを示すことができた。次年度は本事業の集大成と位置づけ、これまでの事業内容をまとめ、より広範な普及を図るようにする。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	地域の支援者層の拡大充実を図ることで、市民や機関との連携を深めながら、より積極的に文化財に関する調査及び研究を推進した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4) 東アジアの文化財修復用手漉き和紙の調査研究(UNESCO との共同) ((5) - (6))
【事業概要】 日本、中国、韓国における文化財の保存修理には、良質の手漉き紙の確保が必要不可欠である。そのため、各国の手漉き紙の製作状況を調査する。材料や技法などを詳細に実地調査し、映像記録（動画、静止画）や調査カードにまとめる。また、各国での調査結果について報告会を開催し、紙文化財の保存修理に関する各国の共通理解の進展を図る。	
【担当部課】	学芸部博物館科学課
【プロジェクト責任者】	保存修復室長 藤田励夫
【スタッフ】 森田稔（副館長）、本田光子（学芸部特任研究員）、渡部史之（博物館科学課アソシエイトフェロー）	
【主な成果】 中国安徽省巢湖市及び涇県の伝統的製紙工房を調査し、映像記録や調査カードを作成した。また中国江蘇省南京市において、各国の調査状況を報告する会議を開催した。	
【年度実績概要】 - 中国安徽省巢湖市の伝統的製紙工房では各施設の調査の他、粉蜡紙の製作工程などを詳しく調査した。また同省涇県の伝統的製紙工房では各施設の調査に加え、紙漉の一連の工程を、時間をかけて調査することができた。これにより、製品からのみでは知り得ない、工程上のさまざまな問題点を調査することができた。 - 各工房での材料及び製作工程の調査を通じて、現状では紙文化財の保存修理に使用できる手漉き紙がきわめて少数であること、手漉き紙製作の改善を進めることで修理材料の確保に努め、紙文化財修理の向上を図る必要があることを改めて確認することができた。	
	
安徽省涇県 製紙工房	
【実績値】 海外調査件数：2 件 （中国安徽省巢湖市、涇県）	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-4

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：日本・中国・韓国は紙文化財の保存修理について共通の問題を抱えており、海外での実地調査が必要である。 独創性：実地調査の難しい海外の手紙漉き調査を実施することができた。 発展性：手漉き紙の製作状況の調査により、保存修理に用いる良質な手漉き紙の確保を図ることができるため。 効率性：ユネスコと連携して調査を行うことで、海外においても円滑に調査を実施することができた。 継続性：各国の手漉き紙の製作状況調査は継続的に行う必要があるため。 正確性：複数の伝統的製紙工房を調査することができた。						

2. 定量的評価

観点	海外調査件数					
判定	A					
判定理由 海外調査件数：海外において、複数の伝統的製紙工房の調査を計画通り2件実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	実地調査の難しい海外の手紙漉き調査について、ユネスコとの連携により円滑に達成することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り調査が実施され、当初の目標を達成することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) デジタル計測技術を使用した文化財の予防保存に関する調査研究（学術研究助成基金助成金） ((5)－⑥)		
【事業概要】 本研究では透過X線撮影及び3D-CTを用いた文化財の内部構造観察に加えて、CTデータから製作技法を検討すると共に、亀裂・空隙・虫害・錆などの劣化痕跡や過去の修復履歴を検証することによって文化財の健康状態を把握し、その結果を予防保存や保存修復計画に役立てることを目的とした診断システムの構築を目指す。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
【スタッフ】 鳥越俊行（文化財課資料登録室主任研究員）			
【主な成果】 透過X線による全体把握を基礎にしながら、X線CT、特に三次元で再構成表示することが可能な3D-CTを用いた観察（内部構造、製作技法、劣化状況、修復履歴など）によって、文化財の非破壊調査を健康診断システムにまで発展させるための基礎研究を実施することができた。また、この3Dデータを三次元プリンタで打ち出して作成したデジタル複製品を基にした詳細な検証が効果的であることを確認した。			
【年度実績概要】 - 文化財の予防保存を実現すべく、透過X線による全体把握を基礎にしながら、X線CT、特に三次元で再構成表示することが可能な3D-CTを用いた観察（内部構造、製作技法、劣化状況、修復履歴など）を実施すると共に、3Dデータを三次元プリンタで打ち出して作成したデジタル複製品を基にした詳細な検証を行った。 - 具体的には、長崎市聖福寺の御本尊釈迦如来坐像及び迦葉尊者立像・阿難尊者立像を調査した。諸像は17世紀の制作で中国から舶載された仏像としては日本最大級の大きさである。現地及び博物館で透過X線撮影を実施して像全体の内部構造把握を行った。その結果、象内に心臓や肺に見立てた金属製の五臓をはじめとする内臓模型を納めた「生身仏」の作例であることを確認した。 - 五臓は長さ約15cmにわたり、肺、心臓、肝臓、脾臓、腎臓、咽喉に見立てた板状の小片（各2cm四方）を鎖で繋いでいた。また、五臓の側には骨（仏舍利）喉仏、歯に見立てた異材質（ガラスあるいは水晶製）の物体もあり、これらと五臓は布に包まれ紐で木（長さ35cm）に結ばれていた。さらに、腹部全体に大小様々な穀類を充満させていた。 - 三次元データから得られた情報を検証するために、形状データを材質別に分離した。また、三次元プリンタを用いてデジタル複製品を制作した。その結果、五臓の立体形状を詳細に確認できると共に、展示物として一般市民へ研究成果を還元することができた。また、将来の解体修理のための基礎情報を得ることができた。			
【実績値】 収集資料数 8点 学会発表件数 2件（①・②）			
【備考】 学会発表 ①「X線CT（3D-CT）による文化財健康診断システムの構築―劣化痕跡・修復履歴からみた文化財の状態把握―」文化財保存修復学会第34回大会（24年4月15日） ②「X線CTスキャナ・3Dデジタイザを応用した文化財の調査研究と三次元データの活用」中国考古学会（24年12月15日）			

釈迦如来坐像で発見された金属製五臓他の材質別の三次元CT像

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：文化財の健康状態を把握し、予防保存に役立てることは文化財保存に必要不可欠であり必要性・緊急性が高いため。 独創性：高品質のデジタルデータ基に、非破壊で文化財の状態把握を行うための研究であり、新規性が高いため。 発展性：X線CT・3Dデジタイザ・三次元プリンタによる調査研究は適用範囲が広く、得られる結果も多様である。 効率性：短時間で高品質のデジタルデータを取得できるので時間的投資効果が大きい。 継続性：非破壊で採取した計測データを基に、短時間で内容豊富な質の高い基礎情報を蓄積することができるため。 正確性：汎用性のある正確な三次元データを基に、文化財の状態を把握することは、多くの文化財調査に有効である。						

2. 定量的評価

観点	収集資料数	学会発表数				
判定	A	A				
判定理由 収集資料数：木造彫刻を中心に8点を調査し、目標を達成することができた。それぞれの作品について、亀裂・空隙・虫害・錆などの劣化痕跡や過去の修復履歴を検証することができた。 学会発表数：文化財の健康診断を目標に、X線CTによる文化財の状態把握に関する研究発表を計画通り2件行った。このうち、文化財保存修復学会では500人の専門家に対して口頭発表を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究によって、透過X線による全体把握を基礎にしながら、三次元で再構成表示することが可能な3D-CTを用いた観察によって文化財の内部構造、製作技法、劣化状況、修復履歴などを把握し、3Dデータを三次元プリンタで立体模型を打ち出すことで、文化財保存の詳細な検証を行うことの重要性が実証された。今後は、これらの観察や検証の結果を総合して、予防的な保存対策や保存修復計画の立案に進むことが望まれる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、当初計画にそって研究内容の水準を保ちながら順調に遂行している。すでに、研究の成果を学会等で発表している。引き続き外部資金を積極的に活用しながら研究を継続し、広く研究成果を普及させたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進						
プロジェクト名称	6) 三次元データに基づく文化財研究と新展示手法の開発 ―興福寺 国宝阿修羅像を中心に― (科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) ((5)―⑥)						
【事業概要】 本研究は特別展の際に各地から収集された文化財を科学的に調査することによって、文化財研究の基礎資料を蓄積すると共に、その研究成果を生かして新しい展示手法を開発することを目的とする。具体的には、文化財用の大型X線CTスキャン調査によって得られた、奈良興福寺の国宝 阿修羅像をはじめとする十大弟子像4軀、八部衆像5軀の像内の高精細三次元データを分析し、奈良時代の脱活乾漆像の構造及び技法、修復履歴を明らかにした上で彫刻史上の作風的位置づけを行う。							
担当部課	学芸部博物館科学課						
プロジェクト責任者	課長 今津節生						
【スタッフ】 楠井隆史（展示課展示調整室主任研究員）、鳥越俊行（文化財課資料登録室主任研究員）							
【主な成果】 本研究は興福寺の特別な許可を得て、X線CT調査で得られた国宝 阿修羅像をはじめとする十大弟子像4軀、八部衆像5軀の高精細三次元データを、美術史・工芸史・修復技術・文化財科学・博物館学の専門家が一同に集まって解析する研究である。本研究によって、X線CTによって得られた三次元画像を外面・内面・断面を問わず自由に拡大・縮小しながら調査研究を進めることが可能になった。							
【年度実績概要】 - これまでの研究で、阿修羅像の心木は虫食が無い良好な状態であり、胸部に見える亀裂も表面に留まっていることが判明した。また、鎌倉時代と明治時代に実施された修理の痕跡も明瞭に把握することができた。さらに、三次元データから阿修羅像の塑土原型像を復元することに成功した。麻布と漆で作られた像内面の凹凸を反転することで原型像を復元した。この原型像は現在の阿修羅像よりも厳しい表情をしていたことが判明した。衣や装身具の表現も原型の段階では表現していないことも判明した。さらに、三次元プリンタで出力した実物大のデジタル複製品を製作した。表面だけではなく麻布と漆を重ねて作った内部構造までも忠実に再現したデジタル複製品によって、見えない部分まで可視化して観察・理解できるようになった。 - 本研究の成果は、興福寺の天平彫刻を、科学調査を基盤として正確に位置づけることによって、日本彫刻研究の新しい研究基盤を形成することが期待される。							
							
凹凸反転内部立体像							
【実績値】 <table border="0"> <tr> <td>収集資料数</td><td>9点</td></tr> <tr> <td>学会発表件数</td><td>1件 (①)</td></tr> <tr> <td>論文掲載数</td><td>1件 (②)</td></tr> </table>		収集資料数	9点	学会発表件数	1件 (①)	論文掲載数	1件 (②)
収集資料数	9点						
学会発表件数	1件 (①)						
論文掲載数	1件 (②)						
【備考】 学会発表 ①「漆工品の修復における、X線CTスキャナの活用」文化財保存修復学会第34回大会（24年6月30日） 論文 ②「X線CTを用いた国宝阿修羅像の健康状態調査と製作技術の解明」『科研費ニュース』（25年1月）							

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：天平彫刻の最高傑作を、科学調査することによって日本彫刻研究の新しい研究基盤を形成することができた。 独創性：所蔵者である興福寺様の特別な許可を得て実施できた研究であり、これまでにない新たな研究基盤である。 発展性：X線CTと三次元プリンタによる調査研究は適用範囲が広く、得られる結果も多様である。 効率性：展示会の際にCT調査を実施しており、高精度の三次元デジタルデータを解析しながら研究データを得られるため。 継続性：採取した三次元データを基に、内容豊富な質の高い基礎情報を蓄積することができるため。 正確性：正確な三次元データを基に、文化財の状態を把握することは、多くの文化財調査に有効であるため。						

2. 定量的評価

観点	収集資料数	学会発表数	論文掲載数			
判定	A	A	A			
判定理由 収集資料数：阿修羅像をはじめとする十大弟子像4躯、八部衆像5躯の高精細三次元データを計測し、十分な成果が得られた。それぞれの彫刻について、美術史・工芸史・修復技術・文化財科学・博物館学の専門家が一同に集まって解析を進めている。 学会発表数：X線CTによる文化財の調査研究として研究発表を、計画通り1件行った。 論文掲載数：論文1件を発表し、目標を達成できた。						

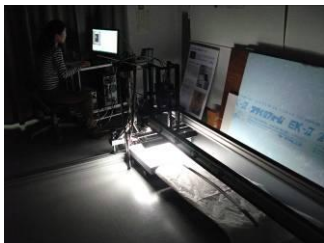
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究は、X線CTによる膨大な三次元データを美術史・工芸史・修復技術・文化財科学・博物館学の専門家が一同に集まって解析することにより、天平彫刻の最高傑作を日本彫刻研究の新しい研究基盤として位置づけることになる。今後は、随時研究成果を公開し、最終的には膨大な研究成果を集積した報告書を作成する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、当初計画にそって研究内容の水準を保ちながら順調に遂行している。すでに、研究の成果を学会等で発表し随時研究報告を計画している。引き続き外部資金を積極的に活用しながら研究を継続したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7) 高精細大型スキャナによる日本刀の保存状態に関する調査研究((5)－⑥)
【事業概要】 高精細の大型スキャナを用いて九州国立博物館所蔵の刀剣をスキャニングし、刃文や帽子、沸、鍛え、鑢目、茎の銘などについて、高精度のデータを得る。そして、この調査を通じて刀剣研磨に先立つ状態確認を行う。更に、刀剣の保存や研磨におけるスキャナ活用の有用性と可能性を探り、その方法論の確立を目指すことを主眼とする。	
【担当部課】	学芸部文化財課
【プロジェクト責任者】	アソシエイトフェロー 望月規史
【スタッフ】	
【主な成果】 本年度の調査により、館蔵刀剣 2 口の状態確認をすることができた。この所見により、次年度予定している外部委託の研磨作業について、予め詳細な見積もりを行うことが可能となった。また、高精細大型スキャナを利用して得られた画像は、研磨の前後の状態確認に極めて有効な資料となることが明らかとなった。	
【年度実績概要】 - 調査対象の刀剣とその状態確認 高精細(3億画素)のデジタルスキャナを用いて、平置きにした館蔵の刀剣2口(No.1: 刀 銘「肥前國住人忠吉作」(収蔵品番号F17)、No.2: 刀 大磨上無銘(伝「光忠」)(収蔵品番号F15))を、表裏それぞれ片照明・両照明の2パターンに分けてスキャニングした。それにより、No.1については現状でも展示が可能ではあるものの、肉眼では確認しきれなかった細かなヒケ傷などが認められた。No.2のほうは、全体にヒケ傷が目立ち、三ツ頭や鎧部分に錆が析出していることが改めて明らかになった。現状では展示が難しく、研磨の必要性を客観的に看取することができた。なお、スキャニングした画像は次年度研磨を依頼する予定の業者にも確認してもらい、作業の見積もりをする上で極めて有用との返答を得た。 - 銘の確認 No.1は茎に銘を切っている。これまでカメラ撮影画像や拓本により確認していたものを、今回はスキャナによる高精細画像として取り込むことを行った。その結果、彫りの深さや鑢の切り合い関係などについて、極めて明瞭な画像を得ることができた。	
 刀剣スキャニング風景 (1)  刀剣スキャニング風景 (2)	
【実績値】 調査回数 4回 刀剣2口のスキャニングと、それをもとにした状態調査。	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-7

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	A	A	S
判定理由 適時性：状態確認をすることで、展示や研磨の際に有用なデータを得ることができるため。 独創性：刀剣の状態確認にスキャナを用いるのは、本研究が最初であるため。 発展性：館蔵刀剣の調査終了後は、借用品や寄託品などにも対象を広げることができるため。 効率性：状態確認を研磨師に依頼することなく、予め館内で行うことが可能であるため。 継続性：ノウハウ蓄積後は、館外からの依頼を受けることが可能となるため。 正確性：個々人の経験則だけに拠らず、科学的なデータが保証されるため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
判定	A					
判定理由 調査回数：本年度は、スキャニングに最も適した方法を勘案するために、敢えて館蔵の2口に絞って調査を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	予定された調査対象については年度内に調査することができた。今後は更に調査件数を増やし、方法の確立に努めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	作業についてはほぼ予定通り進めることができた。また、次年度に向けた準備も遅滞なく行っているところである。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 博物館環境デザインに関する調査研究((5)-(7))		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の展示／観覧環境のデザインについて調査・研究し、今後の展示／観覧環境のデザインの向上に結びつける事を目的として実施する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課デザイン室長 木下史青
【スタッフ】 矢野賀一（企画課デザイン室主任研究員） 勝沼早苗（企画課デザイン室 アソシエートフェロー）			
【主な成果】 東洋館リニューアルにあたり、サイン計画において4カ国語によるサインを設計・設置し、エントランスにおいて、インフォメーションカウンターのデザイン、デジタルサイネージによるサインの導入・設置を行った。また、東洋館に設置されたTNM&TOPPAN ミュージアムシアターに関わるサインデザインを行った。 さらに、特集陳列「美術解剖学」において、iPad 機器を利用した解説補助の手法を実施し、効果を検証した。			
【年度実績概要】 ・他館展示／観覧環境のデザイン調査：これまでの国内外の博物館・美術館での事例調査に加え、さらに地方博物館・美術館における環境デザインを調査し、特に本年度においては東洋館リニューアルのデザインの参考とした。 ・調査先：森美術館（東京・六本木）、サントリー美術館（東京・乃木坂）、山口県立美術館（山口県・山口市） 大津歴史博物館（滋賀県 大津市）、長崎県美術館（九州・長崎）、長崎歴史博物館（長崎）等にて調査を行った。			
 東洋館インフォメーションカウンター 東洋館・総合案内のデジタルサイネージ 東洋館 TNM&TOPPAN ミュージアムシアターに関わるサイン			
【実績値】 研究発表件数 4回 ・対談「文化財をリスペクトする気持ちとは」 於・大津市歴史博物館（滋賀県大津市） ・「あっという間の環の会」 於・オリエギャラリー（東京・外苑前） ・「照明デザインの新しい地平」 於・山口大学（照明学会大会） ・「東京国立博物館の展示について」 於・長崎歴史博物館 論文等掲載数 1回 ・「博物館展示論」（放送大学教科書）			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：当館の来館者数拡大が事業目標とされる中で、よりきめ細かい案内サインの整備が課題である。東洋館の耐震改修工事事業にあたり、さまざまなサインに関わる検討がなされた。 発展性：平成16年度の本館リニューアルから、平成22年度のアクションプランまで、館内サイン充実がなされてきた。一方デジタルサイネージ等、技術的進歩に対応しつつ当館に適応するデザインが整備されつつある。 効率性：iPad等の民生機の解説機器の使用を試みたが、運用面で盗難・悪戯防止・故障など課題が明らかになった。今後は時間的・人的な手当てや、専門機器利用等の投資に対して、問題点が明らかになった。 継続性：館内サインへのデジタルサイネージ導入についての一定の有効性は判断できるが、次年度の正門付近での情報提供整備向け、継続的な最新の技術面・デザイン面での継続的な調査研究が望まれる。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文等掲載数				
判定	B	B				
判定理由 研究発表件数：全館的な方針に沿って計画を実施しているが、まだ不十分な箇所が多く、さらなる研究が必要である。 論文等掲載数：特にデジタルサイネージ系サインについて、最新の技術的・意匠的な面での調査研究が望まれる。文化施設のみでなく、今後は商業環境を含む調査をこころがけたい。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展示・公開事業の基本的なメンテナンスは欠かせない一方で、急速な技術的進歩を遂げているサインのデジタル化（デジタルサイネージ）および画像・映像利用の増進に対応して、展示解説等への応用的デザイン研究を計画的に進めている。 平成24年度に得られた成果、特に東洋館リニューアルで実施・検証された、サイン掲出におけるコンセプトと、視認性・判読性等の方法論的知見は、特に25年度に予定されている「本館リニューアル」及び「正門付近の環境整備（無料ゾーン拡充）」に反映させる予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	24年度においては東洋館リニューアルオープンの事業を中心に計画通り実施されている。 引き続き館内の環境デザインのファシリティ及び質的向上を計画的に行う必要がある。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 博物館教育に関する調査研究((5)―⑦)		
【事業概要】 当館本館 20 室及び東洋館 2 室、6 室の教育普及事業を専門に行うスペース「みどりのライオン」において、総合文化展と密接に関連した博物館教育事業の理論と実践に関する調査研究を実施し、その成果の一部を研究会、論文等で発表する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 今井敦
【スタッフ】 鈴木みどり(博物館教育課ボランティア室長)			
【主な成果】 本館 20 室及び東洋館 2 室、6 室「みどりのライオン」における博物館ガイダンスやハンズオン体験コーナー、制作工程模型展示は年間で 10 万人を超える利用者があり、当館の博物館教育プログラムとして定着している。このプログラムを博物館教育の見地から調査研究し、口頭及び論文で発表を行った。			
【年度実績概要】 ・本館 20 室においてスライドショー「東京国立博物館ガイダンス」、ハンズオン体験コーナー「日本のもようでデザインしよう!」、東洋館 2 室において「オアシス 2 旅の案内所」、東洋館 6 室において「オアシス 6 アジアの占い体験」の博物館教育事業を実施した。 ・上記事業を博物館教育の一事例として、その理論と実践に関して以下の発表を行った。 鈴木みどり「ミュージアム・エデュケーターってどんな仕事?」(『汲泉』) 「博物館利用?・学校連携?ーよりよい利用形態にむけてー」(第二回ミュージアム・エデュケーター研修、口頭発表、24 年 9 月 27 日) 「人文系と自然系博物館の教育連携」(国際シンポジウム「人文系と自然系博物館の教育連携」、口頭発表、24 年 10 月 31 日) ・バリアフリー化とユニバーサル化、ハンズオンの研究を継続し、障がい者も含めた効果的な博物館体験のための展示やプログラムを実施した。 ・ミュージアム・エデュケーターの資質向上の研究を継続し、館内外の人材育成を行った。			
			
国際シンポジウム「人文系と自然系博物館の教育連携」風景 24 年 10 月 31 日開催			
【実績値】 研究発表 2 回 論文発表 1 本			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：博物館のユニバーサル化という時代の要請に込えているため。 独創性：視覚障がい者への対応等、先進的な取組を行っているため。 発展性：今後の展開を視野に入れながら行っているため。 効率性：周到な計画の上に行っているため。 継続性：過去の実績をふまえ、着実に実績を積み重ねているため。 正確性：効果を検証しながら進めているため。						

2. 定量的評価

観点	研究発表回数	論文発表本数				
判定	A	A				
判定理由 研究発表回数・論文発表本数 ：東京国立博物館における教育活動の実践事例を適時に紹介し、館内外の人材育成に寄与しているため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館では本館20室の教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」における博物館ガイダンス、各種レクチャー、体験型プログラム、制作工程模型展示をはじめ、館内各所で一般から学校団体まで幅広い層に向けて教育普及活動を展開している。これは博物館教育を推進する上で大きな成果といえる。また、この事業を通じて、博物館教育の理論の実践について、担当研究員が調査研究を進め、その成果を広く内外に発信できた。今後もさらに研究を続け、博物館教育に関する情報発信を精力的に行っていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館教育に関する調査研究は、博物館教育課に所属する研究員を中心に、概ね研究計画に沿ったかたちで順調に進められていると考える。今後も新たな教育手法の有効性を検証し、また有形文化財に関する調査研究の最新の成果を活用しながら、博物館教育理論の構築、ならびに実践的プログラムの開発に取り組んでいきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究((5)－⑦)
【事業概要】 東京国立博物館における収蔵品管理システムの開発を通じて、資料情報と学芸業務の有機的な関連について調査研究し、博物館における効果的・効率的な情報の管理及び蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。	
【担当部課】	学芸企画部
【プロジェクト責任者】	博物館情報課情報管理室長 村田良二
【スタッフ】 佐藤祐介（博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー）	
【主な成果】 東京国立博物館における収蔵品管理システムのプロトタイプについて、収蔵品検索機能、平常展管理機能、鑑査会議管理機能、貸与管理機能の各機能を継続的に運用し、随時改善を重ねて機能を向上させた。さらに、作品の修理に関する予定・履歴のデータを管理する機能を新たに実装した。また次期システムに向けた設計のための準備を開始した。	
【年度実績概要】 収蔵品管理システムの運用を継続することにより、収蔵品のデータ更新・追加・訂正を円滑に行える環境を維持し、随時改善を重ねて一層の機能向上を図った。 新たに追加した機能として、作品の本格修理に関する予定及び履歴のデータを管理する機能と、作品の保存カルテ・点検調書等を表示する機能を実装した。これらにより、作品の過去の修理に関する情報に迅速にアクセスできるようになるとともに、貸与や展示の計画にあたって修理の予定・履歴を参照することが簡単にできるようになり、関連する作業の効率を向上することができた。	
 修理予定画面  保存カルテ画面  収蔵品管理システム (プロトタイプ)	
【実績値】 収集データ件数 199,517 件 (内訳) 作品データ件数 195,149 件 平常展データ件数 3,112 件 鑑査会議データ件数 33 件 貸与データ件数 977 件 修理データ件数 246 件	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：博物館業務に必要な業務支援機能を実現した。 独創性：既存のシステムにない総合的な博物館資料情報システムとなっている。 発展性：柔軟な機能追加・改善が可能な設計をした。 効率性：内製により効率的な開発を行った。 継続性：データ整備の基盤構築として継続的に実施した。 正確性：収蔵品、寄託品等、業務上必要となる資料情報はほぼすべて網羅した。						

2. 定量的評価

観点	収集データ件数					
判定	A					
判定理由 収集データ件数：効果的な業務支援機能により、学芸業務を行う流れの中で効率的に無理のないデータ収集が可能となり、その結果データを着実に蓄積している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	収蔵品のデータ蓄積と業務支援を密接に連動させたシステムにおいて効果的にデータの蓄積、活用を行うことが可能となっている。また、修理関連情報の管理機能を実装することにより、さらに広範な業務を支援することが可能となった。今後は、これまでに実装した機能をもち、かつてより一貫性・保守性の高い次期システムの試作を開始する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	各分野の研究員、業務担当者と連携をとりながらシステム開発を継続しつつ、さらに発展させた次期システムの試作を進める。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 凸版印刷と協同でミュージアムシアターでの公開に向けた研究を引き続き実施する((5)ー⑦)		
【事業概要】 館蔵文化財のデジタル・アーカイブを活用した、新たな公開手法を凸版印刷株式会社と共同で研究する。 平成19年度から「国宝 聖徳太子絵伝」「国宝 灌頂幡」「重要文化財 洛中洛外図 舟木本」「土偶」の高精細デジタル・アーカイブを作成し、それらを素材としてミュージアムシアターにおけるコンテンツの公開を実施している。本年度は「十一面観音菩薩立像」を素材とした。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課長 井上洋一
【スタッフ】 田良島 哲(調査研究課長)、浅見龍介(調査研究課東洋室長)			
【主な成果】 (1)重要文化財「十一面観音菩薩立像」について、凸版印刷との共同で高精細三次元データを取得し、それに基づいたシアター用コンテンツを制作した。同コンテンツは平成25年4月からミュージアムシアターで公開する予定である。 (2)平成25年1月から公開した「アンコール遺跡パイヨン寺院―尊顔の記憶―」制作に当たって、仏像1件の高精細三次元データの取得を行った。 (3)既に取得した作品のデータを元に、新コンテンツ1件を制作し、公開した。			
【年度実績概要】 (1)館蔵の仏像、重要文化財 十一面観音菩薩立像(C-304) 中国・唐時代 7世紀 多武峰伝来について、高精細三次元データを取得し、それに基づき、凸版印刷が当館の監修のもと、ミュージアムシアター用コンテンツ「三蔵法師の十一面観音」を制作した。同コンテンツは平成25年4月から水、木、金、土、日、祝日にミュージアムシアターで来館者に公開する予定である。 (2)平成25年1月から公開した「パイヨン―尊顔の記憶―」制作に当たって、「ナーガ上の仏坐像」(TC-378)の高精細三次元データの取得を行った。 (3)既に取得した「洛中洛外図屏風 舟木本」のデータを元に、新コンテンツ「洛中洛外にぎわい探訪一京のごちそう」を制作し、平成25年1月からミュージアムシアターで公開した。			
			
高精細三次元データを作成した 「十一面観音菩薩立像」			
【実績値】 データ化 2件 コンテンツ作成 3件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-4

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：博物館の情報化と、より広範な文化財の活用という現在の動向を反映しているため。 独創性：研究員の知見に基づいた、他に類例のないコンテンツを制作しているため。 発展性：多目的に活用できるデータを蓄積しているため。 効率性：凸版印刷との協業により、効率のよいデータ蓄積を行っているため。 継続性：共同研究以来5年を経過し、引き続き積極的な展開を図っているため。 正確性：高精細かつ正確なデータの取得を行っているため。						

2. 定量的評価

観点	データ化件数	コンテンツ化件数				
判定	A	A				
判定理由 データ化件数・コンテンツ化件数：所期のデータ化及びコンテンツ化ができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画どおりのデータ化及びコンテンツ化が行われた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	凸版印刷との共同研究を継続しており、アーカイブの方法も含めた作品データの蓄積と活用を進めるとともに、新シアター向けのコンテンツ制作も実施できた。引き続き、研究対象の選定と方法について協議を進め、新たな素材に関する研究とデータ及びコンテンツ制作に取り組む。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-5

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進																																																																																																																																						
プロジェクト名称	5) 文化財管理における美術品用語辞典の作成（科学研究費補助金）（(5)-(7)）																																																																																																																																						
【事業概要】 本研究は、日本の文化財について使用されている用語を収集・体系化し、それら用語に関する典拠情報を作成することを目的とするものである。																																																																																																																																							
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課情報管理室長 村田良二																																																																																																																																				
【スタッフ】 河内晋平（東京芸術大学総合芸術アーカイブセンター 教育研究助手）、原田一敏（東京芸術大学大学美術館 教授）																																																																																																																																							
【主な成果】 文化財に関する情報を扱う施設から用語データを収集した。特に分担者は、東京国立博物館における収蔵品データベースから、実際に入力されている用語データを抽出・集計した。																																																																																																																																							
【年度実績概要】 文化庁が公開している国宝・重要文化財リストと指定文化財目録、東京国立博物館が館内で使用している収蔵品データベース、東京芸術大学大学美術館の収蔵品データベースそれぞれから、絵画、書跡、工芸の分野を中心に、名称や品質形状といったカテゴリの用語をデータとして収集した。各分野・各カテゴリの用語について、入手可能な場合はふりがなや英語についても収集した。また集取した用語について体系化の検討を行った。 当館の収蔵品データベースからは、絵画、書跡、金工、刀剣（いずれも日本・東洋とも）の各分野について、名称（日英）、品質形状（日英）、員数（日）のそれぞれで使用されている用語データについて、使用回数の集計とともに抽出した。																																																																																																																																							
<table><tr><th>count</th><th>facture</th><th>lang</th></tr><tr><td>6779</td><td></td><td>ja</td></tr><tr><td>964</td><td>紙本墨書</td><td>ja</td></tr><tr><td>162</td><td>彩箋墨書</td><td>ja</td></tr><tr><td>139</td><td>銅製</td><td>ja</td></tr><tr><td>101</td><td>版本</td><td>ja</td></tr><tr><td>85</td><td>石製ほか</td><td>ja</td></tr><tr><td>34</td><td>木製</td><td>ja</td></tr><tr><td>32</td><td>木製板木</td><td>ja</td></tr><tr><td>23</td><td>絹本墨書</td><td>ja</td></tr><tr><td>23</td><td>紙本墨書又は着色</td><td>ja</td></tr><tr><td>20</td><td>紺紙金字</td><td>ja</td></tr><tr><td>18</td><td>彩箋墨書／紙本墨書(巻6のみ)</td><td>ja</td></tr><tr><td>14</td><td>紺紙金銀交書</td><td>ja</td></tr><tr><td>10</td><td>紺紙金字銀針</td><td>ja</td></tr><tr><td>9</td><td>紙本着色</td><td>ja</td></tr><tr><td>9</td><td>絹石製</td><td>ja</td></tr><tr><td>8</td><td>紙本墨書／色紙墨書</td><td>ja</td></tr><tr><td>5</td><td>紙本墨書・彩箋墨書</td><td>ja</td></tr><tr><td>4</td><td>拓本</td><td>ja</td></tr><tr><td>4</td><td>象牙製／紫檀製</td><td>ja</td></tr><tr><td>4</td><td>象牙製／木製</td><td>ja</td></tr><tr><td>3</td><td>紙本墨摺</td><td>ja</td></tr><tr><td>3</td><td>水晶製</td><td>ja</td></tr><tr><td>3</td><td>彩箋墨書</td><td>ja</td></tr><tr><td>3</td><td>紙本墨書</td><td>ja</td></tr><tr><td>3</td><td>陶製</td><td>ja</td></tr><tr><td>3</td><td>紙本墨画淡彩</td><td>ja</td></tr><tr><td>2</td><td>紙本墨書／彩箋墨書</td><td>ja</td></tr><tr><td>2</td><td>紙本墨書</td><td>ja</td></tr><tr><td>2</td><td>銅鉄製</td><td>ja</td></tr><tr><td>2</td><td>真鍮製</td><td>ja</td></tr><tr><td>2</td><td>滑石製</td><td>ja</td></tr><tr><td>2</td><td>石製</td><td>ja</td></tr><tr><td>1</td><td>紙本・彩箋墨書</td><td>ja</td></tr><tr><td>1</td><td>紙本墨書・絹本墨書</td><td>ja</td></tr><tr><td>1</td><td>木製着色</td><td>ja</td></tr><tr><td>1</td><td>紺紙金泥</td><td>ja</td></tr><tr><td>1</td><td>彩箋墨刷</td><td>ja</td></tr><tr><td>1</td><td>彩箋</td><td>ja</td></tr><tr><td>1</td><td>紙本鉛筆</td><td>ja</td></tr><tr><td>1</td><td>紙本金字</td><td>ja</td></tr><tr><td>1</td><td>彩箋着色・鳥毛</td><td>ja</td></tr><tr><td>1</td><td>紙本墨書(双鉤填墨?)</td><td>ja</td></tr></table> 書跡・品質形状の用語データ例				count	facture	lang	6779		ja	964	紙本墨書	ja	162	彩箋墨書	ja	139	銅製	ja	101	版本	ja	85	石製ほか	ja	34	木製	ja	32	木製板木	ja	23	絹本墨書	ja	23	紙本墨書又は着色	ja	20	紺紙金字	ja	18	彩箋墨書／紙本墨書(巻6のみ)	ja	14	紺紙金銀交書	ja	10	紺紙金字銀針	ja	9	紙本着色	ja	9	絹石製	ja	8	紙本墨書／色紙墨書	ja	5	紙本墨書・彩箋墨書	ja	4	拓本	ja	4	象牙製／紫檀製	ja	4	象牙製／木製	ja	3	紙本墨摺	ja	3	水晶製	ja	3	彩箋墨書	ja	3	紙本墨書	ja	3	陶製	ja	3	紙本墨画淡彩	ja	2	紙本墨書／彩箋墨書	ja	2	紙本墨書	ja	2	銅鉄製	ja	2	真鍮製	ja	2	滑石製	ja	2	石製	ja	1	紙本・彩箋墨書	ja	1	紙本墨書・絹本墨書	ja	1	木製着色	ja	1	紺紙金泥	ja	1	彩箋墨刷	ja	1	彩箋	ja	1	紙本鉛筆	ja	1	紙本金字	ja	1	彩箋着色・鳥毛	ja	1	紙本墨書(双鉤填墨?)	ja
count	facture	lang																																																																																																																																					
6779		ja																																																																																																																																					
964	紙本墨書	ja																																																																																																																																					
162	彩箋墨書	ja																																																																																																																																					
139	銅製	ja																																																																																																																																					
101	版本	ja																																																																																																																																					
85	石製ほか	ja																																																																																																																																					
34	木製	ja																																																																																																																																					
32	木製板木	ja																																																																																																																																					
23	絹本墨書	ja																																																																																																																																					
23	紙本墨書又は着色	ja																																																																																																																																					
20	紺紙金字	ja																																																																																																																																					
18	彩箋墨書／紙本墨書(巻6のみ)	ja																																																																																																																																					
14	紺紙金銀交書	ja																																																																																																																																					
10	紺紙金字銀針	ja																																																																																																																																					
9	紙本着色	ja																																																																																																																																					
9	絹石製	ja																																																																																																																																					
8	紙本墨書／色紙墨書	ja																																																																																																																																					
5	紙本墨書・彩箋墨書	ja																																																																																																																																					
4	拓本	ja																																																																																																																																					
4	象牙製／紫檀製	ja																																																																																																																																					
4	象牙製／木製	ja																																																																																																																																					
3	紙本墨摺	ja																																																																																																																																					
3	水晶製	ja																																																																																																																																					
3	彩箋墨書	ja																																																																																																																																					
3	紙本墨書	ja																																																																																																																																					
3	陶製	ja																																																																																																																																					
3	紙本墨画淡彩	ja																																																																																																																																					
2	紙本墨書／彩箋墨書	ja																																																																																																																																					
2	紙本墨書	ja																																																																																																																																					
2	銅鉄製	ja																																																																																																																																					
2	真鍮製	ja																																																																																																																																					
2	滑石製	ja																																																																																																																																					
2	石製	ja																																																																																																																																					
1	紙本・彩箋墨書	ja																																																																																																																																					
1	紙本墨書・絹本墨書	ja																																																																																																																																					
1	木製着色	ja																																																																																																																																					
1	紺紙金泥	ja																																																																																																																																					
1	彩箋墨刷	ja																																																																																																																																					
1	彩箋	ja																																																																																																																																					
1	紙本鉛筆	ja																																																																																																																																					
1	紙本金字	ja																																																																																																																																					
1	彩箋着色・鳥毛	ja																																																																																																																																					
1	紙本墨書(双鉤填墨?)	ja																																																																																																																																					
【実績値】 抽出用語件数：47,479 件																																																																																																																																							
【備考】																																																																																																																																							

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-5

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：文化財に関する情報のデータ化が進展しており、用語の典拠情報が求められているため。 独創性：これまでに作成されていない典拠データである。 発展性：本研究の手法は多分野の文化財関連用語の典拠情報整備にも適用できるため。						

2. 定量的評価

観点	抽出用語件数					
判定	A					
判定理由 抽出用語件数：抽出可能なデータを網羅的に集計・抽出した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	典拠情報整備に向けて着実に用語データを収集している。次年度はこれらをもとに体系化を進める。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化財情報の整備のための基盤として期待される典拠情報の整備が順調に進められた。次年度以降はこれらを再検討し、整理・体系化していく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 文化財情報に関する調査研究 (5)ー⑦)		
【事業概要】 当館のウェブサイトや文化財情報システムなど、運用中のコンテンツの問題点の検討やサイボウズなど機構内の共通システムの運用に対する対応や、館内 LAN システムの発展的整備の方向性など、文化財情報に関する諸般の調査研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 赤尾栄慶
【スタッフ】 後藤 真 (学芸部客員研究員)、澁谷完滋 (アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 (1) 文化財情報システムの昨年度更新後の運用上の問題点を検討し、システムの改良を随時行った。 (2) 特別観覧業務のデジタル化に伴い、システムの整備を継続して実施した。 (3) 写真撮影のデジタル化及び写真原板のデジタル化開始に伴い、大容量ストレージの整備を開始した。 (4) ウェブサイトのコンテンツを随時見直し、情報を更新した。 (5) 新平常展示館へのサーバ室移転に伴い、文化財情報データ等のバックアップ機能改善を行った。			
【年度実績概要】 (1) 各月ごとに現時点での情報システムの運用面における現状調査を行い、その結果について、当館研究員・事務職員・情報システム技術担当と共同で検討会を実施して、システム全体の問題点を抽出。改良を随時行った。 (2) 23年度より開始した特別観覧提供写真のデジタル化に伴う高精細画像の集積システム整備を、継続して実施した。 (3) 本年度より写真撮影のデジタル化及び写真原板のデジタル化を開始した事に伴い、不可逆処理前の RAW データを保管可能な大容量ストレージの整備を開始した。 (4) ・ウェブサイトコンテンツと情報発信についての対応を強化するため、上記検討会にてワーキンググループを編成しウェブサイトコンテンツの検討会を集中的に実施した。 ・ウェブサイトにおける公開情報の充実に向けた取り組みとして、重要文化財高精細画像・公開収蔵品各データベースの更新、研究紀要『学叢』バックナンバーPDF版の拡充、館外貸出作品一覧の更新、展覧会混雑情報の更新など、コンテンツ充実に向けての検討を行った。 (5) 新平常展示館地下2階へのサーバ室移転に伴い、文化財情報や高精細画像を含む各種データの地上階バックアップ等、災害時の文化財情報データ保全性向上に関わる機能改善を行った。			
【実績値】 ・システムの現状調査 11回 ・システム検討会 11回 ・ウェブサイトコンテンツの検討 8回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4572-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：機材の更新を含む検討会を定期的を実施できたため。 独創性：コンテンツの豊富さ（収蔵品データベースなど）による。 発展性：更に魅力的なウェブサイト構築できたため。 効率性：研究業務や特別観覧業務の円滑化による。 継続性：ウェブサイトの充実や機器の更新を行った。 正確性：検討会の実施と正しい情報の提供を行った。						

2. 定量的評価

観点	システム現状調査	システム検討会	ウェブサイトコンテンツの検討			
判定	A	A	A			
判定理由 システム現状調査：特別観覧業務における写真複製提供の全面デジタル化を継続し、高精細画像の集積システムへの追加を鋭意進め、写真撮影のデジタル化及び写真原板のデジタル化を開始し、併せて保管用ストレージの整備も開始した。 システム検討会：システムとウェブサイトコンテンツの検討を随時行い、定期的な検討会を実施した（計11回）。 ウェブサイトコンテンツの検討：ウェブサイトにおける重要文化財高精細画像・公開収蔵品各データベースの拡充、研究紀要『学叢』バックナンバーPDF版の拡充、館外貸出作品一覧の追加、展覧会混雑情報の追加、メールマガジンの配信などの充実を図った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財情報システムなど各種システムの改修・情報更新を続け、ウェブサイトも質・量ともにさらなる充実を図った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	予算をフルに活用し、緊急性の高い事項から順次検討を行い、改良を加えている。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4572-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 博物館教育に関する調査研究 (5)ー⑦)		
【事業概要】 展覧会内容及び展示作品への理解を深めるための事業として、鑑賞ガイド等の配布物の発行や、子ども向け鑑賞ツアーを実施する。また、歴史及び文化財への理解促進を図る事業として、文化財の高精細複製を用いた訪問授業を実施する。さらに、これらの教育普及活動に関連して調査研究を行い、その成果を公表する。			
【担当部課】	学芸部教育室	【プロジェクト責任者】	教育室長 山川暁
【スタッフ】 水谷亜希 (教育室 研究員)			
【主な成果】 「大出雲展」、「宸翰 天皇の書」展、「国宝 十二天像と密教法会の世界」展において、鑑賞ガイド等を作成・配布し、「大出雲展」会期中には、子どもむけの鑑賞ツアー「少年少女博物館くらぶ」を実施した。また、京都市内の小中学校において訪問授業を実施し、その準備のために、講師を務める文化財ソムリエに対してスクーリングを行った。さらに、訪問授業に関して『博物館研究』に論文を執筆した。			
【年度実績概要】 鑑賞ガイド等の作成・配布 ・特別展覧会「大出雲展」こども向けワークシート 70,000 部 ・特別展覧会「宸翰 天皇の書」鑑賞ガイド 20,000 部 ・特別展覧会「国宝 十二天像と密教法会の世界」鑑賞ガイド 20,000 部 ・博物館 Dictionary No.169「弘法大師像 (秘鍵大師像)」(執筆：美術室研究員 大原嘉豊) 5,000 部 子ども向け鑑賞ツアーの実施 ・少年少女博物館くらぶ「出雲のヒミツ！」2 回 (参加者：小中学生 52 名、保護者 33 名) 訪問授業 ・訪問授業の講師を務める文化財ソムリエ (大学生ボランティア 16 名) に向けたスクーリングの実施 (20 回) ・京都市内の小中学校における訪問授業の実施 (7 校、対象児童・生徒 613 名) ・白鶴美術館の学芸員、海原靖子氏による訪問授業 (2 回) の見学・意見交換 ・三井記念美術館の教育普及員、亀井愛氏による訪問授業 (1 回) の見学・意見交換 ・安祥寺中学校の教諭、松村一樹氏による美術の授業 (1 回) の見学・意見交換 ・論文の執筆 (「文化財ソムリエによる「文化財に親しむ授業」について—京都国立博物館の教育普及活動—」『博物館研究』第 48 巻 第 3 号、日本博物館協会、平成 25 年 3 月)			
【実績値】 ・鑑賞ガイド等の発行 4 回 (計 11,500 部) ・子ども向け鑑賞ツアー 2 回 (小中学生 52 名、保護者 33 名) ・スクーリング 20 回 (対象大学生 16 名) ・訪問授業 7 回 (対象生徒 613 名) ・論文の執筆 1 本			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：鑑賞ガイド等の配布物は、展覧会ごとの客層に応じた内容で作成し、アンケートでも好評を得た。訪問授業は、学習指導要領の改訂に伴う学校側の要望の高まりに合致したものであり、多くの申し込みがあった。 独創性：展示に関連する館内での活動に加え、館外での訪問授業を行ったこと、また、その講師を大学生ボランティアが務めた点に独創性がある。 発展性：例年の活動を踏まえて内容を検討・改善し、一部の事業については実施回数を増やすことができたため。 効率性：限られた人員（事務職員も含め教育室3名）の中で、最大限の活動を行うことができたため。 継続性：以前から継続して行っている事業であり、次年度の活動に向けてのノウハウを蓄積することができたため。 正確性：活動にあたっては、それぞれの分野の担当研究員と協議し、正確な内容を伝えるようつとめたため。						

2. 定量的評価

観点	鑑賞ガイド等の発行	子ども向け鑑賞ツアー	スクーリング	訪問授業	論文の執筆	
判定	S	A	A	A	A	
判定理由 鑑賞ガイド等の発行：当初の目標2回に対し、専門的な展示内容の理解促進を目的として、最終的に4回（計11,500部）発行した。 子ども向け鑑賞ツアー：目標の2回を達成し、昨年を若干上回る参加者（小中学生52名、保護者33名）があった。 スクーリング：訪問授業の実施のために、十分な回数のスクーリングを行うことができた。 訪問授業：準備期間を考慮した上で、実現可能な最大の実施回数（7回）を達成できた。 論文の執筆：日本博物館協会が発行する『博物館研究』に論文1本を執筆し、広く活動を紹介することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展示に関わる館内での活動と、歴史・文化財に関わる館外での活動の両面から、現在の人員で実施できる最大限の教育普及活動を行うことができた。また、活動についての調査研究を行い、その成果を論文の形で公表することができた。アンケート等で得た参加者の意見も好評であったため、次年度も継続して活動を行う。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	教育室は本年度発足し、企画室、連携協力室から引き継いだ教育普及事業を行った。前年度までの活動を踏まえたうえで、内容を検討・改善し、一部の事業の実施回数を増やしたことで、質・量ともに充実した活動を行うことができた。今年度の活動で蓄積したノウハウを生かし、次年度の事業を実施する。

業務実績書

中期計画の項目	4文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究を行い、その成果を児童・生徒を対象として行う「世界遺産学習」等に反映させる。(⑤-⑦)
【事業概要】 奈良を中心とした寺社の歴史や伝統行事に関する情報を集め、「世界遺産学習」をはじめとする教育プログラムに反映させられるか検討を行い、重要度の高い情報、適切な内容を発信する仕組みを考える。	
【担当部課】	学芸部教育室
【プロジェクト責任者】	室長 岩井共二
【スタッフ】 西山厚（学芸部長）、斎木涼子（教育室員）	
【主な成果】 奈良の歴史と伝統文化に関する情報を、まずは本年度開催した展覧会の中から抽出することとした。その情報を職員やボランティアが共有する機会を設け、児童・生徒が歴史への関心を高めるのに使える情報は何かを検討した。ボランティアへの指導と話し合いを通して、世界遺産学習の実践の場での「語りかけ」の精度を高めることに努めた。	
【年度実績概要】 当館で開催した特別展や特別陳列、正倉院展の中には奈良の歴史と伝統文化を反映した作品や情報が多く含まれている。「御遠忌 800年記念特別展 解脱上人貞慶～鎌倉時代の本流～」及び「頼朝と重源 東大寺再興を支えた鎌倉と奈良の絆」の両展覧会は、鎌倉時代という歴史的な背景と美術との関係を読み解いていくという点で、子供から大人に至るまで多くの人が楽しめる情報が抽出できることが認識された。その一部は公開講座やサウンズトークなどによって各研究員から情報発信されているが、さらに子供に向けてどのような語り方があるか、検討を行っている。また、世界遺産学習で直接生徒に向き合うのは解説ボランティアであるため、ボランティアに対しても研修の機会などを通して、要点を解説し、共有化を図ると同時に、子供たちに伝えるべき情報は何かを個々にも考えてもらうこととした。これらは未だ試行段階にありマニュアル化されてはいないが、世界遺産学習の実地現場において生徒たちへの語りかけの内容が広がっているとの実感がある。向後も方法的な検討を行い、短時間の中で伝える情報の質的向上がはかれるとの見通しを得ることができた。 また、これと併行して、当館学芸部の職員が個別の情報発信源として学校に趣き、「伝えること」の尊さを講義する機会も設けている。	
京都の中学で出前授業 奈良博研究員 2年生130人 宝物の美に感動  清水さん（京都市伏見区） 鑑臨環の魅力を感じる 奈良市の奈良国立博物館校で4日読売新聞社の正倉院展一開巻の「第4回 倉庫展示開演」が行われた。同博物館の主研究員清水健さん39歳が、2年生約130人に正倉院の巡りや宝物の魅力を語り、ぜひ博物館で実物を見てほしいと呼びかけた。 昨年初めて正倉院展を開催したという高橋佑希くん（14）は「ほのかの宝物なのですね、色きれいに残っていて感動です。今年もかけるのを楽しみです」と話していた。	
当館学芸部職員による出張講義を掲載した新聞記事	
【実績値】 「世界遺産学習」に来校した小学校 35校 出張講義に赴いた回数 3回	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4573-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：博物館が基点となった「世界遺産学習」とは何かを追求する好事業となった。 独創性：展覧会情報を生かした「語りかけ」を検討することで、他の観光案内にはない博物館のオリジナリティをもたせることができた。 発展性：「世界遺産学習」活動の充実により、ボランティアガイドの育成・充実にも貢献し、来館者向けの開設サービスの向上にもつながっているため。 効率性：職員・ボランティアで共有された情報を繰り返し利用して生徒に語ることができ、効率的であり、かつ反復により精度を高めることにもつながった。 継続性：「世界遺産学習」は継続的に行っているため。						

2. 定量的評価

観点	「世界遺産学習」 に来校した小学校数	出張講義 に赴いた回数				
判定	A	A				
判定理由 「世界遺産学習」に来校した小学校数：「世界遺産学習」に来校した小学校数が35校に達した。（目標値：20～30校） 出張講義に赴いた回数：出張講義に赴いた回数が3回に達した。（目標値：2～3回）						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	職員とボランティアの間で情報を検討する時間が多くとれれば、「世界遺産学習」のみならず一般来館者への解説サービスの向上にもつながるものと考えます。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	「世界遺産学習」は歴史・伝統文化の宝庫、奈良にある博物館が担うべき重要な事業である。向後の継続性のみならず発展性をもふまえて、さらに情報の蓄積と方法論の先鋭化をはかっていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究を行い、その成果をデジタル画像の作成・各種データベースの構築（収蔵品・画像・図書）・各種情報資源の公開推進に反映させる。（学術研究助成基金助成金）（(5)－(7)）
【事業概要】 当館が活動範囲とする仏教にかかわる歴史と美術について、展覧会や調査研究事業と連動した情報収集を行い、そこにデジタル技術を適切に取り入れることにより、データの継続的な作成・データベースの構築・情報資源の公開ならびに共有へと展開させる。その際には実践に即した方法論を鍛え、文化財の保存活用に資するアーカイブズの形成・発展にも寄与することを目指す。	
【担当部課】	学芸部資料室
【プロジェクト責任者】	室長 宮崎幹子
【スタッフ】 岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、清水健(主任研究員)、岩戸晶子(列品室員)、斎木涼子(教育室員)、北澤菜月(情報サービス室員)、山口隆介(美術室員)、永井洋之(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)	
【主な成果】 一昨年度から開始したデジタル撮影の本格的な稼働をうけ、その安定的な継続を目指して、撮影機材、環境、ストレージ、体制等の整備を引き続き行い、多数の文化財を撮影した。館内の情報システム・公開用データベースのリプレイス、データ更新を適宜行い、情報資源の拡充と公開に積極的に取り組んだ。仏教美術資料研究センターにおいても、施設整備と情報資源の一般への普及に努めた。上記実践と並行して、文化財アーカイブズに関する研究を進めた。	
【年度実績概要】 - デジタル撮影 本年度の特筆すべき実績としては、特別展「頼朝と重源」の開催と連動して、東大寺鎌倉再興期にかかわる彫刻を中心とする重要作品の撮影を多数行ったことがあげられる。展覧会に先立つ調査及び出陳という貴重な機会を捉え、これまで内外で未整備であった画像データを多数作成・蓄積することが叶い、文化財の調査研究に資することができた。また、館蔵品・寄託品の新規撮影も継続して行い、その成果の一部を『なら仏像館 名品図録』（改訂版）、ポストカードとして公表した。 - 収蔵品情報システムのリプレイス 館内で運用している収蔵品情報システムのリプレイスを行い、あわせて館蔵品・寄託品にかかわる情報の総点検を実施した。このシステムは学芸部での文化財の管理に活用されるものであるが、インターネットで公開する収蔵品データベースの元となる情報も管理している。内部での蓄積が外部への情報公開の拡充に効果的に反映される方向を目指して、引き続き検討を重ねている。 「美術院彫刻等修理記録」の整理とデータベースの構築 当館で保管する「美術院彫刻等修理記録」については、従来から整理とデータ作成を進めてきたが、本年度はデータベースを構築し、学芸部内で情報を閲覧できる環境を整備した。また、彫刻部門の研究員の協力を得て、撮影対象が不明であったガラス乾板について同定作業を行い、多数の名称及び所蔵者を明らかにすることが出来た。 - 研究成果発表 上記の実践を通して、文化財アーカイブズのあり方とその発展について様々な角度から考究を重ねると同時に、アーカイブズ形成にかかわる内外の事例や理論についても研究を継続した。その成果の一部として『アート・ドキュメンテーション通信』において当館のアーカイブズ事業について発表した。また、情報公開施設としての仏教美術センターについては近年外部の関心が高まっており、情報科学技術協会主催見学会等において、専門家に対して当館の施設と事業に関する研修を行った。	
【実績値】 画像撮影件数：4,944 件 データ登録件数（画像データベースへの個別データ登録）：13,402 件（そのうち公開 4,326 件） （参考値） （写真フィルムスキャニング）：4,924 件	
【備考】	



収蔵品のデジタル撮影風景

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	独創性	継続性	発展性	適時性	効率性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 独創性：当館の展覧会事業や調査研究と密接に関連させることにより、重要な文化財の撮影ならびに情報収集を重点的におこない、稀少かつ学術的価値の高い文化財アーカイブズの形成へと繋げた。 継続性：画像データの作成数及びデータベースへの登録件数を順調に増加させ、公開に結び付けた。 発展性：本事業は、南都を中心とした貴重な文化財の新発見とも連動し、画像データが文化財指定調査等の基礎資料となるなど、研究の進展にも大きく貢献した。また、各種データベースの継続的な運用を行うとともに、新たなデータベース構築にも積極的に取り組むなど、文化財アーカイブズの発展の可能性を示すことも叶うなど、大きな成果があった。 適時性：南都を中心とした貴重な文化財の新発見とも連動しており、適切なかたちで新規の記録の蓄積が叶った。 効率性：限られた人員、予算の範囲内において、効率的に撮影ならびに登録件数を増加させた。 正確性：調査により取得された一次的なデータに基づいてアーカイブズの形成を行っており、さらにデータベースの継続的かつ安定的な運用を行うことにより、信頼性の高い情報を公開している。						

2. 定量的評価

観点	画像撮影件数	データ登録件数				
判定	A	A				
判定理由 画像撮影件数：本年度は十分な調査と撮影を実施しており、画像撮影件数は豊富であった。 データ登録件数：撮影後の処理やデータベースへの登録件数については、当館の規模やスタッフ数を勘案しても他機関と比較して遜色のない数をこなしており、順調に増加している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財の調査と撮影は、文化財の保存や所蔵者の意向、物理的・時間的制約など様々な要因が影響するため、過去の平均値との比較から年度の実績を評価することは必ずしも適切ではない。実績概要でも述べたとおり、学術的に重要であり、調査と撮影の機会を得ることが通常では困難な文化財について、調査を実施し、質の高い画像の収集が叶うことの意義は非常に大きい。今後も当館の他の事業と密接に連携した情報収集を続け、仏教美術情報の一大拠点として、コレクションの質と量双方の維持に努める予定である。情報資源の運用にあたっては、デジタル技術を適切に取り入れ、複数のデータベースを運用するなど、文化財アーカイブズ形成の実践を鋭意進めており、更なる発展を視野に入れた調査研究にも引き続き取り組んでいく。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	実績概要でも述べたとおり、デジタル撮影の実施が本格的となり、館内での処理から最終的な情報公開にいたるまでの一連の流れについて、人材及び機材の確保を含めた長期的な展望が今後とも必須である。仏教美術分野では国内唯一と言っていい貴重なコレクションを維持管理しつつ、引き続き内外の研究者や学術出版界の利用に供する体制を整備するとともに、今日的な要請をふまえたシステムの構築、情報公開への対応が急務である。今後も文化財の保存・活用と研究の基盤として機能するべく、アーカイブズの形成を実践していくとともに、それを下支えする理論の構築にも取り組んでいく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1) NHK と協同で高精細画像を活用したシアター4000 での映像公開に向けた研究 ((5)-(7))
【事業概要】 ハイビジョンが 200 万画素であるのに対して、スーパーハイビジョンは 3300 万画素数の情報量を有している。NHK はこれを究極の放送システムと位置付けて、将来の実用放送を視野に入れた研究開発を進めてきた。このスーパーハイビジョンのもつ質感と臨場感に優れたメディアを、文化財の保存と活用に応用するために当館では常設のシアターを設けてコンテンツ制作と一般公開を通じた調査研究を推進する。	
【担当部課】	展示課
【プロジェクト責任者】	課長 赤司善彦
【スタッフ】 三輪嘉六（館長）、臺信祐爾（文化財課長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）	
【主な成果】 撮影事前調査の成果を基に本コンテンツ作成の撮影計画を、所蔵者了解の基に立案した。また、本撮影にむけた撮影レンズやカメラの開発等を行い、その実証実験を実施した。 さらに、映像環境の改善のために、新型プロジェクターの導入を検討し、そのための新旧の比較実験を行った。新型導入によって消費電力は約 1/4、ランプ交換費用等も現在の 1/5 に抑えることができる。実験の結果、改善すべき点を明らかにすることができた。	
【年度実績概要】 ・これまでに当館の展示と深く関わる美術工芸品や遺跡を対象にして番組を制作してきた。今回は、平常展示している「殉教三聖人図」（収蔵品番号 A27）と併せて、五島列島の教会群を取り上げることにしている。そのため、撮影対象教会の所蔵者や管理者さらには、地元の地方公共団体との事前の打合せを行った。 ・当館所蔵の「殉教三聖人図」の撮影を行った。	
	
殉教三聖人図	
【実績値】 ○調査回数 1 回 ・現地調査 1 回（25 年 1 月 9 日～17 日） ○打合せ回数 4 回 ・コンテンツ制作の打合せ 3 回 ・設備改善についての協議 1 回	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4574-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：教会群は、ユネスコ世界文化遺産暫定リストに登録されたところであり、その番組制作の意義は大きい。 独創性：動画ではなく、あくまでも静止画によって臨場感あふれる番組を作ろうとするものである。 発展性：博物館・美術館での新しい映像解説の手法として発展が期待できるため。 効率性：今後、機器を取り替えることで大幅なランニングコストの低減を図る目途がついた。 継続性：NHKでもスーパーハイビジョン放送の早期実現に積極的に取り組むこととなり、当館との連携を協議できた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	打合せ回数				
判定	A	A				
判定理由 調査回数：実際の映像機器を用いて上映実験を行うことで、問題点を明確にできた。 打合せ回数：ロケハンの成果を基に本撮影に向けた十分な打合せを行い、静止画によって五島のクリスチンの歴史的な意味合いを教会建築から探るという意図について共通認識を持つことができた。						

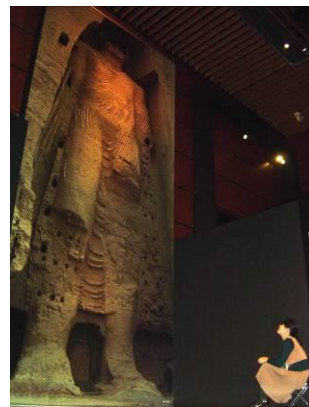
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	教会群の撮影については、信仰の場でもあり難航が予想されたが、関係者との事前打ち合わせを充分に行い、事前の撮影条件を整えることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に沿った内容で実施でき、展示作品を分かりやすく伝える手法として、今後さらにハード面も含めて開発・改良を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 特別展のテーマに則した、解説パネル、冊子、ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムの調査研究（(5)－⑦）		
【事業概要】 特別展ごとに観覧者に展示内容の理解を促進するため、教育普及プログラムを実施する。本年度は、「平山郁夫 シルクロードの軌跡」「美のワンダーランド―十五人の京絵師」「ベルリン国立美術館展」「ボストン美術館展」の4つの特別展において、教育普及プログラムを実施する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	課長 小泉恵英
【スタッフ】 臺信祐爾（文化財課長）、原田あゆみ（文化財課資料管理室主任研究員）、畑靖紀（企画課特別展室主任研究員）、森實久美子（企画課特別展室研究員）、鷲頭桂（企画課特別展室研究員）、山本久美子（企画課研究補佐員）、鮫島由佳（企画課研究補佐員）			
【主な成果】 展覧会出品作品に関連したワークショップ、スタンプラリー、グッズの作成、展示室内への解説パネルの掲出、講演会などを実施した。これらのプログラムによって作品理解が深まった、興味がわいた、といった感想を、アンケートなどを通じて得た。			
【年度実績概要】 ・「平山郁夫 シルクロードの軌跡」展では、平山氏の世界をまたにかけた画業、文化財保護といった多彩な活動を理解させるため、会場内に平山氏の視線を再現した巨大遺跡パネル（平山郁夫の目線）、同氏を知るキーワードパネル、画業のための調査旅行地域を網羅した地図を作成するスタンプラリー（世界を歩いたひらやまいくおさんのあしあと）、日本画家を講師に招いた太宰府天満宮におけるスケッチワークショップを行った。 ・「美のワンダーランド」展では、屏風作りワークショップ、掛け軸の取り扱い講座、独特の光沢を放つ絹織物の「純（ぬめ）」のハンズオン、解説パネルとして京都の絵師の居住分布地図及び相關図などを実施した。 ・「ベルリン美術館展」では、西洋美術のいろはを学習するための解説パネル＜学ベルリン＞を作成し、キリスト教絵画の図像学の基礎や、絵画におけるアトリビュートの意味内容を解説した。 ・「ボストン美術館展」では、ボストン美術館コレクションを形成した岡倉天心、フェノロサ、ビグローに焦点を当て、コレクションの来歴や時代背景などについてパネルで説明した。 ・各展覧会を通じて、連続講演会・記念講演会を複数回実施した。			
			 ＜平山郁夫の目線・バーミヤン大仏＞
【実績値】 解説パネル作成 30枚（平山展5枚、美のワンダーランド10枚、ベルリン展8枚、ボストン展7枚） 冊子及びリーフレット等の配布物の作成 2回（平山展1回、ボストン展1回） 講演会 23回（平山展8回、美のワンダーランド4回、ベルリン展3回、ボストン展8回） ワークショップ 3回（平山展1回、美のワンダーランド1回、ボストン展1回） (参考値) 解説パネル満足度 （平山展89%、美のワンダーランド85%、ベルリン展79%、ボストン展82%）			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4574-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：観覧者が求める作品に関連する情報を適切に提供できた。 独創性：展示室内にさまざまなスペースを大規模に設定するなどして、作品とパネルをメリハリ良く展示した。 発展性：今後の展示にも応用が利く内容であった。 継続性：本年度の実施を踏まえ、次年度も継続して実施していく予定である。						

2. 定量的評価

観点	解説パネル	配布物の作成	講演会	ワークショップ		
判定	A	A	A	A		
判定理由 解説パネル：展覧会毎にその特性を生かしたパネルを作成した。 配布物の作成：主に子供向けに作成し、展覧会の内容理解の助けとなった。 講演会：入門的なものから専門的なものまでバラエティに富んだ講演会を多数実施した。 ワークショップ：子供から大人までが楽しめるような多様なテーマをつくり、好評を博した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展の内容理解を補足するための手段として、多様な展開ができた。観覧者の要望をより適切な形で反映していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、観覧者からの反応も良好である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 学校教育との連携を図りながら、学校貸出キット「きゅうぱっく」の研究・調査 ((5)－⑦)		
【事業概要】 小中学校で完全実施された新学習指導要領の改善の重点に関して、学校貸出キット「きゅうぱっく」の有効な活用方法を検討する。活用にあたっては、教師と交流課職員がチーム・ティーチング形式の授業を考案・実践を行い、モノ（文化財）を通して思考力を高め、言語活動を工夫した歴史授業の展開を考案し、同時に生徒や教師の博物館・文化財に対する興味・感心を高める。また、教員研修を通じて「きゅうぱっく」の利用に関する普及を図る。			
【担当部課】	交流課	【プロジェクト責任者】	教育普及室主任研究員 佐藤茂史
【スタッフ】			
【主な成果】 学校貸出キットを活用した授業展開を教師と博物館職員が一緒に考え実践したことは、生徒の追求意欲を高め、思考力・判断力・表現力を育む場を設定することができ、それを通して言語力を高めることに有効であった。本実践にあたっては、筑紫地区中学校社会科研究会の公開授業として行われ、40 名以上の教師が授業後の研究協議に参加し、多くの意見交換が行われたと同時に、「きゅうぱっく」及び文化財を通じた授業づくりに関して、広く普及ができた。			
【年度実績概要】 ・大野城市立大野東中学校における「きゅうぱっく」を活用した授業に関して、同校主幹教諭平野善浩先生とともに授業案を検討し、新たな活用例を複数考案できた。 ・考案した授業展開に基づき、「きゅうぱっく」を活用した授業実践支援事業として交流課職員とチーム・ティーチング形式で授業を行い、筑紫地区授業研究会の公開授業として公開された。 ・授業後の生徒アンケートの分析では、追求意欲が「大変高い」生徒が 84%、「高い」生徒が 18%であった。また、思考力を高めることに関する「きゅうぱっく」の教材としての有効性について、「大変役に立った」と答えた生徒が 84%、「役に立った」と答えた生徒が 13%であった。以上の結果から、きゅうぱっくが生徒の追求意欲を高め、思考を促し、表現力を高めることに有効であり、新学習指導要領の改善点にも非常に有効な教材となりうると判断できる。 ・実践後の研究協議において、「博物館のモノを通して、比較・分類・類推、その結果に基づく言語活動の場が位置づけられ、主眼達成にきゅうぱっくが非常に有効であった」との意見が出された。 ・本実践を含めた授業実践支援回数は 9 回を数え、また「きゅうぱっく」の活用に関する教員研修の開催も増加した。			
【実績値】 「きゅうぱっく」貸出件数：56 件 博物館職員による授業実践支援回数：9 回（対象生徒数延べ約 509 名） 「きゅうぱっく」の活用に関する教員研修：3 回（参加教員数延べ約 102 名）			
【備考】			



「きゅうぱっく」のキットをもとに、課題に対して考える生徒

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：新学習指導要領では博物館や人材の活用が明記されており、学校貸出キットなど博物館の資源を教材に利用した学習展開の工夫は必要性が高いため。 独創性：「きゅうぱっく」の諸資料について担当教師とともに授業展開を考案・実践したこと、それを社会科研究会で公開・研究協議をしたことなど新たな取り組みであった。 発展性：「きゅうぱっく」活用に関する研修会の依頼が増加している。また各地区の授業研究会で「きゅうぱっく」を活用した公開授業が行われており、さらによりよい活用法の開発が期待されるため。 効率性：学校連携担当の職員の配置により、活用や授業展開に関する教師との打ち合わせや資料の要望に応えやすい体制がとれた。 継続性：次年度文化交流展示Ⅳテーマに対応した資料を新規「きゅうぱっく」として貸出を開始する予定であり、さらなる活用や授業実践が期待されるため。 正確性：授業においては、三次元プリンタで出力したものや文化交流展示室のハンズオン資料と関連するものが活用され、資料の有する情報の正確性は非常に高いため。						

2. 定量的評価

観点	きゅうぱっく貸出件数	授業実践支援回数	きゅうぱっく活用教員研修			
判定	B	A	A			
判定理由 きゅうぱっく貸出件数：貸出件数は前年度比約63%（平成23年度は貸出件数85件）であったが、22年度以前の実績（平均約50件前後）と比較した場合、ほぼ同数であった。県外からの貸出依頼は増えており、貸出実績に関しては、ほぼ計画通り実施できた。 授業実践支援回数：授業実践支援回数は前年度と同数であった（平成23年度は9回）。前年度依頼された学校から同じ教科・単元での依頼もあり、目標を達成できた。 きゅうぱっく活用に関する教員研修：きゅうぱっく活用に関する教員研修の依頼は、前年度より増加しており、目標を達成できた。（平成23年度は1回）。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	「きゅうぱっく」の貸出は順調であり、「きゅうぱっく」に関する授業実践や研修会の回数も順調に伸びてきている。よって、「きゅうぱっく」が新学習指導要領のもとでも、有効な教材としての価値を有していると考えられる。今後は活用事例を整理して公開し、教師の利用に供する手法も考えられる。次年度は文化交流展示第Ⅳテーマに対応する資料をパッキングし、学校への貸出を予定している。また、第Ⅴテーマに係わるシリーズの構築へ向けて、更なる資料の調査と選定が必要である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	「きゅうぱっく」を活用した学校教育との連携は着実に進展している。授業支援のためのツールとしてだけでなく、新学習指導要領に対応し、生徒の思考力を高め言語活動を充実させることに大いに有効である。また、館内での観覧支援のための活用も定着してきており、さらなる連携の可能性も広がっている。「きゅうぱっく」の構成資料と関係する体験型展示室「あじっば」の体験用資料には、授業支援に有効な資料が多数あり、今後これらについて調査研究と活用を推進することで、一層学校教育との連携は強化されると思われる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4)平成27年度に迎える開館10周年における一定程度のリニューアルを見据えた、現在の展示施設、展示環境や展示方法の課題や展望についての検討（(5)－⑦）		
【事業概要】 平成27年には開館10周年を迎えることから、文化交流展示室のリニューアルを念頭におき、現在の展示全般に関するさまざまな課題に対して、展示に関係する全研究員による討論や、外部委員会による意見の聴取あるいは、展示業者等との討議により、新しい展望を開こうとする取り組みである。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	課長 赤司善彦
【スタッフ】 三輪嘉六（館長）、森田稔（副館長）、谷豊信（学芸部長）、本田光子（学芸部特任研究員）、臺信祐爾（文化財課長）、小泉恵英（企画課長）、今津節生（博物館科学課長）、藤田励夫（博物館科学課保存修復室長）、秋山純子（博物館科学課アソシエイトフェロー）、志賀智史（博物館科学課保存修復室主任研究員）、渡部史之（博物館科学課アソシエイトフェロー）、河野一隆（企画課文化交流展示室長）、池内一誠（展示課情報サービス室主任研究員）、上野知彦（交流課ボランティア室主任研究員）、楠井隆志（展示課展示調整室主任研究員）、鳥越俊行（文化財課資料登録室主任研究員）、畑靖紀（企画課特別展示室主任研究員）、川畑憲子（企画課文化交流展示室主任研究員）、森實久美子（企画課特別展示室主任研究員）、鷲頭桂（企画課特別展示室主任研究員）、進村真之（交流課教育普及室主任研究員）、酒井芳司（展示課展示調整室主任研究員）、遠藤啓介（展示課展示調整室主任研究員）、坂元雄紀（展示課情報サービス室主任研究員）、丸山猶計（文化財課資料登録室主任研究員）、原田あゆみ（文化財課資料管理室主任研究員）、望月規史（文化財課アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 (1) 研究員全員参加による検討会を行い、各課題の解決や必要な展示についての共通理解を得ることができた。 (2) 外部委員会「次の10年を考える懇話会」を開催し、識者や市民代表による率直な意見をうかがうことができた。 (3) 当館の展示工事を担当した展示業者と、開館後の展示環境の課題について、つくる立場と使う立場での相互の意見交換を行うことができた。			
【年度実績概要】 (1) 平成23年度より実施。毎月1回、閉館後の40分程度、文化交流展示室を会場に全研究員と非常勤職員が参加する検討会を実施。各回、数名が持ち回りでそれぞれ専門分野や担当テーマの立場からこれまでの取り組みや課題などについて発表。展示テーマの位置付け、動線、中央エリアの問題点洗い出しなど、活発な意見交換を重ね、共通認識を深める格好の機会となった。 (2) 本年度より立ち上げた新規事業。文化交流展示だけでなく、国際交流、ボランティア活動、地域との連携、広報・サービス面に関するさまざまな意見・要望が外部委員から寄せられた。 (3) 当館の展示工事を担当した展示施工業者を交えて文化交流展示室の諸課題改善に向けた検討会を実施。動線及び中央エリアの改修案について、展示ケース及び造作を移設した場合の課題整理・工程について、LED照明機器についての報告を聞き、活発な意見交換を行った。			
【実績値】 (1) 館員による展示検討会 8回 (2) 外部委員による次の10年を考える懇話会 4回 (3) 展示業者との懇話会 1回			
【備考】			



「次の10年を考える懇話会」での会議風景

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4574-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：3年後には開館10周年を迎える。それにむけて課題の洗い出しを着実に進めることができた。 独創性：館内関係者だけでなく、外部の様々な視点を取り入れ、新たな活動の展開につなげようと試みているため。 発展性：外部委員による懇話会の立ち上げ、展示施工業者との共同研究の実施など、多岐にわたる実績を積み重ねることができた。 効率性：展示検討会は毎月の学芸定例会議開催日に定例化し、定着した。そのため、関係者の出席率も高いため。 継続性：館員による展示検討会は、平成23年度に引き続き定例的に検討を進めており、館員の共通認識を深めることにつながっているため。						

2. 定量的評価

観点	検討会実施回数	外部委員による懇話会開催	展示業者との懇話会			
判定	A	A	A			
判定理由 検討会実施回数：検討会がほぼ毎月定例化されることで館員に定着。リニューアルにむけての共通認識を得ることにつながっている。 外部委員による懇話会開催：ほぼ3ヵ月ごとに開催され、外部視点からの多岐にわたる意見を聞くことができた。 展示業者との懇話会：計画通り実施できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	全研究員による検討会の定例化、外部委員会の立ち上げ、あるいは展示業者等との討議実施をとおして、10周年リニューアルに対するある一定の方向性を見出すとともに、館員の共通認識を得ることにつながっている。3年後とはいえ着実な検討を進めていると評価できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	展示に係る全研究員による討論や、外部委員会による意見の聴取、あるいは展示業者等との討議により、10周年リニューアルに対するある一定の方向性を見出すとともに、館員の共通認識を得ることにつながっている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 高等学校所蔵考古資料の調査研究((5)－⑦)		
【事業概要】 日本の各地の高等学校には、あらゆる考古資料が保管されていることは一般にはあまり知られていないが、これは世界的にみても珍しく、特筆すべき現象である。収蔵資料の多くは、教員や地元有志からの寄贈、構内遺跡出土品、歴史系クラブ活動の調査資料品などである。いずれも高校がその地域において知の集積地として機能していたことを示しており、収蔵資料の実態把握は、近現代における社会史あるいは教育史的意義を有するものである。しかしながら、学校によっては管理者が不在であったり、知識不足から活用がなされなかったりと、文化財の活用という面において各種の問題を含んでいる。本研究では、高等学校が所蔵する考古資料について全国的な調査を実施して、保管実態を精査するとともに、26 年度には関連する展示会を実施し、文化財保護の普及をはかり、かつ次代を担う高校生たちの考古学に対する興味を存分に感化することを企図するものである。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 市元 暁
【スタッフ】 河野一隆（企画課文化交流展室長）、志賀智史（博物館科学課保存修復室主任研究員）			
【主な成果】 福島、栃木、東京、神奈川、大阪の高等学校所蔵資料の調査を実施して、収蔵状況における実態をつぶさに把握することができた。また兵庫県では博物館連携を進めている学校教員にヒアリングを行い、今後の指針とした。さらに高等学校の歴史系クラブが発行した機関誌の収集に努め、これらによって特に戦後20年内外の活動実態について大要を把握した。			
【年度実績概要】 24 年 8 月に 3 カ年の調査計画案を策定し、24 年 10 月から実地調査に着手した。 24 年 10 月 4 日には兵庫県立明石北高等学校の地歴科教諭を訪ね、学校教育に於ける考古資料の活動実態についてヒアリングを行った。同日、大阪府立泉大津高等学校にて、同校地歴部がかつて調査した考古資料を調査するとともに、現在の活用状況や保管状況の実態調査を実施した。 24 年 11 月 15 日には東京都立五日市高等学校並びにあきる野市資料館を訪ね、同校構内遺跡出土の縄文時代資料の調査を実施した。翌日には神奈川県藤沢学園鶴沼高等学校を訪ね、同校がかつて調査した考古資料を調査するとともに、現在の活用状況や保管状況の実態調査を実施した。また藤沢市図書館にて発掘当時の新聞記事などを収集した。 24 年 11 月 26 日には福島県立磐城高等学校にて、同校歴史部がかつて調査した古墳出土資料を調査するとともに、現在の活用状況や保管状況の実態調査を実施した。翌日には栃木県立栃木高等学校にて、旧制中学校時代に同校に寄贈された考古資料を調査すると共に、現在の活用状況や保管状況の実態調査を実施した。 - 各校調査と並行して、九州国立博物館所蔵の麻生優寄贈図書及び文化庁寄贈図書をもとに、高等学校が発行した歴史系クラブ機関誌の収集と分析に着手した。 - 研究をさらに計画的に推進すべく、河野一隆を研究代表者として、科学研究費を申請した。			
【実績値】 収集資料数：目標 20 点・実績 20 点 収集図書数：目標 40 点・実績 50 点			
【備考】			



栃木県立栃木高等学校が旧制中学校時代に寄贈された古墳時代の木棺。ひずみや割れを生じているものの、棺身の全容が判明する稀有な事例である。

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4574-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	A	A	A
判定理由 適時性：高校所蔵資料はつねに散逸や毀損の危機にあるため、本研究は緊急性がきわめて高いため。 独創性：学校外で活用される機会がきわめて少ない高校所蔵資料に着目した独創的な研究であるため。 発展性：研究成果を学校現場や地域社会に還元できる。また昭和史の新たな側面を浮彫にすることができた。 効率性：調査対象校はすでに絞り込みつつあるので、無駄なく調査が実施できた。 継続性：計画的に調査を進めているため。 正確性：各府県自治体の協力により、正確な調査を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	収集資料数	収集図書数				
判定	A	A				
判定理由 資料収集数：考古学上の重要資料を収集し得た。また目標値を達成した。 収集図書数：学史上重要な図書を収集し得た。また目標値を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初目標を達成し、あわせて26年度トピック展示開催の見通しを立てた。次年度も継続して調査を進める。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り調査研究を実施できている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6) 平山郁夫が関与した文化財保護活動に関する調査研究((5)－⑦)
【事業概要】 日本画家で文化勲章受章者の平山郁夫(1930-2009年)の生涯を、その画業、作画及び研究資料用に夫人とともに蒐集した美術品コレクションと、ユーラシア各地で実施した取材の過程で目の当たりにした危機に瀕した文化遺産の文化財保護活動を通して調査研究するとともに、その成果を特別展の形で広く一般に公開する。	
【担当部課】	学芸部文化財課
【プロジェクト責任者】	課長 臺信祐爾
【スタッフ】 小泉恵英(企画課長)、原田あゆみ(文化財課資料管理室主任研究員)、森實久美子(企画課特別展室研究員)	
【主な成果】 画家の初期を代表する仏伝シリーズのうち、本画「受胎霊夢」「入涅槃幻想」に関する調査研究、30代後半から参加したキリスト教教会堂壁画模写及び法隆寺金堂壁画と高松塚古墳壁画模写に関する調査研究、敦煌莫高窟・アンコールワット・バーミヤーン大石仏を中心とする文化財保護活動に関する調査研究を行い、その意義を考察するとともに、特別展として広く一般に公開した。	
【年度実績概要】 調査結果については、以下のとおりである。 - 平山郁夫の画業について 東京美術学校入学から62年間の画業を分析した。卒業後、副手として大学に残り前田青邨教授の指導を受けた平山は、生まれ故郷の生口島の人々や風景を叙情的に描き評価された。その後、原爆後遺症に苦しみ、新たな芸術上の展開に悩んでいた平山は、「仏教伝来」を描き、新境地を開くとともに、体調が回復した。以後、玄奘三蔵の足跡を辿る旅と、シルクロードをめぐる旅から得られた風景描写がそのテーマとなった。厳しい気候・自然条件の海外調査から帰る度に、湿潤な気候の日本の風土にさらにひかれることとなった。被爆体験をもとに、世界平和を望む気持ちが溢れている。 - 平山郁夫の文化財保護活動 仏教伝来の道とシルクロードへの取材活動を通じて、各地の文化遺産が崩壊の危機に瀕していることを切実に感じた平山は、これらを人類共通の遺産として次世代へ引き渡す責任を自覚し、二カ国間協力の形になるまで、私財を投げ打ってでも尽力した。中でも本プロジェクトでは、敦煌莫高窟、アンコールワット、バーミヤーン大石仏について、基礎的な調査研究を実施した。	
	
菩薩半跏思惟像・ 平山夫妻コレクション	
【実績値】 調査回数：20回 収集資料数：109点 論文掲載数：2本 「平山郁夫 シルクロードの軌跡 ―文化財にかけた画家の生涯―」(『平山郁夫 シルクロードの軌跡』図録) 「九州国立博物館 特別展『平山郁夫 シルクロードの軌跡』」(『電気と九州』2012年4月号) 報告書・図録等：1冊 特別展図録「平山郁夫 シルクロードの軌跡」 展覧回数：1回 特別展「平山郁夫 シルクロードの軌跡」(24年4月3日～5月27日 (49日間))	
【備考】 - 画業の流れ、コレクション及び文化遺産保護活動について、記者発表資料を準備した。 - 展覧会の広報ツールとして、YouTubeを利用した展覧会紹介のための映像プログラム2本を製作した。 - 展覧会の内容について、民放ラジオインタビューを通じて広報した。 - 平山郁夫の画業と生涯を紹介するNHK制作特別番組制作に関与した。 - 会場で放映した展覧会紹介番組構成に関与した。	

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：東京国立博物館が前年に開催した「平山郁夫展」によって平山郁夫の関心興味が高まっていた。 独創性：初期から晩年に至る画業、美術コレクション、文化財保護活動からその生涯を際立たせた。 発展性：人類共通の文化遺産を保護する意義について広報でき、一般の興味をかき立てた。 効率性：各方面の協力を得て、準備期間1年強で特別展に結実させられた。 継続性：今後も平山郁夫が道筋をつけた国際貢献の経過について基礎的データを集積する必要がある。 正確性：平山郁夫シルクロード美術館・平山美郁夫美術館から正確なデータの提供を受けた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	論文掲載数	報告書・図録等	展覧会数	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 調査回数：必要な調査が実施できた。 収集資料数：計画通り実施できた。 論文掲載数：目標を達成できた。 報告書・図録等：目標を達成できた。 展覧会数：目標を達成できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本プロジェクトにより、平山郁夫にとって初期の壁画模写体験が、重要なものであることが明確となった。また、研究成果を展示・講演会などを通じて適切に発信できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り調査が実施され、当初の目標を達成することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7) ヨーロッパ美術にみる文化交流に関する調査研究((5)－⑦)
【事業概要】 1400年代から1800年代に至る約400年間にみられる、二つの美術的な中心としてのイタリア美術とアルプスの北に広がる北方（現在のドイツ、ベルギー、オランダなどを含む地域）で発達した北方美術の相互影響関係について調査研究する。	
【担当部課】	学芸部文化財課
【プロジェクト責任者】	課長 臺信祐爾
【スタッフ】	
【主な成果】 15世紀～18世紀末における、ヨーロッパ美術の流れを、イタリアルネサンス、北方ルネサンス、マニエリスム、バロック、ロココ様式の変遷の中で、各国の絵画と彫刻作品、ならびにイタリアルネサンスを中心とする素描作品を位置づける作業を行い、その成果を各章はじめの説明パネル、作品の制作地を示す地図、世界史上の出来事を略記した年表として掲出し、来館者に分かりやすく提示した。	
【年度実績概要】 - 現在のドイツ・ベルギー・オランダなどを含むアルプス山脈北方の美術は、15世紀に始まるイタリアルネサンスの影響を受けて発達し、16世紀になって北方ルネサンスと呼ばれる黄金期を迎えた。北方では、宗教改革及びその後の社会的混乱を受けたため、美術的には沈滞傾向が見られたが、大航海時代以後海洋国家として大躍進を遂げた17世紀オランダにおいて進展がみられた。新教徒国家における宗教美術の否定にともない、具体的には風景画、肖像画、静物画、風俗画といったジャンルにおいてオランダ絵画が他の国々に大きな影響を与えた。フェルメール筆「真珠の首飾りの少女」に描かれた、17世紀中国製蓋付壺が、アジアとヨーロッパがすでに密接な関係にあったことを具体的に示すものであることを指摘した。 - フランス18世紀ルイ15世紀治下において一世を風靡した、若い貴族の男女が遊ぶ風景などを柔らかな色彩で描くロココ様式にあって、厳密な構図と落ち着いた色彩で静物画を描いたシャルダンの作品を紹介することで、ロココ時代の美術の幅の広さを示すことができた。	
 各章解説パネルイメージ	
【実績値】 収集資料点数：108点 論文等掲載数：1件 「九州国立博物館 特別展 ベルリン国立美術館展 ー学べるヨーロッパ美術の400年ー」(文化庁月報 No.528) 報告書・図録等：1冊 特別展図録『ベルリン美術館ー学べるヨーロッパ美術の400年ー』 展覧会数：1回 「ベルリン国立美術館展 ー学べるヨーロッパ美術の400年ー」(24年10月9日～12月2日(51日間))	
【備考】 400年間のヨーロッパ美術の流れについて、主要な作品を取り上げつつ、解説を加えた記者発表用資料を準備した。 - 展覧会の広報用ツールとして、YouTubeを利用した展覧会紹介のための映像プログラム1本を制作した。 - 展覧会の内容について、民放テレビラジオインタビューを通じて広報した。	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4574-7

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：ヨーロッパ内における文化交流のありさま、及びアジアとの関係を指摘できた。 独創性：イタリアと北方美術との相関関係に注目した。 発展性：イタリア、ドイツ、オランダ、フランスなど、相互に影響関係がみられたため。 効率性：ベルリン国立美術館の協力により、円滑に展示を行うことができた。 正確性：ドイツ国立美術館群及び国立西洋美術館の全面的な協力を得たため。						

2. 定量的評価

観点	収集資料点数	論文等掲載数	報告書・図録等	展覧回数		
判定	A	A	A	A		
判定理由 収集資料点数：計画通り実施できた。 論文等掲載数：目標を達成できた。 報告書・図録等：目標を達成できた。 展覧会数：計画通り実施できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究を計画通りに実施することができ、展覧会にその成果を反映させることができた。また、年表とともに地図を使用した各章の解説パネルを作製したため、来館者に展示の趣旨が適切に伝達された。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り調査が実施され、当初の目標を達成することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	8) 芦屋釜の制作と復元に関する調査研究((5)－⑦)
【事業概要】 中世に筑前国芦屋津（現：福岡県芦屋町の遠賀川河口付近）で制作されていた芦屋釜（あしやがま）の制作技法と現在の復元状況を検討する。また、実際復元に携わる職人に聞き取りを行うとともに、芦屋釜やその復元品についてCTスキャンを実施し、更に蛍光X線分析によって得られた知見も踏まえながら、芦屋釜の展示・紹介及び教育普及活動を行う。	
【担当部課】	学芸部文化財課
【プロジェクト責任者】	アソシエイトフェロー 望月規史
【スタッフ】 遠藤啓介（展示課展示調整室研究員）	
【主な成果】 本年度の調査研究により明らかとなった諸点は、平成24年度トピック展示「茶の湯をたのしむⅤ：芦屋釜と館蔵茶道具」のなかで芦屋釜の特集を組み、分かりやすく紹介することができた。また、芦屋釜の魅力を伝える企画を芦屋町と共同で立案し、一般からの希望者を募って九州国立博物館と芦屋町の双方で見学を行うツアーを実施した。	
【年度実績概要】 ・ 芦屋釜の調査と展示について 重要文化財2件（文化庁保管「浜松図真形釜」、当館所蔵「楓流水鶏図真形釜」）を含む芦屋釜8口及び復元品1口について調査した。また、芦屋釜の制作工程を窺わせる芦屋町・金屋遺跡出土の鋳型片（芦屋町歴史民俗資料館所蔵）を精査し、更に芦屋町立芦屋釜の里からの全面的な協力を得ながら、現在復元に用いられている鋳型と比較検討した。なお、成果の一部は、平成24年度トピック展示「茶の湯をたのしむⅤ：芦屋釜と館蔵茶道具」リーフレット及び展示室内の解説パネル等で広く紹介した。 ・ 芦屋釜に関する教育普及活動について 体験型施設「あじっぱ」を活用して、芦屋釜（復元品）を手にとり、実際にその軽さと薄さを体験できるコーナーを設けた。また、九州国立博物館～芦屋町歴史民俗資料館～芦屋町立芦屋釜の里（資料館・工房）を順に巡る日帰りツアー（名称：「芦屋町・九州国立博物館共同企画 芦屋釜探訪バスツアー」）を実施し、計32名の参加者を得た。更に、芦屋釜の里の学芸員を博物館に招聘し、講演会を開催した。	
 芦屋釜の展示風景	
 ツアーでの工房見学	
【実績値】 調査回数 8回（東京国立博物館（1回）、芦屋町立芦屋釜の里（4回）、芦屋町歴史民俗資料館（3回）） 収集資料数 2点（芦屋町産砂鉄サンプル、鋳型土サンプル） 学会研究会等発表数 1回（①福岡金属遺物談話会例会） 報告書図録等 1件（展示配布用解説リーフレット） 展覧回数 1回（平成24年度トピック展示「茶の湯をたのしむⅤ 芦屋釜と館蔵茶道具」）	
【備考】 学会研究会等 ①「芦屋釜の制作と復元に関する調査研究」福岡金属遺物談話会第83回例会（24年10月12日）	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4574-8

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	B	A	A
判定理由 適時性：所有者側の希望を踏まえつつ研究の質的な深化をさせることができたため。 独創性：眼で見るだけでなく、実際に釜を手にするのできる体験的な展示を行った。 発展性：展示を通じて芦屋釜の認知度を大きく高め、広く関心を喚起したため。 効率性：調査と展示、教育普及を同時に行うことができた。 継続性：芦屋釜の里と更に密接な交流を図ることができた。 正確性：CTスキャンにより、断面他正確なデータを取得できたため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	学会研究会等 発表数	報告書図録等	展覧回数	
判定	A	A	B	B	A	
判定理由 調査回数：目標値8回（東京国立博物館、芦屋町立芦屋釜の里、芦屋町歴史民俗資料館）を達成した。 収集資料数：目標値2点（芦屋町産砂鉄、鋳型土）を達成した。 学会研究会等発表数：目標値1回（福岡金属遺物談話会）を達成した。 報告書図録等：目標値1件（リーフレット）を達成した。 展覧回数：目標値1回（トピック展示）を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	芦屋釜にかかわる調査や教育普及活動を遅滞なく計画通りに実施することができた。また、展示を通じて調査成果も適切に行い、観覧者から高い評価を複数頂いた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究をほぼ予定通りに進めることができた。また、成果物の刊行も計画通りに行った。